金沢市戸水C遺跡

金沢港泊地造成事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

1986

石川県立埋蔵文化財センター

金沢市戸水C遺跡

金沢港泊地造成事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

石川県立埋蔵文化財センター

E区全景(上空より望む)

E区溝３－ａ　籠出土状態

F区　10号土坑

緑釉香炉

例　　言

1　本書は石川県金沢市戸水町、御供田町に所在する戸水C遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、金沢港泊地造成事業に係るもので、運輸省第一港湾建設局の委託により、昭和50年度から石川県教育委員会文化財保護課、石川県立埋蔵文化財センターが実施し、調査費用は同建設局が負担した。

3　発掘調査の年度別担当者、協力者等については、第1章第2節調査の経過の項に詳しく記した。

4　本遺跡出土遺物の整理作業は、昭和57～59年度に石川県埋蔵文化財協会に再委託して実施した。

5　本書の編集、執筆は担当者の協議のうえ行った。

6　本調査の遺構・遺物の実測図、写真等の記録、出土遺物等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

7　本書の遺構、遺物挿図、写真図版の指示は次の通りであるが適宜変更したものについては挿図に明示している。

(1)　方位は全て磁北を表示する。

(2)　水平基準は海抜高で表示する。

(3)　挿図の縮尺については原則としてスケールを付した。

(4)　写真図版中の遺物写真の縮尺は統一していない。

第１章　調査にいたる経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

運輸省第一港湾建設局七尾港工事事務所が、金沢港泊地造成のため凌渫工事を進めていた金沢市戸水町地内で、荒木繁行氏（当時石川考古学研究会副会長）から井戸跡が発見され、その周辺に縄文から平安期の土器片、石鏃、土錘などが散布しているとの通報が、県教育委員会文化財保護課にもたらされたのは、昭和50年3月17日であった。そこで同日、同課の埋蔵文化財担当職員が現地に赴き、荒木氏の案内で遺跡、遺物及び遺跡の範囲を確認、引き続き工事事務所において遺跡の保存等について談合した。また、3月23日には、先に発見された井戸跡が泊地掘削地点の汀線付近に所在し、既に自然崩壊の危機に瀕していたので、県文化財保護課職員が荒木氏の協力を得て一部発掘を行ない、約60 cm四方の井戸の板枠を検出、その内部より古墳前期(月影式)の土器片を得た。また当日、高堀勝喜県文化財審議委員（石川考古学研究会会長）らも現地を訪れ、『石川県遺跡地名表』所載の県No. 1525「戸水遺跡」のうちに含まれる重要遺跡であることを確認し、「戸水Ｃ遺跡」と呼称することにした。3月28日、荒木氏はさらに、既述した井戸跡から約500 m南の汀線付近（掘削後の水中）で、鎌倉期と推定される井戸跡や柱痕を確認したが、その直後に流出してしまった。

4月10日、県文化財保護課は、金沢港一10 m泊地造成地に所在する埋蔵文化財(戸水Ｃ遺跡)の保護と工事について、七尾港工事事務所と協議に入った。次いで、4月21日、5月12日に再度県文化財保護課と工事事務所の間で協議がもたれ、その間互いに検討が重ねられた。その結果、5月12日、泊地造成地の汀線沿いに位置し、波浪による浸蝕が著しく、消滅の危機に直面している造成予定地内のうち約2,150 m²の区域について、取りあえず本年度記録保存を前提とした緊急発掘調査（第１次）を実施し、その他の区域に関しては、次年度以降審議を継続することで協議がととのった。そこで5月30日、第一港湾建設局長から文化庁長官に対し、金沢港泊地造成事業（港湾整備5ケ年計画にもとづき、昭和53年度に遺跡地点の工事に着工予定)にともなう発掘調査届が提出され、6月1日には、県教委も発掘担当者の承諾書を添付し、発掘調査届を提出した。また、6月25日、第一港湾建設局長と石川県知事との間に本発掘調査事業に係る委託契約が締結された。

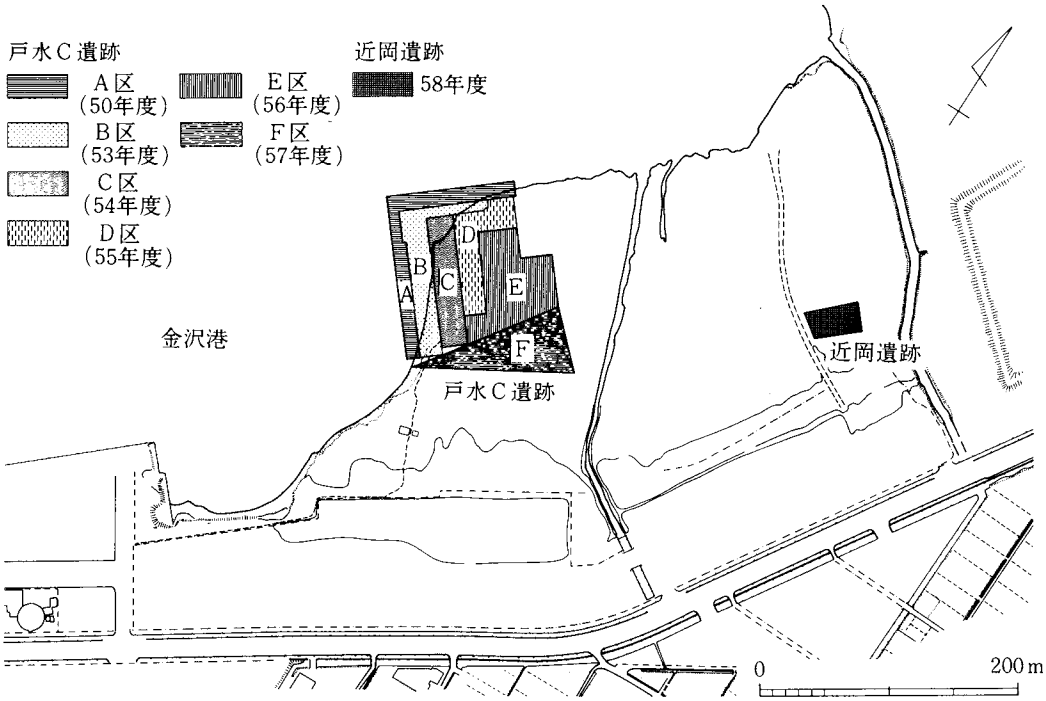
ところで、本遺跡の調査は、昭和42年頃から当地域周辺のフイルド調査を精力的に続け、寺中、下安原海岸、畝田遺跡などの発見を重ねていた荒木氏が、昭和45年4月19日、無量寺遺跡の発見直後、近岡縄文遺跡発見の直前に、両遺跡の中間地点にあたる戸水町地内の泊地造成工事で掘削した排土の中から、中世の遺物（柱痕、曲物容器、下駄、漆器椀、珠洲焼などの破片）が混在していることを発見、その後掘削区域週辺で包含層の位置確認踏査を続行し、汀線付近で波浪による侵蝕著しい崩壊部の断面から、中世の瀬戸天目、土師質土器、青磁などを検出し、本遺跡の存在を明らかにしたことに始まる。その後、昭和47年1月にいたり、荒木氏は五輪塔の一部(風・

空輪)、火葬骨片を納入した曲物製容器、桶などを発見するにおよび、石川考古学研究会の高堀勝喜氏、吉岡康暢氏や当時の県教委文化室係長橋本澄夫氏と連絡をとり、本遺跡の重要性を確認、造成工事の施工に先立って、緊急発掘調査実施の必要性を談合した。一方、荒木氏から本遺跡発見の通報を受けた文化室は、七尾港工事事務所、石川考古学研究会と協議を行ない、とりあえず遺跡の範囲確認を目的とした第一次調査を実施し、その結果にもとづき第二次調査を行なうことで合意に達した。昭和47年3月22～31日、36,000 m² を調査対象区域に設定し、グリッド法による試掘調査(第一次調査)を実施した。しかし、広範囲にわたる遺物の散布状況を確認できたが、遺構面の検出にはいたらなかった。次いで同年5月17日～6月20日、先に柱痕が発見された汀線の付近にトレンチを設定し、第二次調査(発掘調査)を実施、その結果、掘立柱穴群、方形の溝、土坑などの遺構と、加賀古陶、瀬戸天目、瓦器、青磁、土師質土器、漆器、ハシ状木器など室町期を中心とする鎌倉後期から桃山期にかけての遺物を得ることになり、中世臨海集落としての本遺跡の一斑が明らかとなった。このことは、当時普正寺、草戸千軒町、一乗谷朝倉氏館跡などの中世遺跡に、学界の高い関心がむけられていたことから、大いに注目されたものであった。それから約2年後の昭和49年8月6日、県文化財保護課は、社団法人石川県地域開発公社から、金沢港南地区工業団地区画事業計画にともなう本遺跡南端地区の埋蔵文化財調査の依頼を受けた。そこで8月28日、主要地方道松任・宇ノ気線沿いの区域約70 m² を対象に、約5m間隔で試掘孔4ケ所を設定し、試掘調査を行なったところ、室町期頃の珠洲焼、土師質土器片が若干出土した。以後、地域開発公社と県文化財保護課の間で、再三にわたって協議がもたれ、昭和50年2月14日、再度確認(分布)調査を実施した結果、若干の土器片が採集できたものの、工業団地区画事業にともなう水路工事を実施することには、さしたる支障がないとの結論に達した。

以上のように、本遺跡の調査にいたる過程には、種々の土地開発事業とのかかわりのなかで、従来部分的に試掘程度の調査が重ねられつつも、未だ本格的調査を見ることはなかった。また、昭和50年度より発掘調査を実施することになった「戸水C遺跡」地区については、従来から休耕田となっており、葺や雑草が繁茂していたため、戸水遺跡に内包されることの確認がなされておらず、昭和50年3月17日に至り、それが荒木氏の踏査によって明らかとなったことは、冒頭で述べたところである。しかしながらその間、本遺跡の発見以来、執念にも近い情熱をもって遺跡の観察と愛護に腐心してきた荒木氏のご苦労は、決して忘れることができないであろう。また、地元戸水町居住の池田国光氏は、長年にわたって採集した当該地域の歴史地理的情報を、快く荒木氏に提供し、本遺跡の観察調査に側面的協力を惜まなかった。

以上の経緯をふまえて、県教委文化財保護課は、石川考古学研究会の協力を受けて、昭和50年7月初旬から戸水C遺跡A地区の発掘調査を開始した。それ以後、本遺跡の調査は六次にわたり昭和58年3月28日までを要した。その後、膨大な出土品等の整理作業に三カ年を費やした。また、泊地造成事業関係では、隣町に所在する近岡遺跡の発掘調査も昭和58年度に実施している。

(東四柳、平田)



第1図　調査区と位置図(S＝1/6,000)

第2節　調査の経過

1　第1次調査（A区）

前節で述べた経緯を経て昭和50年6月25日から調査を開始した。本年度は、泊地造成地の汀線沿いの波浪などにより浸蝕、崩落の危機に直面している2,150 m² を調査対象とした。冬期の浸蝕、崩落を考えると包蔵地の北、西側をL字状に取り囲む調査区とならざるを得なかった。それらの一辺は、ほぼ10×115 mのものである。また、このような調査区域を設定したのは、3月中に実施した、浸蝕崖面の観察などにより、おおよそ120×120 mの範囲に埋蔵文化財が所在するものと推定されたから、取りあえず泊地に面する部分を調査し、自然崩落による消失を防止するとともに次年度以降の調査資料を得るためのものであった。

検出した主な遺構には、柴山出村式期や小松式期に比定される溝状遺構と、古墳時代前期の溝状遺構のほか、最も顕著な状況を示すものに平安時代の遺構群がある。平安期の遺構は、掘立柱建物2棟、井戸3基、溝状遺構、土坑などである。建物は、桁行2間以上、梁行3間のもの（第1号建物）と桁行1間以上、梁行2間のいずれも総柱の南北棟建物である。出土遺物では、須恵器、土師器のほかに施釉陶器が目立つ。「依」、「大田」、「友」、「田」などと読める墨書土器多数が出土し、さらには、丸鞆形石銙も1点出土しており、下級官人クラスの存在を想起させるものであった。

中世の遺物は断片的であるが、珠洲、越前、瀬戸などの国産陶磁器のほか、中国製のものでは、南宋代に比定される青磁が最も多く、白磁も若干認められた。

現場での作業は、昭和50年12月2日に終了し、その他の作業は昭和51年3月30日に終了した。

発掘調査にあたっては、次の諸氏の教示、協力を得た。

高堀勝喜（石川考古学研究会々長）、荒木繁行（同副会長）、浜岡賢太郎（同代表幹事）、桜井甚一（同代表幹事）、橋本澄夫（同幹事）、浅香年木（国立石川工業高等専門学校助教授）、吉岡康暢（県立郷土資料館資料課長）、谷内尾晋司（石川考古学研究会幹事）、西野秀和（同会員）、安村敬学（同）、福田弘光（同）、清水庄吉（同）、田口光春（金沢大学々生）、小林　博（同）、坂口則夫（同）、坂口洋子

発掘調査は、石川県教育委員会文化財保護課があたり、東四柳史明（主事）、平田天秋（同）が担当した。

発掘協力者名簿

田中たまき、北野　春、北野スイ、宮本花子、中栄　操、中本花子、宮田はる、高村　緑、高崎春子、中本すず、野村とし子、井村みわ子、西川愛子、篠田かつい、橋本ため、林　初枝、米島松枝、高村松子、高村正雄、林　一郎、北村芳子、西川つま子

2　第2次調査（B区）

第1次調査以降、冬期間の波浪と通常時での港内を航行する船泊の航波により第1次調査区とそれに後続する未調査区域の自然崩壊の危険が生じてきた。そのため、第一港湾建設局と文化財保護課との協議の結果、未調査区域の西側と北側部分について崩壊防止のための防止柵を新設することとした。この防護柵も約一年間は役立ったのであるが、52年から53年の冬期間の波浪により無残にも壊されてしまった。そのため、第1次調査区域はほとんど消滅し、未調査区域も一部では、波に洗われる状態となった。（北陸中日新聞53．3．10）それ以降に、双方で数回の協議を進め、波に洗われはじめた未調査区域の調査を再開することとなった。第1次調査に後続する東側、南側の約5,000 m² を調査区とした。が本年度は県事業に伴なう発掘調査の増大、不時発見の遺跡（羽咋市寺家遺跡）の調査などにより当初計画を大幅に変更せざるを得なくなり2,000 m² を実施した。調査は昭和53年5月1日に開始し昭和54年3月31日に終了した。

検出した主な遺構は、A区に接続する古墳時代前期の溝状遺構、平安時代に属する掘立柱建物、井戸、多数の溝状遺構、中世では1条の溝状遺構があった。建物は、第1次調査で確認された2棟（1、2号建物）の未確認部分を追跡するとともに、新らたに2棟の検出があった。（4、5号建物）そのうちの4号建物は、桁行4間、梁行2間の南北棟である。柱穴の掘方は、約120 cm を測る方形を呈し、それぞれに礎板を埋置させたもので、規格性に富むものである。5号建物は、桁行2間、梁行1間の身舎の四面に付属施設が付く東西棟の特殊な建物である。

発掘調査にあたっては、次の諸氏の教示、協力を得た。

高堀勝喜（石川考古学研究会々長）、荒木繁行（同副会長）、橋本澄夫（同幹事）

発掘調査は石川県教育委員会文化財保護課があたり、端野英子（主事）、田嶋明人（同）、平田天秋（同）が担当した。

発掘調査協力者名簿

田中たまき、北野　春、道場嘉次郎、北野スイ、宮本花子、中栄　操、中本花子、宮田はる、高村　緑、高崎春子、中本すず、野村とし子、井村みわ子、西川愛子、福島寿磨子、篠田かつい、橋本ため、林　初枝、米島松枝、高村松子、高村正雄、林　一郎、北村芳子、村本広之、西川つま子、山下　真、倉橋克人、北村伸二、木越弘明、倉橋　充、田辺徳治、南野政之、清水正夫、田村治一、西村善太郎

3　第3次調査（C区の調査）

第2次調査区（B区）に東接するC地区の約2,000 m² の調査を実施している。冬期間の波浪、航波などによる崩落、消失が予想以上に激しく、年間約2,000 m² 程度の発掘調査で対応せざるを得なくなってきている。また、泊地造成事業と未調査部分の面積とも考えあわせて3～4年間で終了してほしいと言う第一港湾建設局の要望も強かった。双方で協議を重ねた結果、昭和54年6月15日より開始し、昭和55年3月31日に終了している。（但し現場作業は、昭和54年12月15日に終了）

本年度に検出された主要な遺構では、古墳時代前半に属するほぼ平行走する二条の溝跡がある。古墳時代前半の遺構は、概して少ない。古墳時代後半の遺構になるとさらに少なく、円形の土坑一基があるのみである。奈良、平安時代に属する遺構、遺物は多く、多数の溝址、ピット、掘立柱建物などが検出されている。平安時代に属すると思われる掘立柱建物は、2棟検出された。また、ピット状の遺構から緑釉の香炉が出土している。昨年の調査区（B地区）からのびる中世の大溝跡も検出され、陶磁器片のほかに宝篋印塔が出土している。

発掘調査にあたっては、次の諸氏の教示、協力を得た。

高堀勝喜（石川考古学研究会々長）、荒木繁行（同副会長）、岡本　晃（同幹事）、滋井　真（同幹事）、土肥富士夫（同会員）、市堀元一（同会員）、上庄由美子（同会員）、岡本恭一（同会員）

発掘調査は石川県立埋蔵文化財センターがあたり、端野英子（主事）、西野秀和（嘱託）、平田天秋（主事）が担当した。

発掘調査協力者名簿

竹山くに子、高柳美代子、宮田はる、北野スイ、中栄みゆき、北野　春、田中たまき、中栄　操、高村正男、高村　緑、高村松子、高崎春子、北村芳子、山田あや子、村沢仁雄、坂田あや子

4　第4次調査（D区の調査）

昨年度の調査区（C区）の北東側、D区約2,000 m² の調査を実施した。昭和55年6月16日から調査を開始し、昭和56年2月25日に終了している。検出した主な遺構は、古墳時代前期の井

戸や溝状遺構、同後期の土坑、平安時代の掘立柱建物、井戸、溝状遺構である。建物は、桁行7間、梁行2間の細長い南北棟建物が建替をともなって2棟検出された。(8、9号建物) 建替は、旧建物の柱や礎板を取り除き、柱穴を埋め房して移築されている。建替られた新建物には、北側妻中柱をのぞくすべての柱穴に礎板が設けられており、柱痕も径ほぼ1尺を測る太いものである。柱穴掘り方も一辺約1mの方形をなし、柱間寸法は桁で8尺強、梁で11尺弱を測るものである。県内でも有数の規模をもつ建物といえる。この建物に北接して、桁行3間、梁行2間の南北棟建物があり、これも建替がなされている。

出土遺物についてみると、一時に埋った溝中より「依」と読める墨書土器多数が集中している点が注目され、そのほかにも、「蔵」、「中」、「吉」などが認められた。また、新資料として円面硯の出土があった。緑釉、灰釉の施釉陶器もかなり累積され、本遺跡2点目の石銙も出土している。

また、泊地造成区域の拡大に伴なって東側の試掘分布調査もあわせて実施した。その結果、当初の調査区域の東南側については、遺構および良好な遺物包含層が所在することが確認された。このことによって増加する調査面積、調査期日の問題については、以後継続して協議することとした。

発掘調査にあたっては、次の諸氏の教示、協力を得た。

高堀勝喜(石川考古学研究会々長)、荒木繁行(同副会長)、滋井　真(同幹事)、大藤雅男(同会員)、豊田善樹、山川正一、藤田　潔、宇野文明

発掘調査は、石川県立埋蔵文化財センターがあたり、河村好光(主事)、浅田耕治(同)、米沢義光(同)、倉田正一(兼務)、五十川稔(鶴来町教育委員会主事、センター研修生)が担当した。

発掘調査協力者名簿

宮田はる、北野　春、中栄　操、中栄みゆき、西川愛子、高村正雄、高村松子、高村　緑、高柳美代子、高崎春子、竹山くに子、坂田あや子、村田清子、北村芳子、山田あや子、田中たまき

5　第5次調査(E区の調査)

本年度は、昨年度のD区の南東側のE区約3,800 m² の発掘調査を実施した。調査は、昭和56年5月1日から開始し昭和57年3月31日に終了した。

検出した主な遺構は、縄文晩期の溝状遺構、弥生後期から古墳前期にかかるる土坑、水路状遺構、古墳後期の溝、そして奈良・平安期の溝、井戸、掘立柱建物などがある。水路状遺構は6条検出し、弥生後期から古墳前期にかけてある程度幅を持って機能していたものと考えられている。そのうち3条は、溝の覆土や土器の出土状況などから、弥生時代後期後半の法仏式の時期には、ほぼ埋っていたと推測される。一方、舟底状の落ち込みを有する溝が調査区中央を東西に走り、下層から法仏式の土器に混じってカゴが出土している。また、上層からは布留式併行期の土器に伴ない径約1mの範囲で琴柱形石製品と管玉6点が集中して出土している。同様に布留式併行期

の土器を伴う溝はもう1条確認されている。

建物跡は、調査区南側で1棟検出した。桁行5間、梁行2間のもので柱穴は不整円形をなし径50～70 cmを測る。柱痕、礎板等の検出はなかった。井戸は、2基検出され2号井戸は建物跡南西隅で確認された。井側内より斎串、箸状木器、特殊土師器のほか「宅」、「東」、「奏」、「依」と読める墨書土器、大型獣骨などが出土し祭祀儀礼を行なった可能性を窺わせた。出土土器は平安中期初頭に属するものであった。その他の遺物としては、円面硯、施釉陶器、時期不明の銅環、また建物跡付近から出土した石鈴、鏡片がある。また、墨書土器も多く、「依」をはじめとして「廣人」と読めるものが確認されている。

また、当初から予定していた調査区域の発掘調査については、今年度が最終年度にあたっており次年度以降の出土遺物の整理、報告書の刊行についても協議がなされた。過去5次にわたる出土遺物は、整理箱400箱を超す膨大なものであるので、出土品整理に三ケ年、報告書刊行を昭和60年度とすることで合意がなった。

また、泊地造成区域の変更（新らたに増加など）などに伴なって試掘調査も実施した。その結果、次年度についても相当量の発掘調査が必要となってきた。以降、継続して調査期日などについて協議を行なっている。

発掘調査にあたっては、次の諸氏の教示、協力を得た。

高堀勝喜（石川考古学研究会々長）、荒木繁行（同副会長）、藤田邦雄（同会員）、藤井直樹（同会員）

発掘調査は、石川県立埋蔵文化財センターがあたり、河村好光（主事）、芝田　悟（技師）が担当した。

発掘調査協力者名簿

宮田はる、田中たまき、坂田あや子、北野スイ、北野　春、村田清子、中栄みゆき、西川愛子、山田あや子、竹山くに子、高村　緑、高崎春子、北村芳子、高村政雄、高柳美代子、高崎道子、高村松子、上村初男、大村すずえ、上原福美、丹羽住子、中谷正作、里見修児、野村久一、浜井和夫、遠田圭司、中居惣松、野村幸二郎、北川外治、示野謙二、村内正治、上村喜代枝、松本　弘、田辺徳治、升崎伊蔵

6　第6次調査（F区の調査）

昭和50年度の第1次調査開始時に協議がなされていた区域の発掘調査については、昨年度で一応、終了したのであるが、それ以降に港湾建設事業の見直しがなされ、新らたに戸水C遺跡の南側部分において、3,400 m^2 の発掘調査が必要となった。協議の結果、昭和57年6月10日より開始し、昭和58年3月28日に終了した。

主な検出遺跡は、弥生中期の柴山出村期の土坑をはじめ、後期の溝状遺構や土坑群が検出されている。また、包含層中より遠賀川系土器1点が出土し注目された。古墳時代では、前方後方形周溝状遺構や後期の土坑などがあった。平安期では、前期から中期を中心とする掘立柱建物や、

井戸、溝状遺構などがあった。中世では、鎌倉期の井戸や室町期の溝状遺構と土坑が検出された。出土品については、従来のように平安期のものが圧倒的に多く、多数の墨書土器や緑釉、灰釉陶器があり、本遺跡3点目の石銙、鏡片、和同開珎などの銅銭も出土している。

また、新らたに泊地造成地として追加となった区域約40,000 m²(御供田町、近岡町地内)の試掘分布調査もあわせて実施した。その結果、本遺跡の東方近岡町地内において近岡遺跡の北側部分と推定される範囲約2,500 m²が新らたに事業地内に含まれることが判明した。その結果、昭和58年度に近岡遺跡の調査を実施している。

発掘調査にあたっては、次の諸氏の教示、協力を得た。

高堀勝喜(石川考古学研究会常任顧問)、荒木繁行(同顧問)、桜井甚一(同会長)、楢崎彰一(名古屋大学文学部教授)、河原純之(文化庁主任調査官)、吉岡康暢(県立郷土資料館資料課長)、福田弘光(石川考古学研究会員)、伊林永幸(県立図書館古文書課主事)、河村好光(県立向陽高校教諭)、宮本哲郎(金沢市文化課主事)、栃木英道(石川考古学研究会員)、山川桂子

発掘調査は、石川県立埋蔵文化財センターがあたり、谷内尾晋司(係長)、三浦純夫(主事)、芝田　悟(技師)、戸澗幹夫(主事)が担当した。

発掘協力者名簿

宮田はる、村田清子、西川つま子、北野　春、西川愛子、坂田あや子、北野スイ、中栄みゆき、高村正雄、高村　緑、高村松子、高柳美代子、高崎春子、高崎道子、北村芳子、竹山くに子、丹羽住子、最里健太郎、上村初男、永井信治、上原福美、大村寿江、嶋野他美、村谷幸子、中野栄子、森川敏子、橋場盛嗣、西川重治、本田嘉次、北野与一、本野美智子、舟田美幸、稲本百合子、本田芳子、山田あや子、水村とみ、前田君子、中村きよ、石田文一、大田英次、渡辺功、永井夕美、山森浩幸、渡辺桂子、浜井和夫、本田豊代子、南　勉、中森　徹、巽喜代子、南野ミヨ、北村貞子、上原光枝、上村嘉代枝、村田三治郎、福田節子、村田　操、照田てる子、村本かおり、新納貞子、田中好枝、福田登嘉代、中島征子、西田豊子、浜井寿美江

7　出土品整理

昭和50年以降6次にわたった発掘調査によって出土した遺物は、膨大な量になる。遺物整理箱で約400箱を数える。それぞれ調査年度に概要報告書を刊行したのであるが、出土品の整理については、未着手の状態であった。それで昭和56年から協議を開始し、昭和57年度から年次的に整理事業として実施した。57年度から開始し、3カ年で遺物整理、昭和60年度に本報告書の刊行とした。出土品整理事業は、「石川県埋蔵文化財協会」に委託して実施した。

石川県埋蔵文化財協会57年度担当者　滋井　真、河村裕子、川端敦子、小屋玲子、北田琴美、山岸康子、小谷紀美子、正木直子、土井真智子、河村真紀、田植孝子

石川県埋蔵文化財協会58年度担当者　河村裕子、小林直子、北田琴美、土井真智子、河村真紀、田植孝子

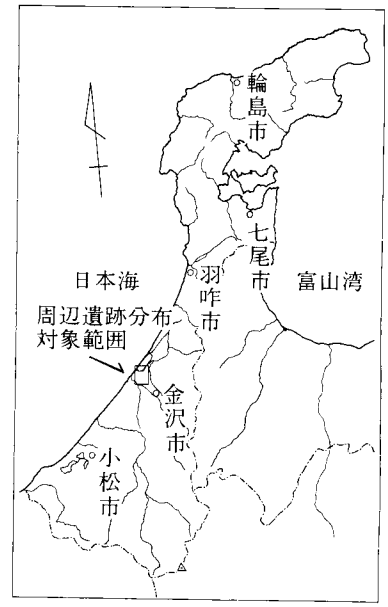
石川県埋蔵文化財協会59年度担当者　河村裕子、小林直子、小谷紀美与、新野吉枝

(平田)

第２章　戸水Ｃ遺跡の位置と環境

第１節　位置と地理的環境（第２・第３図・図版第１）

戸水Ｃ遺跡は、金沢市街地の中心より北西約６kmの郊外にあたる戸水町地内に所在する。本遺跡は、市域の西寄りを縦断する国鉄北陸本線金沢駅より南東約4.2kmを測り、昭和60年、全国高等学校総合体育大会（インターハイ）のメイン会場となった西部緑地運動公園とは南西約５km隔てる。そして近年、金沢市のベッドタウンとして急激に発展してきた内灘町との境界は北東約1.2kmのところであり、本県の重要港湾として開港された金沢港泊地造成地内に位置する。



第２図　戸水Ｃ遺跡の位置

石川県は、日本海に大きく突出したほぼ南北に細長い県である。金沢市はその中央やや南よりに位置しており、その地形は東部から南部にかけては、北陸の霊峰白山（標高2,702m）を中心に派生する加越山地の北端部にあたり、標高1,000～1,500mの中山級山地がひろがっている。市域南東端の奈良岳（標高1,644m）は、市内における最高峰で北方の大門山（標高1,572m）、月ヶ原山（標高1,170m）、赤堂山（標高1,046m）、大倉山（標高1,005m）などの峰々へ次第に高度を減じながら、医王山（標高939m）へと連なっている。その前山には、金沢城の石垣・辰巳用水の石管・兼六園の庭石などと利用の多い戸室石を産出する戸室山（標高547m）が立地している。

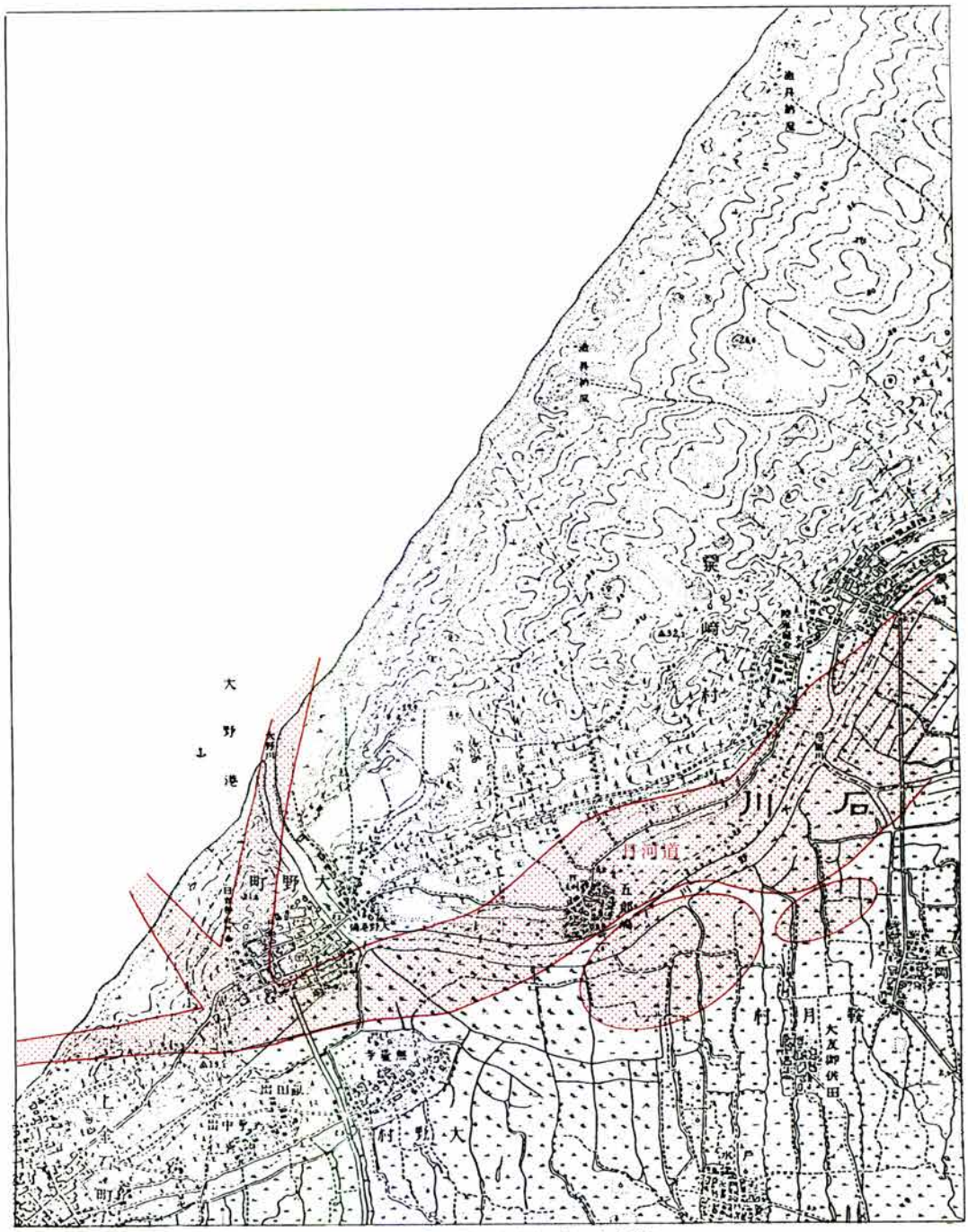
一方、西部から北部にかけては、県境近くの奥三方山に源を発する犀川、大門山系順尾山を源流にする浅野川の二大水系と伏見川・大野川などによって沖積平野が形成されている。また、当平野は県内における代表的な扇状地である手取扇状地（曲率半径12km、扇形開角度110度）の北部扇端地域の複合平野でもある。犀川・浅野川の両河川は、市街枢要部をほぼ並行して流れ、急にひろびろとした沖積平野を蛇行しながら分・支流を合して日本海と河北潟に注いでいる。それらの河川の氾濫によって堆積層は重り合い、その地質構造は複雑な分布をみせている。地勢は微地形を呈しながら南東から北西に向って緩やかに傾斜している。

本遺跡は、当金沢平野北東域の末端部にあたり、大野川左岸に立地する。現標高は約1.5mを測るが、これは港湾造成工事の盛土・整地によるもので、本来は標高0.5m前後の強粘質の低湿地帯である。付近一帯は自然湧水地帯で、古くからその豊富な自噴地下水は飲料水や自然灌漑用水として利用されてきたが、近年の工業化にともない地下水位は低下し、自噴がみられないのが現況である。

ところで、『皇国地誌』石川郡近岡村の項には

地勢　大概平坦ニシテ盡ク田圃トナル。北方沼田多ク地稍低シ。舟ニ乗シテ植苗ヲナス。西北河北湖ノ尾流ヲ帯ヒ。運輸便ナリ。人家中央ニ位ス。

と明治期の当該地の状況を伝えている。北方の沼田（低湿地）地域が本遺跡の立地点にあたり、河北潟と大野川の後背湿地により灰色・青灰色土のグライ土壌が被覆している。この強粘性土壌は透水性が少く、そのため還元性の強い特性をもつことから、畑地に不適当であり、また水稲栽



第３図　戸水Ｃ遺跡周辺地形(明治43年発行)

培においても根系障害の恐れが大きい地質である。田植え作業が田舟に乗って行なわれるなど、農作業時においてはきわめて困難であった状況が窺える。

かつてこの付近一帯は、大野川の旧流路や中州・自然堤防が島状に分布し、田舟を縦横に走らせ往来していたといわれ、この周辺域の輸送では、舟運が重要な役割を果していたのである。

弥生時代から長く続いてきた水田地帯も、1964（昭和39）年、北陸地方の地域開発の拠点として始められた金沢港の建設・金沢港泊地造成工事とともに、臨海工業地化が進み、その地貌は徐徐に変容している。（芝田）

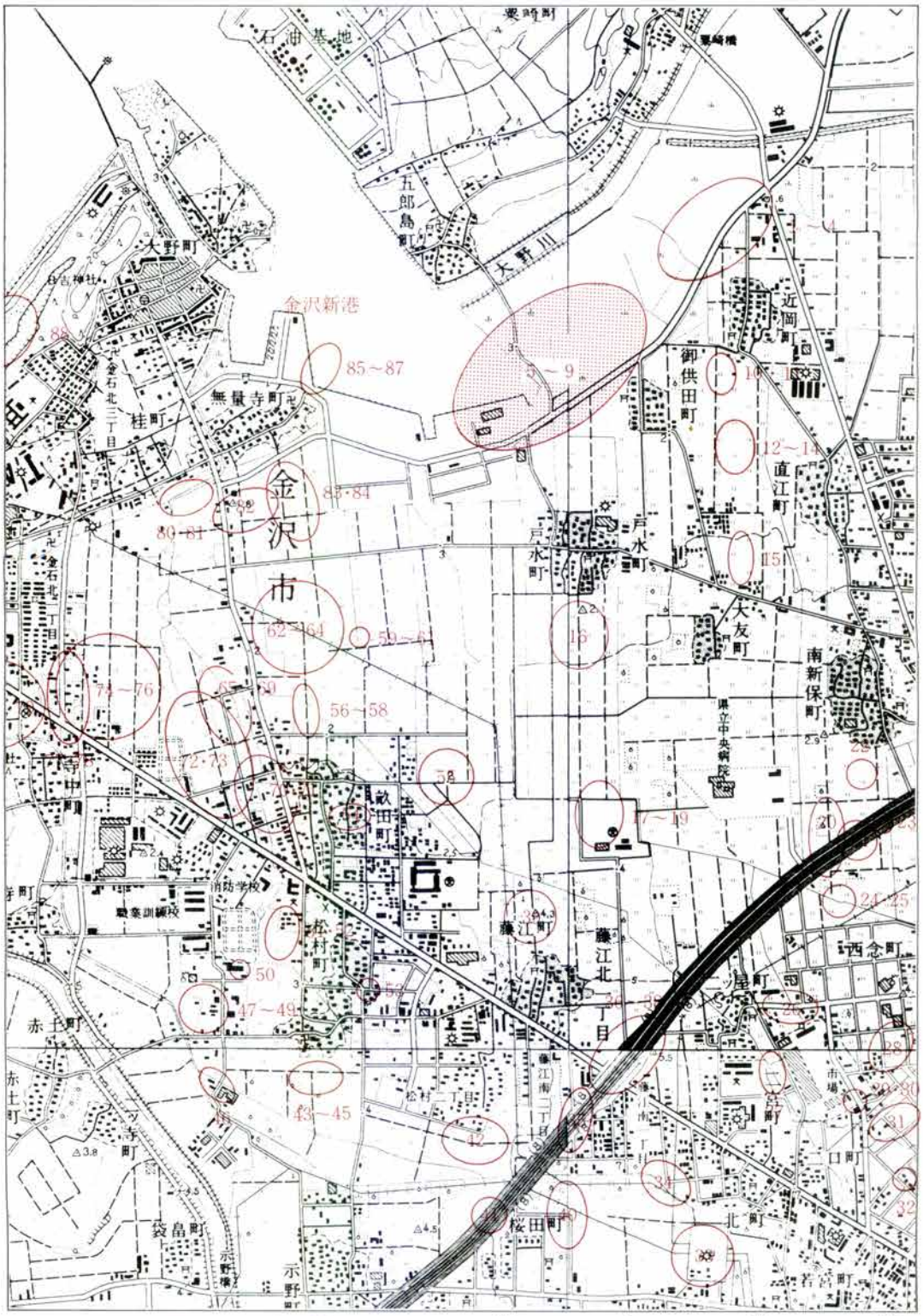
第2節　歴史的環境（第4・第5図）

本遺跡の周辺域を俯瞰すると、大きく二つにわけることができよう。一つは、東から南にかけて形成する標高200m前後の丘陵地帯であって、その尾根上に構築されている墳墓は、平野部において集落を統治していた支配者層の奥津城である。他の一つは、犀川・浅野川・大野川など河川の沖積作用によって形成されたほぼ標高1～25mの金沢平野である。本遺跡の立地点は当平野の北西部にあたり、周辺には数多くの遺跡が分布しており、県下でも有数の濃密分布地域とされている。それらの確認は、地元に居住する荒木繁行・米沢義直・福田弘光など石川考古学研究会々員の日頃のたゆまぬ努力と粘り強い踏査活動に負うところが多い。

それでは以下に既往の調査と知見をふまえ、後者の地域、特に大野川・浅野川・犀川によって形成された当該地域を中心に歴史的環境の概略を述べていきたい。なお、第4図の遺跡番号と、第1表の番号は符合する。

金沢平野における最古の遺跡は、現在のところ本遺跡より南西約6.5kmに位置する下安原海岸遺跡である。福浦上層式の土器片が出土していることから、縄文前期末に位置付けられている。南南西約6.5kmに立地する古府遺跡は、北陸縄文土器の中期中葉の標式遺跡として著名である。この遺跡より北西約1.7km隔てる北塚A遺跡は、中期中葉から後期前葉にかけて営まれた集落跡で、北塚式土器の標式遺跡である。北塚A遺跡が後期前葉に廃絶した後、当平野では一時集落形成が途絶える。このことは縄文海進・海退と深い関係をもつものと考えられている。しかし、後期後葉頃になると南南西約6.8kmに巨大木柱遺構群の検出で全国的に注目された新保本町チカモリ遺跡（県指定史跡）が集落形成をはじめる。この遺跡より南西約1.2kmに、県下最大の縄文集落跡で著名な野々市町御経塚遺跡（国指定史跡）が位置し、西1.7km隔てて中屋遺跡が立地している。いずれも縄文晩期の標式遺跡であり、1.7km内に鼎立するように大集落を構成しているが、そうした背景として、充分な食料資源が確保できる環境であったことと、豊富な地下水自噴の恵みなどが考えられている。

ところで、該期になると本遺跡近辺においても漸く遺跡が分布しはじめる。1970（昭和45）年、金沢港南部地区造成工事中に本遺跡が発見され、緊急発掘が実施されている。調査の結果、中屋式（晩期前～中葉）土器を主に下野式（晩期後葉）土器が出土している。それと同時に稲の花粉



第4図　周辺の遺跡（S＝1/25,000）

第1表　周辺の遺跡分布表

（番号は第4図と符合する）

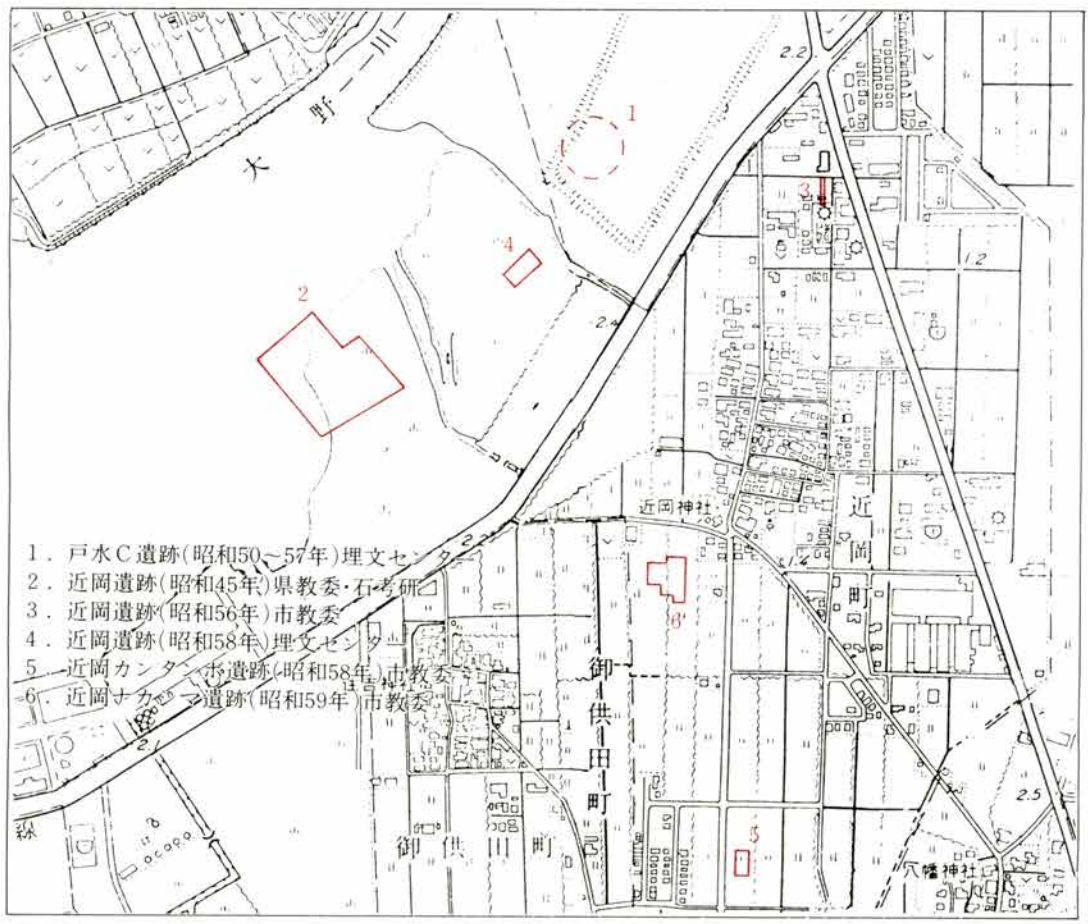
No.	遺跡名	所在地(通称)	種別	現況	時代	出土品
1	近岡遺跡	近岡町(ヤシキ)	包含地	扇状地・港湾・宅地	縄文晩期	縄文式土器片多数、磨・打製石斧、稲の花粉、磨石、凹石、石冠、石剣
2	〃	〃（〃）	〃	扇状地端・〃	弥生～古墳	土師器多数、木製鍬・鋤、管玉、庖丁形木製品
3	〃	〃（〃）	〃	〃・〃	平安	墨書土器、木簡、人形
4	〃	〃（〃）	〃	〃・〃	鎌倉～室町	珠洲焼、越前焼、土師質灯明皿、曲物製井戸枠
5	戸水C遺跡	戸水町	包含地	海岸・金沢港湾内	縄文	土器
6	〃	〃	〃	〃・〃	弥生中期	〃
7	〃	〃	〃	〃・〃	弥生終末	土器、琴柱型石製品
8	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	墨書土器、灰釉陶器、石帯、和同開珎、須恵器、土師器
9	〃	〃	〃	〃・〃	中世	土器片、土師質灯明皿、珠洲焼、越前焼、中国青磁、曲物井戸枠、渡来銭
10	近岡ナカシマ遺跡	近岡町(ナカシマ)	包含地	扇状地・水田	弥生終末	土器
11	〃	〃（〃）	〃	〃・〃	平安	須恵器
12	近岡カンタンボ遺跡	〃（カンタンボ）	〃	〃・〃	弥生後期	土器片
13	〃	〃（〃）	〃	〃・〃	古墳中期	土師器片
14	〃	〃（〃）	〃	〃・〃	奈良後期	須恵器
15	大友遺跡	大友町	集落跡	〃・〃	奈良・平安	須恵器、土師器、墨書土器
16	戸水オモテ遺跡	戸水町(オモテ)	包含地	平地・水田	平安・中世	須恵器、土師器
17	戸水B遺跡	戸水町、藤江町（イッチョウダ）	〃	〃・水田・校地	弥生	弥生式土器、砥石
18	〃	〃、〃（〃）	〃	〃・〃・〃	平安	須恵器、土師器
19	〃	〃、〃（〃）	〃	〃・〃・〃	中世	珠洲焼
20	南新保三枚田遺跡	南新保町	〃	扇状地・水田	弥生終末	土器
21	〃B遺跡	〃	〃	〃・〃	弥生中後期	土器片
22	〃C遺跡	〃	〃	〃・水田一部畑地	古墳前期	土師器多数
23	〃D遺跡	〃	〃	〃・自動車バイパス道路、一部水田	〃	土師器片
24	西念・南新保遺跡	西念・南新保町	〃	平地・水田	弥生後期	土器多数、石器、木器
25	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	墨書土器、須恵器、土師器
26	二口六丁B遺跡	二口町	〃	扇状地・市場敷地	古墳前期	土師器片
27	〃A遺跡	〃	集落跡	扇状地端・工場用地	〃	〃
28	西念ネジタ遺跡	西念町	包含地	〃・宅地一部水田	弥生	土器細片、打製石斧
29	〃クボ遺跡	〃	〃	扇状地・宅地	縄文	
30	〃	〃	〃	〃・〃	古墳前期	
31	二口シミズ遺跡	二口町	〃	扇状地端・畑地	土師器	
32	二口町遺跡	〃	集落跡	平地・造成地	弥生後期	弥生土器
33	薬師堂遺跡	薬師堂町	包含地	扇状地端・変電所用地	古墳前期	土師器
34	北町遺跡	北町	〃	平地・水田畑地	縄文	打製石斧
35	藤江A遺跡	藤江町	集落跡	扇状地端・北陸自動車道路敷	平安(前・後)	須恵器、土師器
36	〃B遺跡	〃	包含地	扇状地・水田	弥生中期	弥生土器、打製石斧
37	〃	〃	〃	〃・〃	古墳(前・中)	土師器片
38	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	須恵器、土師器等
39	〃C遺跡	〃	〃	〃・〃	古墳前期	土師器片
40	出雲じいさまだ遺跡	出雲町(アラタマシ)	〃	〃・〃	平安	須恵器
41	示野中桜田遺跡	示野中町	〃	平地・水田・道路	〃	〃、土師器
42	松村高見遺跡	松村町(タカミ)	〃	〃・水田	弥生	土器、石斧、管玉、同未製品
43	松村B遺跡	〃	〃	〃・〃・宅地	縄文	土器・石斧、石鏃
44	〃	〃	〃	〃・〃	弥生	土器
45	〃	〃	〃	〃・〃	江戸	伊万里染付

No.	遺跡名	所在地(通称)	種別	現況	時代	出土品
46	松村どのまえ遺跡	松村町(ドノマエ)	包含地	平地・水田・宅地	弥生	土器、石鏃
47	松村A遺跡	〃	〃	〃・水田	縄文(後～晩期)	土器、打製石斧、石鏃、磨製石斧
48	〃	〃	〃	〃・〃	古墳	土師器
49	〃	〃	〃	〃・〃	室町	井戸枠、管状木器
50	松村平田遺跡	〃 (ヒラダ)	〃	〃・〃	弥生	土器、石斧、石鏃
51	松村西の城遺跡	〃 (ニシノシロ)	〃	平地・水田	古墳	土師器
52	〃	〃 (〃)	〃	〃・〃	平安	須恵器
53	松村寺の前遺跡	〃	〃	〃・宅地	室町	五輪塔(空輪部)
54	畝田御台場遺跡	畝田町	堡跡	〃・〃	江戸	
55	畝田首戸遺跡	〃 (ナベタ)	包含地	扇状地端・水田	平安前期	墨書土器
56	畝田B遺跡	〃	〃	〃・〃	弥生	弥生式土器・石鏃
57	〃	〃	〃	〃・〃	古墳	土師器、須恵器
58	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	土師器片、須恵器片
59	畝田C遺跡	〃	〃	〃・〃	弥生	土器片、石鏃、扁平片刃石斧
60	〃	〃	〃	〃・〃	古墳前期	土師器片
61	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	須恵器、土師器
62	畝田無量寺遺跡	〃 ・寺中町・無量寺町	〃	〃・〃	弥生	土器、石鏃
63	〃	〃 ・〃・〃	〃	〃・〃	古墳(前・後)	土師器、須恵器
64	〃	〃 ・〃・〃	〃	〃・〃	奈良・平安	墨書土器、須恵器、土師器
65	畝田遺跡	〃 (ホリノウチ)	〃	〃・〃	縄文晩期	土器片、石錘、小型磨製石斧、凹石
66	〃	〃 (〃)	〃	〃・水田一部宅地	弥生中期	壺、甕、高杯(弥生式土器)、環状石斧、石鏃、硬玉製勾玉
67	〃	〃 (〃)	〃	〃・水田	古墳前期	土師器片、碧玉原石
68	〃	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	須恵器片・土師器片
69	〃	〃	〃	〃・水田一部宅地	鎌倉・室町	珠洲焼片、井戸枠、越前焼片、土師器片、青白磁小片
70	畝田・大徳川遺跡	〃	〃	〃・〃	奈良・平安	土師器、須恵器
71	〃	〃	〃	〃・〃	鎌倉・室町	珠洲焼片・越前焼片、曲物製井戸枠、下駄
72	畝田寺中遺跡	〃 ・寺中町	〃	扇状地・水田	古墳(前・後)	土師器、須恵器、墨書土器
73	〃	〃 ・〃	〃	〃・〃	奈良・平安	須恵器
74	寺中B遺跡	寺中町	集落跡	扇状地端・水田	縄文晩期	打製石斧、石鏃
75	〃	〃	包含地	〃・〃	弥生中期	土器片
76	〃	〃	〃	〃・〃	古墳前期	土師器
77	寺中遺跡	〃	〃	〃・〃	弥生中期	土器、磨製石斧、石鏃、砥石
78	〃	〃	〃	〃・〃	古墳前期	土師器
79	金石本町遺跡	金石本町	集落跡	扇状地端・水田一部宅地	奈良・平安	土師器(甕、高杯)、須恵器(甕、杯)、墨書土器(「東」記銘)
80	桂遺跡	桂町	包含地	扇状地端・水田	古墳前期	土師器(甕、高杯、壺)
81	〃	〃	〃	〃・〃	中世	珠洲焼、加賀焼、越前焼、美濃焼片、石鍋片、北宋銭
82	無量寺B遺跡	無量寺町	〃	〃・水田・宅地	古墳	土師器
83	無量寺遺跡	〃	〃	〃・宅地一部水田	古墳前期	土師器多数
84	〃	〃	〃	〃・〃	鎌倉・室町	珠洲焼片、石臼、越前焼片、漆器椀
85	無量寺金沢港遺跡	〃	〃	扇状地端・金沢港湾内	縄文	土器片
86	〃	〃	〃	〃・〃	弥生中後期	〃
87	〃	〃	〃	〃・〃	古墳前期	土師器
88	金石北遺跡	金石北町	〃	平地・水田		〃

※ 分布表は、『石川県遺跡地図』(改訂版)に一部加筆して作製している。

が検出され、藤則雄氏は、この稲の花粉分析を通して「縄文晩期農耕論」を学界に提起している。しかし、いまだ通説化するに至っていない。北東に近接する近岡遺跡は、若干の縄文式土器片が採集されており、本遺跡との関連が想定されている。その西方には、無量寺金沢港遺跡が所在している。南西約 3.5 km の距離にある松村A遺跡は、地表下約 1.5 km の地点より中屋式土器が出土し、晩期前葉に比定されている。この遺物包含層の確認によって、河川の沖積作用による厚い堆積層下に該期の遺跡が、かなり存在することを予想させた。この遺跡東隣に松村B遺跡、さらに東方に西念クボ遺跡、北方には畝田遺跡、寺中B遺跡などが周知されている。中期以降、晩期前半にかけてみられる集落の丘陵地から低湿地への進出は、狩猟・採集による自然経済社会の転換の兆しを示唆する現象といえよう。

長く続いた縄文時代に終りを告げ、水稲耕作を主とする農耕文化の弥生時代になると、本遺跡が登場する。北陸で最初の弥生式土器である柴山出村式（中期初頭）と後続する小松式（中期後葉）併行期の土器数片が出土している。南西部微低地上に立地する寺中遺跡は、数次にわたって



第５図　戸水、近岡地内等における過去の発掘調査地点（S＝1/10,000）

調査されている。多数の土壙墓群と小松式土器と一部戸水B式土器とともに、稲作に関連すると考えられる石庖丁などが検出されており、当該地の中核的な集落と考えられている。南南西約2.3kmにあたる戸水B遺跡は、多量の凹線文系土器を出土し、畿内第Ⅳ様式に比定される標式遺跡である。南方約2.6kmにある西念・南新保遺跡は、住居跡・井戸・土坑・溝などの遺構と漆を施した木製大型高杯や石剣など多彩な遺物を検出し注目をあつめた。中期から後期にかけて営まれた大きな集落であることが判明している。その他の遺跡として、近岡カンタンボ遺跡、畝田・無量寺遺跡、藤江B遺跡、二口町遺跡、畝田C遺跡、無量寺金沢港遺跡、南新保B遺跡などが周知されている。

弥生時代の後期終末から古墳時代初頭の移行期になると、従来からの農業技術の蓄積と労働力の集約化によって、農業生産は大きく発展を迎え、これらを経済基盤として、各地には急激な遺跡増加現象がみられる。この付近では、本遺跡をはじめ近岡遺跡、無量寺遺跡、同B遺跡、南新保三枚田遺跡、同C遺跡、同D遺跡、畝田遺跡、桂遺跡、寺中遺跡、同B遺跡など数多くの遺跡が分布している。

西南西約2.2kmの距離にある無量寺B遺跡では、月影式期の溝より五銖(ごしゅ)銭をモチーフとした双頭龍鳳文鏡系（舶載鏡）の鏡が出土して注目された。今年度調査された畝田遺跡からは、南北方向に流路する大溝より、ヘラによる円弧・斜行線文様を施したきわめて特異な赤彩広口壺や、時期比定に好資料の完形品土器とともに、鍬・鋤・杵などの農耕具を中心に多数の木製品が出土している。本遺跡大溝からも多量の月影式土器とともに鍬・鋤などの木製品が出土しており、このような、自然遺物の保存状態が良好であるのは、低温の地下水の存在によって土壌中の酸素が不足し、腐植に必要な好気的微生物の活動が不活発になるためである。したがって当該地のように、地下水位の高いところでは自然遺物は静かに眠り続けているので、その寶庫であると言っても過言ではない。一方、墓制関係では本遺跡から前方後方形周溝状遺構、畝田・寺中遺跡では方形周溝墓、南新保D遺跡より円形周溝状遺構などが検出され、当平野における墓制研究に重要な資料を提供している。

前時代と政治的・社会的な変革をみる古墳時代になると、本遺跡南南西約5.3kmに古府(こふ)クルビ遺跡が所在する。該期では最も早い段階に比定される標式遺跡である。この遺跡より東方約600m隔てる高畠(たかばたけ)遺跡は、畿内布留式併行期の標式遺跡である。多数の土壙墓とともに、石釧破片や管玉未製品などが出土され、玉作工人の集団墓地と考えられている。

当平野における有力支配者層が眠る古墳は、東方に連なる丘陵上に築造されている。森本丘陵では、弥生時代後期末より継続的に造墓されている七(なな)ツ塚(づか)古墳群をはじめ、法華堂(ほっけどう)古墳群、小坂(こざか)古墳群、神谷内(かみやち)古墳群が分布している。また、野田山山頂部には野田山(のだやま)三角点古墳、山麓では長坂(ながさか)二子塚(ふたこづか)古墳などが長坂古墳群を構成している。一方、平野部では平地に築造されていることで著名なおまる塚古墳を中心に北塚古墳群が形成されている。

律令時代になると、当周辺は越前(えちぜん)国加賀(かが)郡八郷のうちの一つ大野(おおの)郷に属している。しかし、越前の国域が広大で支配が行き届かない情況などから、平安前期の823（弘仁14）年、最後の一国

建置策によって、加賀国として立国し、北半分は加賀郡に、南半分は石川郡に分割している。

ところで、本遺跡より「依」と銘記された墨書土器が出土している。この墨書土器は、周辺の遺跡よりこれまでにかなりの数が採集されており、文献資料の限界を克服する資料として貴重な成果を上げている。本遺跡から、大型掘立柱建物跡・井戸・溝などの遺構、緑釉・灰釉陶器・硯・和同開珎・斎串とともに、「依」・「東」・「上」と記した墨書土器が出土している。一般集落跡とは大きく異なる多彩な出土品、建物遺構から、遺跡の性格をめぐって論議がかもされ、加賀郡津かと想定されている。南方約1.3kmの大友遺跡では、特徴のある方形単筒井戸をはじめ、柱穴・溝などとともに、「依」の墨書土器が出土している。南方約2.6kmの西念・南新保遺跡から、桁行4間×梁行2間の掘立柱建物跡と「東」・「庄人」と判読できる墨書土器が出土している。この遺跡より南西約1km隔てる藤江A・B遺跡は、桁行6間×梁行3間の西廂を備えた掘立柱建物跡と多量の墨書土器を検出している。A遺跡より「石」・「川」・「稲」の文字、B遺跡より「石田庄」・「石田」・「依」などの墨書土器が出土していることから、文献史料にみえない初期荘園「石田庄」の庄家跡と考えられている。南西約2.2kmの畝田無量寺遺跡は、桁行7間×梁行3間の大型建物跡をはじめ、数棟の掘立柱建物跡・井戸・柵列の遺構群が検出され、井戸内より出土した「庄」の墨書土器などから、官衛・荘家跡もしくは上級官人の居宅と想定されている。その他では、畝田首戸遺跡より「浄」・「上」の文字、金石東遺跡より「主」、その付近より「東」の文字が出土している。以上、周辺遺跡より出土した墨書土器を列挙してみたが、共通性をもつ「依」・「東」・「庄」・「上」の文字の存在は注視される。また、古代大野郷と、その周辺の集落分布を解明していく上で墨書土器のもつ意義はますます重視されていこう。

中世になると、本遺跡の所在する戸水・近岡・直江・大友などは倉月荘に含まれ、西の富積保と接している。本遺跡の中世遺物としては、珠洲焼・越前焼・土師質灯明皿などと曲物製井戸枠が出土している。この曲物製井戸枠の出土例は近岡遺跡、畝田遺跡、松村どのまえ遺跡、普正寺遺跡など近距離の間から多量に検出されていることは注目される。

本遺跡は、掘立柱穴群・溝・土坑などの遺構と珠洲焼・加賀古陶・瀬戸天目・土師質土器・漆器・箸状木器などが検出され、港湾集落跡と理解されている。西南西約3.5km隔てた犀川河口には、中世港湾都市として著名な普正寺遺跡が立地する。1965（昭和40）年、犀川護岸工事中に発見され、五輪塔、寶篋印塔、板碑、蔵骨器などと付近から銅製懸仏、人形など宗教関係の遺物が出土し、荘官級の墓地跡であることが判明した。その後、1983（昭和58）年の調査では、中国製青・白磁、渡来銭、柿経、鞴の羽口、鉄滓など日常関係品が多量に出土している。こうした出土品から、中世後期の港湾都市にみられる鍛冶師や檜物師・石工・木工などの手工業者が居住し、商業経済活動が活発に展開されていたことが窺知される。この遺跡と中世の大野荘湊を直接結びつける資料は現在のところ見当らないが、その可能性は高いものと考えられる。

ところで、本遺跡に近接して流れる大野川は、日本海海運の隔地間交易の要港であった大野荘湊と後背地内陸部（生産地及び消費地）への物資の供給・輸送にと連結し、その周辺地域における商品流通の展開の上で、当河川の水運が重要な役割を果たしていたのである。　　（芝田）

引 用・参 考 文 献（五十音順）

浅香年木・田川捷一他　『角川日本地名大辞典』17　石川県　角川書店　1981年　東京。

石川県立埋蔵文化財センター編　『石川県遺跡地図』　石川県教育委員会　1980年　金沢。

加能史料編纂委員会編　『加賀史料』　奈良・平安Ⅰ　石川県　1982年　金沢。

――――――――　『加能史料』　平安Ⅱ　石川県　1985年　金沢。

河村好光他　『金沢市戸水C遺跡発掘調査概報―金沢港泊地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書―(4)』　石川県教育委員会　1981年　金沢。（以下「金沢港泊地…」は省略）

楠　正勝　『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡　金沢市近岡カンタンボ遺跡』　金沢市教育委員会　1985年　金沢。

小嶋芳孝　「北加賀地域古墳群分布調査報告書」『石川考古学研究会々誌』第22号　石川考古学研究会　1979年　金沢。

高堀勝喜・櫻井甚一・浅香年木・吉岡康暢他　『普正寺』　石川考古学研究会　1970年　金沢。

出越茂和　『金沢市畝田・無量寺遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　金沢。

――――　『金沢市無量寺B遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。

戸澗幹夫・栃木英道　『金沢市近岡遺跡　(7)』　石川県立埋蔵文化財センター　1984年　金沢。

――――・――――・三浦純夫他　『北塚遺跡群』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年　金沢。

橋本澄夫　「砂丘遺跡」『金沢周辺の第四系と遺跡』　北陸第四紀研究グループ　1975年　金沢。

――――・南　久和　『金沢市高畠遺跡』　金沢市教育委員会　1975年　金沢。

平田天秋・東四柳史明　『金沢市・戸水C遺跡発掘調査概報』　石川県教育委員会　1976年　金沢。

福田弘光編　『大徳郷土史』　大徳公民館　1970年　金沢。

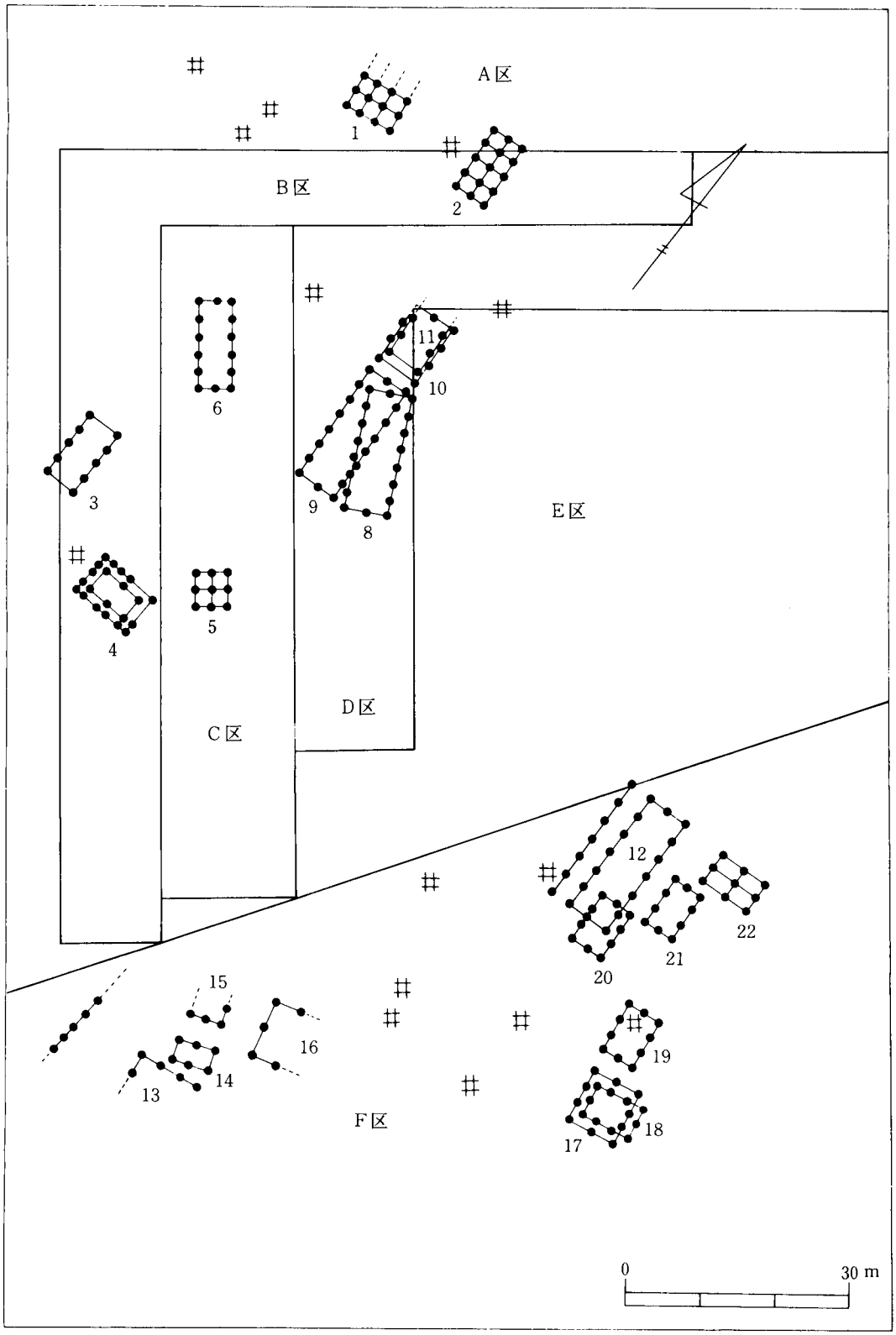
藤　則雄・四柳嘉章　「金沢の縄文晩期近岡遺跡からの稲の発見」『考古学研究』第17巻3号　考古学研究会　1971年　岡山。

南　久和　『金沢市二口六丁遺跡』　金沢市教育委員会　1983年　金沢。

宮本哲郎・楠　正勝　『金沢市大友遺跡・近岡遺跡』　金沢市教育委員会　1984年　金沢。

湯尻修平　『金沢市戸水B遺跡発掘調査報告』　石川県教育委員会　1975年　金沢。

米沢義直　「金沢市松村晩期縄文遺跡概報」『石川考古学研究会々誌』第12号　石川考古学研究会　1969年　金沢。



第6図　戸水遺跡主要建物跡配置概念図と調査区

第3章　遺構と遺物

第1節　A区の遺構と遺物

主要な遺構では、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての溝跡(A－1溝)、古墳時代前期の溝跡A－2溝、A－3溝)、平安時代の溝跡(A－4溝～A－11溝)がある。ほかにも、無数に近い溝跡が検出されているが、それらのほとんどは南北走する(中には若干東西走するものもある)平安時代に属するものが大半を占める。建物では、2棟分を検出した。第1号建物では、南側部分、第2号建物では北側部分の調査をした。井戸は、2基（A－1井戸、A－2井戸）を検出したが、A－3土坑としたものも可能性があるかも知れない。土坑、ピットは非常に多いが、それらには性格不明のものが多い。また、通常の土坑より大きく竪穴住居跡状の方形を示すものが、2基（A－1方形遺構、A－2方形遺構）検出されている。

1　A－1号溝

形状　昭和51年3月発行の概要報告でS－5～S－3溝跡として報告したものである。A－2号溝と同様に、ほぼ平行して北西、南東走するものである。

形状　幅1.4～1.8m、溝底幅0.3～0.45m、検出面よりの深さ0.4～0.6mを測る基本的には二段堀りのものである。今回は、東西9.5mの検出であるが、次年度調査区のB区に延びている。また、南東端では、掘立柱建物の柱穴が切っている。柱穴内には、約30×30、20×20cm、厚さ5cmの礎板二枚が重なって据え置かれていた。溝内からは、土器のほかに数片の不明木製品（棒状のもの）が出土している。

遺物　比較的下層でまとまって出土したものに弥生式土器がある。第15図4～12がそれであるが、そのうちの4、5は箆状工具あるいは櫛状工具により胴部に沈線および波状文を施したもので柴山出村式（弥生中期初頭）と呼称される一群のものである。また、同図6～12は櫛状具により廉状文、波状文を交互に施文するものである。これら施文方法からすると、小松市八日市地方から出土した土器に代表される小松式（中期中葉）に近い時期を考えることができる。また、第13図1～3に見られるような有段口縁に擬凹線を施した甕形土器に代表される一群の土器がある。おおまかに、北陸地方土師器編年の月影式期に該当するものである。また、同図13～15に代表される一群の甕形土器は、高畠式にほぼ近い年代を与えることができる。

2　A－2号溝

形状　A－1号溝の北東方向2.7mの地点に検出された。A－1号溝同様に北西、南東走するもので、ほぼ平行するものである。幅0.9～1m、溝底幅0.2～0.3mを測る。溝底差は、3～4cmでわずかに北西方向が低位である。検出面からの深度は、0.25～0.3mである。溝中位で、第1号建物により切られている。

遺物　第17図1～5のうち、1、2の甕形土器は、いずれも細片であるが1が2よりやや古相を呈する。3は、甕か壺の底部、4は器台脚部、5は台付鉢か台付甕の脚部と考えられるものであ

る。

3　A－3号溝

形状　A－1号井戸に西接して検出されたもので、幅1.0～1.3 m、溝底幅60～80 cm、深さ15～20 cmを測る南北走するものである。溝底レベルは、ほぼ水平に近い。また、上層部分では水田の用水と複合している部分もある。A－7号溝と同一の可能性がある。

遺物　図示できたのは、第16図7の1点のみである。口径24 cmを測る有段口縁に擬凹線を施す甕形土器の口縁部片である。月影式期の中でも比較的古相を呈するものと考えられる。

4　A－4号溝

形状　調査区南側で検出されたもので、この周辺は南北走する溝跡の集中する地点である。幅40～60 cm、溝底幅30～50 cm、深さ5～15 cmを測る浅いものである。溝底レベルは、やや南側に低位である。溝内から少数の遺物が出土している。

遺物　第16図12の須恵器坏が1点ある。底部ヘラ切りで器壁も薄く、腰部の張りがなく外傾する。底外面には、「依」の墨書が認められる。「依」の墨書を有する須恵器群中では比較的新しい部類に属する。

5　A－5号溝

形状　調査区の北側で検出されたものである。この周辺では、南北走する多数の溝跡が検出されたが、そのうちの代表的な数条について説明する。幅0.35～0.45 m、溝底幅0.25～0.35 m、検出面からの深度13～15 cmを測るものである。溝底差は、0.5～2.5 cmとわずかなもので、ほぼ水平に近いが北側にやや低い。周辺部の溝でも概して北側に若干傾斜をもつものが多いが、ほとんどレベル差がないと言ってもよい程度のものである。

遺物　第16図1～6、9、10の土師器坏がある。いずれも内面黒色のものでヘラミガキの痕跡を残すものも見られる。5は、坏と言うよりは鉢か盌に近い大振りのもので、口径16.5 cm、底径6.3 cm、器高6.0 cmを測るものである。土錘1点も出土している。

6　A－6号溝

形状　A－5号溝の西約10 mの位置で検出したものである。幅65～70 cm、溝底幅0.4～0.5 m、検出面からの深度10～15 cmを測る。レベル差はほとんどないが、若干北方向に2～3 cm低い。溝の掘削の方法などから見て、A－7号溝と似かよっている。遺物で検討して見ないと不明であるが同時期に存在した可能性が高い。

遺物　第16図8の1点が図示できた。A－5号溝出土土器と同様に内面黒色の土師器坏である。

7　A－7号溝

形状　A－6号溝の西側3.8 mの地点で検出し、南北走するものである。幅1～1.2 m、溝底幅55～60 cm、検出面からの深度は20～40 cmを測る。溝底のレベル差は、約10 cm程度であり、どちらかと言えば南側に低位である。A－6号溝とA－7号溝の間には幅約3 mの平坦面を有する。この面では、径25～30 cm、深さ30～45 cmを測るピット群を検出した。これらは、柵列とも考えられなくもないが、断定はできない。この二条の溝に囲まれた空間は道路面とも考えられ、また

本遺跡の西側を画するものである可能性も考えられる。

遺物　第16図11の1点が出土した。内面黒色の土師器坏であるが高坏の可能性も考えられる。内面では、ヘラミガキが認められる。体部外面に、本遺跡では比較的稚拙な「依」の墨書がある。

8　A－8号溝

形状　A区西隅で検出したもので幅50～65㎝、溝底幅40～55㎝、深さ15～20㎝を測るものである。溝底のレベルは、ほぼ水平に近く南北走する。また、この溝は、南側で終息するものである。溝内からは、須恵器、土錘などが出土している。

遺物　第17図30～36の7点が図示できた。須恵器の蓋、坏、高台付坏はいずれも同時期の所産と考えてよいものである。30の土錘1点が伴出した。

9　A－9号溝

形状　A－8号溝近くで検出した。ほぼ東西走するが、ゆるやかに孤状をなす。幅20～55㎝、溝底幅25～45㎝、深さ5～10㎝を測る比較的浅いものである。レベル差はほとんど見られないが、若干西側に低位である。溝内からは、土師器が主として出土しており古墳前期のものが多い。本溝のように孤状をなすようなもの、不特定方向走するものには概して古墳時代に属するものが多いようである。

遺物　第17図6～17。7、9のくの字口縁甕形土器は、宮地式の所産と考えられる。12は須恵器蓋である。土錘も多く6点を数える。溝状遺構の性質から各時期のものが混入している。

10　A－10号溝

形状　第2号建物の西側2.4ｍの位置で検出し、南北走するものである。幅30～40㎝、溝底幅20～30㎝、深さ4～6㎝の浅いものである。溝底レベルは、ほぼ水平である。ピット、柱穴、土坑などによりかなり形状が変化している。溝内から墨書土器を含む須恵器と土錘が出土している。

遺物　第17図25～29の須恵器坏、高台坏、土錘が出土している。須恵器坏は、いずれも底部ヘラ切り未調整のもので概して器肉も薄く、外傾も強い。高台坏は、口径14.0㎝、底径9.8㎝、器高4.5㎝を測り、器壁も均一的で体部は直線的にのびて、外傾は弱い。それぞれ、ほぼ同一時期の所産と考えられ平安時代前半のものであろう。土錘は、円筒状の細長いものでその長さ4.5㎝、最大幅1.7㎝、孔径0.6㎝を測るものである。

11　A－11号溝

形状　第2号建物東側で検出されたもので、幅30～45㎝、溝底幅15～40㎝、深さ10～20㎝を測り南北走するものである。溝底レベルは、南が低位である。溝内から須恵器が若干出土している。

遺物　第17図23、24。須恵坏は、底部ヘラ切りで未調整のもので、外傾も比較的強いものである。24の高台坏は、口径16.5㎝、底径9.5㎝、器高6.5㎝を測る大形品である。いずれも、平安時代前葉の特徴を示すものと考えられる。

12　A－12号溝

形状　A－11号溝の約5ｍ東に検出されたもので、幅1.45～2.2ｍ、溝底幅0.9～1.7ｍ、深さ20～25㎝を測り、溝底レベルは、ほぼ水平に近いが、やや南側が低位である。北側では、二条の

溝が複合している可能性が大きい。溝内からは、緑釉陶器、土錘が出土している。

遺物　第17図18～22。18、19はいずれも緑釉陶器である。18は、高台坏の底部で須恵質硬胎のものである。高台は、削り出しのベタ高台でややあげ底風である。内外面ともに淡緑色の釉がかかる。近江産的なものである。19は、香炉の蓋と思われる破片で須恵質硬胎のものである。釉は、淡緑色を呈し全面に施釉される。天井部は欠失して存しないが、透し彫りの痕跡が認められる。土錘は3点出土しているが、いずれも長胴形のものである。22は、特に平面形が長方形を呈するもので長さ4.0㎝、幅1.1㎝、孔径0.5㎝を測る。

12　A－1土坑

形状　調査区南側の溝の集中する地点で検出された。径1.3ｍを測る円形に近いもので、底径も90㎝を測りほぼ円形をなす。また、周辺の溝跡、ピットを切って穿っている。検出面からの深さは80㎝で溝底より2本の竹が検出された。また、遺物では、土師質土器1点がある。機能については、定かでないが井戸の可能性が最も高いものと考えられる。坑底では、ほぼ現海水面高であり、湧水を集水すると言うより溜井戸的なものであった可能性がある。平安期の井戸では、下層に砂層があり、湧水可能地点を選定しているふしが見られるが、本地点は固くしまった粘土層のみの所であることを考えあわせても後者である。倒置された竹は、井戸廃棄の際に息ヌキのために挿したものと考えられる。

遺物　土師質土器（燈明皿）が1点出土している。径8.2㎝、器高1.8㎝を測る。いわゆる手捏ねのもので、底部はほぼ平底に近く口縁外面および内面はかるくナデを施す。全体的に器肉も厚く均一なものである。口縁端内外面に油脂状の付着が甚しく灯芯油痕と考えられる。第18図31。

13　A－2土坑

形状　第1号建物の東側で検出されたもので、長軸260㎝、短軸198㎝、深さ52㎝を測る長楕円形のものである。

遺物　石鏃の基部片1点が出土した。安山岩質のもので、わたくりの弱い二等辺三角形状をなすものと思われる。本土坑から他の出土遺物はなく履土の感じなどからも縄文期の所産の可能性が考えられる。第18図32。

14　A－3号土坑

形状　A－2号井戸に西接して検出された。平面プランは、径200㎝を測りほぼ円形をなす。二段掘りのもので、第2段はやや西側に偏しその径80㎝を測る。深さは、テラス面まで76㎝、坑底まで114㎝である。形状、掘り方などから井戸の可能性が高く考えられるものである。

遺物　第18図13～25。須恵器の坏蓋（13）、同坏（14～18）、同高台坏（19～22）、土錘（23～25）が出土している。坏は口径12～14㎝、器高3～4㎝を測り比較的器壁も厚く、身の深いものが多く、外傾も弱い。高台坏は、口径16～18㎝、器高5.5～6.5㎝を測る大形のものである。22の底外面には、「友」の墨書がある。土錘はいずれも長胴（球）形のものであるが、25は長さ6.7㎝、幅3.2㎝、孔1.3㎝を測る大形のものである。13の蓋にやや後出的な要素が認められるが、おおむね奈良時代後半の所産と考えられる。

15　A－4号土坑

形状　第2号建物の北側に検出したもので、長辺160㎝、短辺74㎝、深さ24㎝を測る方形のもので坑底はほぼ水平である。坑底プランも、長辺92㎝、短辺64㎝を測る長方形である。須恵器が出土している。柱穴掘り方の可能性がある。

遺物　第18図26～30。須恵器坏蓋（26）、同坏（27、28）、同高台坏（29）、メンコ状のもの（10）が出土している。いずれも細片が多くまた時期的なものに関しても混入が甚しいものと考えられる。30は珠洲の甕か壺の胴部片の周囲を打ち欠いてメンコ状にしたものである。本遺跡では、須恵器片を打ち欠いたもの中世陶片を打ち欠いたものなど非常に多く出土している。

16　A－1号井戸

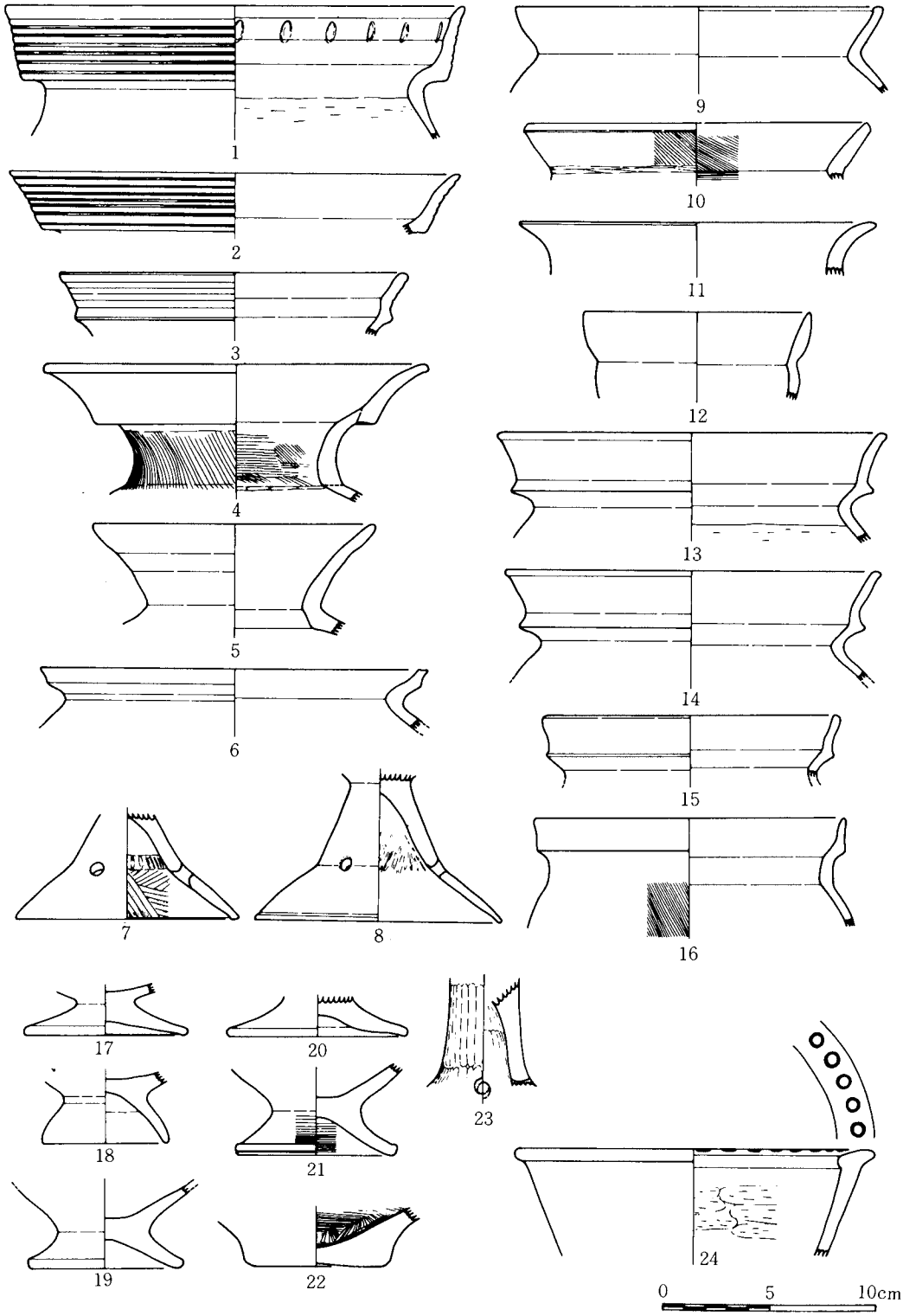
形状　A－3号溝に東接し、現農道下で検出されたため遺存状態は良い。褐色砂質土（粗砂）を基調とするベース面で掘り方を検出した。ほぼ平面正方形をなし、頭大の河原石および須恵器片で区画を設けている。中でも東辺列の遺存は良く整然と一列に並ぶ。北辺列でも若干の石列が残っているから四辺を河原石等で区画していたものと推定できる。遺存度の良い東辺で110㎝を測る。井戸側には木板を縦位に下層の青灰色砂質土層に達する程度に打ち込んでいる。遺存状態の良い東側では、幅約20㎝、厚さ約2㎝、長さ約40㎝の木板4枚を使用している。木板の状態はあまり良くないが、若干底部の切断痕、表面の仕上げ痕の観察できるものもある。やや東側に偏して径40㎝の曲物による「まなこ」を付設する。「まなこ」は、浄化施設とみられるが幅約20㎝の一段のみである。この曲物は、幅約20㎝、厚さ0.5㎝の板材の内面に切れ目（擦痕）を入れ、桜の表皮で綴じている。なお湧水が激しく詳しい観察はできなかったが「まなこ」底面には特殊な施設はなかった。井戸内から須恵器、土師細片、桜の表皮、桜の小枝、ウリ科に属する種子が出土している。「まなこ」底面までの深さは70㎝である。

遺物　第18図7～12。須恵器坏蓋（7）、同坏（8）、同高台坏（9～11）、土師器鉢（12）が出土している。蓋は大型のもので鈕を欠失する。坏（8）は口径12.0㎝、器高3.5㎝を測りやや深目のものである。高台坏（9）は、口径11.2㎝、底径6.0㎝、器高4.5㎝を測り腰部が張り、口縁先端がゆるく外反するものである。10、11は口径16.5～18.5㎝、器高6.2～6.5㎝を測り大形のものである。12は土師器の大形の鉢を思われるもので底部近く外面ではヘラ削りを施す。9はやや古相を呈するが、その他はほぼ同一時期と思われ奈良時代後半の所産と考えられる。

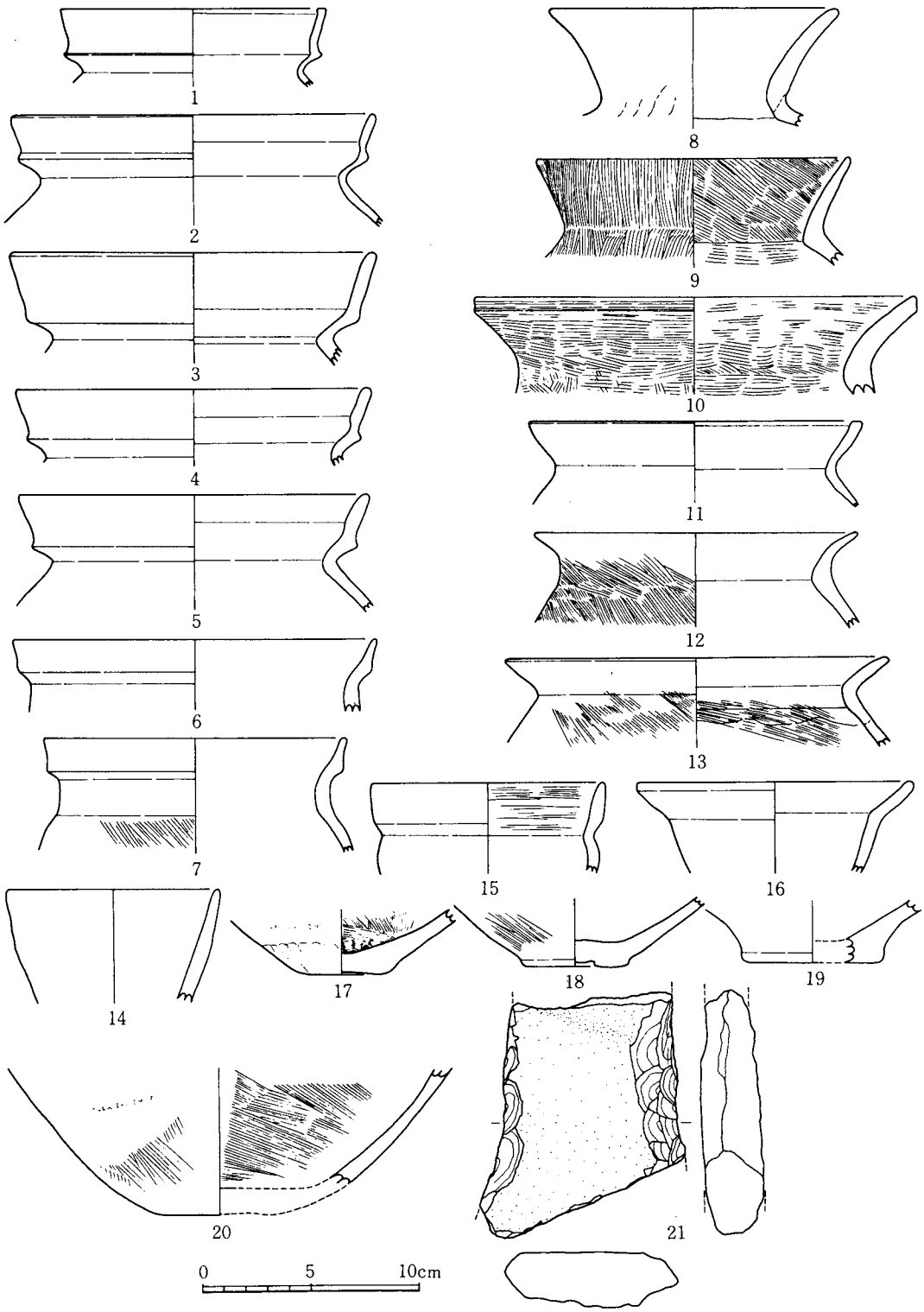
17　A－2号井戸

形状　A－2号建物西側3.7ｍの地点で検出した。方形隅柱横桟型の井側をもつもので、掘り方は平面形では隅丸方形（約220×230㎝）を呈していたものと考えられるが、ピットその他の遺構により不整である。井側は完存しないが、残存長110㎝を測る隅柱と残存長115㎝の横桟と残存長90㎝、幅15～20㎝を測る側板から構成される。井側は、土圧によってかなりの変化をきたしており、推定の域を出ないが内側で一辺90㎝前後の方形のものであったろう。井戸底部までの深さ90㎝を測る。「依」の墨書土器、土師器、灰釉陶器が出土している。

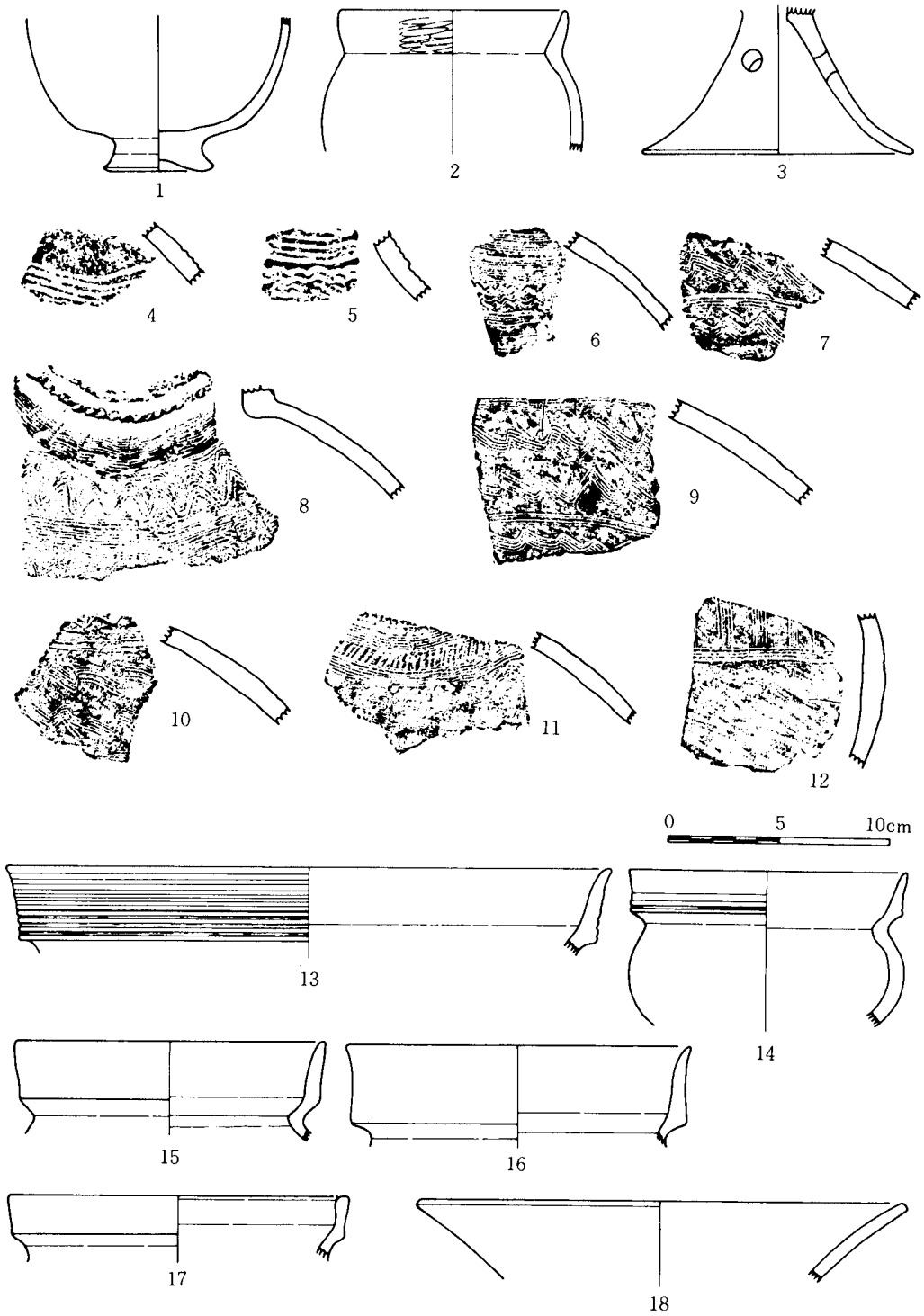
遺物　第18図1～6。須恵器坏（1、3）、小壺（4）、壺（5）、灰釉陶器（6）、土師器（2）



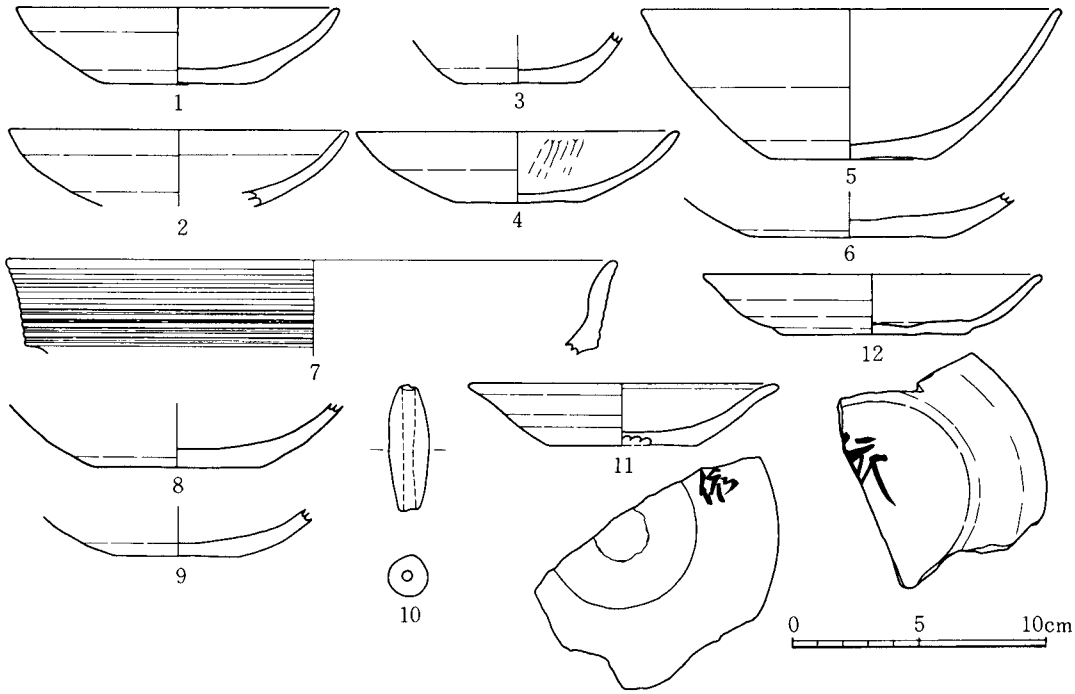
第13図　A－1号溝出土遺物



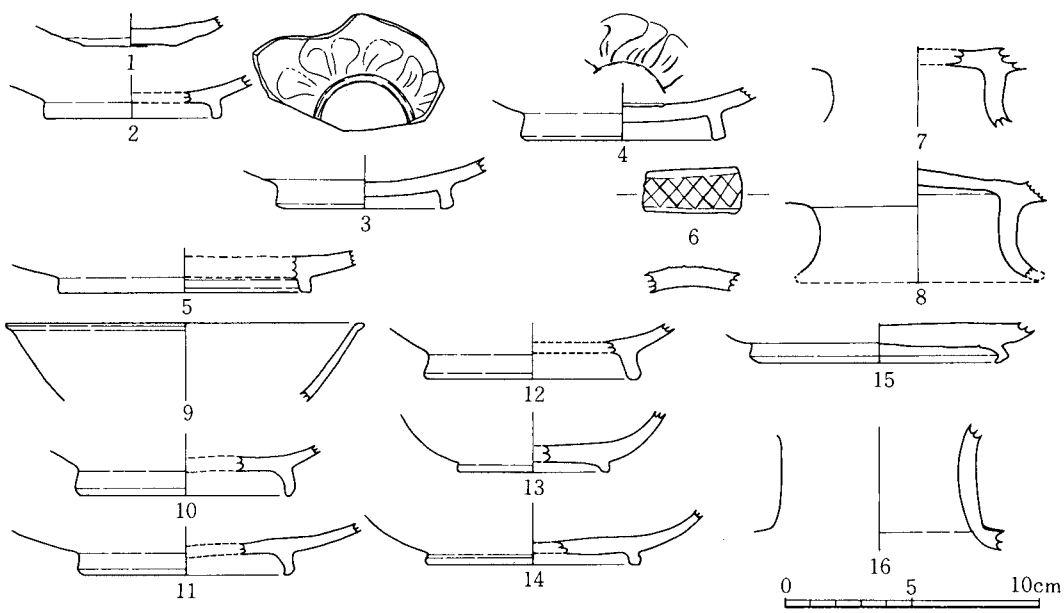
第14図　A－1号溝出土遺物



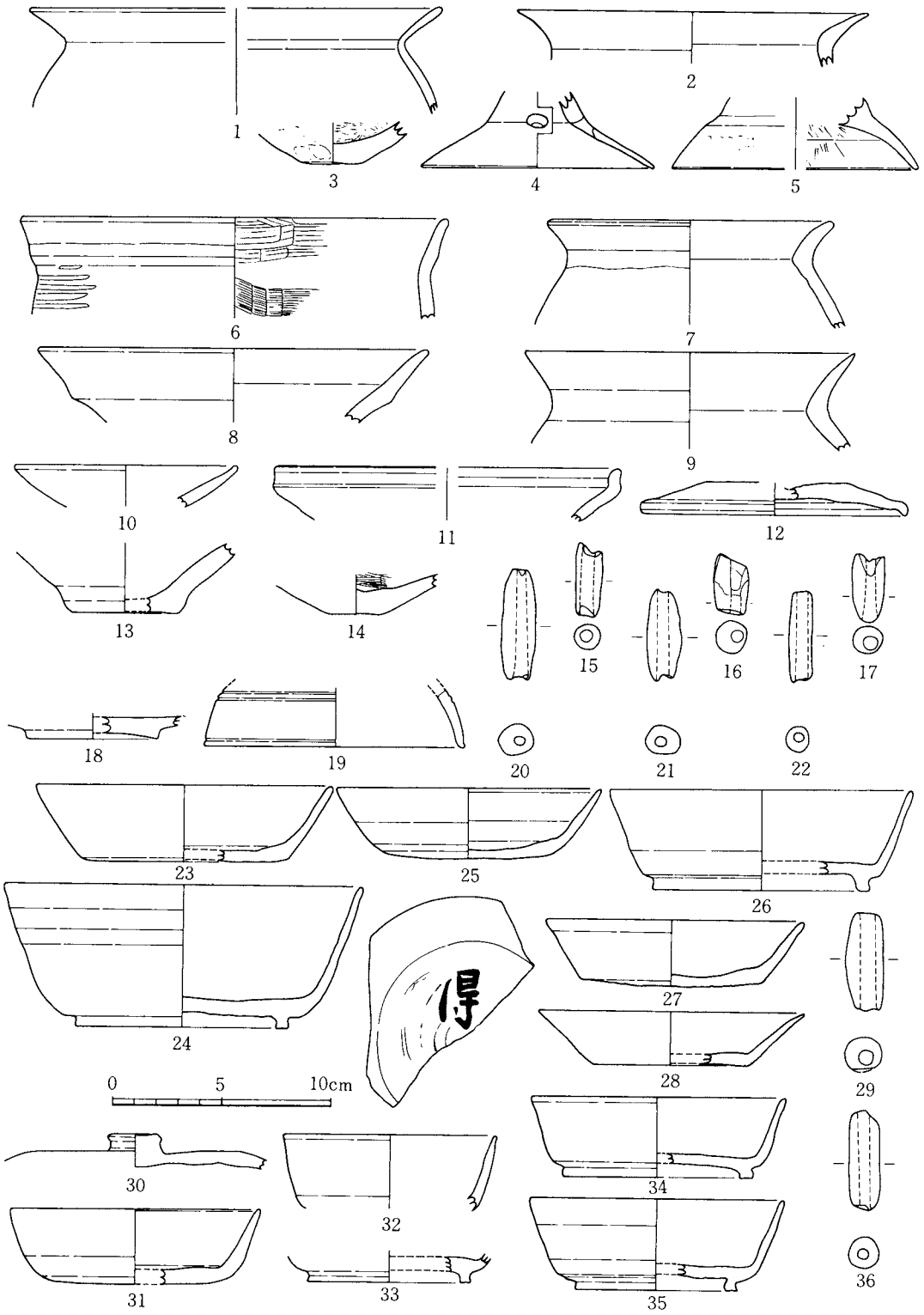
第15図　A－1号溝(1～12)　A－3号溝(13～18)出土遺物



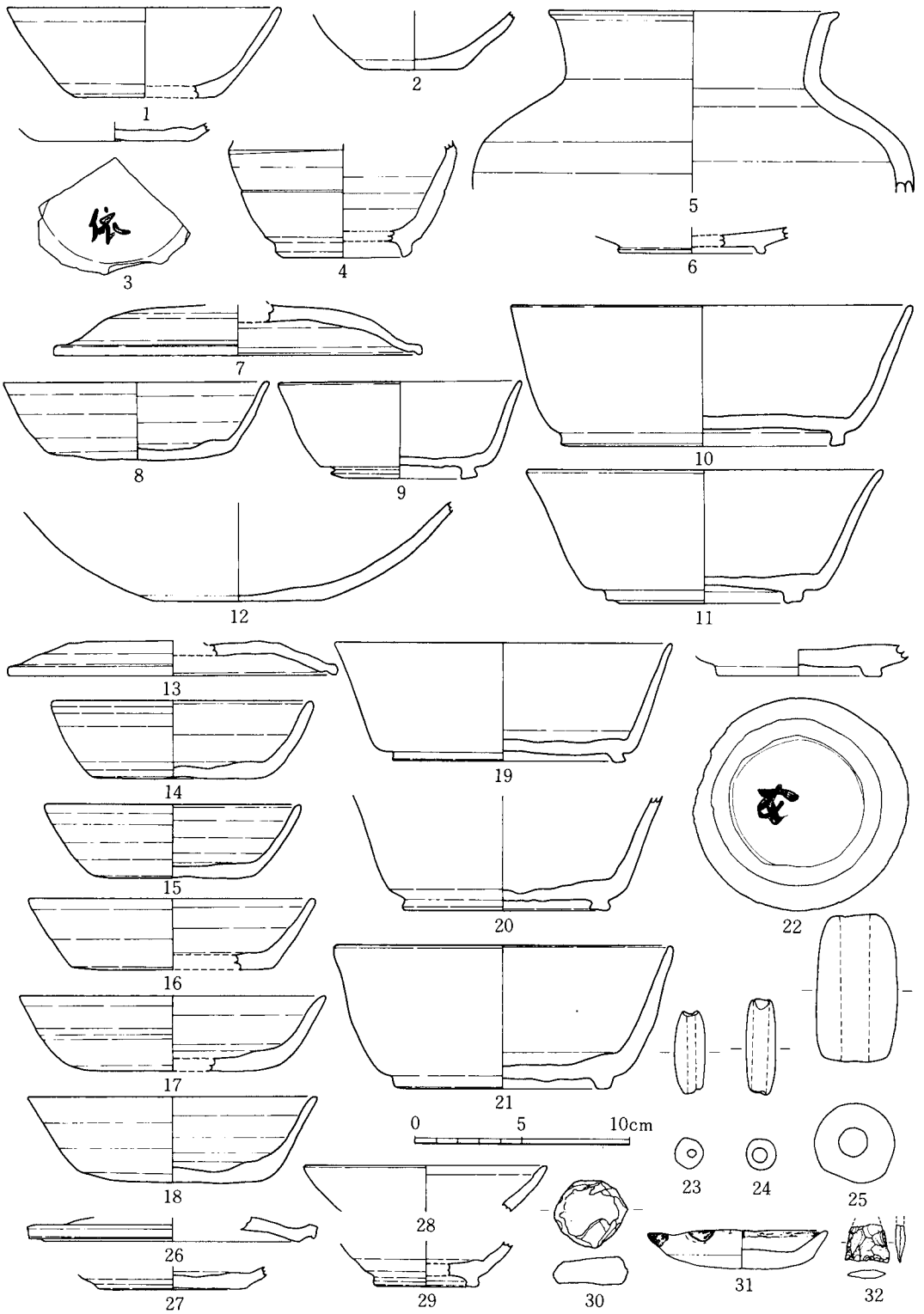
第16図　A－5号溝(1～6.9.10)、A－3号溝(7)　A－6号溝(11)、A－4号溝(12)
出土遺物



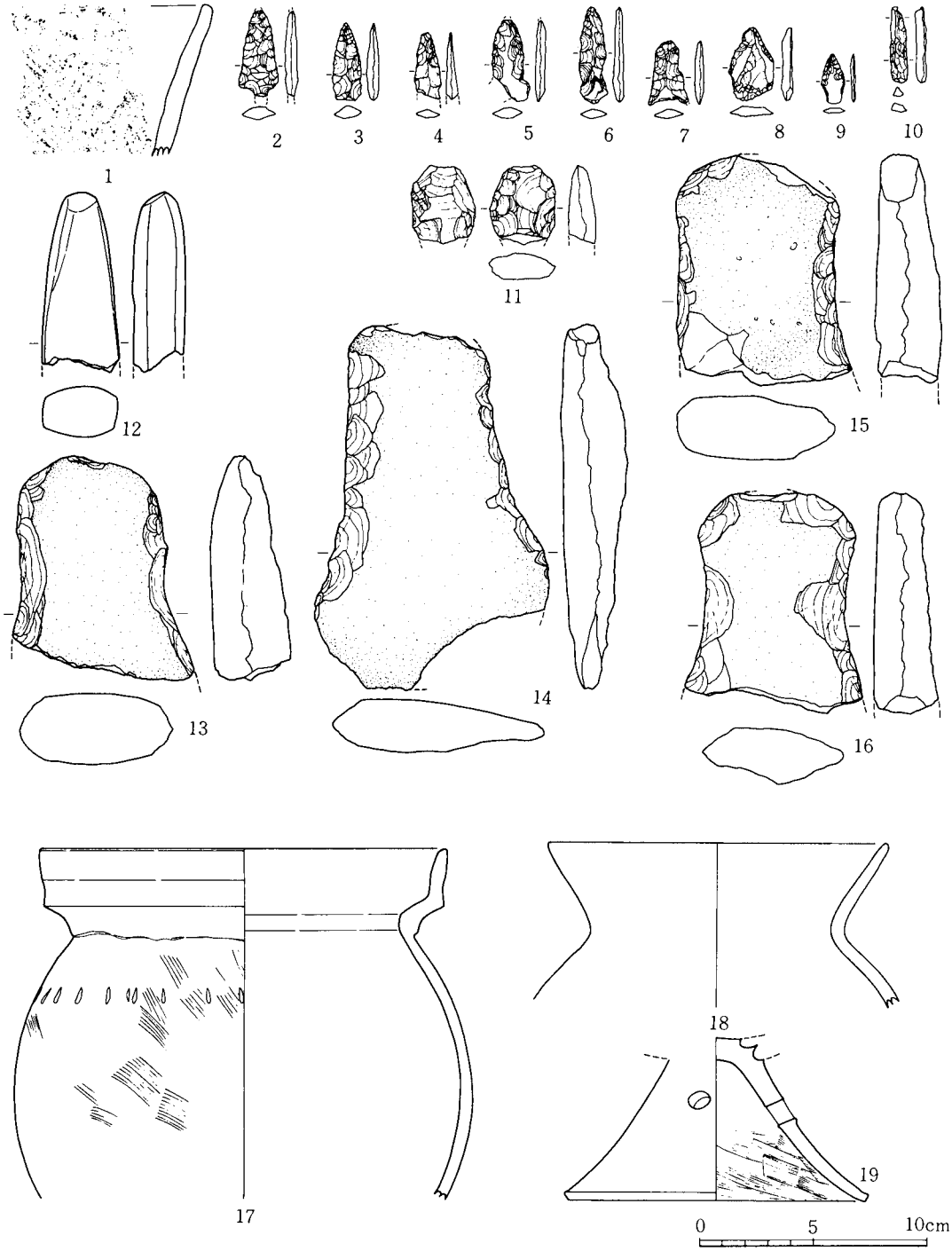
第23図　A区包含層出土遺物



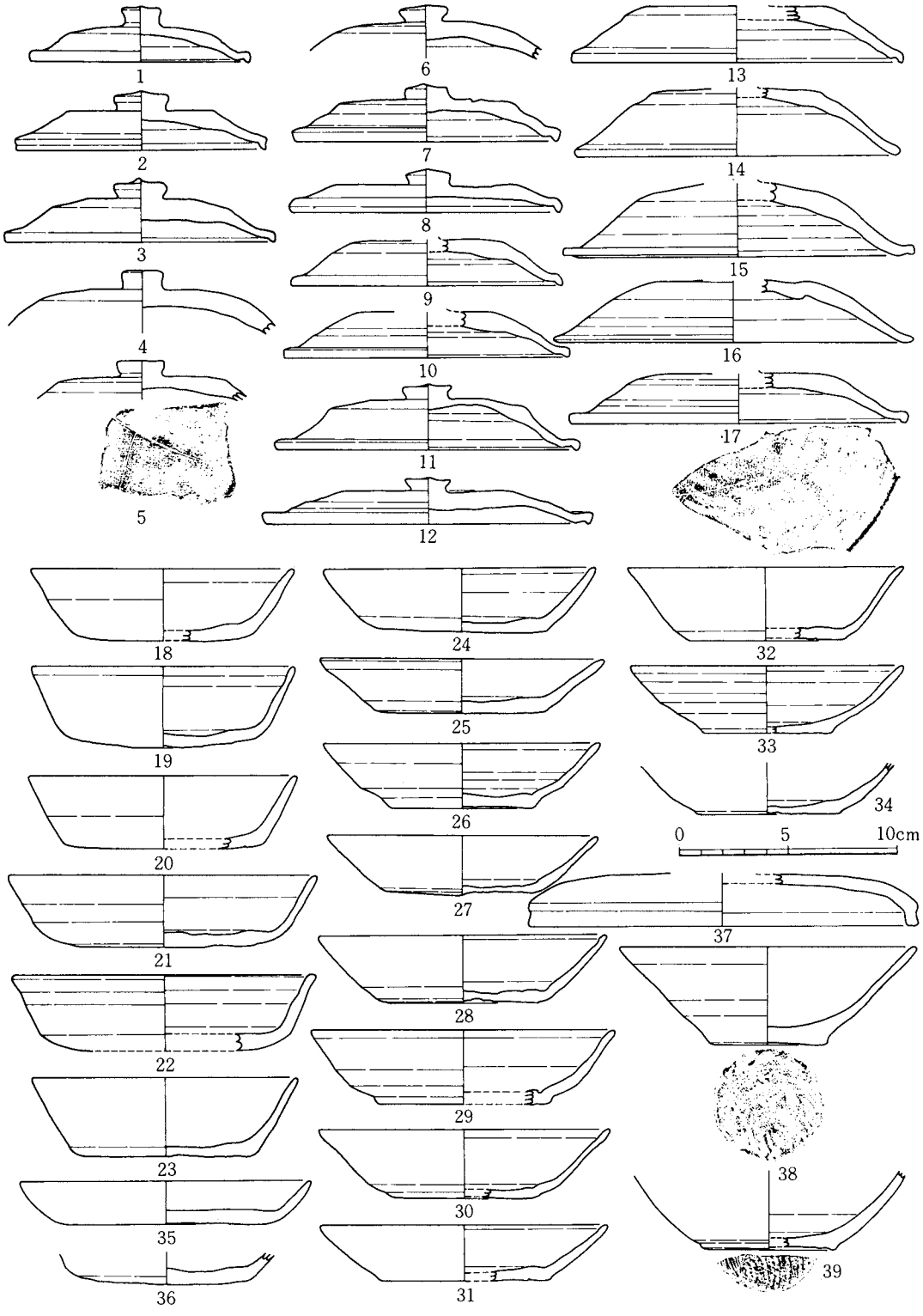
第17図　A－2号溝(1～5)、A－9号溝(6～12)、A－12号溝(18～22)、A－11号溝(23、24)、A－10号溝(25～29)、A－8号溝(30～36)出土遺物



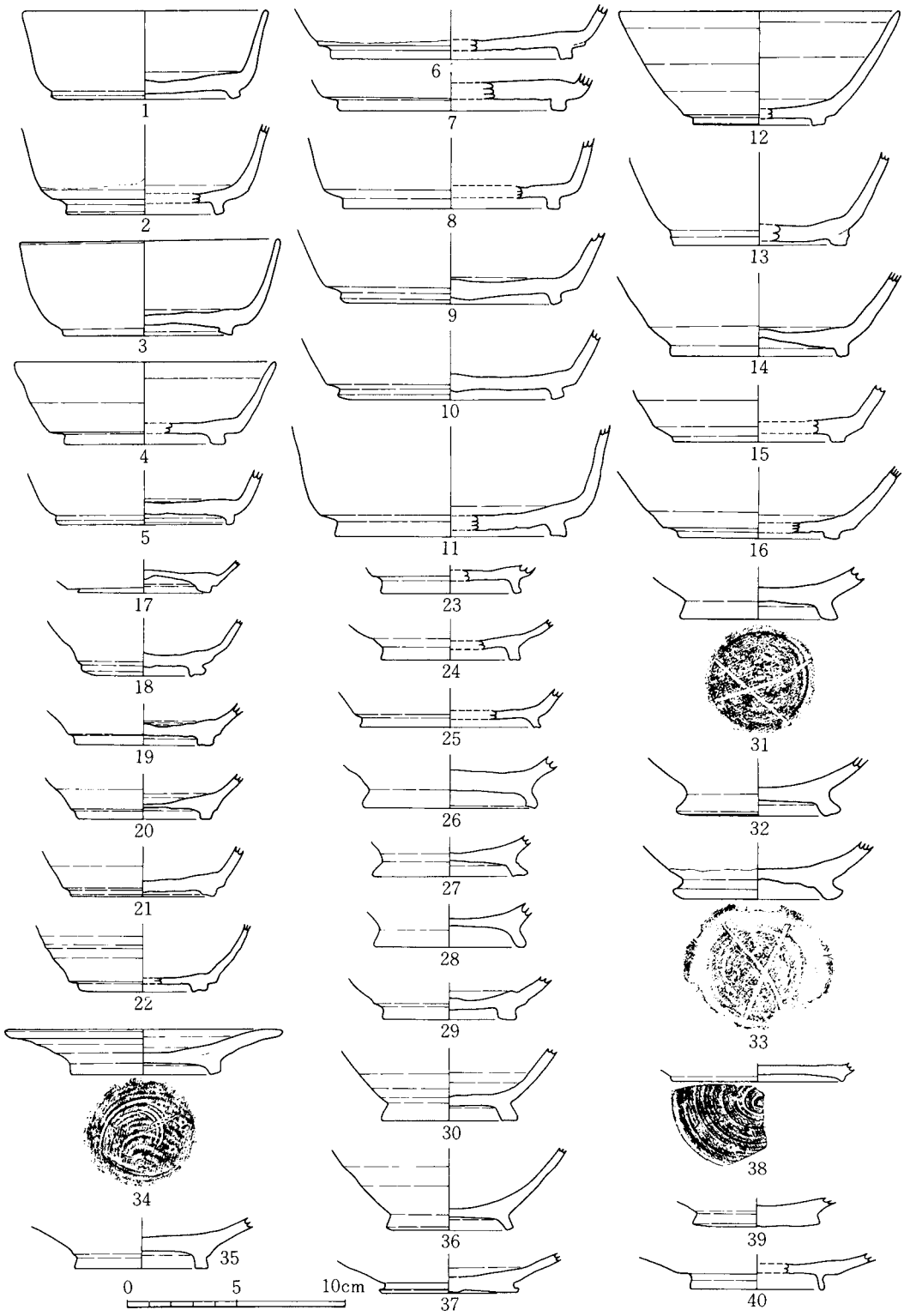
第18図　A－2井戸(1～6)、A－1井戸(7～12)、A－3号土坑(13～25)
A－4号土坑(26～30)　A－1号土坑(31)　A－2号土坑(32)出土遺物



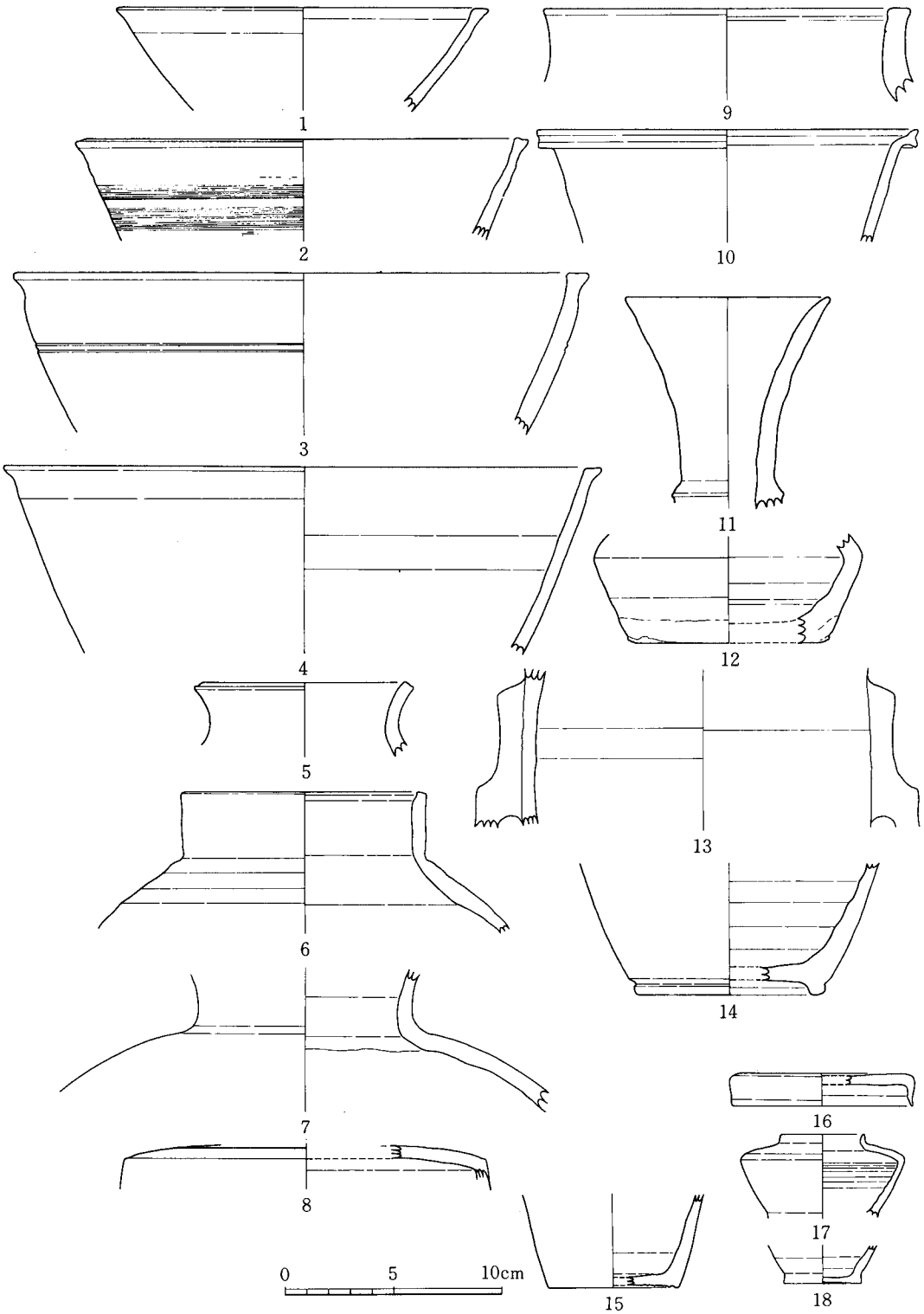
第19図　A区包含層出土遺物



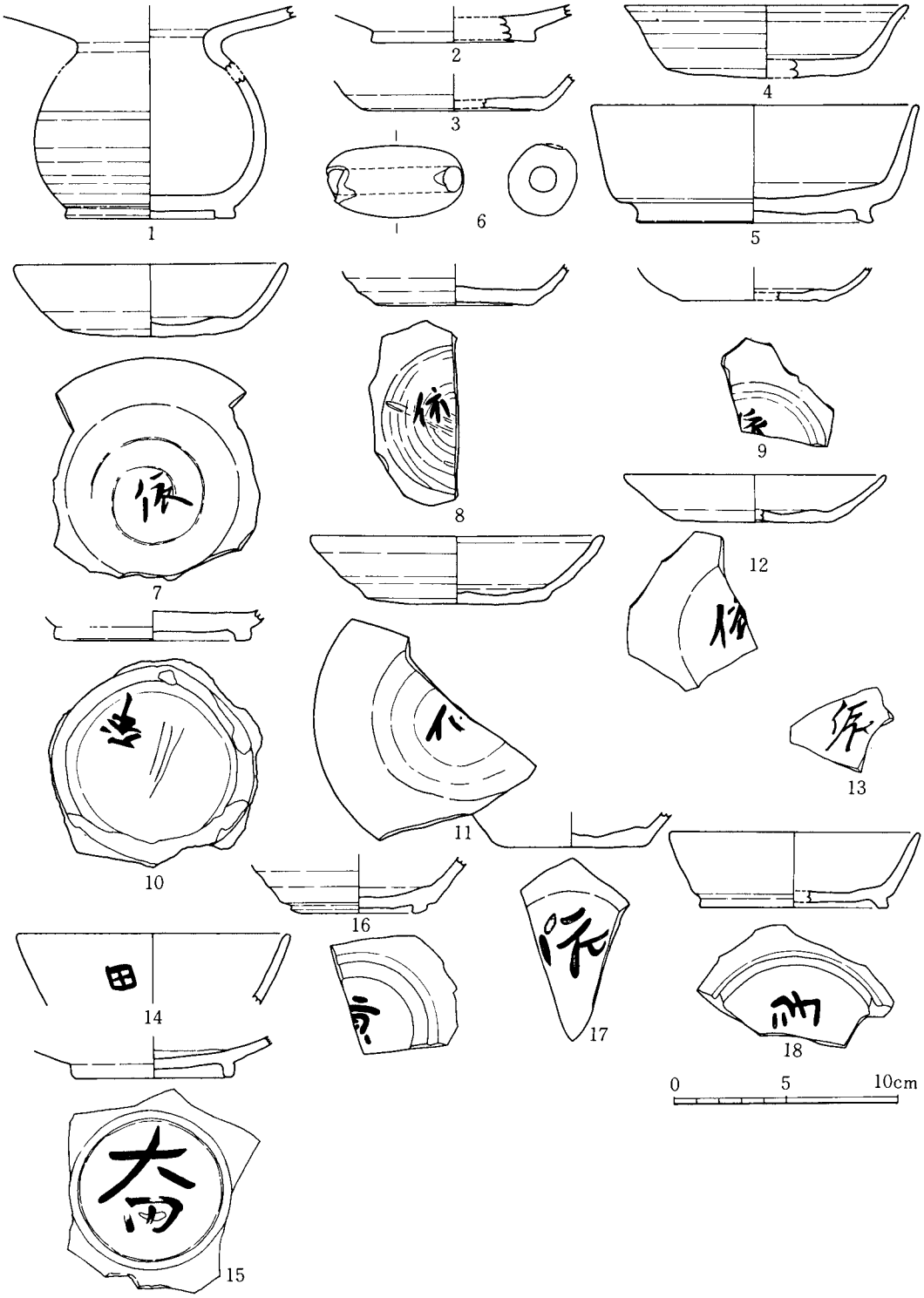
第20図　A区包含層出土遺物



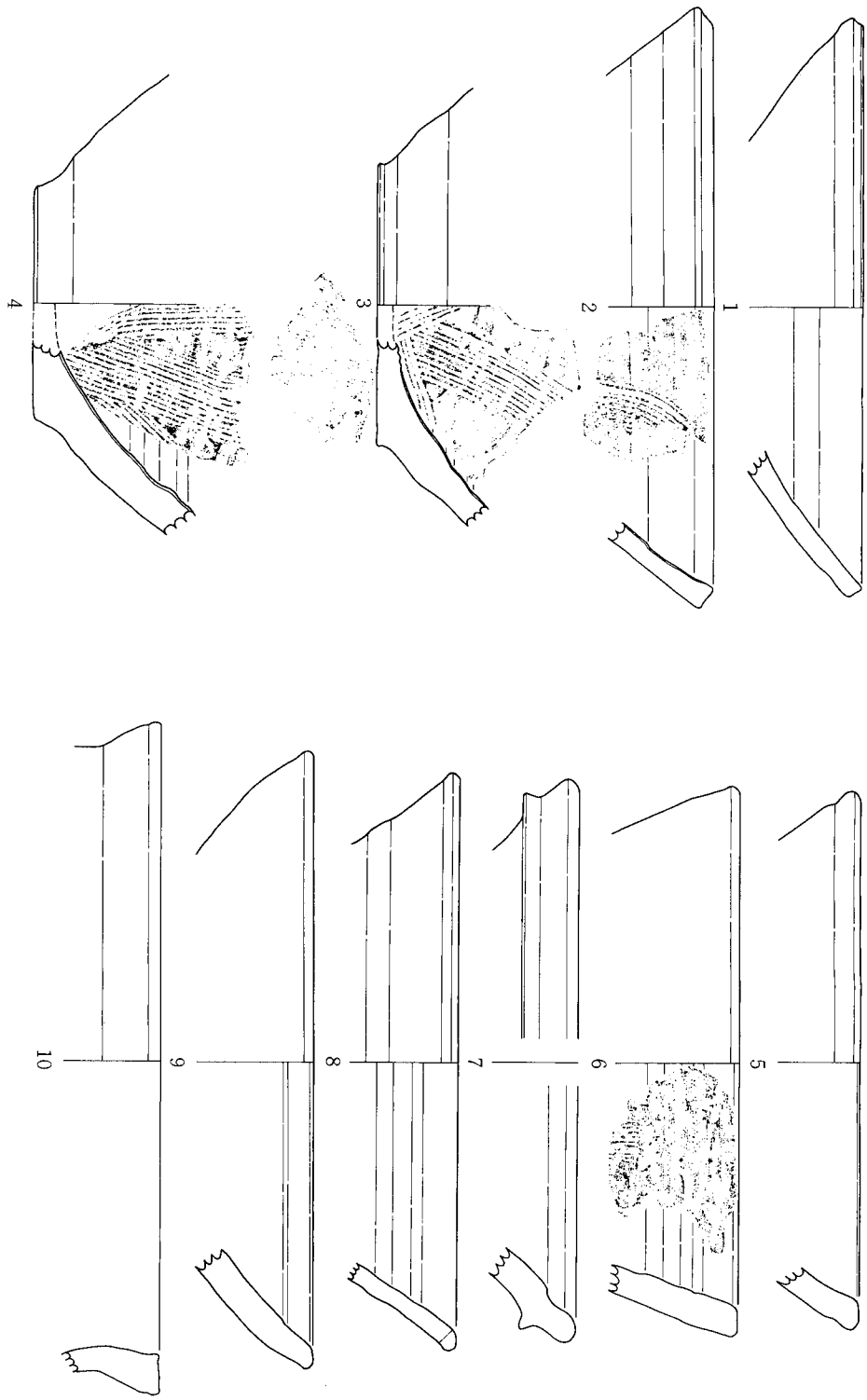
第21図　A区包含層出土遺物



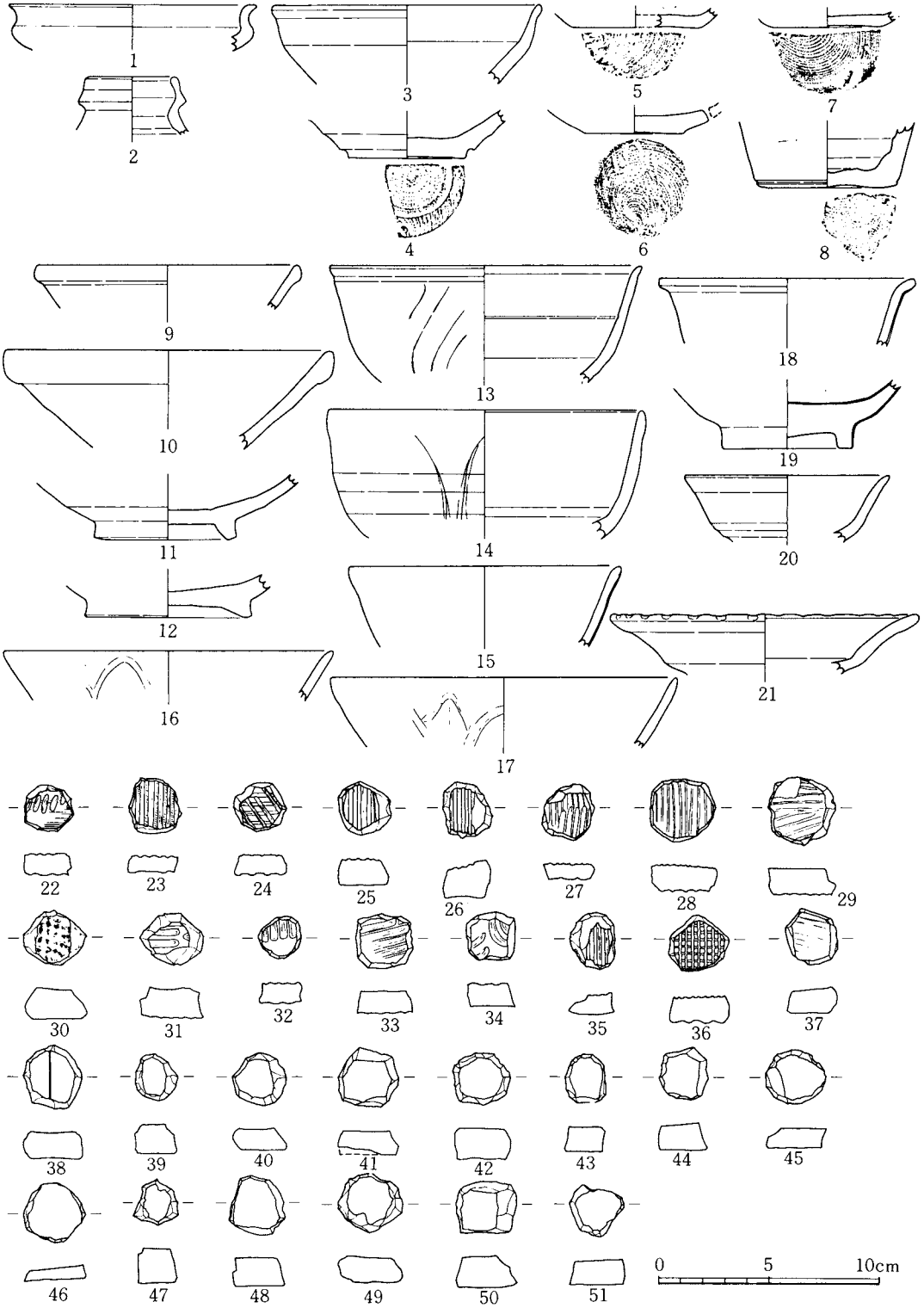
第22図　A区包含層出土遺物



第24図　　1号建物(1)、2号建物(2、6)、A－4号土坑(3)とA区包含層出土遺物



第25図　A区包含層出土遺物



第26図　A区包含層出土遺物

が出土している。坏1はやや器壁も薄く、器高の高いものである。3は底部片であるが外面に「依」の墨書が認められる。4は肩の張る小壺（瓶）と思われる破片で肩、胴部にそれぞれ一条の沈線を廻らす。6は灰釉の皿底部片と思われるもので、濁緑灰色の釉が内面に見られる。

18　1号建物

形状　北側部分では検出不能であるが南北棟建物と考えられるものである。3間×3間以上の建物となる。柱間寸法は、桁行220×200×200 cm、梁行160×150×160 cmを測る。据え付掘り方は、不整形なものが多いが、おおむね60×90 cmの方形のものと思われる。柱痕跡は約30 cm程度を確認できるものが多いが、柱痕、礎板、礎石等の遺存する柱穴はなかった。棟方向はN－1°6″－Wをさす。なお、東側桁列北第4の柱穴から緑釉陶器の唾壺が出土している。

遺物　第24図1。底部から胴部にかけての破片である。灰白色硬胎の地に淡い緑釉を内外面とも一様に施している。底部径7.8 cm、胴径10.6 cm、現存高6.4 cmのものである。なお、図示した頸部以上については泊地からの採集品である。

19　2号建物

形状　1号建物の東側18 mの地点で検出されたものである。南北棟建物と推定されるもので、妻列2間と桁列1間分を検出した。柱間寸法は、桁行240 cm、梁行270 cmを測る。据え付掘り方は、方形、円形に近いものがあり一定しないが、約70×80 cmの方形を基調とするようである。なお、北側妻列西2の柱穴には柱根が遺存し、その径は28 cmである。同じく北側妻列西3の柱穴には礎板が遺存している。棟方向はN－8°－Wをさす。この地点では、溝状遺構、その他のピットなどと重複しており全体に遺存状態は良くない。

遺物　西側桁列北2の柱穴から緑釉陶片が出土している。底径7.5 cm、残存器高1.3 cmを測る底部片である。茶褐色軟胎の地に淡い斑のある緑釉が一様に施される。ベタ高台の近江産風のものである。第24図2、6。　（平田）

第2節　B区の遺構と遺物

検出した遺構には、古墳時代前期の溝跡（A－1、A－2号溝）の南側への追認、平安時代に属する多くの溝、中世の溝、平安時代の井戸（B－1号井戸）がある。また、長方形、方形に近い竪穴状の遺構が5基ある。また、掘立柱建物は2号建物の南側の確認と2棟分の検出があった。（3、'4号建物）

1　B－1、B－2号溝

形状　A－1、A－2号溝の南東側の同一溝である。B－1号溝は、幅120 cm前後、溝底幅20～30 cm、深さ30 cm前後を測るものである。B－2号溝も幅80 cm前後、溝底幅20～40 cm、深さ25 cm前後を測るものである。

遺物　第32図1～11。すべてB－2号溝からの出土である。すべて土師器で受口状の口縁を有する甕（1）、くの字状口縁を有する甕（2～7）、大きくラッパ状に開き、くの字状口縁を有し頸

部に刺突文を廻らす壺（2）、台脚（8）、器台脚部（9）と壺、甕の底部片（10、11）がある。

2　B－3号溝

形状　幅80cm前後、深さ20cmを測る比較的浅いものである。

遺物　第35図17～44。土師器では受け口状の口縁を有する17～19。くの字口縁を有する20、高坏脚部21、22がある。古墳時代に属する須恵器では23、その他の須恵器では、奈良から平安時代にかけてのものである。37は、土師質軟胎の緑釉陶片である。39は、灰釉陶器の埦である。また、土錘も4点出土している。本溝跡は、浅く各時期の遺物が出土していることを考えると、かなり混入品も見られるものと思う。溝の方向の不整な点から見ると17～19の時期の所産と考えた方がより妥当性をおびる。

3　B－4号溝

形状　幅60cm前後、溝底幅30cm前後、深さ25cmを測るものである。南北走する溝の多い本遺跡においては、異方向のものである。

遺物　第33図1～22。1、2は受け口状の口縁を有し擬凹線をもつ甕である。3～4は受け口状の口縁を有し素文のものである。7～10は、受け口状口縁を有し壺形器形をなすものである。6、11はくの字状口縁を有する甕である。須恵器も3点（17、18、22）出土している。19は土師質軟胎の緑釉陶器である。土錘も2点出土している。本溝跡もB－3号溝と同様に本遺跡では異方向の部類に属することなどから、その機能していた主な時期は1～5の時期に求められるものと思われる。

4　B－5号溝

形状　東西走するもので幅30cm前後、溝底幅10cm前後、深さ20cmを測るものである。

遺物　第32図12～20。須恵器と土錘1点が出土している。12は混入品と見られる古墳時代後期に属するものである。本溝跡は、東西走するもので14～18の須恵器の時期の所産と考えられる。その時期は平安時代前半の後葉のものであろう。

5　B－6号溝

形状　幅40cm前後、溝底幅40cm前後、深さ25cmを測るものである。B－4号溝と同一のものと思われるが、この地点で拡幅、複合が考えられるので一応別に扱う。

遺物　第33図23～26。須恵器23、24と土師器25、26が出土している。蓋は口径11.8cmに復元できる比較的小振りのもので端面先端で鋭く屈曲するものである。24は口径12.0cm、器高4.0cm、に復元でき、器壁も厚くまた外傾も弱いものである。25は長胴形の甕、26は堝と推定されるものである。これらは概ね奈良時代前半の特徴を具備していると思われる。

6　B－7号溝

形状　南北走するもので幅160cm前後、溝底幅60cm前後、深さ70cmを測る。肩中位で段を有する二段掘りのものである。

遺物　第36図1～31、第35図1～16。土師器1～4、須恵器5～26、珠洲28、越前29、31、青磁32、4～6、瓦質土器30、土錘、メンコなどが出土している。古墳時代前期では擬凹線文を有

する甕1、後期では須恵器坏5がある。須恵器蓋、坏では概ね奈良時代前半のもの(9、15など)と平安時代前半の後葉(26など)に属するものがある。27は灰釉陶器である。珠洲では口唇部に櫛歯による波状文を施す鉢28が1点ある。馬緤窯式のものと思われる。越前では29の底部片と31の肩部にヘラ先による4条以上の線刻と格子目が認められる。瓦質土器30は火鉢と思われるもので口縁部近くに花文状のスタンプがある。32、第36図4は青磁の碗で見込にスタンプがある。第36図5、6は青磁盤である。本溝跡の機能していた年代も一部平安時代まで遡る可能性も考えられるが概ね珠洲編年の馬緤窯式以降のものであろう。

7　B－8号溝

形状　溝として扱ったが、方形の土坑の可能性が高い。長辺520cm、短辺270cm、深さ30cmを測るものである。

遺物　第37図1～44。須恵器1～19、22～25、珠洲33、34、土師質土器26～32、青磁36、白磁37、土錘、メンコが出土している。須恵器では古墳時代後期に属する蓋6、奈良時代前半と思われる1、7、平安時代前期後半とみられる11、19などがある。珠洲33、34は法住寺3号窯式から馬緤窯式期にかけてのものであろう。37は小玉縁を有する白磁碗の底部片である。土師質土器も口径7～10cmにかけての比較的小形のものが多い。土錘も平面形が長方形を呈する39、40の2がある。

8　B－9号溝

形状　ほぼ南北走するもので幅170cm、深さ40cmを測り、溝底もほぼ水平に近く幅70cmを測るものである。

遺物　第34図1～23。須恵器では古墳時代後期に属する坏1、2と奈良時代に属する坏、盤(3～16)が出土している。17～19は土師質土器である。21は珠洲甕の底部片である。

9　B－1号方形竪穴状遺構

形状　長辺260cm、短辺220cm、深さ25cmを測るものである。覆土は、地山ブロック(黄褐色粘土)混じりの比較的脆い感じのものである。出土遺物も掘削時に混入したと推定される細片が多い。短軸をほぼ南北に(N－6°－E)にもつものである。

遺物　第38図1、2。1は白磁玉縁鉢の口縁部片である。2は須恵器甕胴部片である。

10　B－2号方形竪穴状遺構

形状　長辺340cm、短辺240cm、深さ35cmを測るほぼ長方形をなすものである。覆土は、地山ブロック(黄褐色粘土)と黒褐色土の混合した比較的脆い感じを与えるものである。出土遺物もB－1号同様に細片が多い。長辺軸をほぼ南北(N－7°－E)にもつものである。

遺物　第38図3～11。須恵器3～5、7、10、11と土師器6、8と土錘が出土している。須恵器では概ね奈良時代の後半のもの、土師器では平安時代前期後半のものが多い。

11　B－3号方形竪穴状遺構

形状　長辺280cm、短辺150cm、深さ25cmを測り隅円方形を呈するものである。覆土は、B－1、B－2号などと同様である。長辺軸をほぼ南北(N－3°－W)にもつ。

遺物　第38図12～24。細片が多いのであるが須恵器12～18、23、24と土師器19、20と土錘が出土している。須恵器では奈良時代の後半のものと平安時代前期後葉のものがある。土師器も平安時代前期後葉のものであろう。

12　B－1号井戸

形状　長軸140cm、短軸130cmを測るほぼ円形に近い形状を呈する。深さ25cmで段をなす二段掘りのもので深さ150cmで底面に達する。井戸側とかの材は残存していないが、形状などから井戸と推定される。元より井戸側などを使用しない素掘りのものであった可能性が高い。出土遺物は細片であるが、図示した4点を井戸中位より検出している。

遺物　第38図25～29。25は双身瓶の耳の部分の破片である。26は須恵器甕口頸部の破片で波状文を廻らす。27は土師器坏である。28、29は須恵器高台坏である。

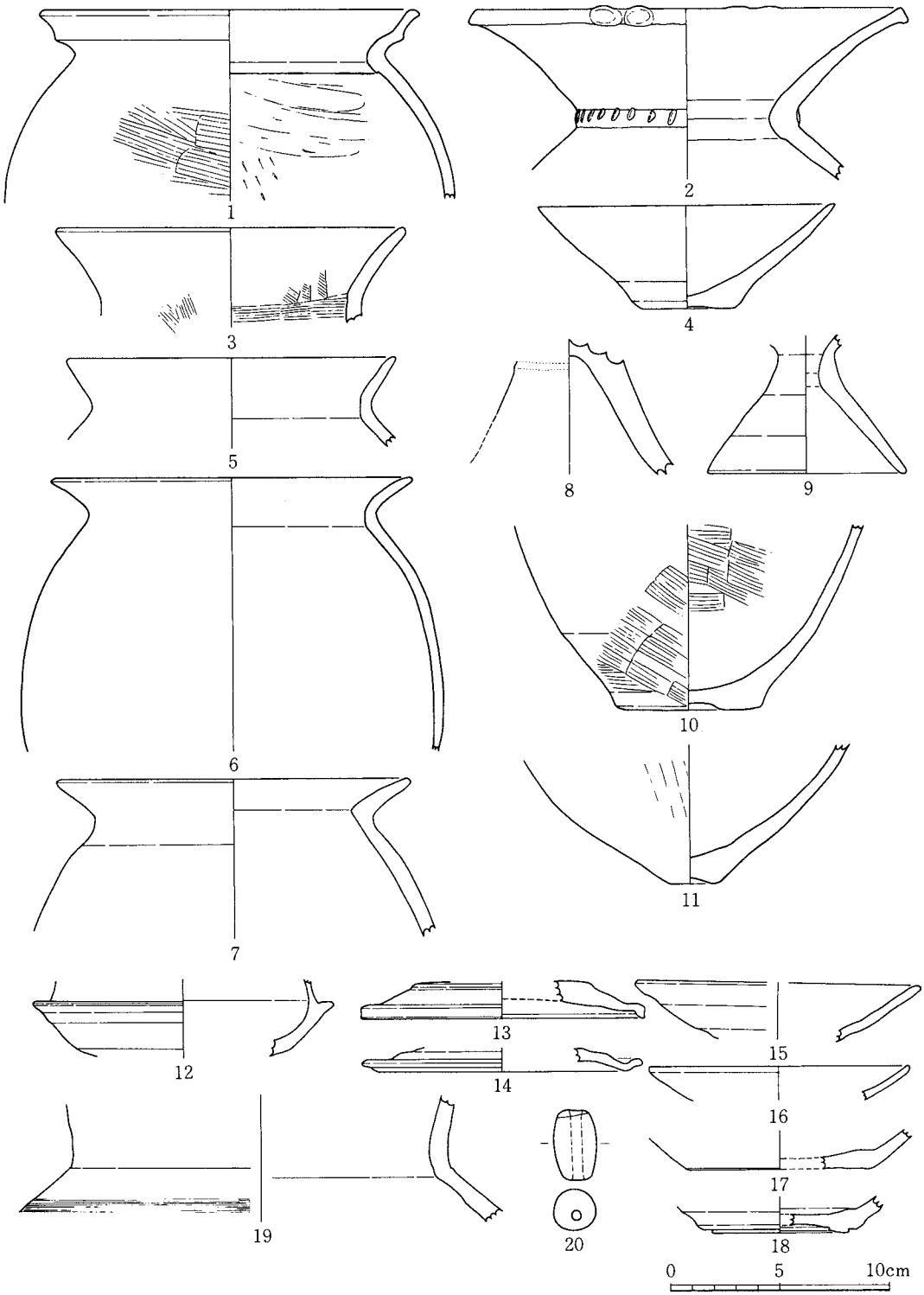
13　3号建物

形状　南北棟建物で西側柱列南2、3と南妻柱列西1、2の柱穴と礎板は冬期の波浪のために消失しており検出不能であった。桁行4間、梁行2間の可能性が最も高い。西側柱列北第2柱穴に柱痕が遺存するほかは、検出した各柱穴にはそれぞれ礎板が遺存している。柱痕は、長径40cm、短径28cmが現存するが、元は径40cmを超す円柱と推定される。なお、底面よりややあがった位置に径10cmのいかだ穴がある。据付掘方は約120cmの方形をなす。そのほかのものはやや小さく約100cm×90cmの長方形を呈するものである。礎板は、おおむね15×40cm、厚さ約5cmを測るものである。柱穴内に1枚だけのもの2～4枚遺存するものがある。東側柱列南第1柱穴の礎板には、柄穴がみられ廃材を転用したものと思われる。各々の柱間寸法を復元すると240cm（8尺）等間となる。棟軸は、磁北に対して約1°6′東にふれている。

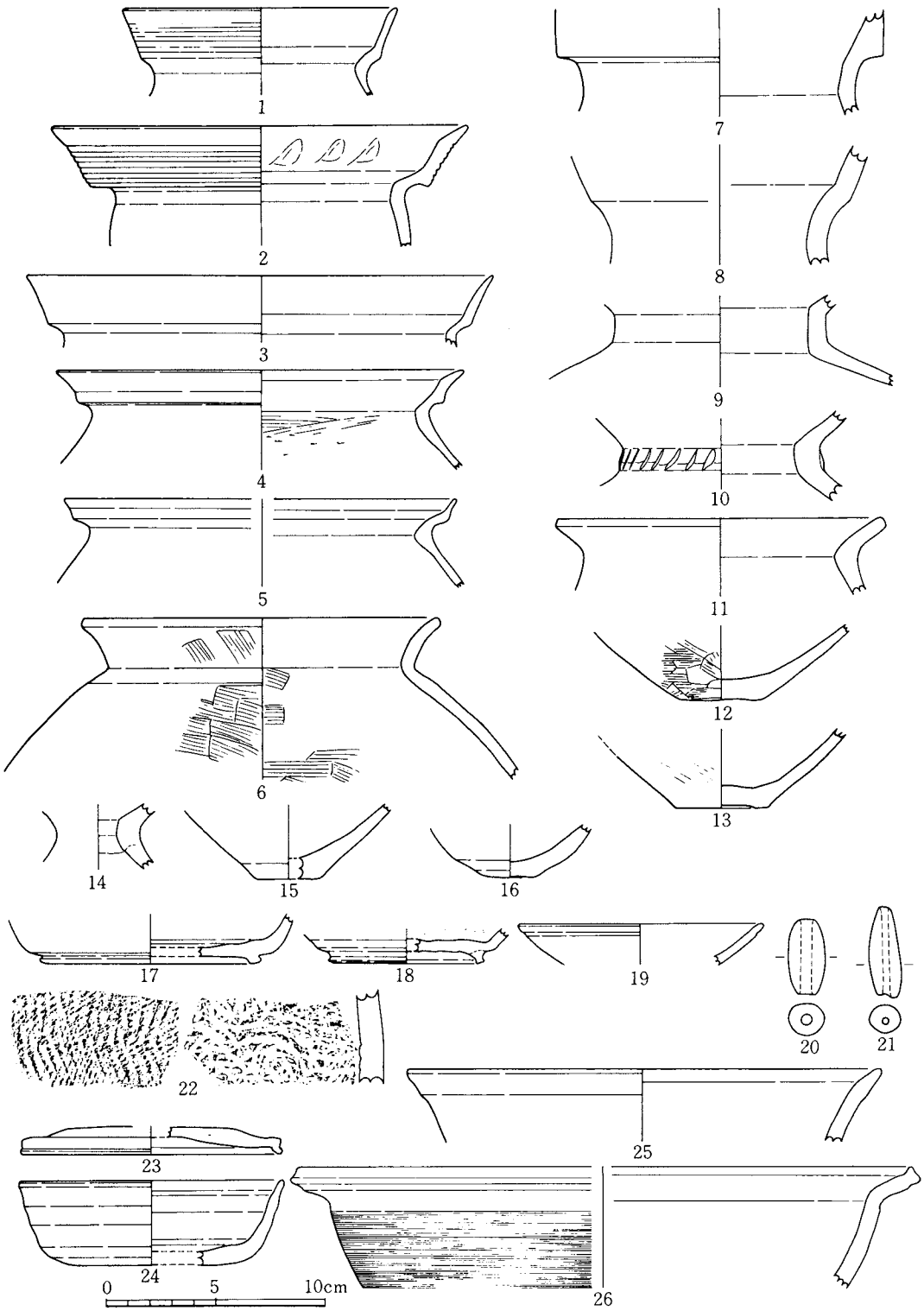
遺物　第38図34、35。東側柱列北第3柱穴の掘り方から土師器坏底部片2点を検出している。いずれも底部細片のため全形を知り得ないが、34は底径7.5cm、35は5.5cmに復元できるものである。いずれも底部は、糸切りと思われるが35には明瞭に認められる。

14　4号建物

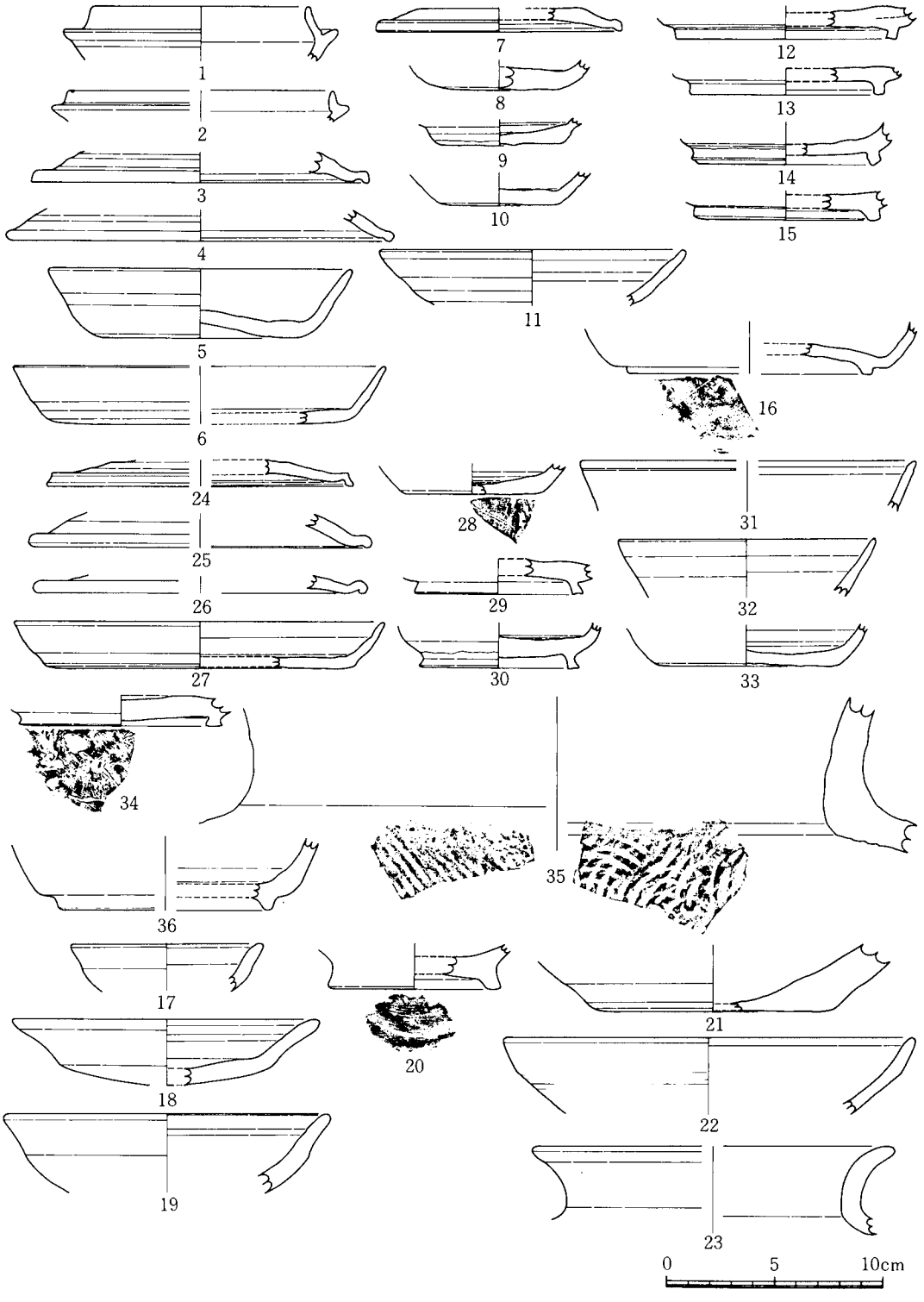
形状　3号建物の南東21mの地点で検出したものである。東西棟建物で身舎は1間×2間で四面に付属施設の付くものである。身舎の据付掘方は不形な円形のものが多いが、長径60cm、短径50cmを測り、柱痕跡は径20cmを測るものが多い。四面に付属する施設の掘方は、20cm×20cmの方形を基調とし、柱痕跡の直径は約10cmのものが多く非常に小さい。この付属施設については、類例の検索もしていなく不明であるが、縁に類する施設かと考えている。柱間寸法を柱痕跡の位置より復元すると、身舎の南北側柱列は各々240cm（8尺）の等間で、東西側柱列は各々300cm（10尺）となる。また、比較的よく遺存する付属施設の南側柱列西第1柱穴からの復元柱間寸法は、100cm×230cm×70cm×190cm×100cmとなり、規格性にとぼしいものとなる。なお、建物軸方位は磁北に対して約8°東にふられている。本建物は、構造のうえからも本遺跡の中では異質なもので、また時期的な面からも後出的な要素をもったものと考えている。据付掘方、柱痕跡からは図示可能な遺物は、まったく検出されなかった。



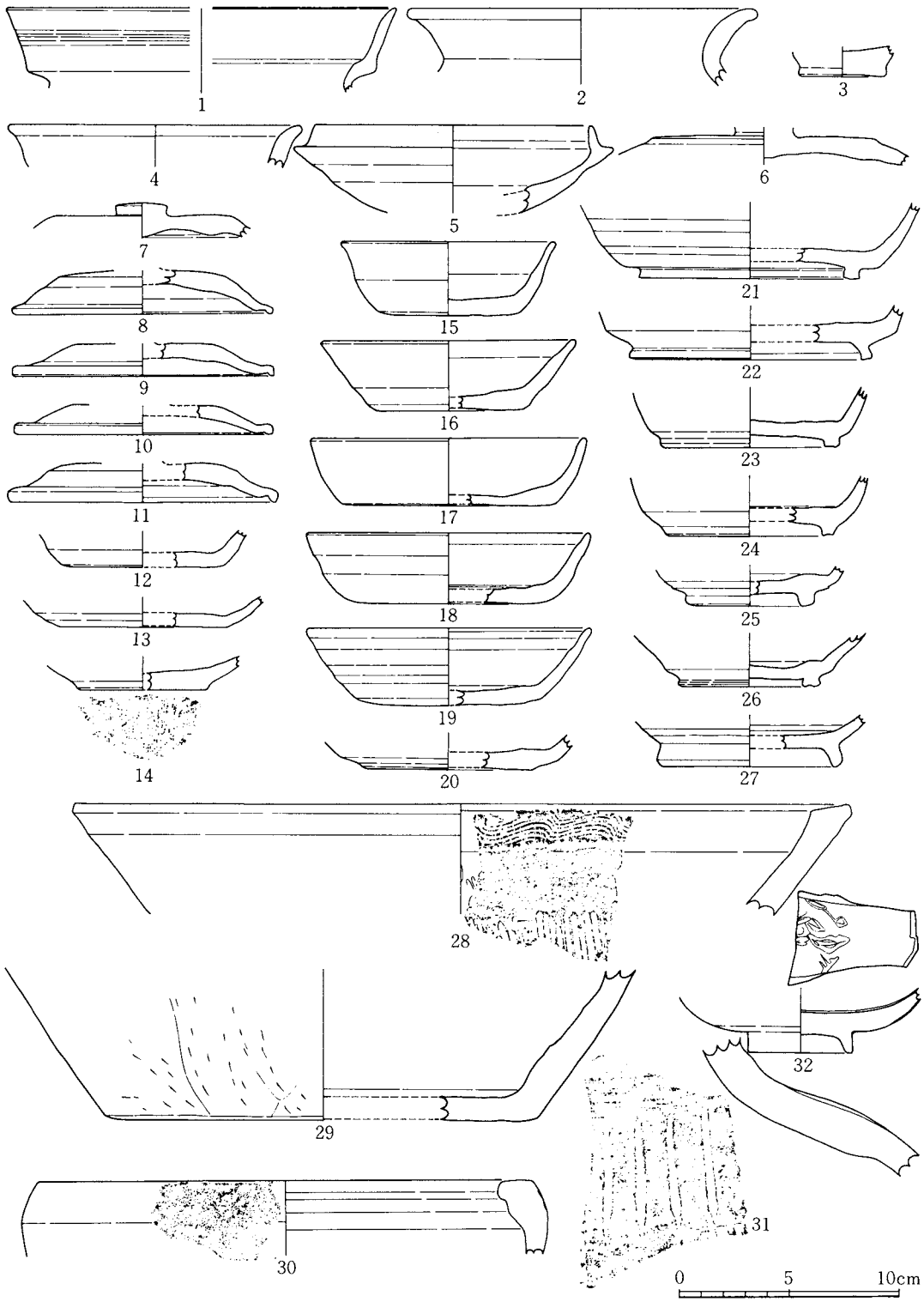
第32図　B－2号溝(1～11)、B－5溝(12～20)出土遺物



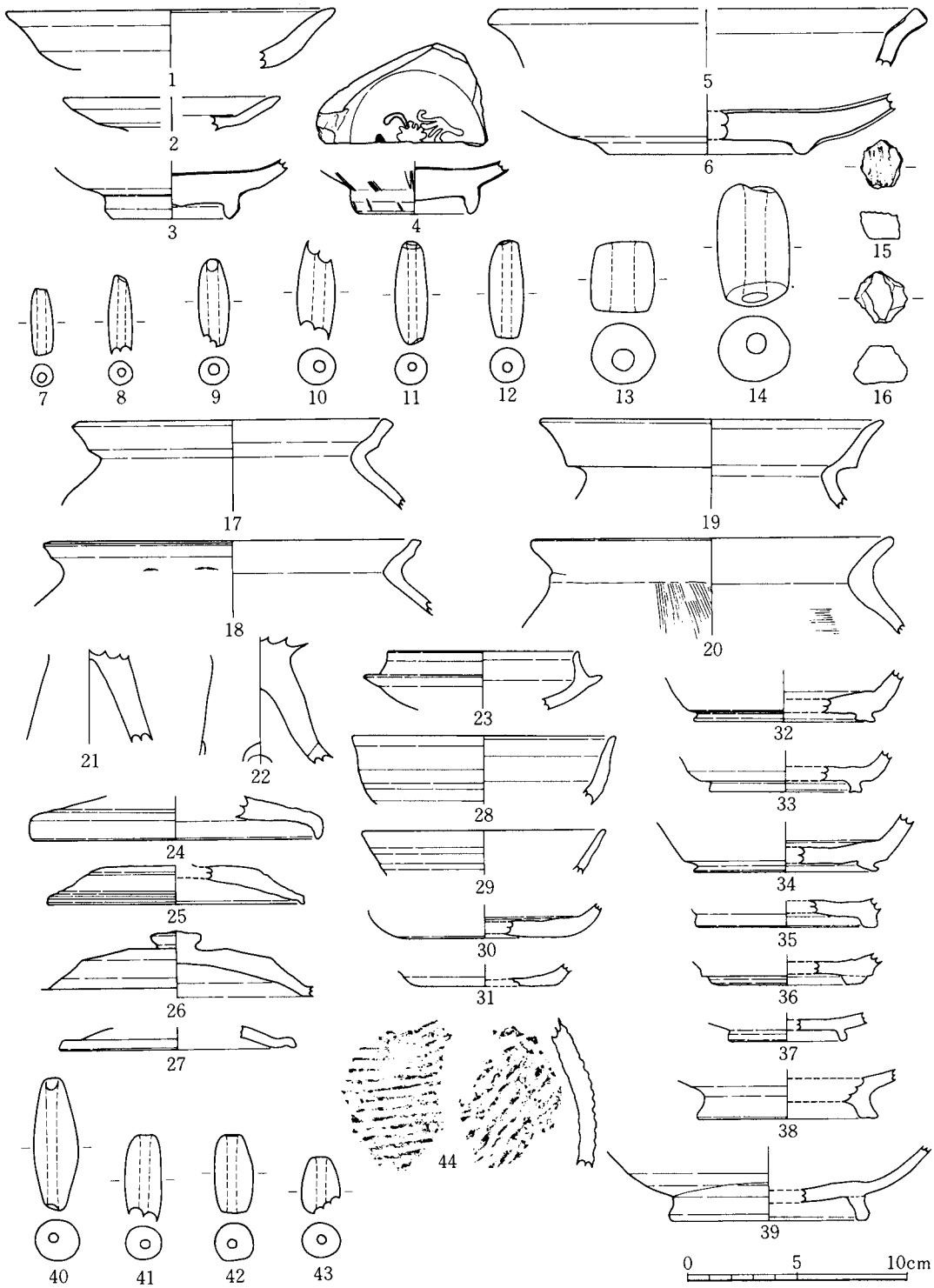
第33図　B－4号溝(1～22)、B－6号溝(23～26)出土遺物



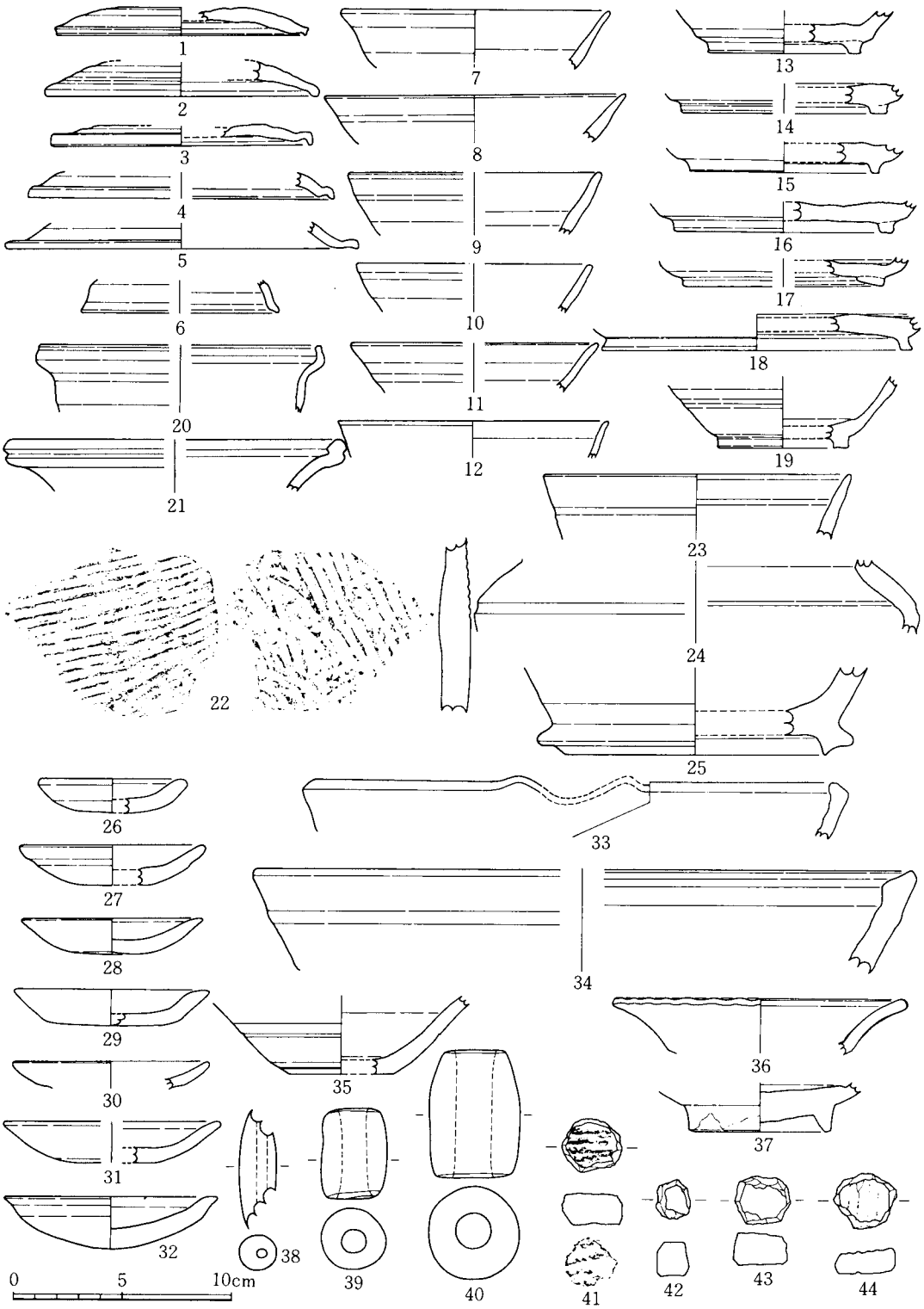
第34図　B－5号溝(24～36)、B－9号溝(1～23)出土遺物



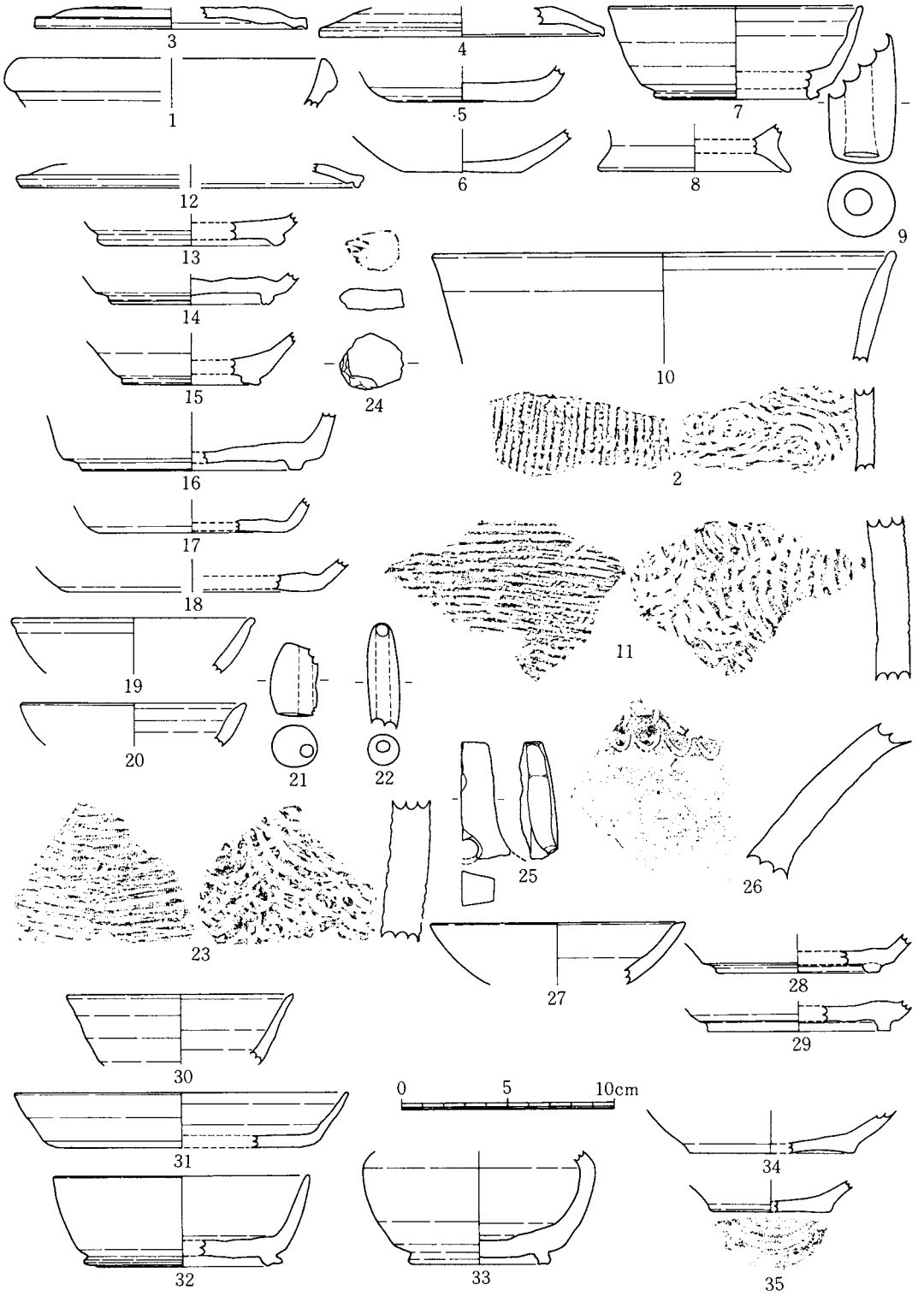
第35図　B－7号溝出土遺物



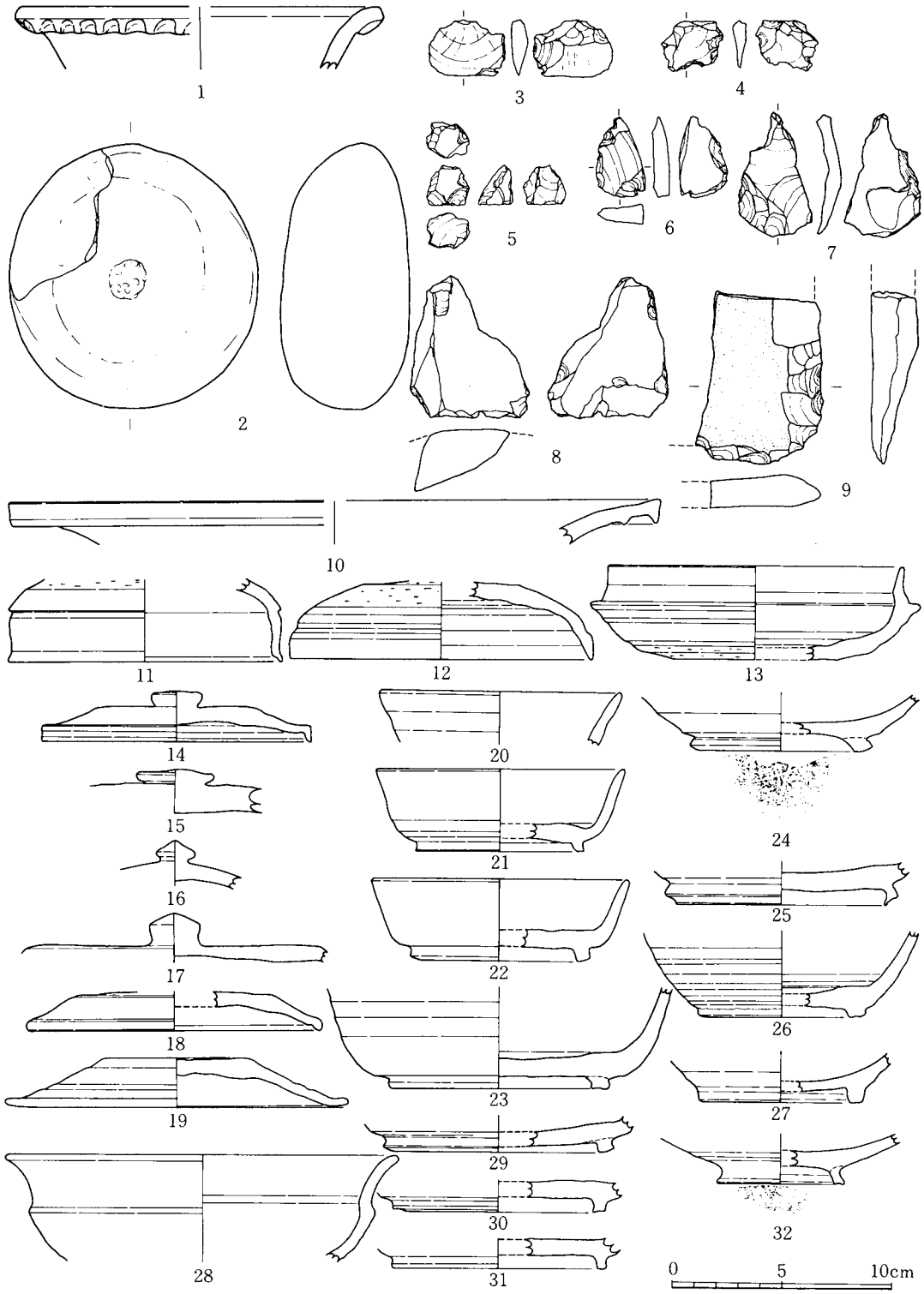
第36図　B－7号溝(1～16)、B－3号溝(17～44)



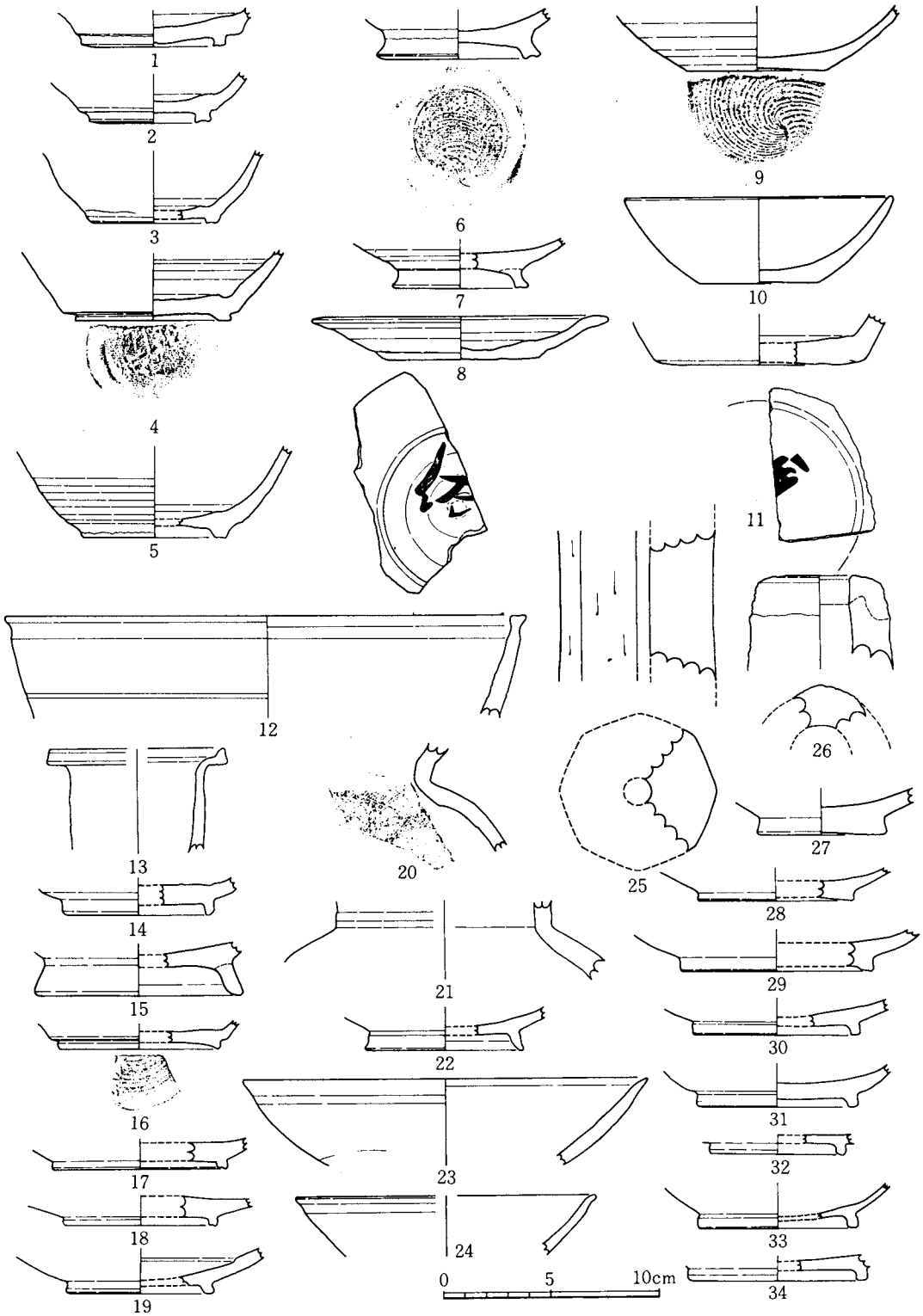
第37図　B－8号溝出土遺物(1～44)



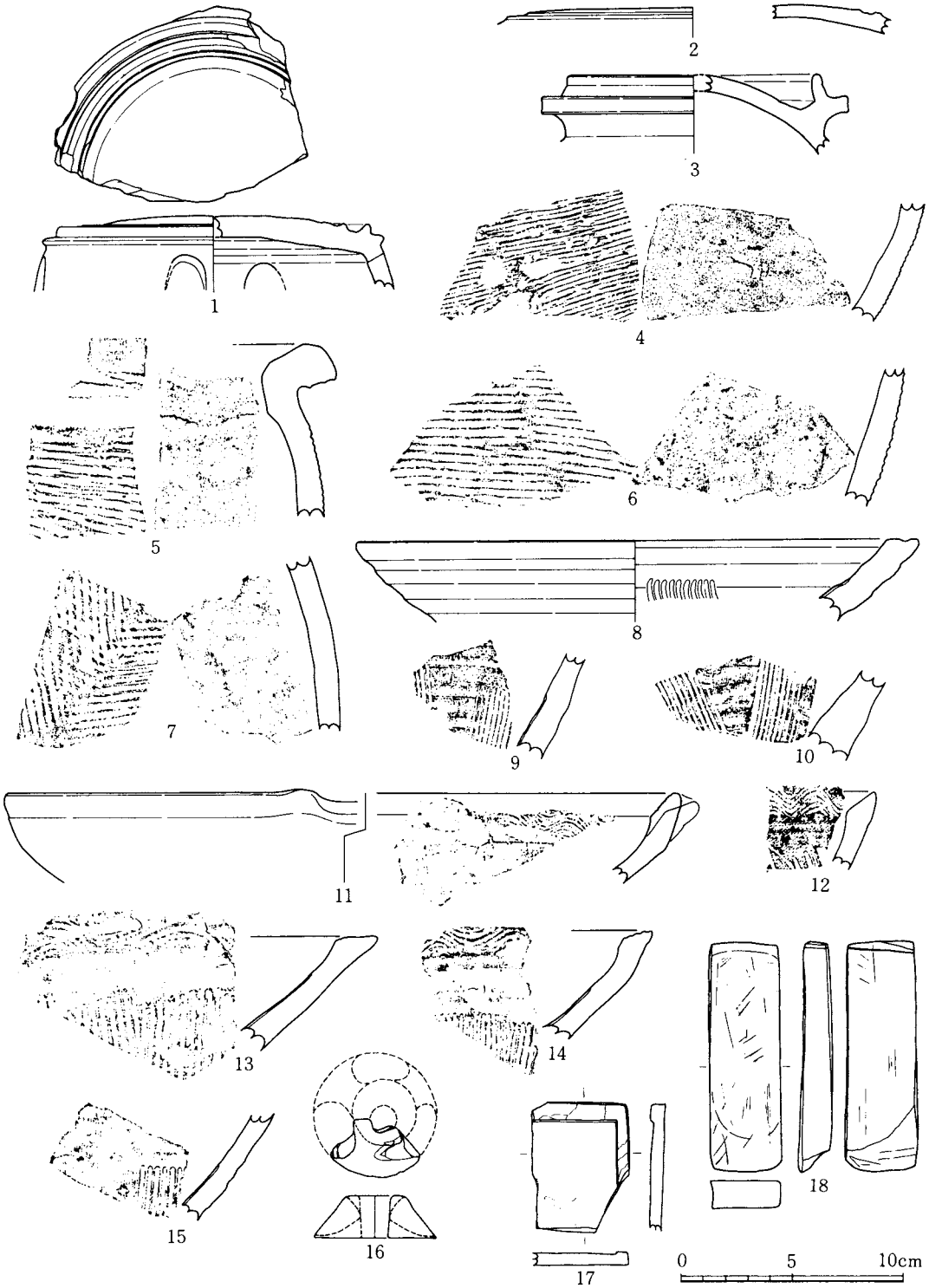
第38図　B－1号方形(1、2)、B－2号方形(3～11)、B－3方形(12～24)、
B－1号井戸(25～29)、ピット、柱穴(30～35)出土遺物



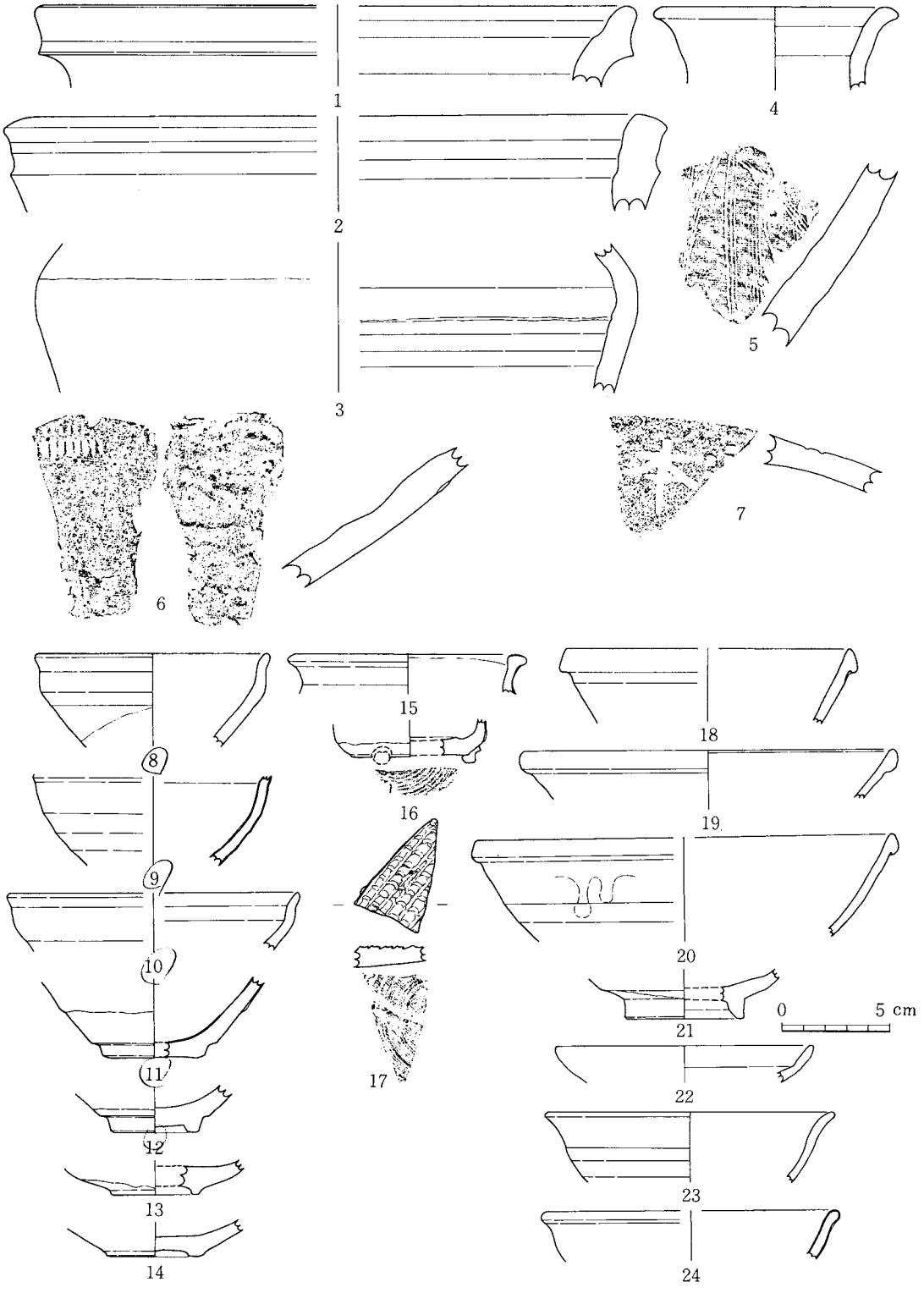
第39図　B区包含層出土遺物



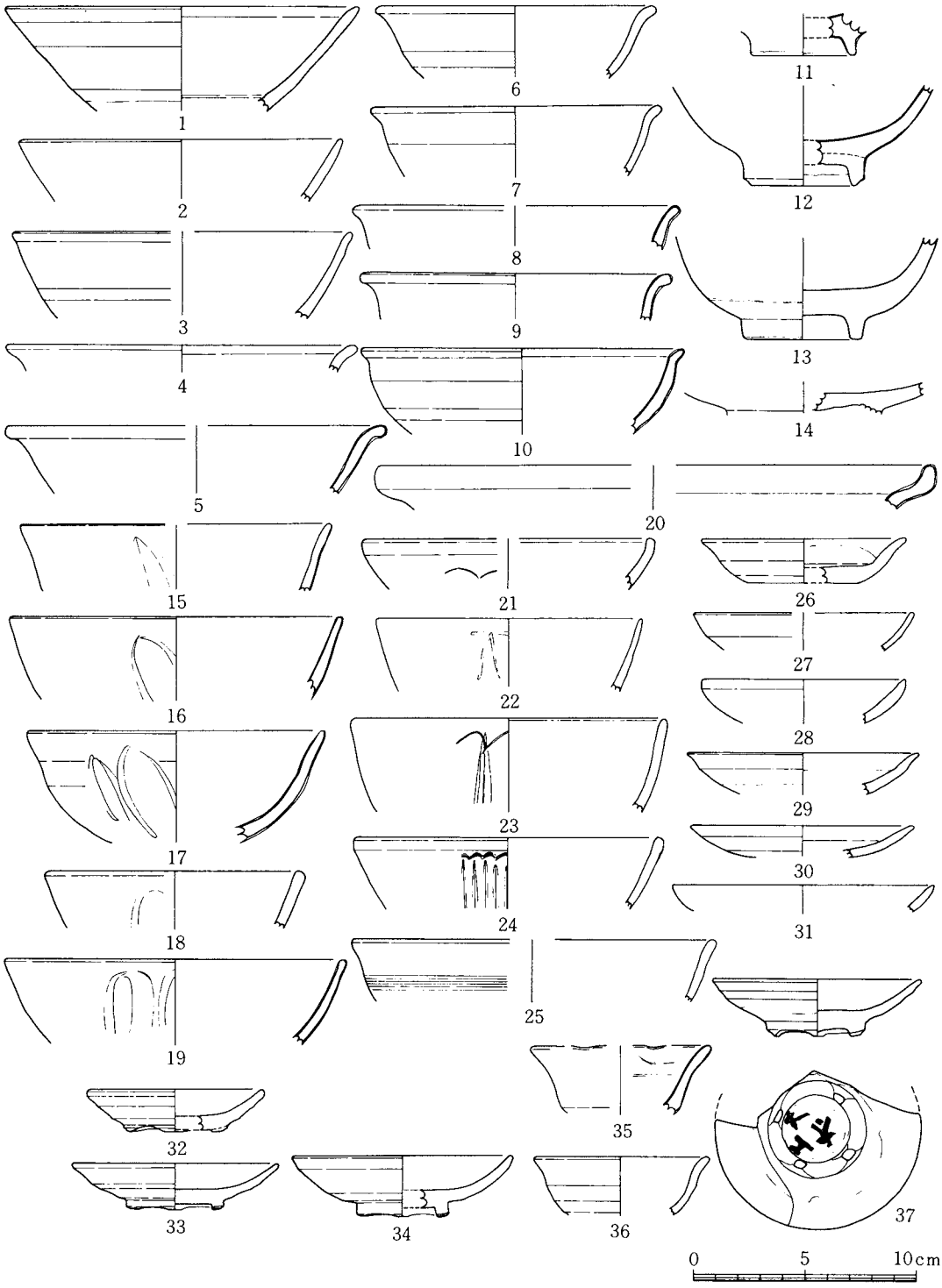
第40図　B区包含層出土遺物



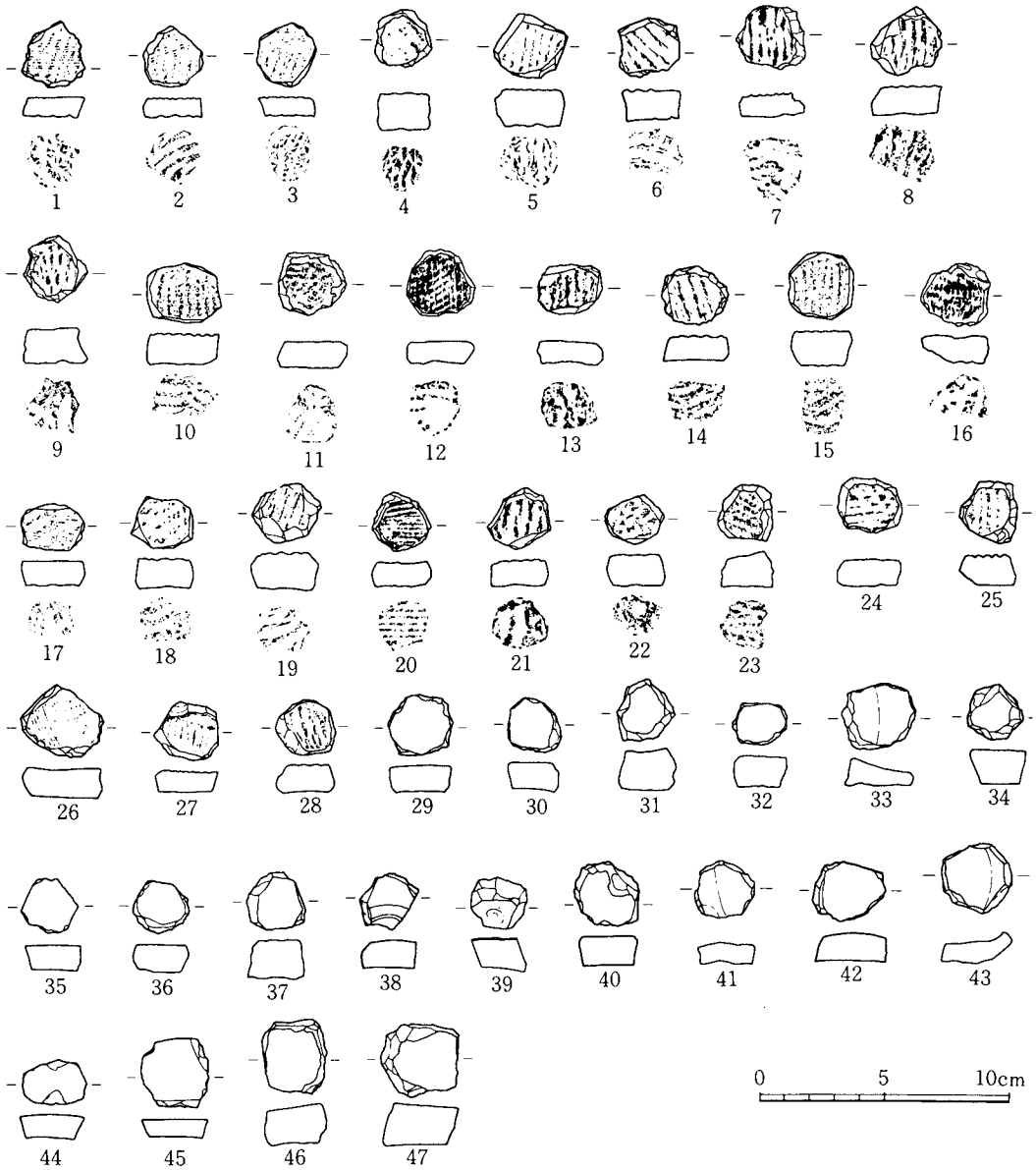
第41図　B区包含層出土遺物



第42図　B区包含層出土遺物



第43図　B区包含層出土遺物



第44図　B区包含層出土遺物

第3節　C区の遺構と遺物

検出した遺構には、A、B区と同様に多数の溝跡、数多くの土坑がある。また、方形堅穴状遺構も4基がある。掘立柱建物も3棟以上が検出された。

1　C－1号溝

形状　調査区の南側で検出されたもので、ほぼ調査区に平行して東西走し約40ｍを確認した。幅100～160㎝、深さ22～25㎝を測り南西方向に低位である。A、B、C地区の中で検出した溝の中では最も整然としたものである。上層からは、第53図の9～16の遺物が検出されているが、掘削使用されていた時期の遺物（第53図1～8）が溝底近くより出土している。

遺物　第53図1～16。ほぼ1個体分に復元できる受け口状口縁を有する甕1がある。口径20.0㎝、器高約28㎝、底径5.0㎝を測るものである。2もほぼ同様のものである。3の底部にはスダレ状圧痕が認められる。9、10、14、15、16は須恵器でその他は土師器である。

2　C－2号溝

形状　ゆるく孤状を呈し、幅100～140㎝、深さ15～21㎝を測るものである。覆土は、暗灰色砂質土を呈し、片側二段掘りの可能性の高いものである。上面は、削平されたと思われ、溝底も浅く検出遺物のほとんどは、溝底および肩部のものである。

遺物　第54図1～26。土師器（1～4、6～12）と須恵器（13～26）が出土している。土師器ではゆるく、くの字状を呈する甕と内面黒色研磨の坏がある。須恵器では坏蓋と比較的立上りの弱い坏身がある。また、口頸部に細波状文を廻らず甕（23）もある。その他は混入品と考えられるものである。本溝跡の盛行期は概ね6世紀中葉頃であったと思われる。

3　C－3号溝

形状　B－7号溝の北側への追認部分である。規模などには、前述したので省くが、検出面の溝両側には粗い砂が薄く堆積する。上層では、赤褐色砂質土、中層では黄褐色地山ブロック混じりの灰黒色粘質土、下層は黒色粘質土である。本溝跡は、C区で終結するものである。終結部分で、C－3号溝に付くと思われる宝篋印塔の笠の部分が検出された。

遺物　第55図1～27、第56図1～19。各種各時期の遺物が数多く出土している。古墳時代後期のものとしては須恵器坏（第55図1～4）、高坏（同図9）、甕（同図11）がまた土師器では、ゆるく外反する甕（第56図3、4）と内面黒色研磨の坏（同図9～11）がある。奈良時代前半に属する須恵器では蓋（第55図5～8）、坏（第56図22、23など）がある。平安時代のものでは須恵器の坏（12～15、25、26など）が出土している。珠洲では鉢（第55図27、第56図14、15）の3点があり馬緤窯式から大畠窯式期のものである。第56図12、13は青磁碗である。第56図16～19は土師質土器である。

4　C－1号土坑

形状　C－3号方形堅穴状遺構の南東隅で検出し、また同堅穴状遺構により切られている。木炭混りの黒色砂質土の覆土で、ほぼ円形を呈するプランでその径170㎝を測る。またその深さは、

15 cmである。炭化した木片とともに、図示した（第57図）遺物が床面近くより検出された。

遺物　第57図1～13。土師器ではゆるく、くの字状に外反する甕（2）、内面黒色研磨した坏（5）、甑（13）と混入品を考えられる長胴形の甕（9、10）が出土している。須恵器では坏蓋（6）、口縁部を欠失する瓿、口頸部に三段の細波状文を有する甕がある。本土坑の規模などから考えて一部を除けばほぼ単一の時間幅のうちに収まるものである。

5　C－2号土坑

遺物　第60図28～30。28は口径10.7 cmを測る小形の甕である。29は口縁帯がほぼ直立する鉢形に近い甕である。30は須恵器坏蓋の破片であるが小片のため詳細は不明である。

6　C－3号土坑

遺物　第58図1～14。土師器ではくの字状口縁を有する甕（1）と内面黒色研磨、あるいは研磨の坏類（2～4、6～8）がある。須恵器では坏（11）、甕胴部片（12～13）が出土している。

7　C－4号土坑

形状　長辺146 cm、短辺120 cm、深さ80 cmを測り、平面はほぼ長方形をなすものである。調査時点では、土坑と処理したのであるが、7号掘立柱建物の柱穴掘方の可能性が高い。

遺物　第58図15～25に見られるように、須恵器では、蓋、坏（おそらく台付坏）、甕胴部片が出土している。蓋（第58図15）は、鈕を欠失するが、径13 cm前後の厚手タイプである。坏（第58図16、17）は、口径10 cm、114 cmを測るもので、腰部が張り薄手のもので、おそらく高台が付くものと思われる。25は、最大胴径20.5 cmを測る長胴形の甕である。頸部にかけては、粗いナデ、胴下半はタタキを施す。また、内面も同様である。土師器では、内面黒色の高台付坏の高台部分片（18）と甕がある。甕もこの二種類出土しており、20～22のような受け口状のタイプのものと朝顔状に開くものとがある。受け口状に屈曲するものも20、21のように比較的器壁の薄い球形をなすと思われるものと、厚手で(22)、長胴形となるものが見られる。また、朝顔状に開く23、24は長胴形のものとなろう。

8　C－5号土坑

遺物　第59図1～25。須恵器では1～3、6、24、25があり他はすべて土師器である。それもほとんど坏類で占められる。口径11 cm前後、器高3.5 cm前後、底径4 cm前後を測るものが多くいずれも底面に糸切り痕をとどめる。

9　C－6号土坑

形状　C－7号土坑に切られているが、平面形は長方形を呈するものであったものと思われる。長辺約190 cm、短辺155 cm、深さ24.5 cmに推定できる。覆土は、鉄分を含む暗灰色砂質土である。これも、C－4号土坑と同様に7号建物の柱穴の可能性が非常に高い。

遺物　第61図1～23。須恵器（1～11、20～23）と土師器（12～19）が出土している。8、9は口径17 cm前後を測る大形の高台坏である。21、22は甕の口頸部分である。14は口径14 cmを測る小形甕、15～19は、くの字状口縁を有する長胴形の長甕となるものであろう。

10　C－7号土坑

形状　長辺 305 cm、短辺 255 cm、深さ 93.5 cmを測る長楕円形のものである。溝底は、水平に近くほぼ 220 cm×165 cmの長方形を呈する。溝底では、二片の木材（板板）が検出されその一は 15×87×1.2 cm（厚さ）のものである。板材の出土などから、井戸とも考えられるが、確証はない。また、板材は、７号建物の礎板の可能性も考えられる。

遺物　第 60 図１～21。須恵器（３～９、20～21－２）と土師器（１、２、10～19）が出土している。20 は風字硯の破片である。

11　C－８号土坑

形状　長辺 95 cm、短辺 50 cm、深さ 25 cmを測る長楕円形のものである。C－１号溝を切っている。覆土は、暗灰色砂質土である。

遺物　第 60 図 22～27。22 は須恵器で高台坏となるものであろう。24 は土師質軟胎の緑釉陶器である。26、27 はくの字状口縁で長胴形を呈する長甕であろう。

12　C－１号方形竪穴状遺構

形状　長辺 300 cm、短辺 290 cm、深さ 30 cmを測り平面形はほぼ正方形に近い。床面も水平に近いがピットなどの付属施設の検出はなかった。覆土は、層序として分けることができず、黒色粘質土に黄褐色地山ブロックが混じる単一層である。

遺物　第 62 図１～９。この種の遺構は、本遺跡では数例を数えるが、いずれも短期間に埋めたと思われ、各時期の遺物が混じって検出される。土師器では、第62図２、５のような古墳時代前期に属するようなもの、10、12 の坏、高台付坏のように平安時代後半に属するもの、11 のように厚手で腰部で屈曲する土師質土器までが出土している。須恵器についても同様で１、６～８のような類と３、９のような類とがある。

13　C－２号方形竪穴状遺構

形状　長辺 510 cm、短辺 300 cm、深さ 25 cmを測り、平面形は長方形をなす。床面はほぼ水平であり、ピットなど付属施設の検出はなかった。東南隅では、C－１号土坑、西南隅では、C－３号方形竪穴状遺構をそれぞれ切っている。覆土は同様に単一層で黒褐色粘質土に黄褐色の地山ブロックが混じるものである。

遺物　第 62 図 10～21。10 は、施文については判然としないが縄文土器の可能性の高いものである。19、20、21 は古墳時代後期に属するもので、20 の高坏は内面黒色研磨のものである。須恵器では、古墳時代後期に属するものは一点で 11 の坏がある。律令期のものでは、12～14 の蓋と台付坏がある。また、土師器の高台付坏の 15～18 も出土している。

14　C－３号方形竪穴状遺構

形状　C－２号方形竪穴状遺構により切られており全形は不明であるが、一辺 360 cm、他辺 150 cm 以上、深さ 16.5 cmを測るものである。覆土は単一層で、やや砂質の強い黒色粘質土に黄褐色の地山ブロックの混じるものである。

遺物　第 62 図 22～26。22 は、土師器坏の底部片で糸切り痕を留める。25 は、口径 13.7 cmを測る内面磨きのものである。23、24 は須恵器の高台付坏の細片である。この種の遺構から検出される

遺物は、概して小片のものが多い。それも、各時期の包含層および地山を掘削した土を、そのまま埋土として再利用していることに起因するものと考えられる。

15　C－4号方形竪穴状遺構

形状　長辺335㎝、短辺265㎝、深さ26㎝を測る平面形は長方形のもので長辺軸をほぼ南北にもつものである。床面はほぼ水平に近く、他の付属施設などの検出はなかった。覆土は、単一層で黒色砂質土に黄白色の地山ブロックの混じるもので、固く締っている。

遺物　第62図27～31。本遺構では、平安期のものばかりが出土している。第62図27、28は、いずれも底部に糸切り痕を留める土師器の坏である。29～31は、須恵器で31は、高台も薄く外側に開く台付坏（皿）である。いずれも細片が多く、遺構掘削時のものと考えられる。

16　5号建物

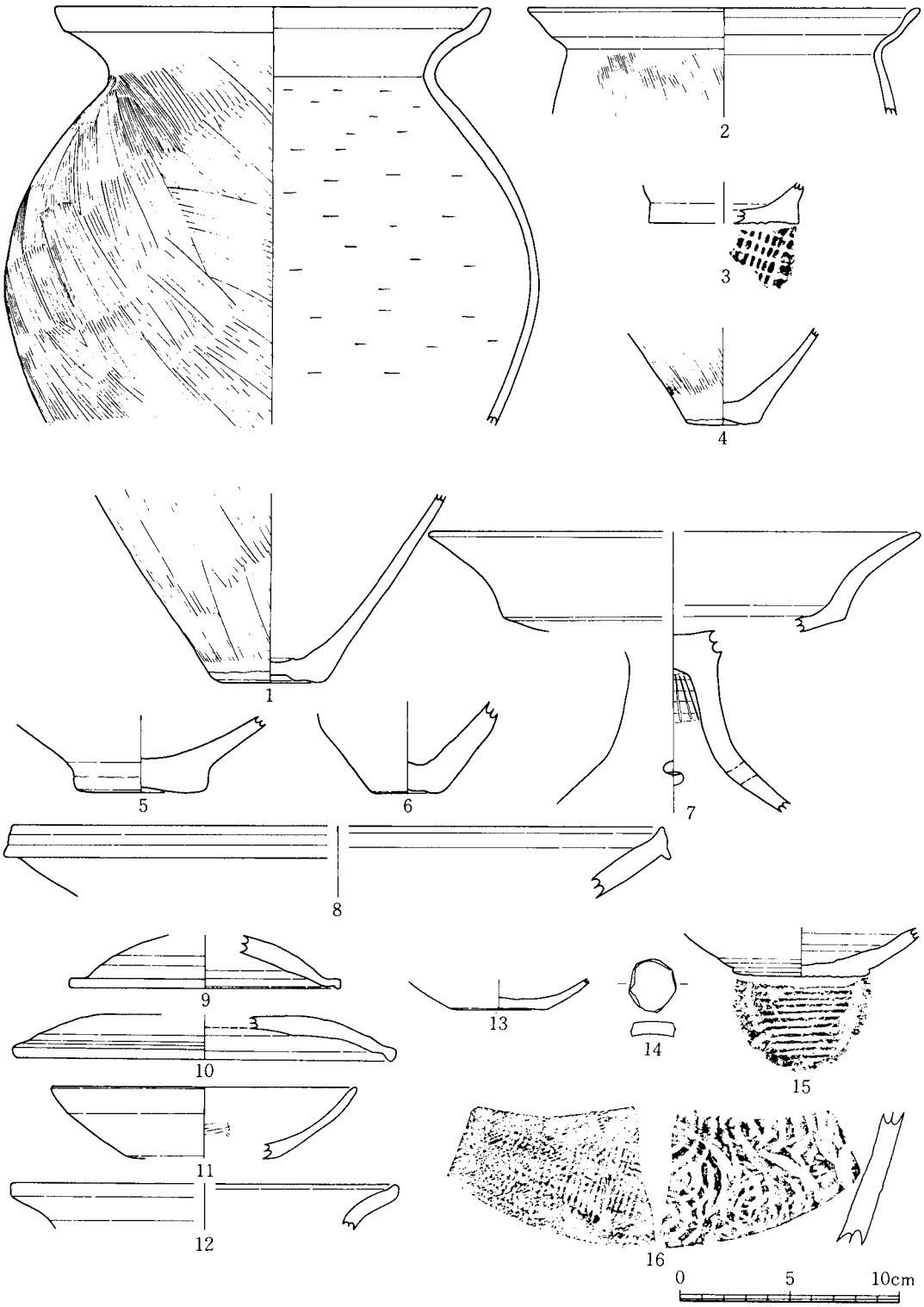
形状　B地区の4号建物の東約10ｍの地点で検出したものである。桁行、梁行ともに2間の総柱の建物で北側柱列西第2柱穴と東側柱列北第2柱穴には柱根が遺存し、その径20㎝を測る。柱の据え付け掘方は約70×70㎝の円形と方形に近いものがある。柱間寸法は、西側柱列で200㎝、北側柱列で170㎝を測る。なお、本建物は南東を走るC－3号溝により東側柱列南第1柱穴は切られている。この建物は、A地区で検出した1、2号建物と同様に、柱筋にすべて柱のたつ総柱の倉庫様の建物となる。なお、C－3号溝をはさんで東側に、もう一間のびて2間×3間の建物となる可能性もある。（やや柱筋が通らず不安が残る。）

17　6号建物

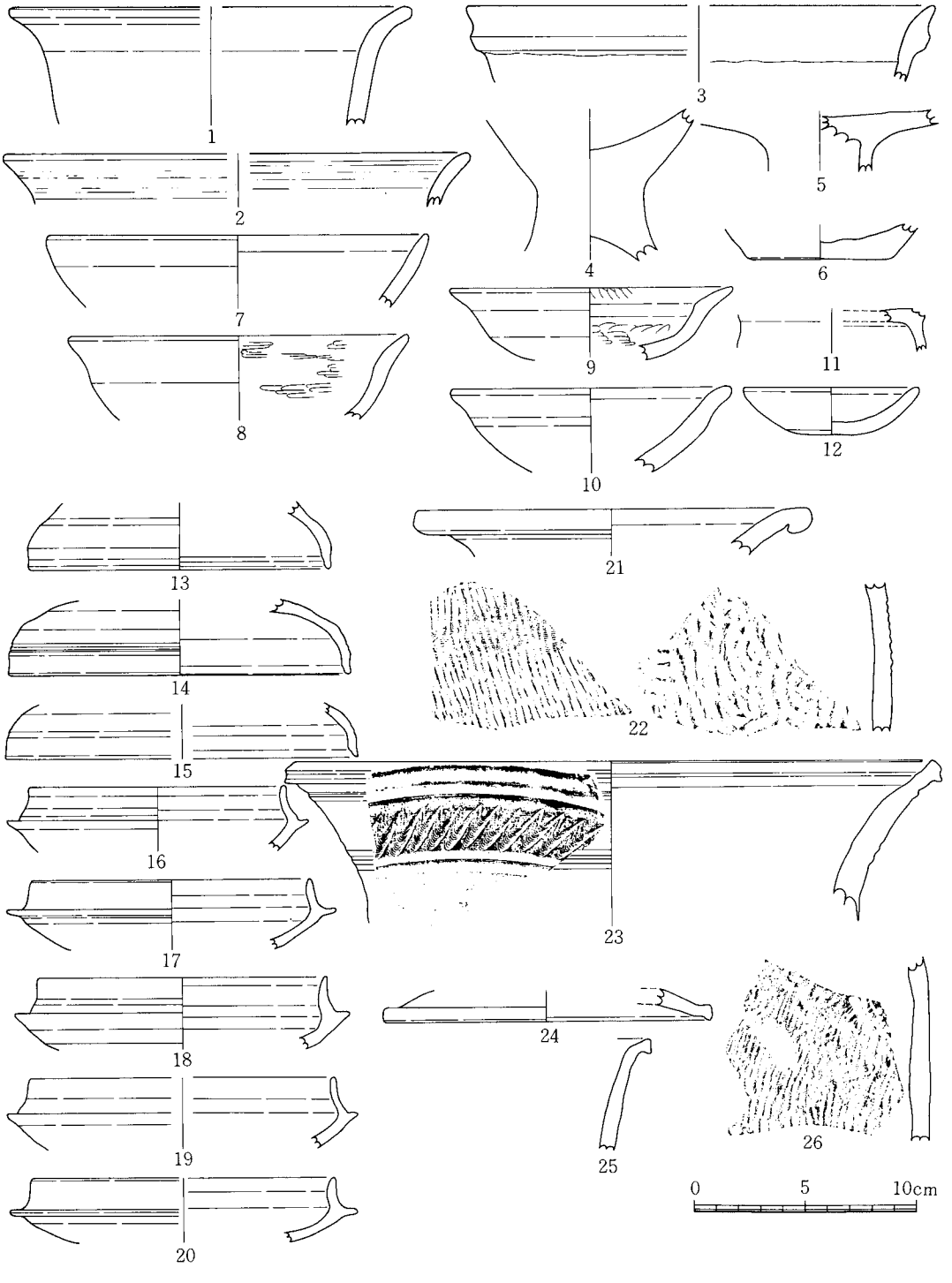
形状　桁行5間、梁行2間の東西棟建物である。本建物を検出した地点は削平が甚しく、掘り方の痕跡がわずかに色別できる程度であった。なお、南側柱列は平行して走る古墳時代のC－1号溝上で検出した。据え付掘り方は、約1×1ｍの痕跡のものが多く、柱痕跡を確認できるものも径30㎝程度を測る。柱間寸法は、桁行は210㎝等間、梁行240㎝程度のものとなろう。

18　7号建物

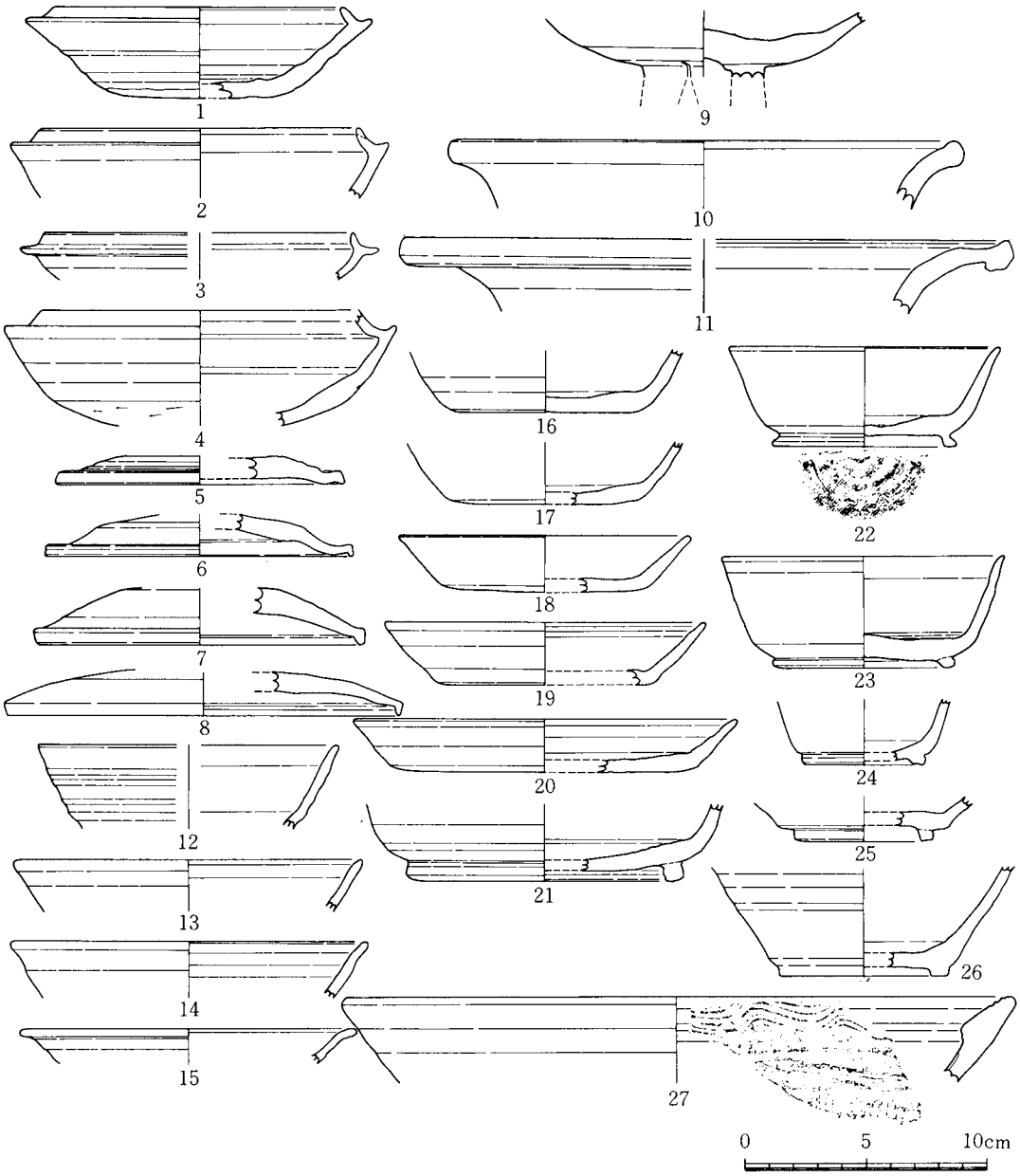
形状　C－7号土坑周辺で検出したものであるが、遺構間の重複が多く判然としない。南北棟建物と推定されるもので、南側柱列2間分、西・東側柱列1間分を検出した。据え付掘り方は、115×90㎝の方形のものが多いが円形に近いものもある。東側柱列南第1、2柱穴には礎板が遺存する。南第1柱穴の礎板には柄穴が見られる。その柱間寸法は、ほぼ210㎝を測る。妻列の柱間寸法は140㎝程度を測る。また、C－7号土坑内の板材も本建物の礎板の可能性が高い。柱筋にすべて柱をもつ倉庫様の建物となろう。



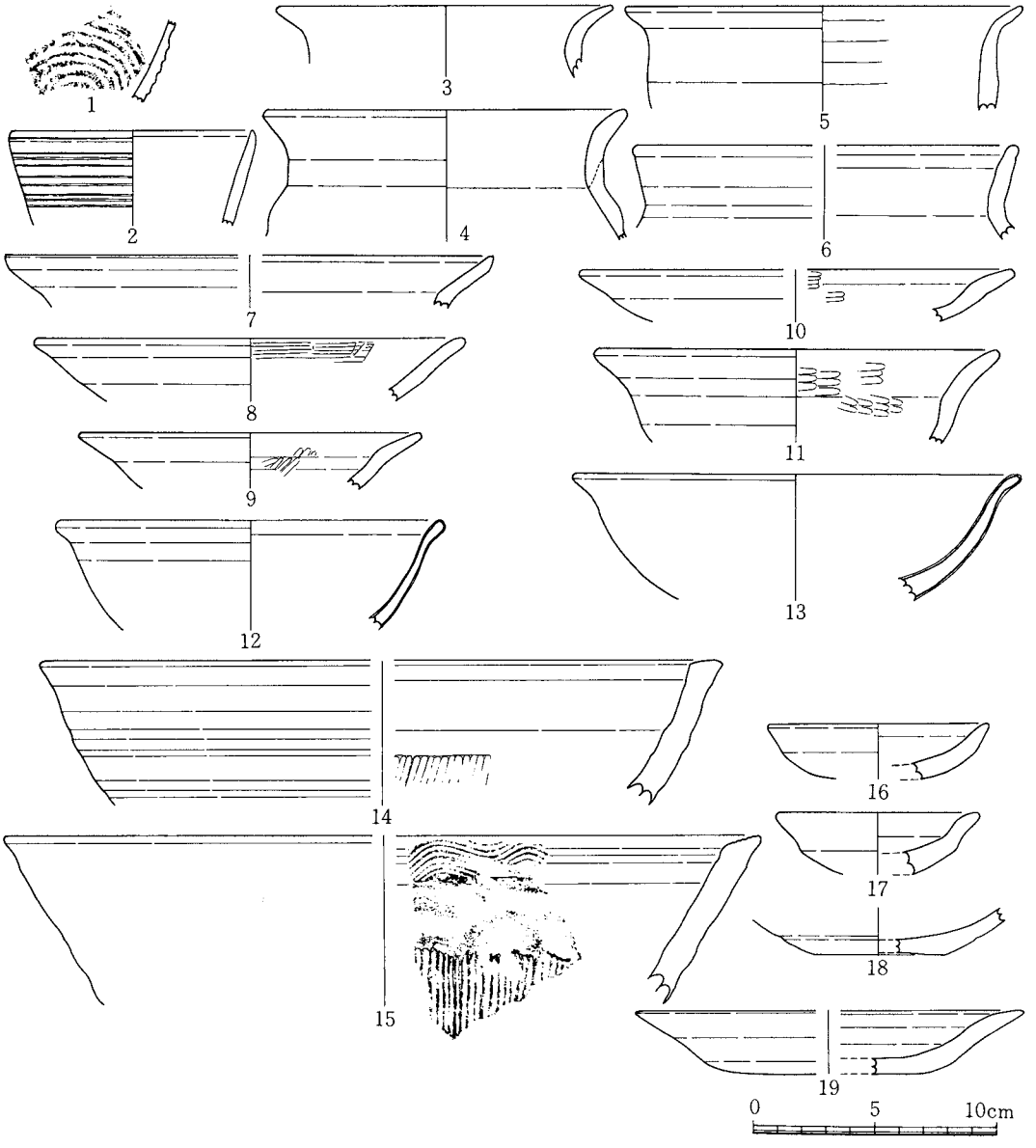
第53図　C－1号溝出土遺物



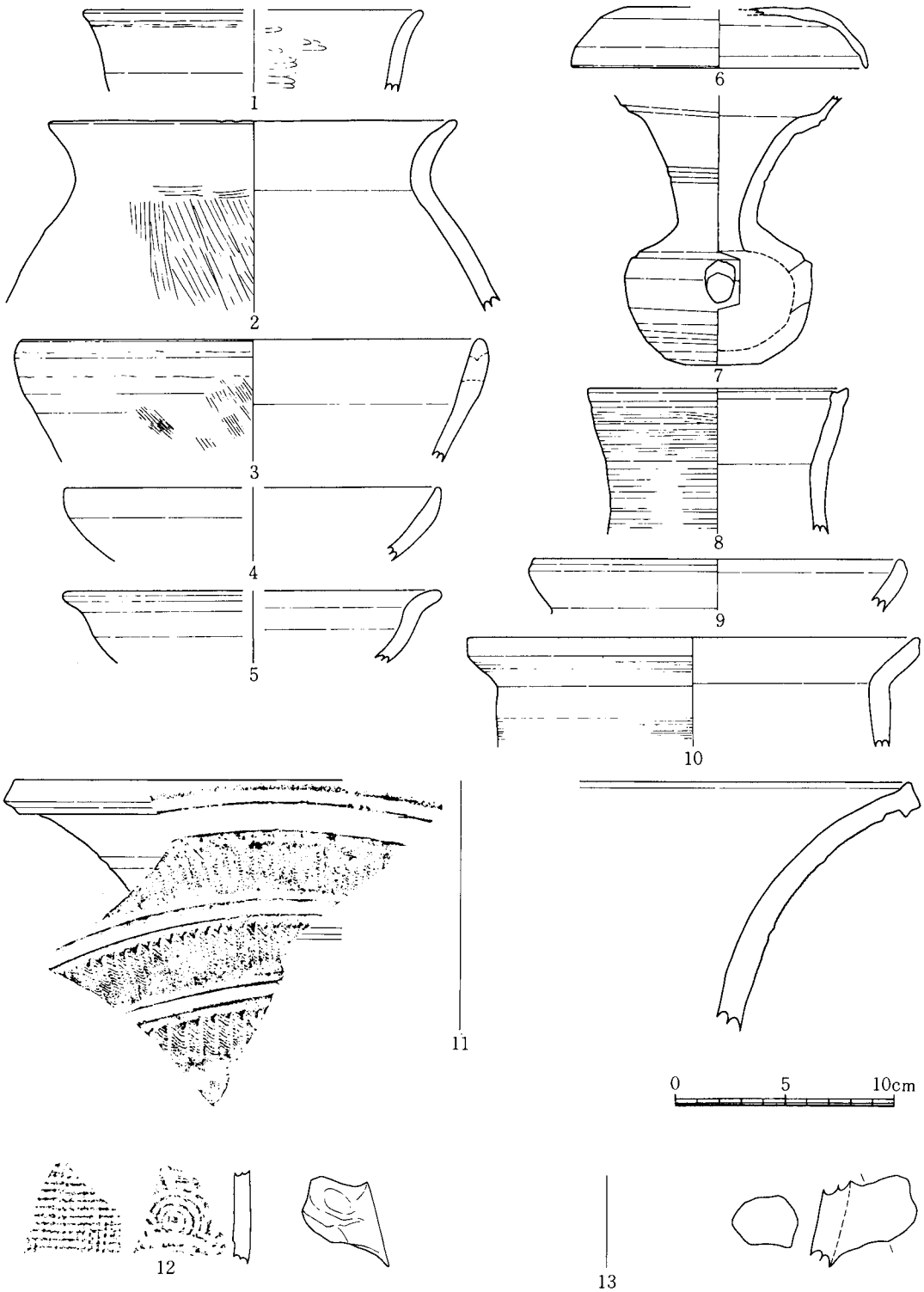
第54図　C－2号溝出土遺物



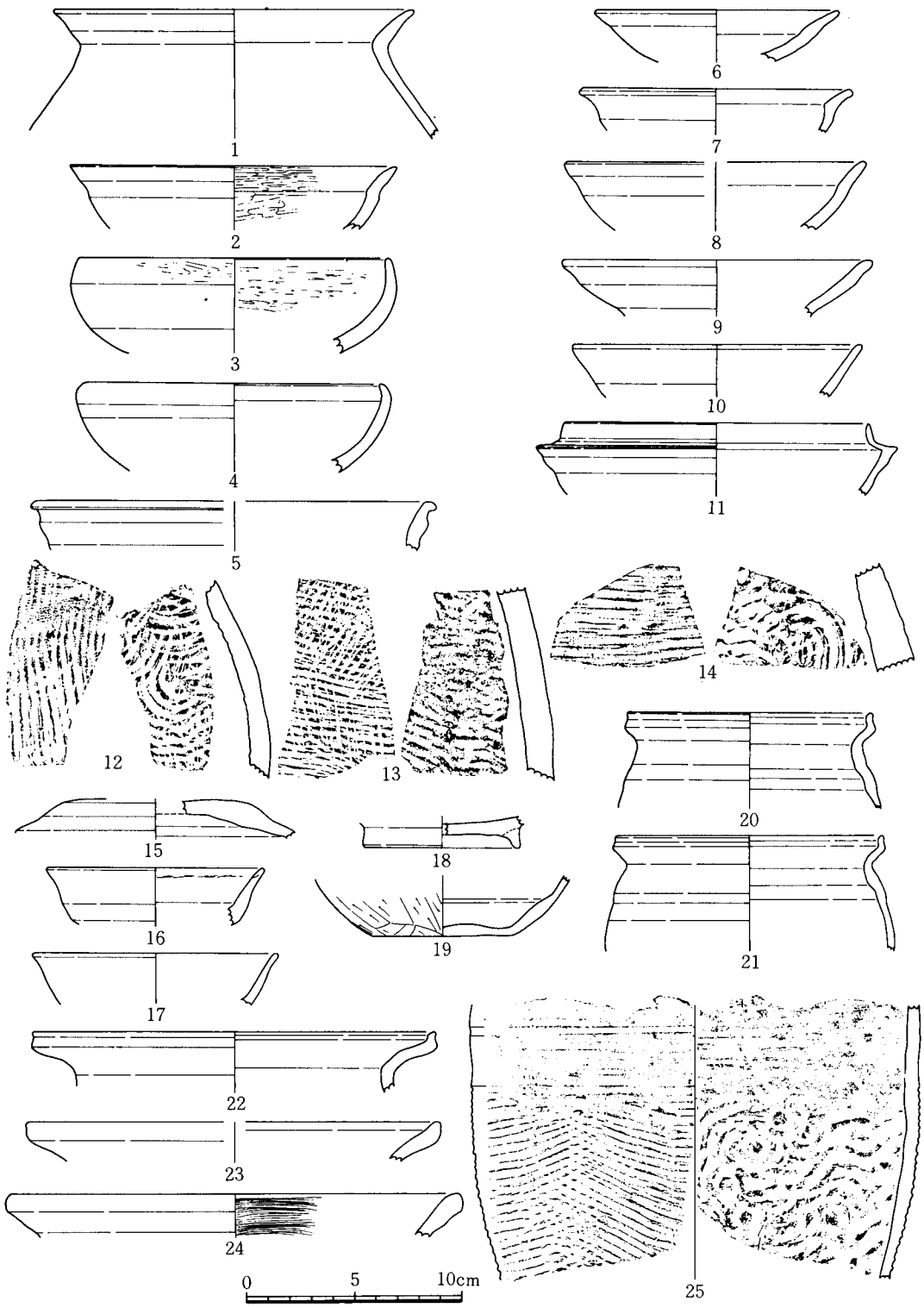
第55図　C－3号溝出土遺物



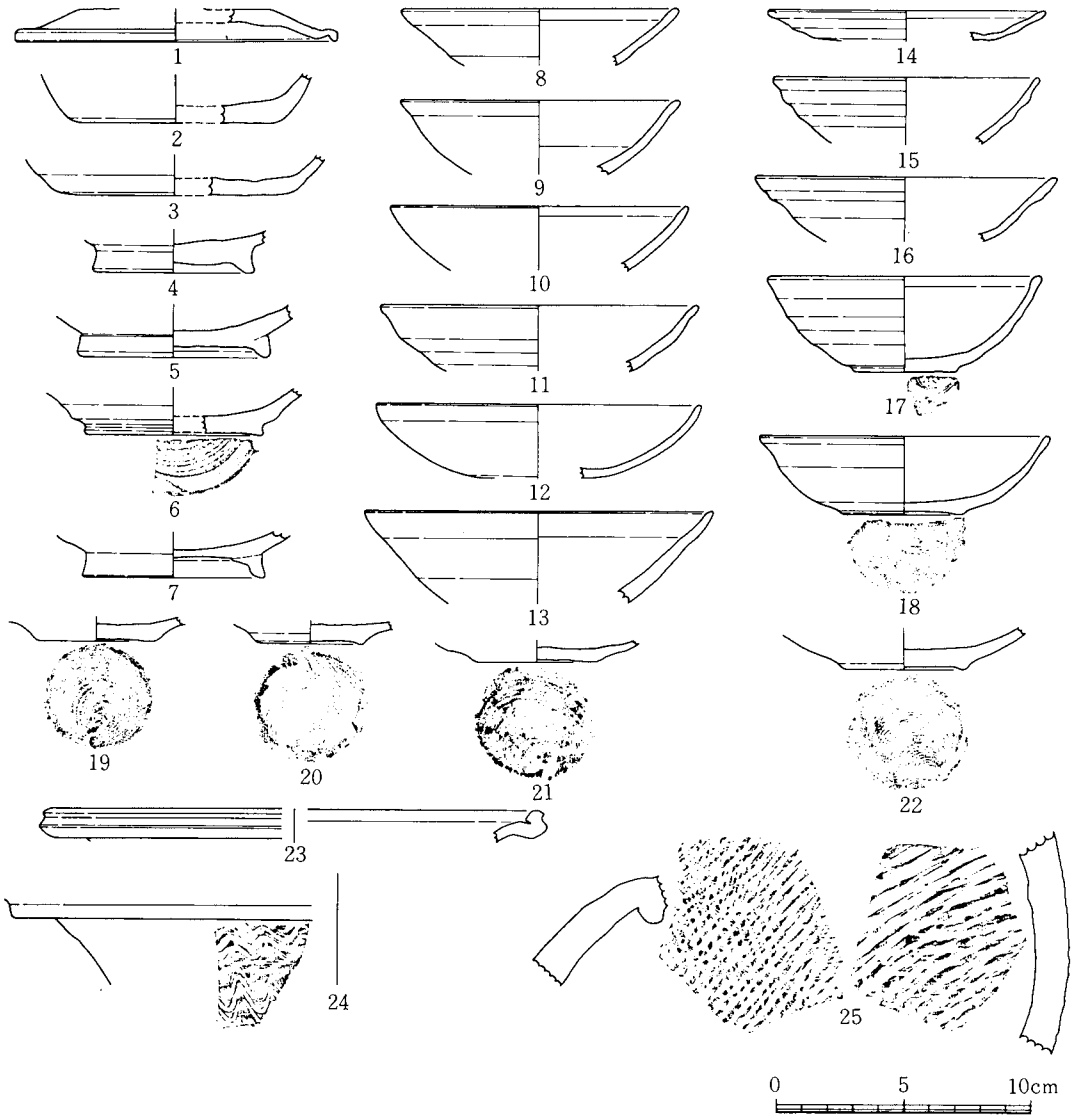
第56図　C－3号溝出土遺物



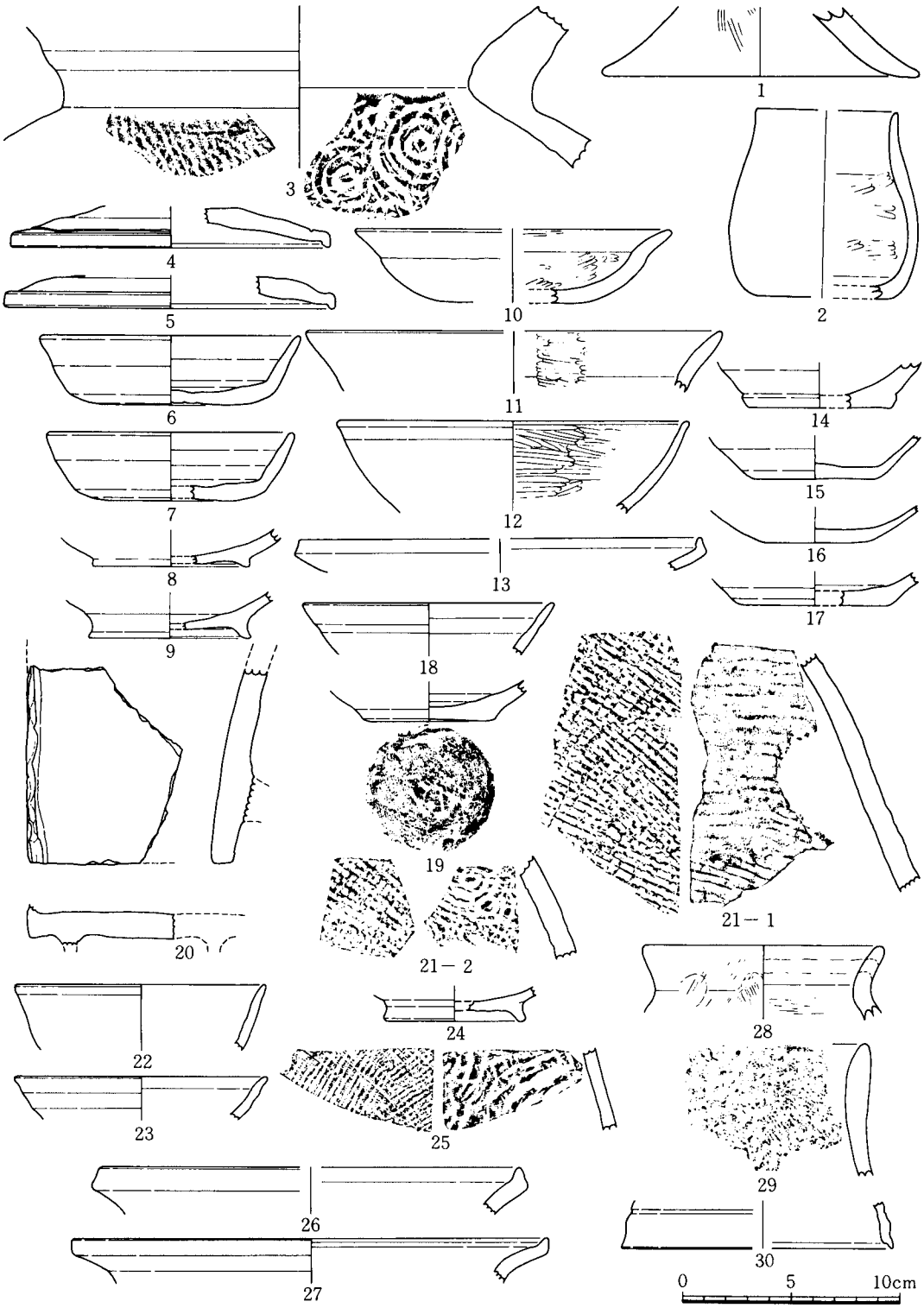
第57図　C－1号土坑出土遺物



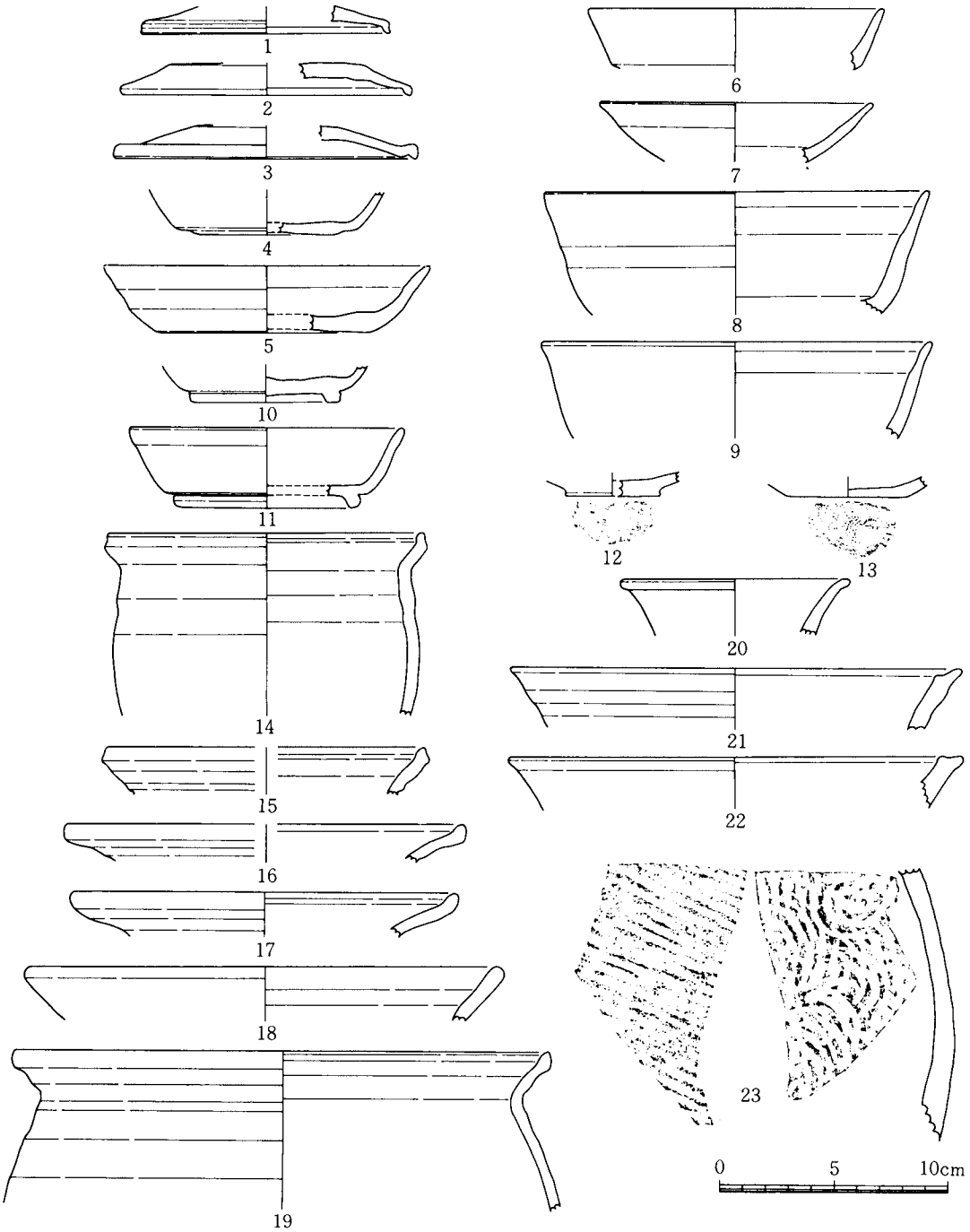
第58図　C－3号土坑(1～14)、C－4土坑(15～25)　出土遺物



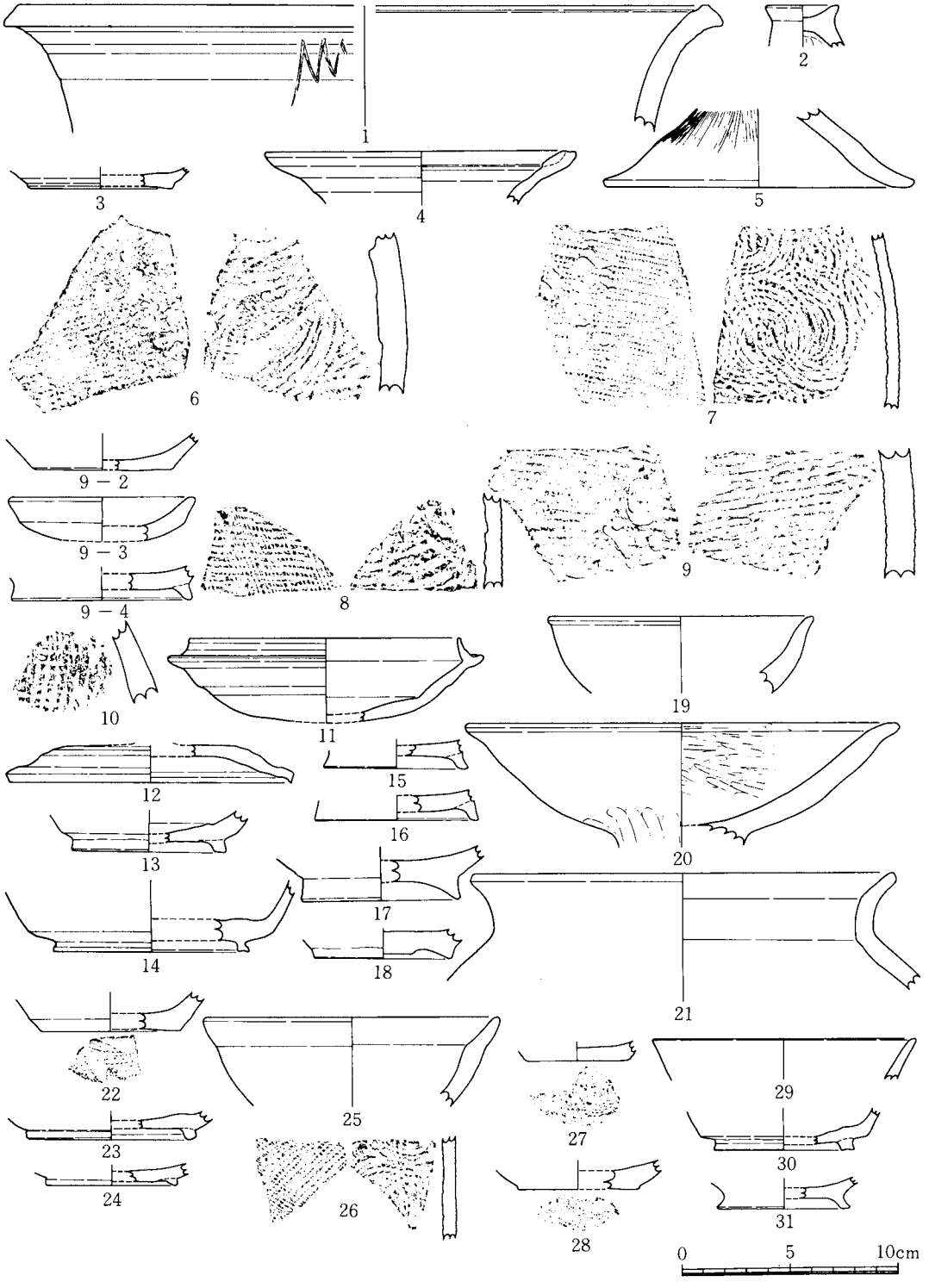
第59図　C－5号土坑出土遺物



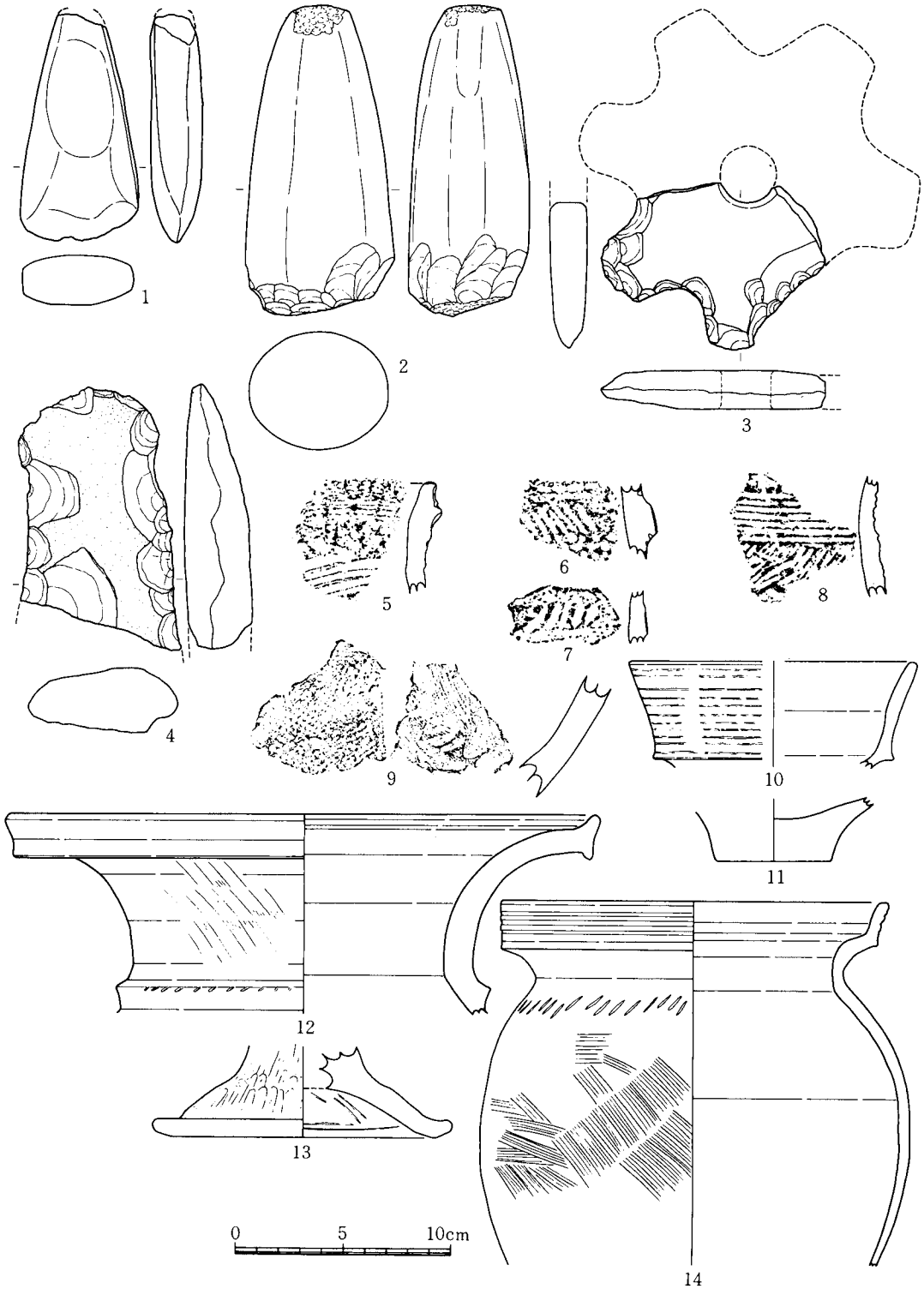
第60図　C－7土坑(1～21)、C－8号土坑(22～27) C－2号土坑(28～30)出土遺物



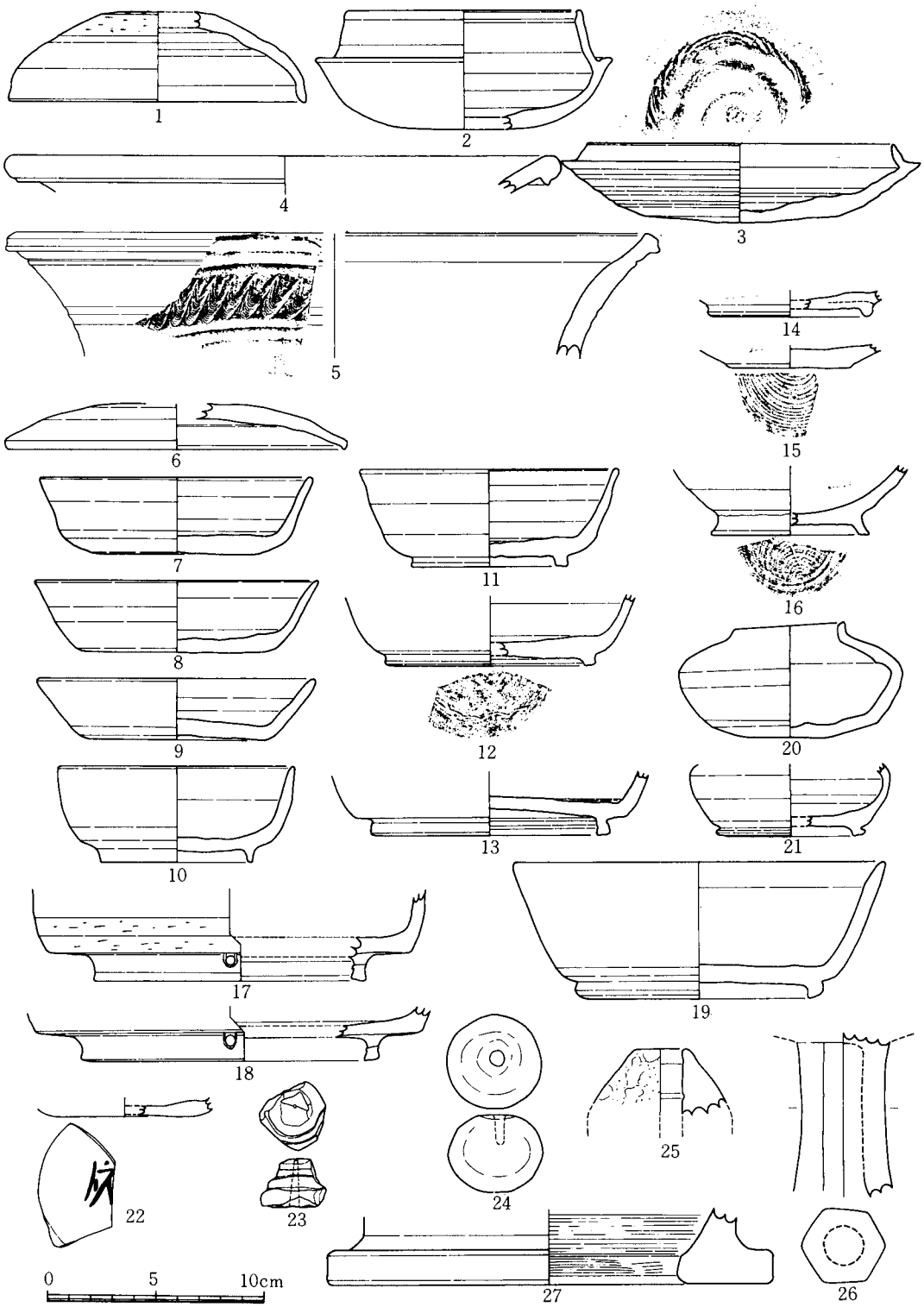
第61図　C－6号土坑出土遺物



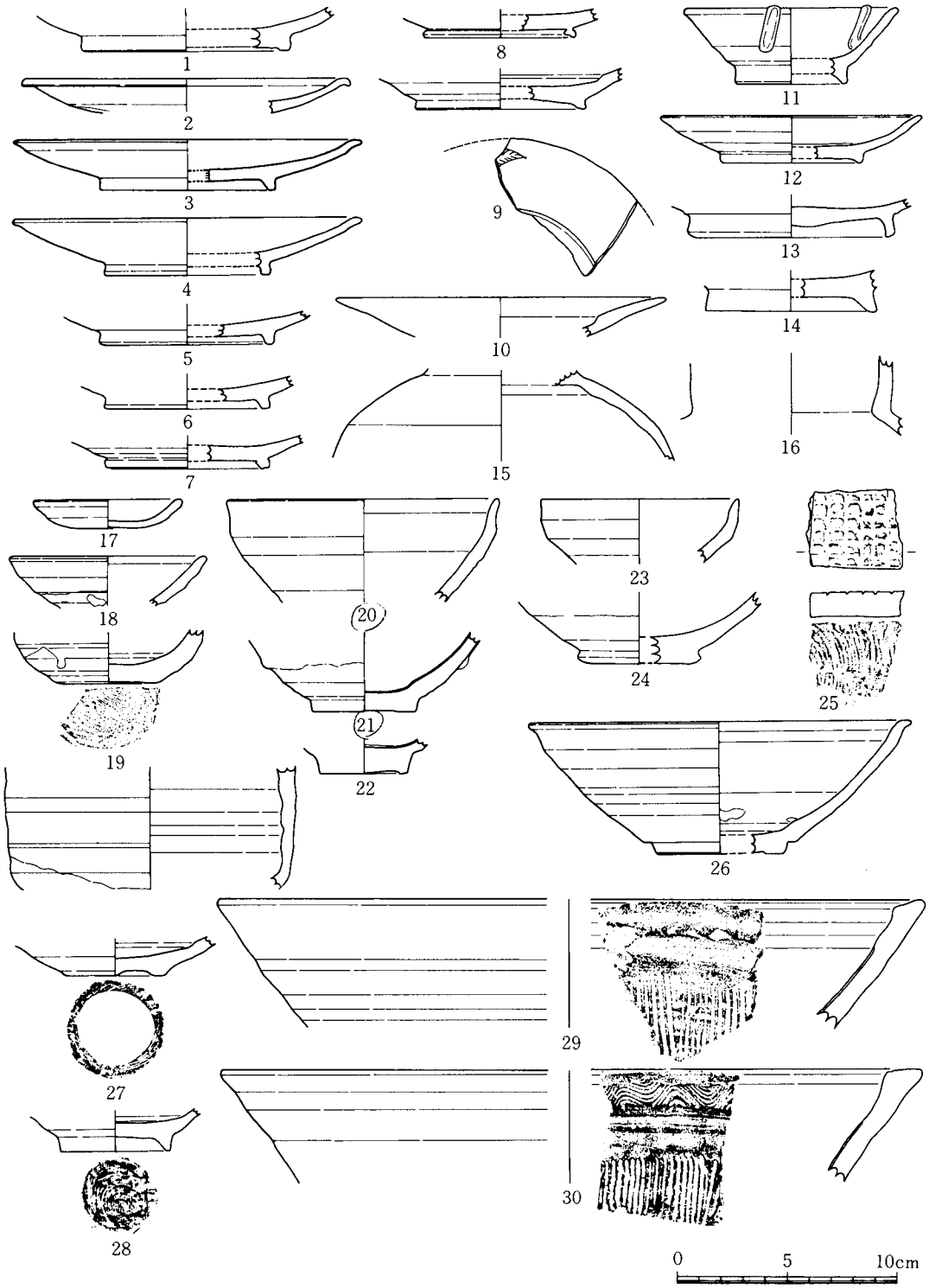
第62図　C－1号(1～9)、C－2号(10～21)、C－3号(22～26)、C－4号(27～31)各方形竪穴状出土遺物



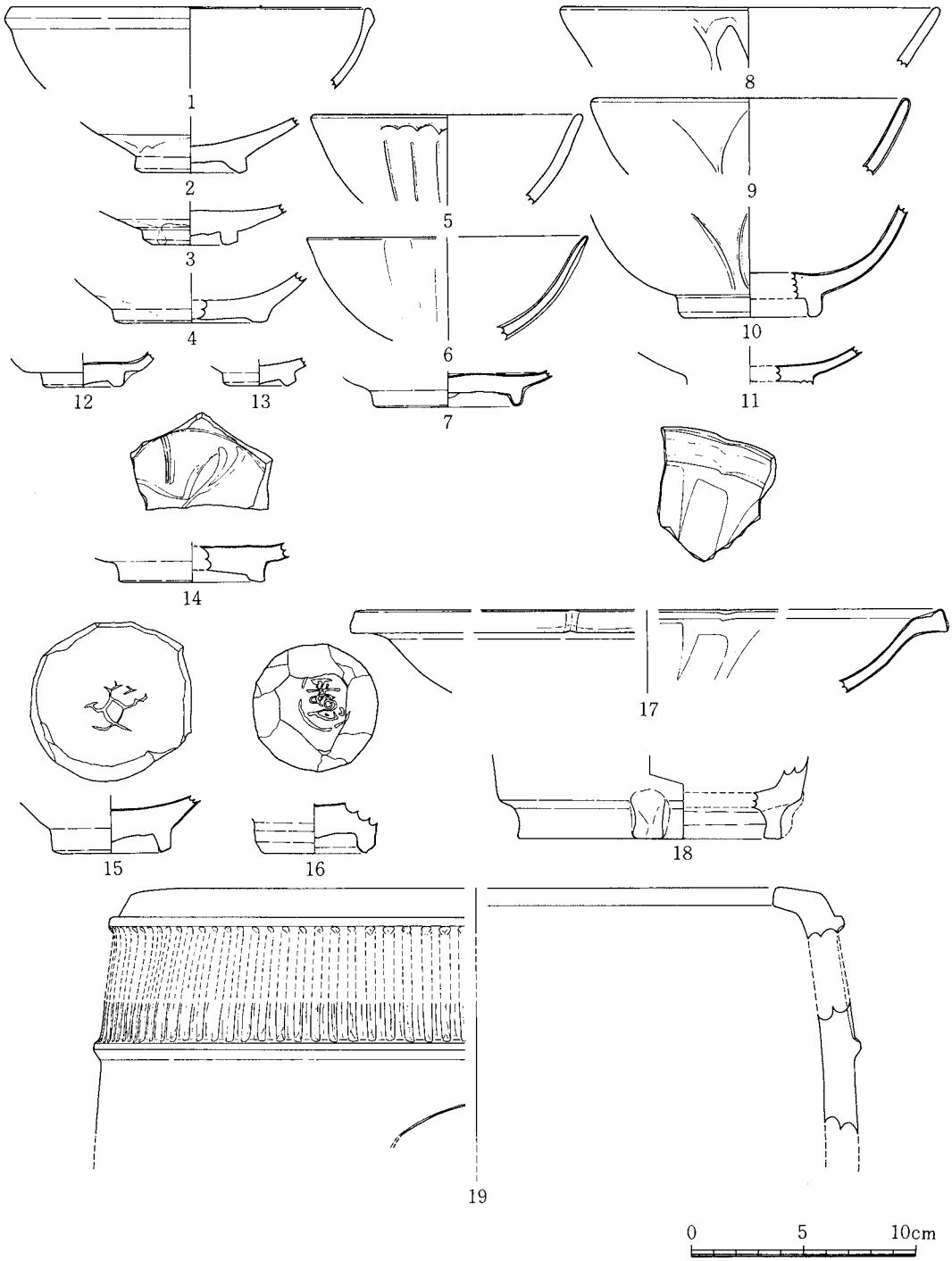
第63図　C区包含層出土遺物



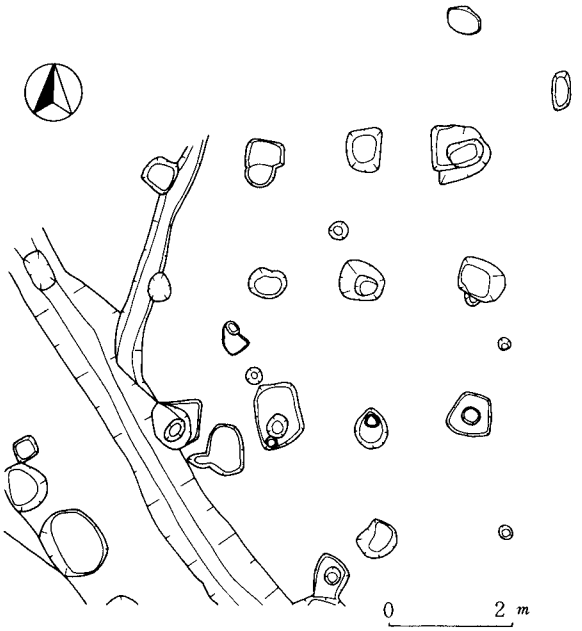
第64図　C区包含層出土遺物



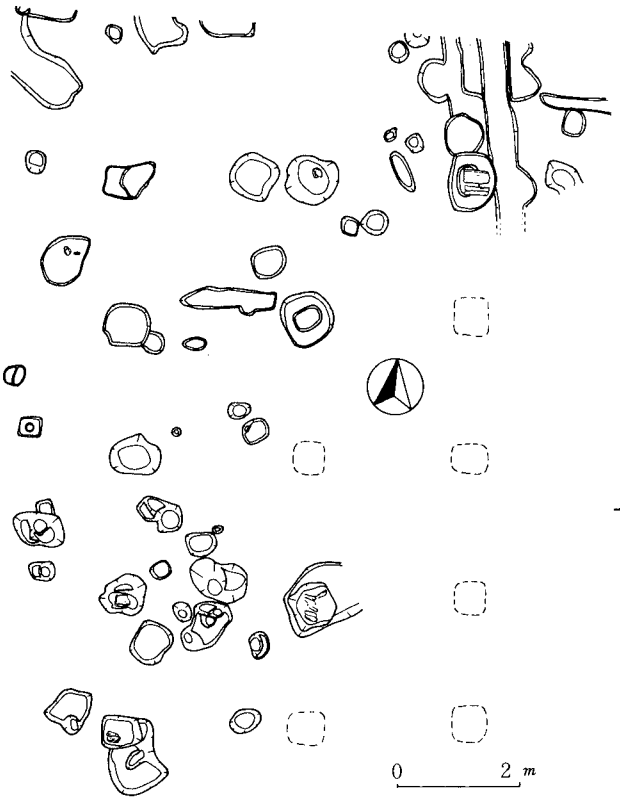
第65図　C区包含層出土遺物



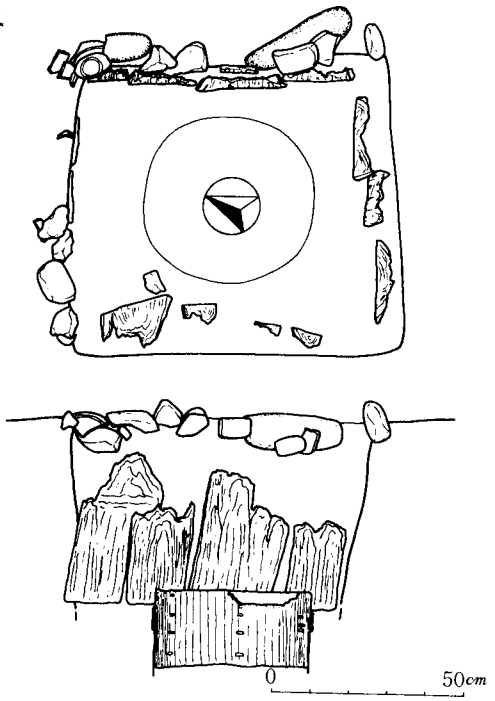
第66図　C区包含層出土遺物



1号建物

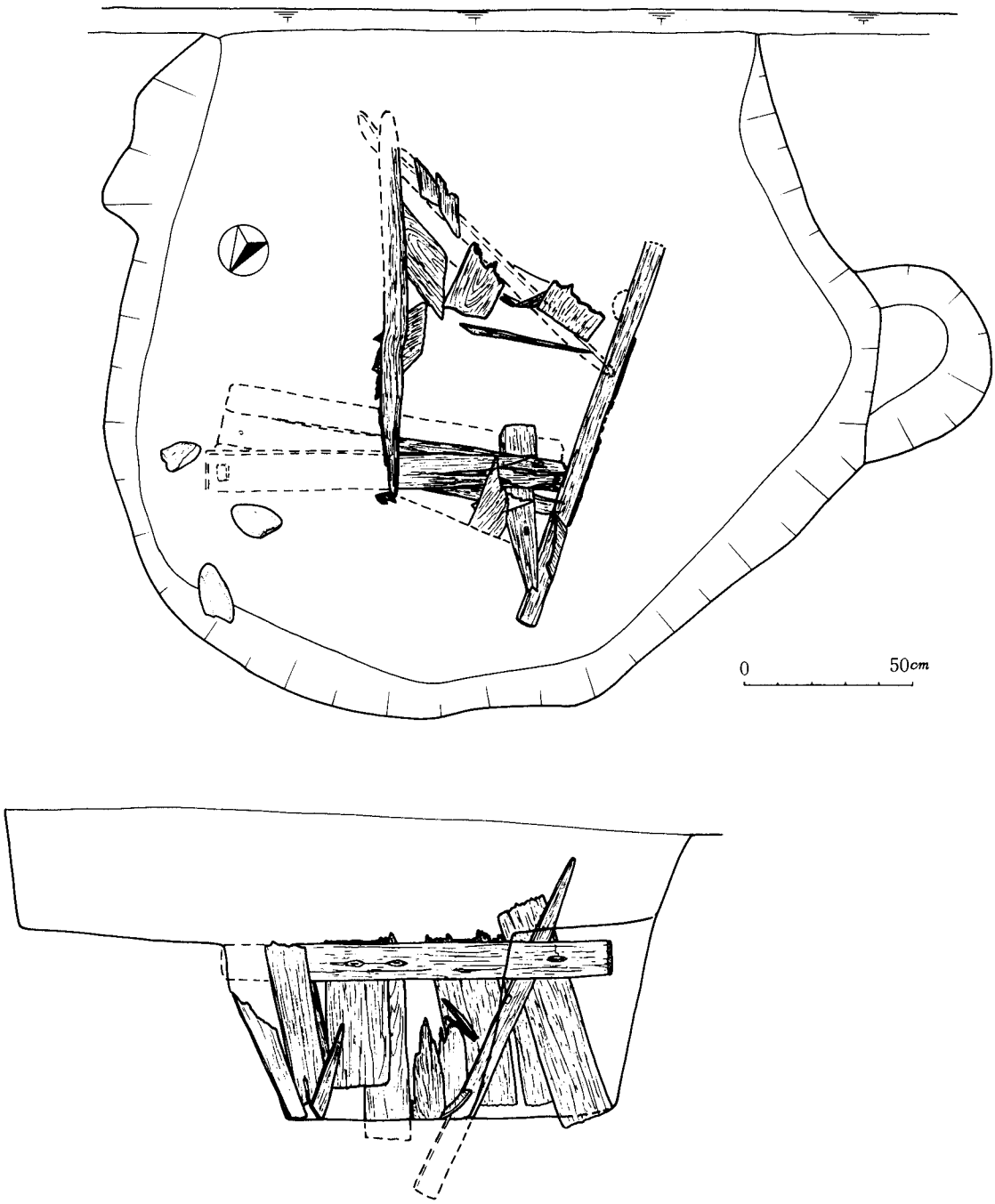


2号建物



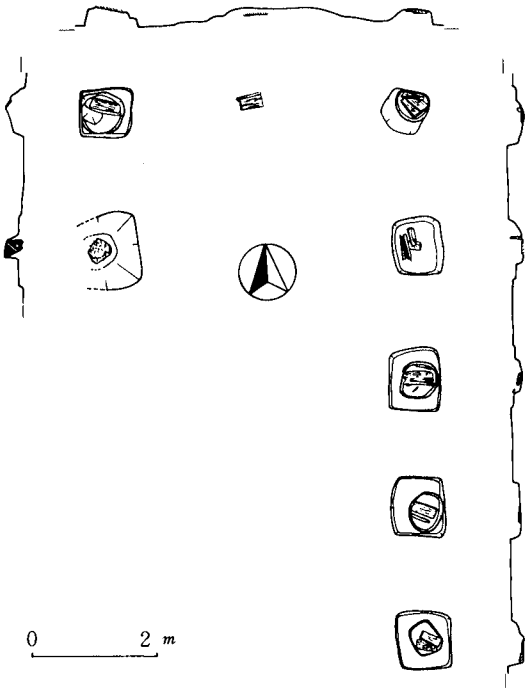
A－1号井戸

第67図　遺構実測図

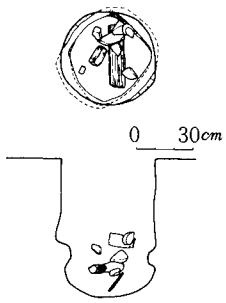


A－2号井戸

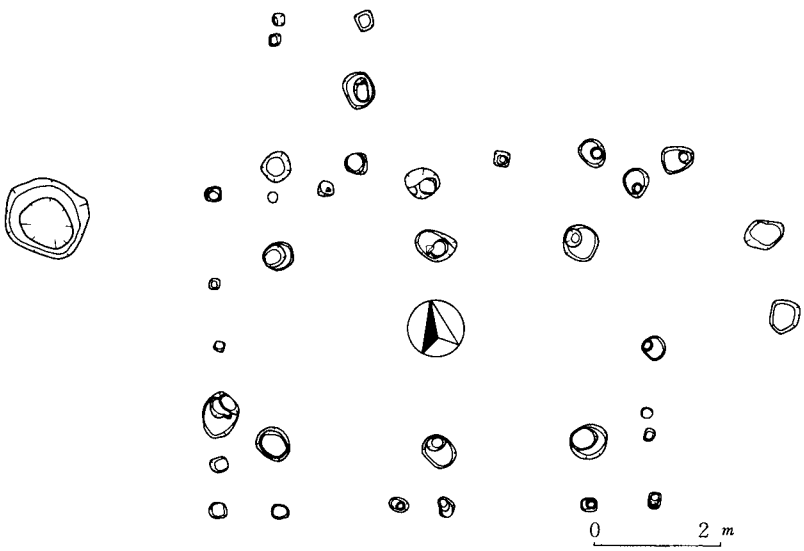
第68図　遺構実測図



3 号建物

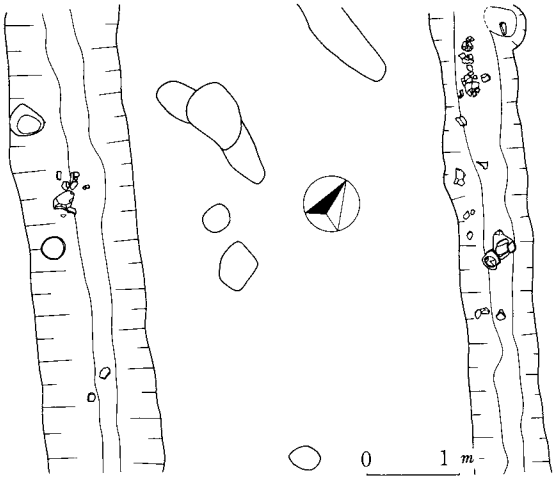


B 区井戸

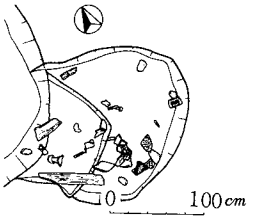


4 号建物

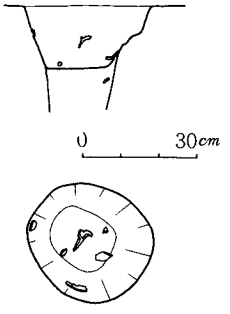
第 69 図　遺構実測図



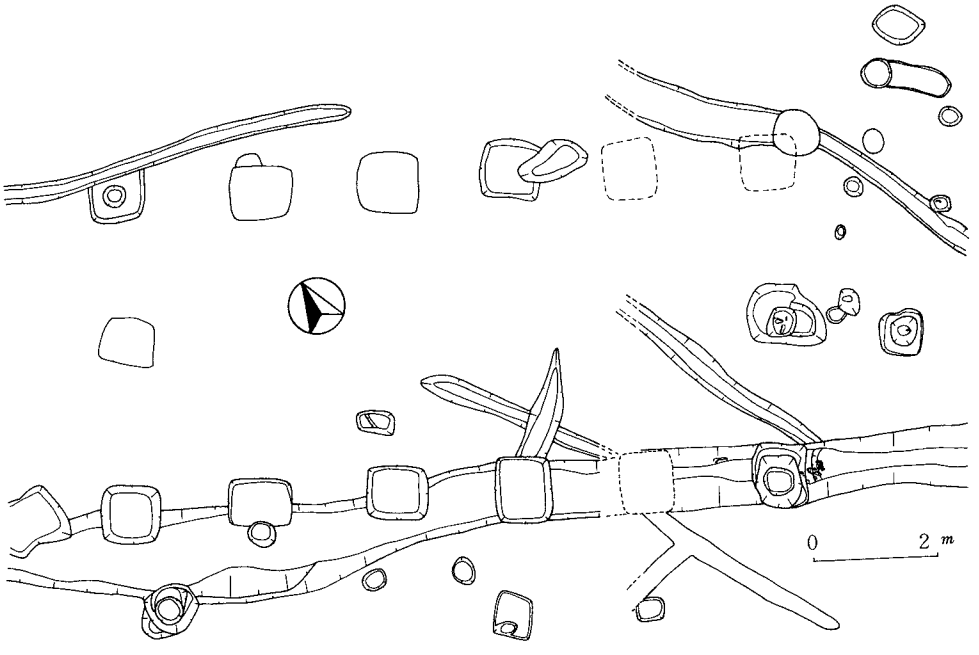
B－1、B－2号溝



C－1号土坑

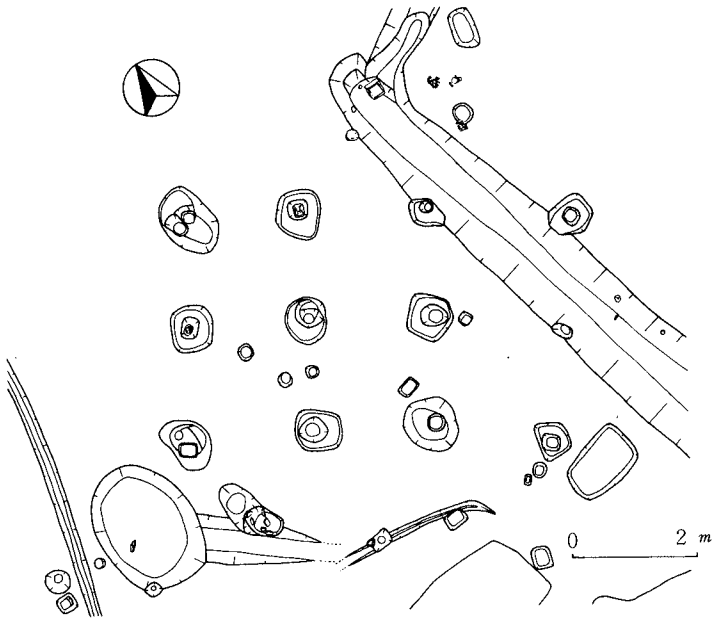


C区緑釉香炉出土状態

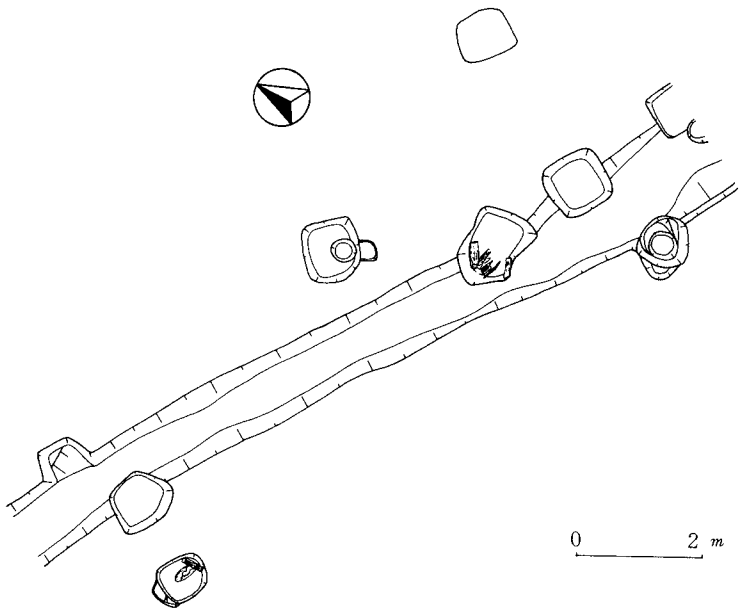


6号建物

第70図　遺構実測図

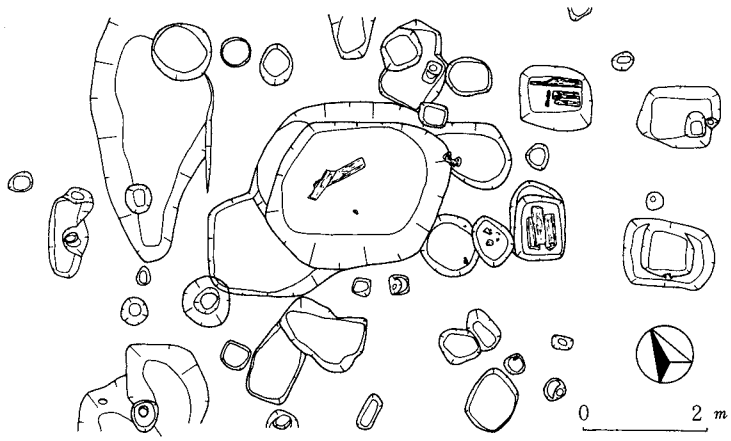


5号建物

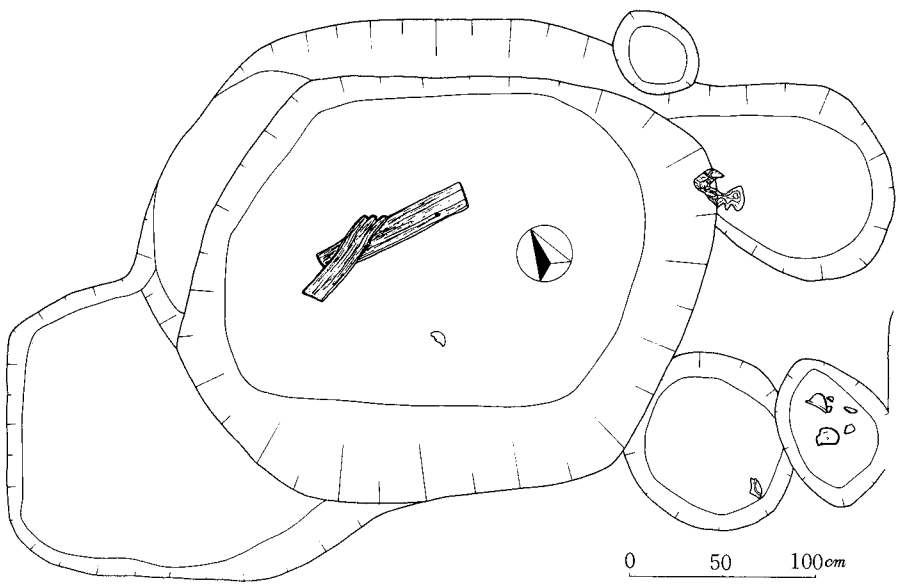


C区建物

第71図　遺構実測図



7号建物



C－6、C－7土坑

第72図　遺構実測図

第4節　D調査区の遺構と遺物

1　調査の概要（図D－1）

戸水C遺跡昭和55年度調査区をD調査区とする。D調査区は同年6月16日から翌2月25日にかけて実施された。秋に入ってから天候が悪化し、大野川に面した海抜0m地帯にあり、川からの浸水をしばしばこうむり、調査は難渋をきわめ不十分な成果しかのこせなかった。調査を実施したのは約2,000㎡である。

検出した遺構は弥生時代の溝および井戸1基、律令時代（平安期）の掘立柱建物群と井戸1基および溝である。ほかに時期不詳の無数のピットや溝が確認された。遺物としては、包含層より前記の時代のほかに古墳時代後期、奈良時代、さらに中世の土器が出土している。

2　弥生時代の遺構

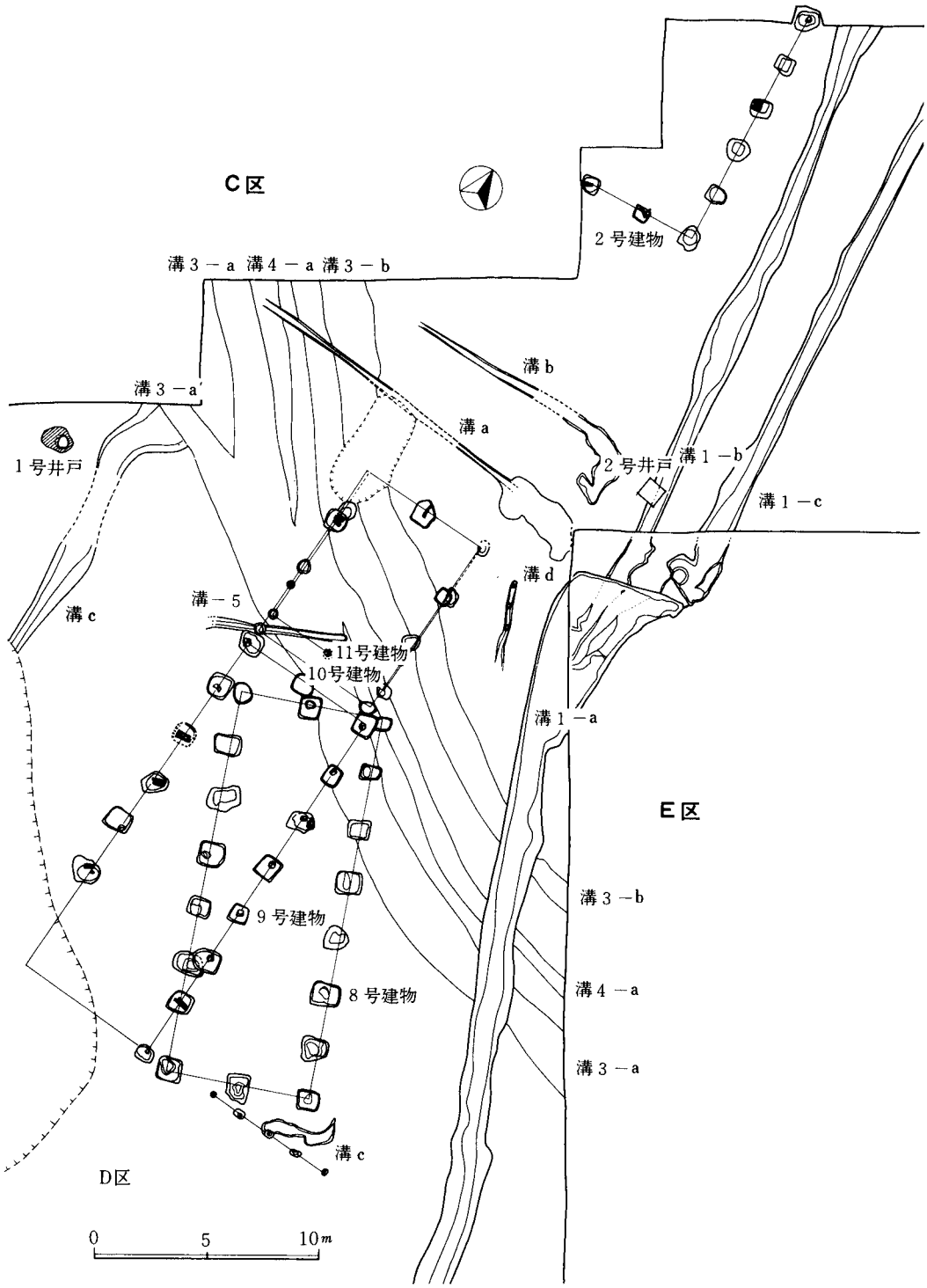
水路状遺構　水路状の溝が三条確認された。これはF・E調査区より続くもので弥生時代後期から終末期（月影式）ごろにかけて機能し、以後の布留式（古墳時代前期）に埋没したものとみられる溝である（6節参照）。E区と接する所から東西にやや弓状に曲がりながら、溝3－a、溝4－a、溝3－bが平行して走る。溝3－aは、西へ行くと二つに分岐する。地山がかなり削平されているので規模は正確にはわからないが、C区と接する所で、溝3－aは幅1.7m・深さ0.5m、溝4－aは幅0.7m・深さ0.2m、溝3－bは幅約2m・深さ0.3mを計る。溝底の高低差は10㎝未満であるがわずかに東側が高い。覆土は、暗茶カッ色粘質土であるが、溝底のくぼみ等の落ちこみには青灰色砂礫土が認められた。土器の出土は少ないが、溝3－aの西側分岐点あたりの溝底に月影式にぞくする高坏々部片が出土した。

1号井戸　長径1.4m・短径1.1mの不整だ円形の掘り方に、弧状にくりぬいた板材二枚を組み合わせ埋めこんだものである（図版22）。板材は横断面C字をなし、組み合った形は卵形をなし、長径60㎝、短径50㎝を計り、板材の厚みは基底部で7㎝であった。現存の深さは70㎝を計るが、井戸底には数～十数㎝の角礫が層をなしていた。中に井戸板材とみられる板片数枚が没入していた。ほかに月影式前後の土器片が確認された。掘り方の埋土は灰黒カッ色粘質土であった。前記水路状遺構とほぼ同時期と考えられる。大野川からの浸水がひどく実測図はとり得なかった。

同種の井戸は、金沢市金石東遺跡でも確認している（昭和55年度埋文センター調査）。時期は同じく弥生時代後期から終末期のあたりに相当する。

3　律令時代の遺構（図D－1）

掘立柱建物五棟と溝（溝1）および井戸1基が確認された。遺構相互の関係と配置の概要をあらかじめのべておこう。


C区
2号建物
溝3－a 溝4－a 溝3－b
溝b
溝3－a
溝a
1号井戸
2号井戸
溝1－b
溝1－c
溝d
溝－5
溝c
11号建物
10号建物
溝1－a
E区
溝3－b
9号建物
溝4－a
8号建物
溝3－a
溝c
D区
0
5
10m

図D－1 D区遺構配置図

(1) 溝と建物の関係

溝1と有機的な関連がうかがえる建物は、8号建物と2号建物である。8号建物は溝1－aと平行して南北にのびる。東側柱列と溝の西の縁の間は6m強を計り、南妻柱列の手前で溝がくの字にやや折れ、北妻柱列をすぎると形状が不規則となる。さらに、東側柱列に平行する溝の西縁がもっとも丁寧なつくりになっているから、両者は併存するものとしてつくられていることは明らかである。

2号建物と溝1－cもほぼ同じ関係がうかがわれる。東側柱列とほぼ直線的にのびる溝1－cとの間は6.5mを計り、平行する。

(2) 8号建物と9号建物

8号建物と9号建物はともに桁行7間、梁行2間の細長い大型建物であるが、柱穴の掘り方、柱間の寸法、規模ともに全く同規格である。9号建物の検出された柱穴には北妻列中柱をのぞくすべてに礎板または柱根あるいはその双方が遺存していたが、8号建物はまったくそれがみられず、かわりに柱の掘りぬき穴が確認され、地山ブロックを含んだ土で埋めもどされていた。おそらく、8号建物を建築して間もなく、何らかの事情で移築、すなわち9号建物として約20°振って建てかえられたものと推定できる。

(3) 9号建物と10・11号建物

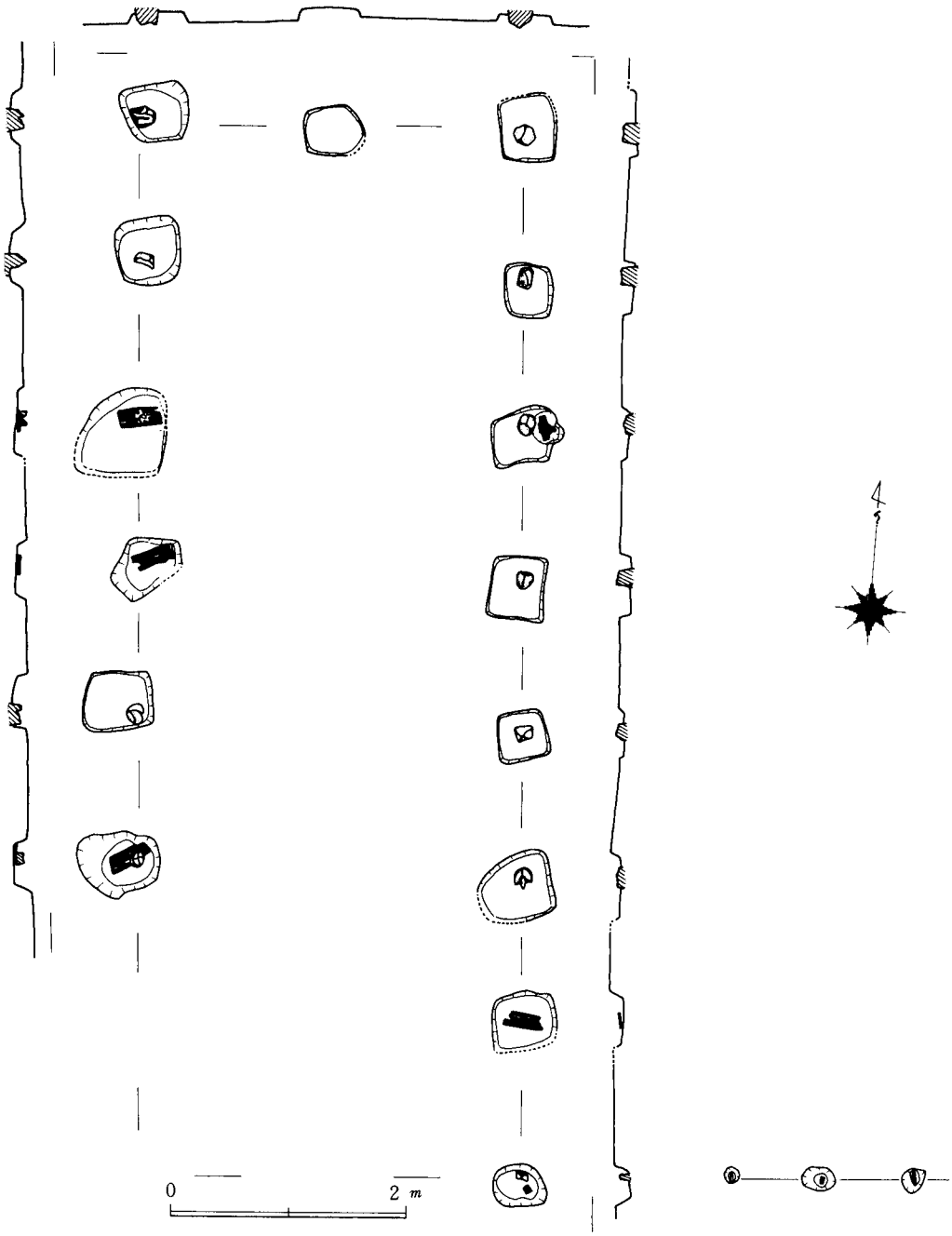
9号建物とほぼ側柱列をそろえて10・11号建物が建てられている。いずれも切妻式の上屋構造が想定でき、9号建物の方が屋根が高いと推定されるから併存するとみてよい。10・11号建物は9号建物の付属屋的性格をもつものと推定される。

10号建物北妻柱列にほぼ併行して、同形状の溝a・溝bがある。溝aは約3m、溝bは約6.5mの間隔をもち西へ走る。東側はいずれも不規則に袋状をなして南に折れてすぼまる。溝aと溝bの前後関係は不明であるが、9号建物南妻柱列にそろえて東にのびる柵列と相まって、9号建物と10・11号建物からなる建物小群の区画に関係するものとみられる。

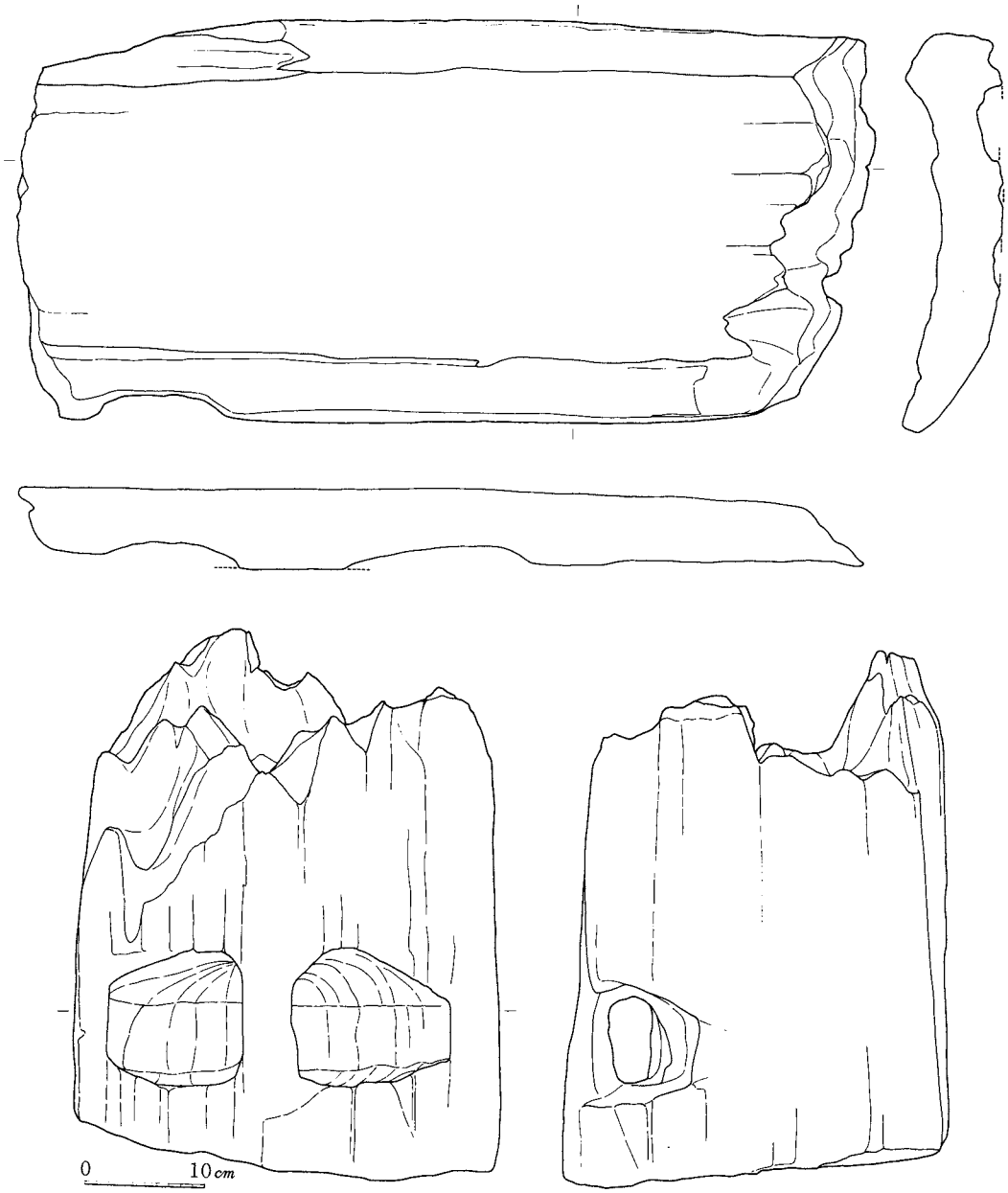
9号建物　桁行7間、梁行2間をなし、それぞれ17.5m、6.5mを計る。戸水C遺跡中最大の建物である。柱間寸法は桁で2.6m（8尺強）、梁で3.2m（11尺弱）をなす。柱穴は、やや乱れたものもあるが、一辺ほぼ1m前行の方形をなす。ほとんどの柱穴に柱根や礎板が遺存しているが（図D－2）、保存状態の良い柱根は、基底部で径35cm前後を計るから、ほぼ一尺の太い柱が用いられていたことになる。柱は丸いものが多いが、若干四方を面取りして隅丸方形をなすものもある。柱穴は、いずれも深さ10～15cmしか認められなかった。かなり削平されていることがわかる。西側柱の一部と南妻柱の3つの柱穴は検出できなかった。このあたりは、砂礫土層となり層位が乱れてかく乱されている。

南妻柱列を東に延長する所に、東側柱列と1.8m隔てて直線的に五つの柱穴が確認された。深さ約20cm、径10～15cmを計る。柱根が遺存しており、それは厚さ4～5cmの板状のもので、列に対して直角にすえられている。柵と考えられる。

10・11号建物　10・11号建物とも9号建物の北で南北にのびる建物であり、ほぼ後者と西側柱



図D－2　9号建物実測図



図D－3　9号建物礎板・柱根実測図

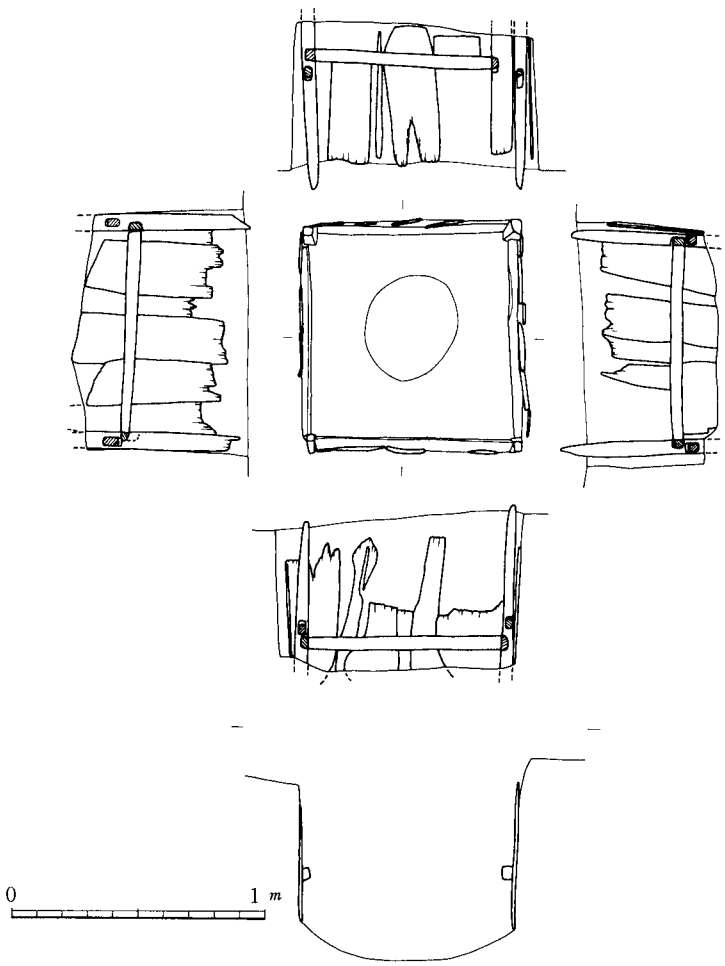
列を合わせている。弥生時代溝やかく乱などで柱穴は完全には検出できていない。

10号建物は、9号建物の北妻柱列と0.7mの間隔にあり、ほとんど接した状態である。桁行3間、梁行2間をなし、規模は桁行8.6m・梁行6.0mを計る。柱穴はやや不整形な円形(径30～50cm)のものが多いが方形に近いものもある。一部の柱穴に礎板・柱根が遺存していた。柱間は、一定していない。側柱で約2.5m＋約3.5m＋約2.5mとなり中央がやや長い。

11号建物は、9号建物との間隔1.7mを計る。10号建物と同じく桁行3間・梁行2間の建物と考えたいが北妻柱列は検出できなかった。梁行6.0m。柱穴は径40～60cmの円形をなしている。

11号建物の柱穴が二ヶ所において10号建物の柱穴によって切られていることより、11号建物→10号建物の順で建てかえられたものと考えられる。

2号建物　建物の規模は不明であるが、大型の建物と推定される。柱穴は一辺60～80cmの不整方形のものが多い。一部に礎板・柱根を遺存する。柱穴の深さは20～30cm程度。柱間は桁で2.



図D－4　D区2号井戸実測図

3～2.4 m、梁で2.5 m程度である。

溝1　溝1はa～cの三条に区別できる。南の方が若干高くなっているので水が流れるものと考えてよいが、接合状態はきわめて複雑であった。溝1－aは、かなり南から続いてきているものであるが、8号建物に平行してのびる部分をすぎるとやや開き気味となりバチ状に収束してしまう。溝1－bと溝1－cはそのバチ状収束部から新たに続くかたちで北にのびる。接続部は複雑で無数の不定形なピットなどがあり十分把握できなかった。

溝の深さは現況で溝1－aが15～20 cm、溝1－bが5～10 cm、溝1－cが15 cm前後を計った。溝中はいずれも茶カッ色砂礫層で充満されており、とくにその上層からはおびただしい土器が出土した。ただし、溝1－cは溝底から東縁にかけて黒カッ色粘質土の無遺物層が確認できたので掘られた時期は前二者よりすこし早いと考えられる。溝1－bはもっとも浅くまたしまりが悪く雑につくられている。これらの溝が最終的に埋まる時期は、砂礫におおわれた時であり、レンズ状に順時堆積したのではなく、一時に洪水等の事情で埋まったものと観察できた。出土土器の説明は次項にゆずる。

2号井戸　溝1－bの以前に掘りこまれたとみられる井戸。溝1－bの覆土である砂礫層がこの部分はやや赤く変色していた。井戸の覆土は黒カッ色粘質土であり、中に杓が没入していた。

構造は、四隅に角柱を打ち、下部に桟をわたして固定し、掘り方との間に5～6材の板材をはめこんでいる。一辺は80～85 cmを計る。底はU字状をなしており、中央部からの現存高は80 cmほどであった。

4　溝1出土遺物（図D－5～図D－10）

D調査区でも包含層中より大量の遺物が出土しているが、遺構に伴なうものはすくない。前者のうち注意すべき遺物は次節でまとめて紹介することとし、ここでは溝1より出土した土器類についてのべたい。

前述したように溝1に充満している茶カッ色砂礫層中におびただしい土器が出土した。これらは順次溝中に堆積したものではなく、砂礫とともに一時に埋積したものと推定される。したがって、若干の例外はあっても時期的な幅はすくない。須恵器と土師器の比率は前者が大部分を占めている。ただし両者ともほぼ全器種が出土している。

(1)　須恵器

蓋類　鈕は、擬宝珠形のしっかりしたもの（図D－5の3）から、頂部がやや平坦でしまりの弱いもの（図D－5の2）まで各種みられる。口径は径16 cmの大形のもの（図D－5の5）から、図D－5の6のように小形（径12 cm）のものまであるが、径15 cm程度が普通である。口縁は端部近くでいったん屈曲しやや横にのびる形でおれ曲がる。

杯・埦類　有台杯・無台杯および埦状のものに区別できる。有台杯は、口径10～12 cm、高さ4～5 cmの小形品が多いが、一部（図D－5の34）のように台部径13 cmの大形品もある。無台杯にくらべて体部の開きが少ないのが一般的傾向であるが、図D－5の29・30などは底部と体部の区

別がなく、ゆるやかに埦状に開く型式のものであり。図D－5の18～35は有台杯として扱っているが、同32は有台盤として分類すべきかもしれない。

無台杯は図D－6の1～10に示すとおりで全体として体部が開き、口縁端部はやや丸みをおびる。口径12～13.5㎝、高さは3～3.5㎝を計る。

図D－6の12～16を埦として処理したが、13は杯に含めるべきかもしれない。図D－6の14・16は口径16～17㎝を計る大形品であり、14はとくに体部が球状に丸みをもつ。12は口径12㎝、高さ4.5㎝を計る。

盤・皿類　図D－6の17～21を盤とし、11・22・23を皿とした。盤は口径14～17㎝、高さ2～2.5㎝を計る。18は全体として器肉が厚いが、他は底部が厚く体部は薄い。皿については22は口径が大きく複元される。23はほとんど扁平につくられている。11は口縁部がやや屈曲し、底径が狭い。口径15.5㎝、高さ2.5㎝。

壺・瓶類　図D－7の1～5は口頸部の破片であるが、1は口縁端部がやや外開きとなり双耳瓶の口縁部とみられる。2・5は長頸壺とみられる。4はいずれとも判断しがたい。3は細長い体部につくものであり、小形の浄瓶の口縁部である。口径5㎝。図D－7の6は双耳瓶の体部、図D－7の9はその把手部である。図D－7の7は長頸壺の底部である。図D－7の8は口径11.5㎝を計る短頸壺の口縁部。

その他　図D－7の11・12は深鉢に分類される。11の口径は26㎝。図D－7の13・14は肩衝壺の肩部の破片。図D－7の15は大形の直口壺か。同16は大形の甕、口縁が大きく開くタイプ。同10は脚部であるが体部の形状は不明。同17は胴部の破片であるが、内面はカキ目調整と同心円タタキが併用されている。

(2)　土師器

埦類　土師器埦は、高台付のもの（図D－8の1～12)、平高台のもの（同－13～18)、無高台のもの（同－19～30）に区別される。

図D－8の1は、口径11㎝、高さ4㎝の体部にしっかりした高台が付くものとみられる。つくりは丁寧で内面はよくヘラで研磨されている。図D－8の5・10・11は内面が黒色をなすいわゆる黒色土師器である。

平高台（ベタ高台）の椀の全形状を知ることはできないが、底部にロクロ糸切痕をとどめるものがあり（図D－8の13・15・18）注目される。

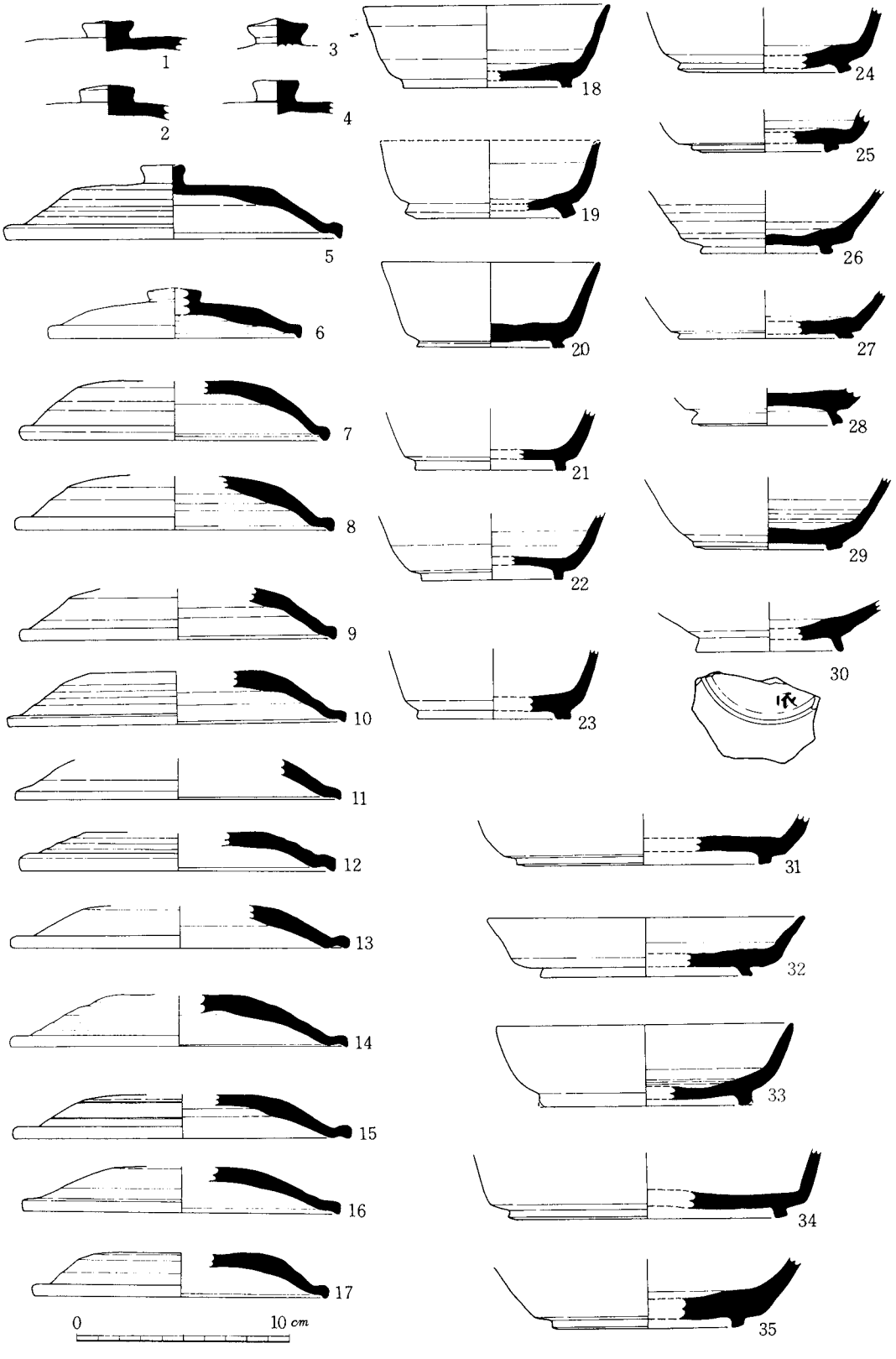
無高台の埦の中には、口径12㎝の小形のもの(図D－8の19)から口径24㎝の大形(図D－8の30）まで各種ある。図D－8の28などは内面がよく研磨されている。

甕・鍋類など　図D－9の1～9は長甕の類。頸部はくの字状をなし、口縁端部は屈曲して上方にのびる。図D－9の10～18は小甕の類。10は口径9㎝をはかり、やや頸部のしまりが弱い。基本的に底部は糸切り痕をのこす。図D－10の1～4は堝。口径の複元に不安がのこるものの広い口縁に浅い体部がとりつくものとみられる。図D－10の5・6は大形の鉢状土器と推定される。同8は瓶の把手。同9は高杯脚であろう。なお、同10は径5㎝を計る円柱状器。同12は径6㎝

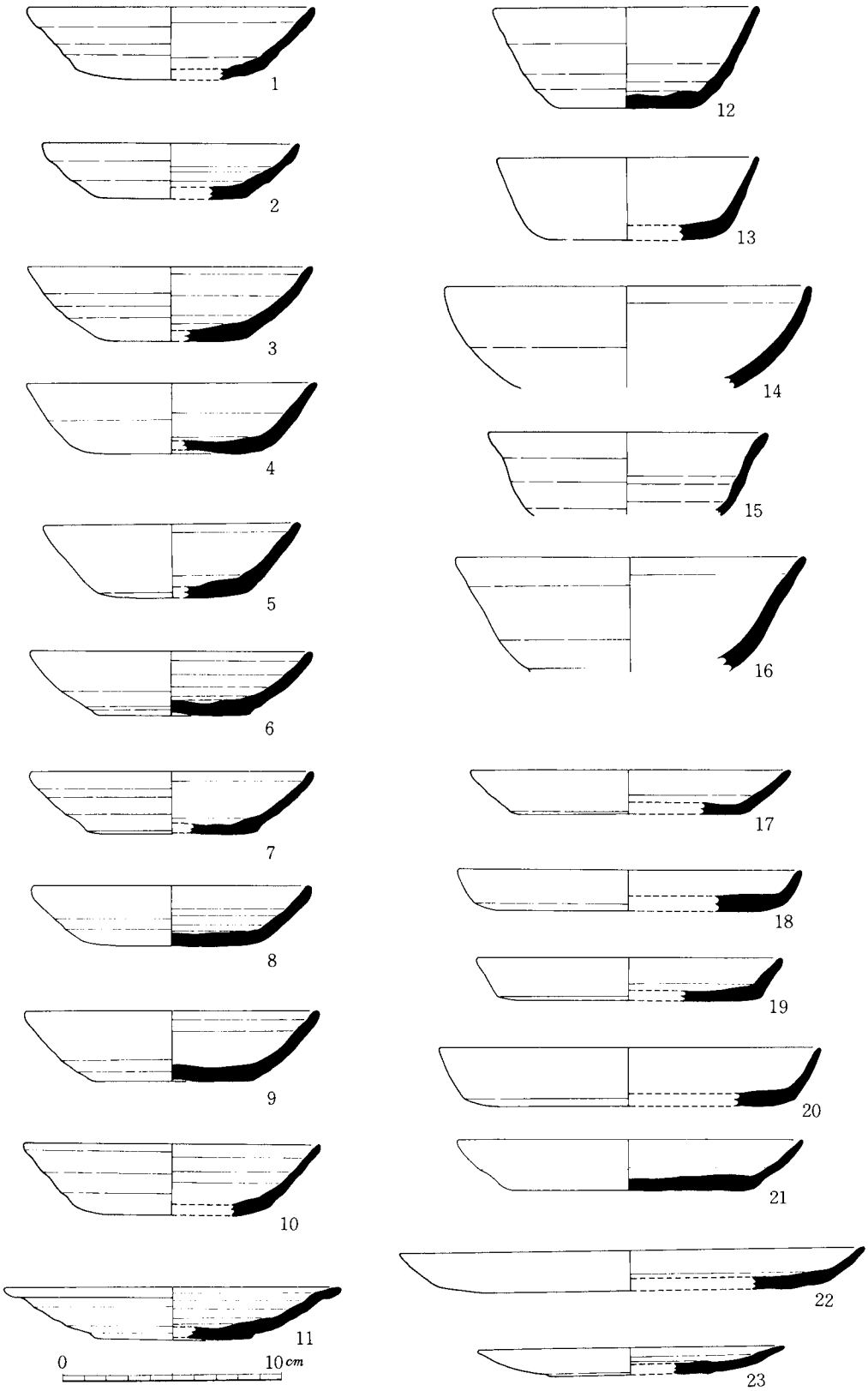
強を計る円筒土製品であり、ふいごの破片である。

施釉陶器　図D—10の13・14・15は灰釉陶器、16は緑釉陶器である。灰釉陶器はいずれも素地は緻密で堅く焼きしまっている。13は直線的に開く皿状品。口径15.5㎝、高さ2.3㎝、底径6.5㎝を計る優品である。15は大形で埦状の体部をもつもの。16はやや焼成が甘い平高台の緑釉陶器である。

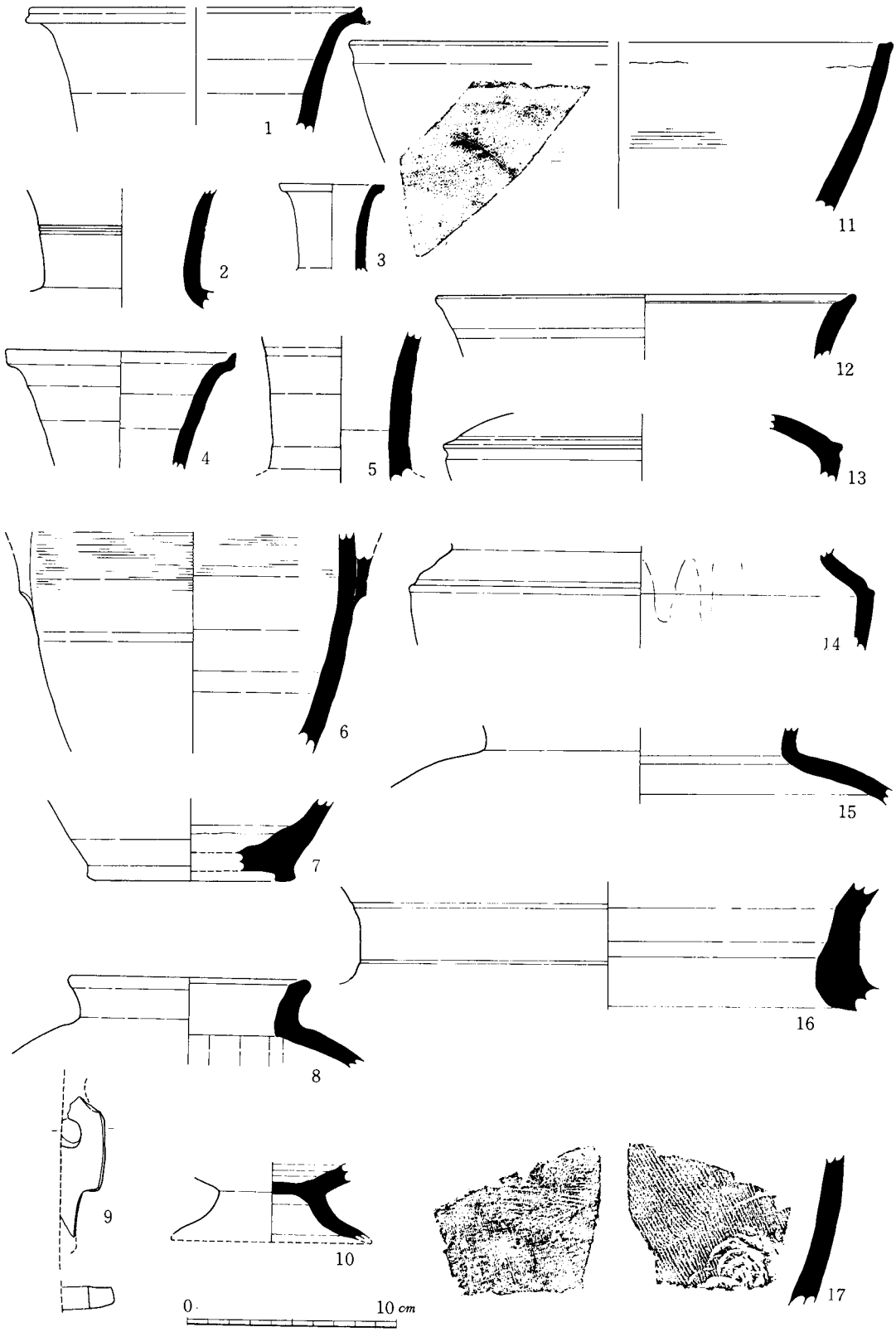
小括　溝1より出土した土器については、吉岡康暢氏の研究（「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』1983）より、輪島市洲衛1号窯期と富来町給分小袋窯期のほぼ中間に位置するものとみられ、年代的には九世紀後半から10世紀初頭にかかるころと推定される。（河村）



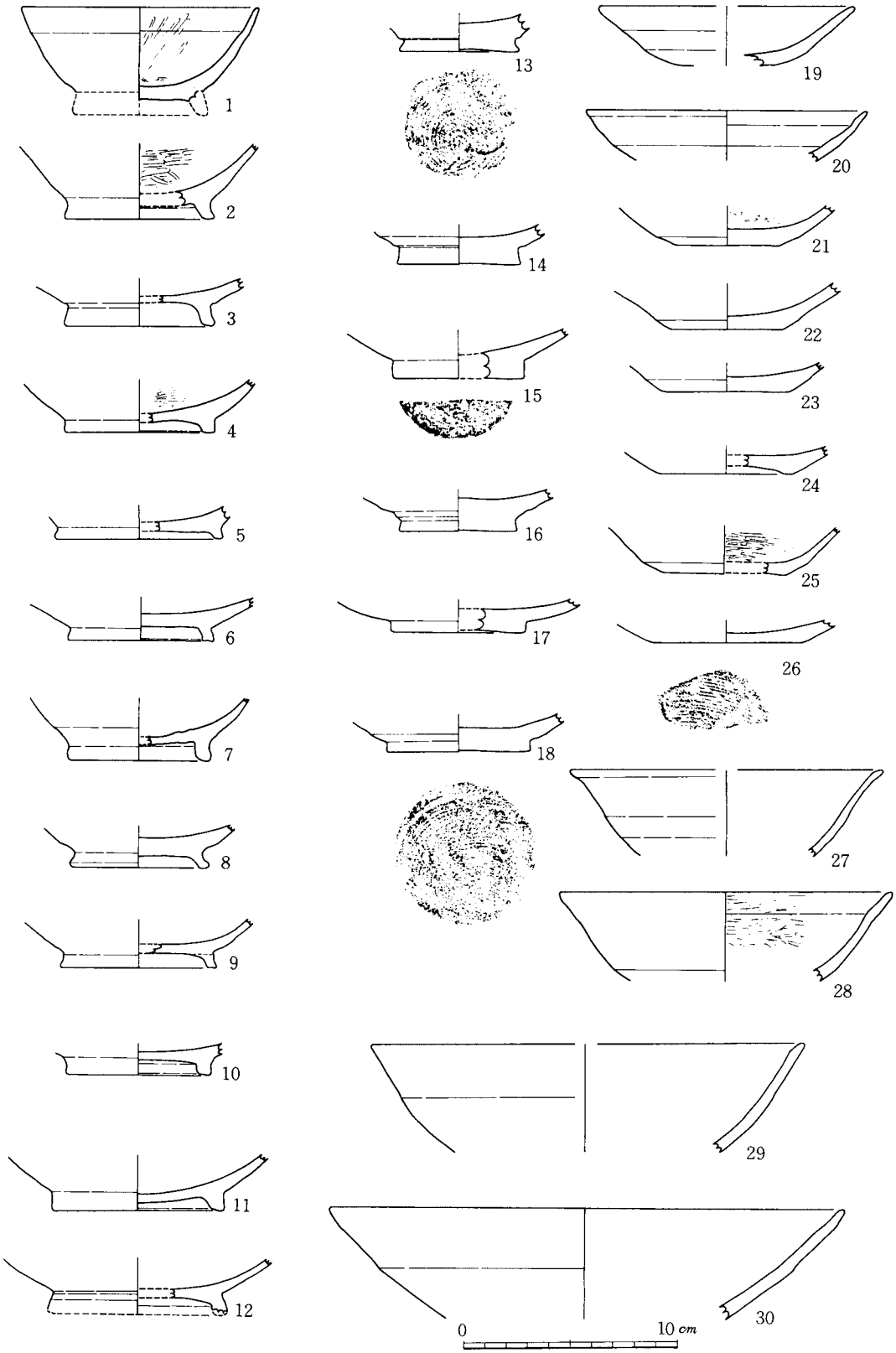
図D－5　溝1（D区）出土土器実測図(1)



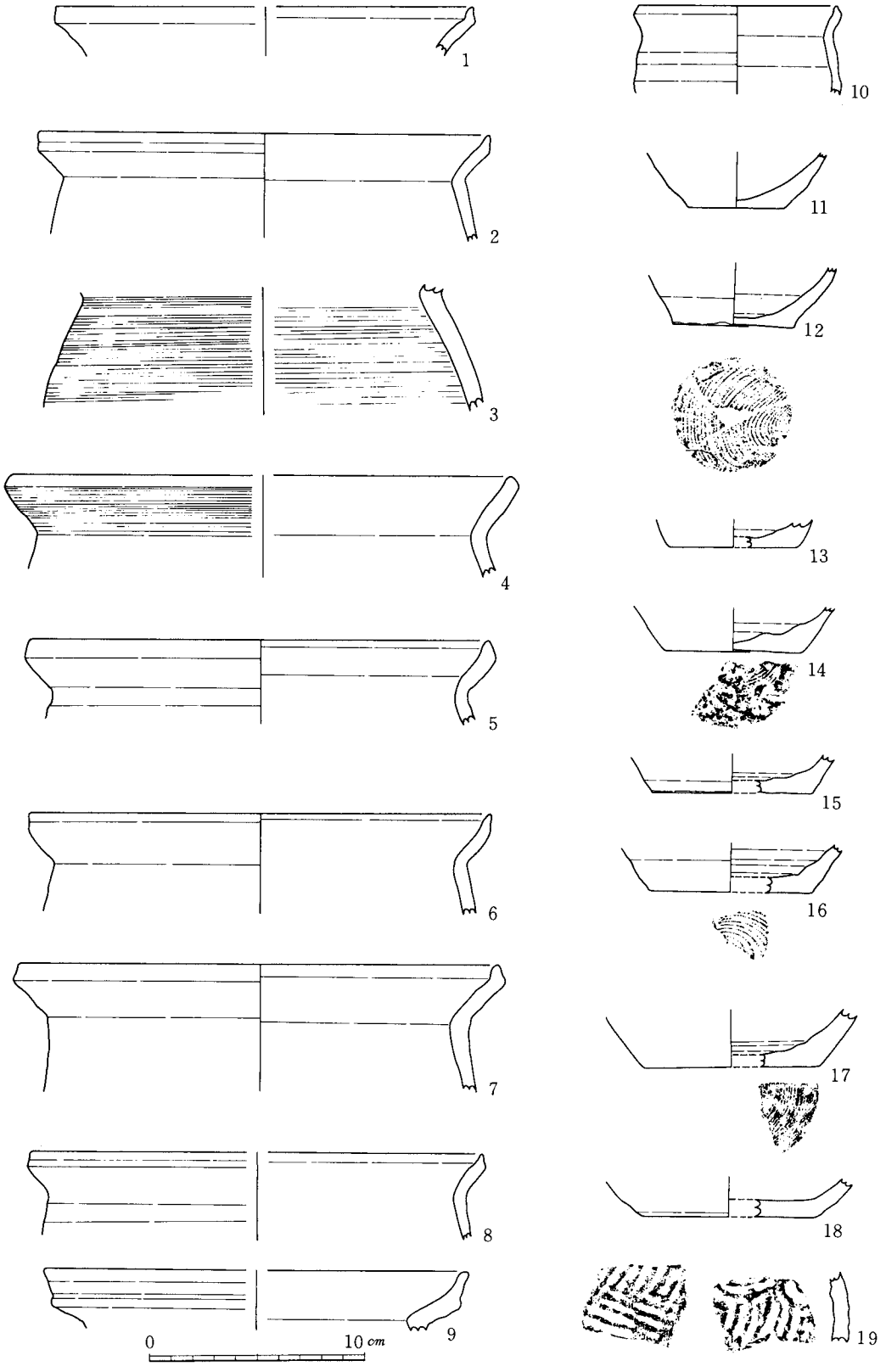
図D－6　溝1（D区）出土土器実測図(2)



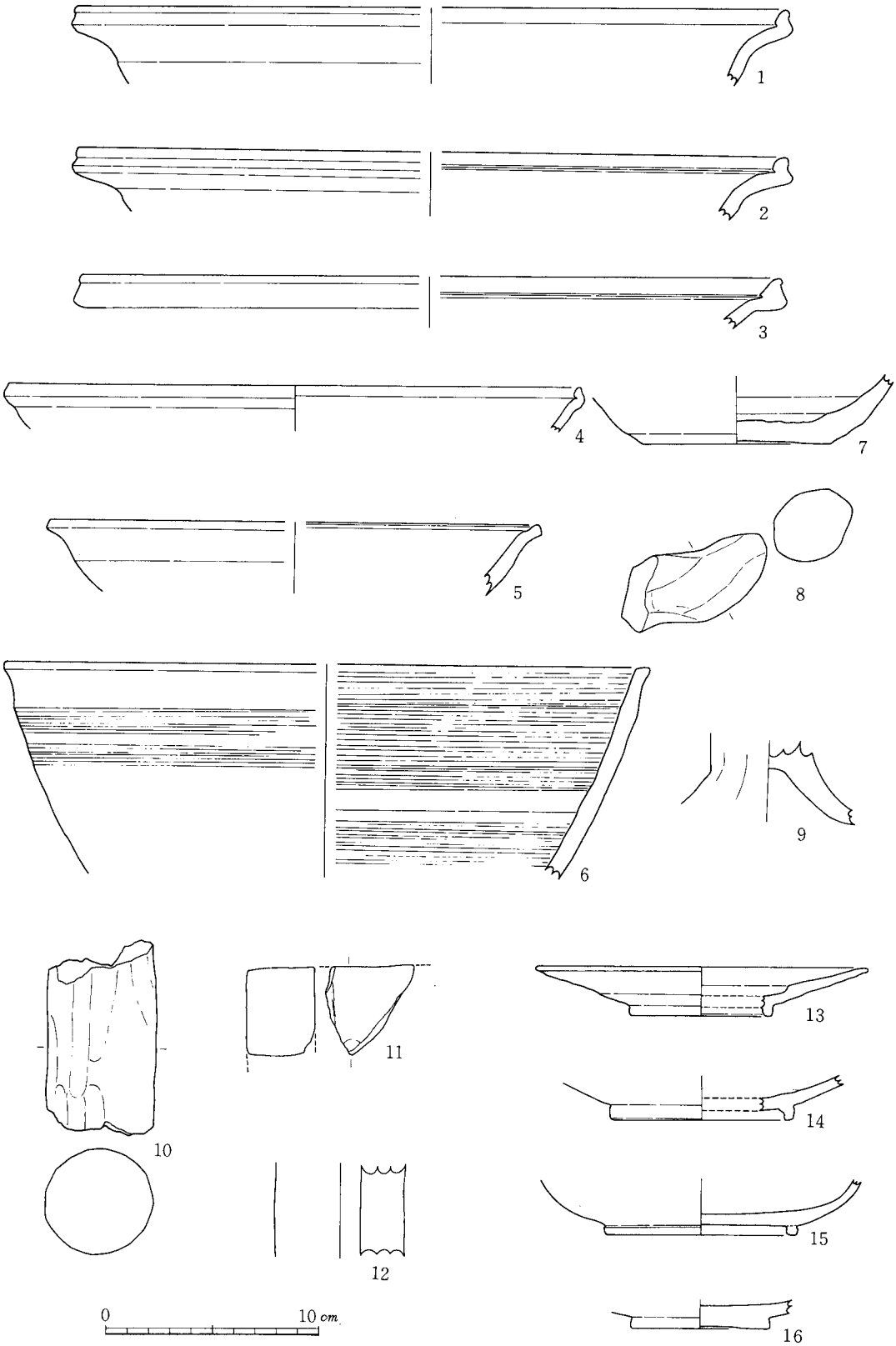
図D－7　溝1（D区）出土土器実測図(3)



図D－8　溝1（D区）出土土器実測図(4)



図D－9　溝1（D区）出土土器実測図(5)



図D－10　溝1（D区）出土土器実測図(6)

第5節　E調査区の遺構と遺物

1　調査の概要

戸水C遺跡昭和56年度調査区をE調査区とする。E調査区は昭和56年5月1日より昭和57年3月27日にかけて実施された。

調査区はD調査区の北東、F調査区(57年度調査区)との間にあたる約3,800㎡の区域である。図E－1は、E調査区の遺構全体図であるが、東西および西北―東南にのびる3条づつの水路状遺構、南北に走る溝、F調査区にかかって検出された掘立柱建物、井戸、土坑（以上図E－2）の他に無数のピット、不定形土坑、南北・東西に平行して走る幅50㎝前後の溝など検出された遺構は多いが、遺構密度は南から北へいくにしたがって少なくなる。地山も北にいくにしたがって低く傾斜し比高差40～50㎝を計る。一応遺跡の北端をとらえたものとして理解したい。遺構検出面は海抜0m以下の部分があり、前年度同様調査は難渋をきわめた。以下主要な遺構遺物について紹介したい。

2　弥生時代から古墳時代前期にかけての遺構と遺物

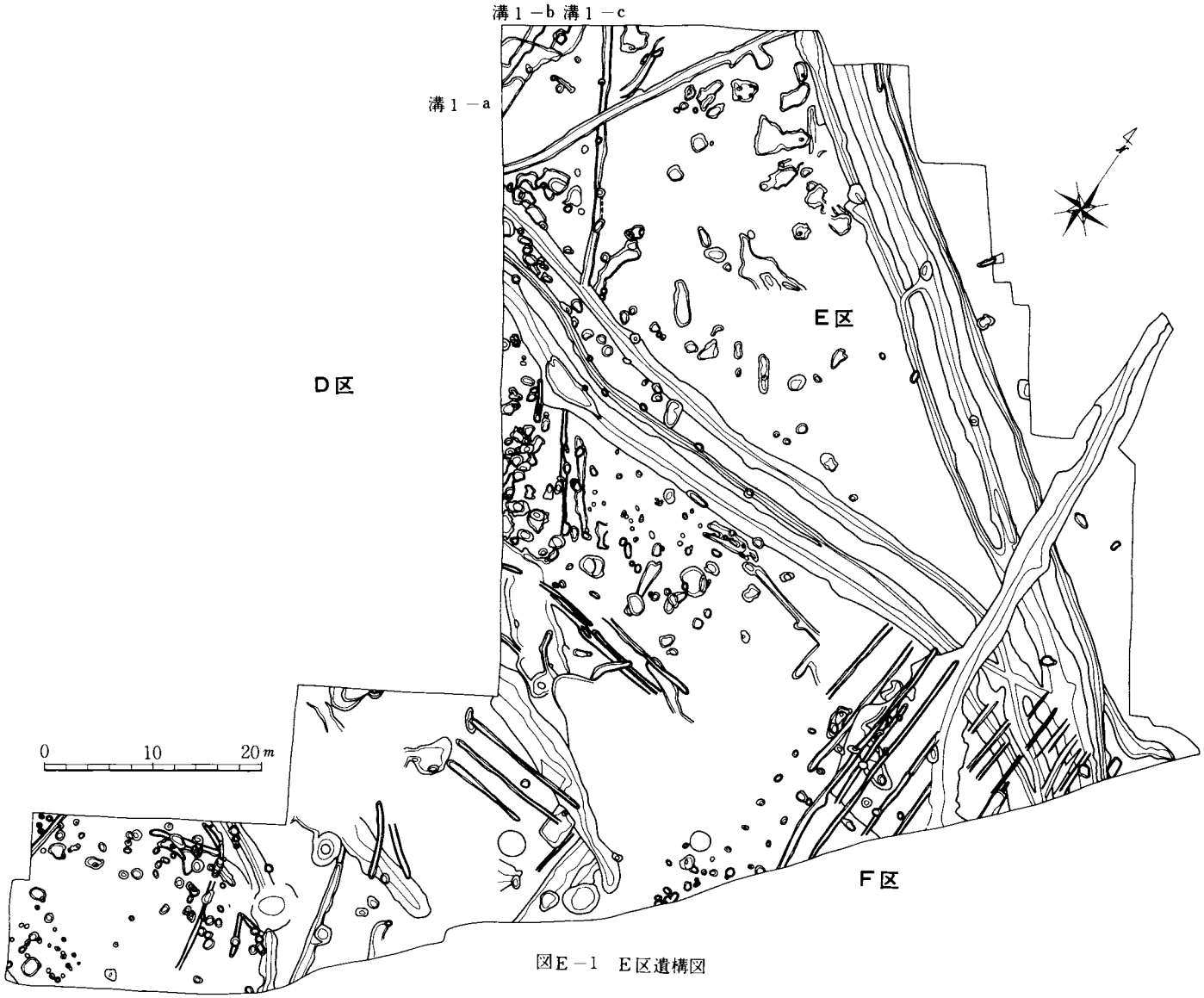
(1)　水路状遺構（図E－2）

水路状遺構は六条確認された。これらはE調査区にそくして述べると、東西に走る三条（溝3－a、溝4－a、溝3－b）と南東―西北に走る三条（溝4－b、溝4－c、溝5）に区別できる。これらの溝はいずれも平行して走っている関係があり、同時期か前後関係があるのかは個々に検討すべきであるが、相互に関連性をもった水路群として有機的にとらえる必要がある。もともと、溝3－a・bは同じ溝（溝4）の分岐したものであり、溝4－b・cは相互に交流し合っているので同時期併存とみてよい。また東西に走る溝4－aはこれらの支流である。溝の深さは現況でいずれも20～30㎝、幅はもっとも狭い溝5で0.8～1.0m、もっとも幅広い溝3－aで2.5m強であった。覆土はいずれも上層が黒カッ色粘質土、下層が灰茶カッ色粘質土をなしレンズ状に堆積しており自然的に埋まったものと推定される。

ところで、溝3－aの西側に溝の上面が幅広くなった箇所がある(幅4.5m)。この下を掘ると溝底が舟底状に落ち込んでいるのが確認された。舟底状遺構は長さ7m、幅2.3mをなし深さは両端の溝底より計って40㎝程である。土層（図E－3）は、溝覆土である暗茶カッ色粘質土（①）と灰茶カッ色粘質土（②）の下に四層認められ、この内の第④・第⑥層は完全な砂層である。したがって、何らかの事情で舟底状遺構が埋まり、そののちも溝そのものは機能していたものと理解できる。

舟底状遺構出土の遺物（図E－4～図E－7、図版27～28）

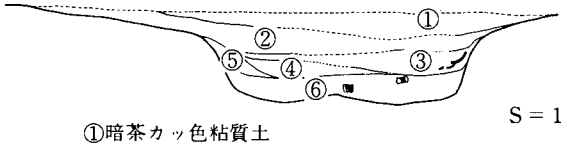
舟底状遺構の第③・④・⑥層より60個体近い土器片と自然木および籠製品が出土した。舟底状



図E－1　E区遺構図

溝1－b
溝1－c
D区
E区
溝1－a
溝3－b
溝4－b
溝5
溝4－c
溝4－a
舟底状遺構
303号土坑
溝3－a
1
2
3
溝2
12号建物
F区
2号井戸
1号井戸
0
10
20 m

図E－2　E区主要遺構配置図



S＝1/6

①暗茶カッ色粘質土
②灰茶カッ色粘質土
③灰暗青カッ色粘質土(砂粒多く含む)
④茶カッ色砂礫層(暗茶カッ色粘質土ブロック含)
⑤黒カッ色粘質土
⑥青灰色砂層

図E－3　E区溝3－a舟底状遺構断面図

遺構は順次埋没していったものではなく、砂礫により一時に埋ったものとみられ、これら遺物群も比較的時期幅の狭いものとみられる。

土器は、甕形土器・壺形土器・高杯・器台のほか鉢・蓋・コップ形土器などほとんどの種類が出土している。また、完形品あるいは複元すると完形になるものが多く、破片は一般に大きい。

甕形土器　甕形土器は概して頸部のしまりが強く、胴部の中ほどのやや上あたりに最大径がくる。口縁の形態で分類すると有段口縁をなし擬横線がしばしば施されるもの(図E－4の1～6)、口縁端部が直立し受け口状をなすもの（図E－4の7～13〈11は壺形土器に分類すべきかもしれない〉)、口縁口唇部上が短かくつまみあげられるとともに下方にものびるもの（図E－5の1～6・9～12）に分類できる。大形の甕もあるが図E－4の3・10・12・13のように小形の甕も目立つ。

壺形土器　図E－6の1は、くの字状をなすしまった口頸部をなし、口唇部はやや上につまみ上げられるとともに下方にものびる。図E－6の2と同一個体をなし、口径13.2㎝、高さ21㎝をなす。胴部は球状をなし、ほぼ中央がもっとも径が大きくなる。外面はヘラで丁寧にみがかれ、上半部はタテ方向、中以下は斜方向、底部付近はタテ方向である。

ほかに、長頸壺（図E－6の4・5）も目立つ。図E－6の7・8は受け口状をなし頸部がのびるタイプのものである。図E－6の3は長い頸撃につぶれた球状の体部のつく壺とみられる。

高杯・器台形土器　高杯は図E－7の1～5にみるように大形品もあるが、その一方で図E－7の16のように鉢状の杯部に短かい脚がつく小形品がある。後者は、杯部径16.5㎝、高さ12.5㎝の完形品である。前者の大形の高杯でも杯部の開きの度合はまだ少ない。脚部が有段になるものはみられなかったが、図E－7の14の器台はその可能性がある。

図E－7の11の器台は同一13と同一個体をなすものである。浅い皿状の杯部に棒状の胴部がとりつき、内外面とも丁寧にヘラミガキもされている。口縁はやや屈曲したちあがる。図E－7の15は大形の器台の脚部、透しは2段である。高杯・器台とも加飾的要素はまだほとんどみられない。

その他の土器　図E－5の13は粗製の埦形の土器であるが焼成前に底部に穴があけられ、甑の一形態とみられる。図E－6の9・10は台付の埦形土器、外面はハケメ調整である。同11・12は算盤状の体部をなし、入念にヘラミガキされたコップ形土器の優品である。同13・14は粗製の盃形土器。同15・16はゆるい二重口縁をなす浅い鉢。16は口径2.5㎝を計る。図E－4の14はしっかりした蓋。

小括　本土器群はほぼ同一時期として処理することができる一括資料である。甕形土器は、有段口縁をなし擬横線帯をもつものがいまだすくない。壺・高杯類とも加飾的傾向の乏しい段階にある。

総合的に検討すると、やや古い要素もあるが谷内尾晋司氏編年によるところの法仏II式土器に比定することができる(谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』1983)。

その他の遺物　舟底状遺構のほぼ中央に籠の一部が遺存していた(図版28)。ほかに自然本多数が出土したが加工されたものはみあたらなかった。

溝3－a上層の遺物（図E－8）

E調査区のほぼ中央、溝3－aにややまとまって遺物が出土した。図E－2出土地点1・2が図E－8の1・2にそれぞれ対応し、その東の出土地点3の範囲に図E－8の3～8の琴柱形石製品と管玉が出土した。いずれも覆土上層の黒カッ色粘質土より出土した。

1は、底部付近が欠損しているがもともと1個体として置かれていたものと推定される。口縁端部が肥厚したくの字状口縁をなし、胴部は球形に近く、外面は荒い横ハケ、内面はヘラケズリによる。口径17cmを計る典形的な布留式の特徴をもった甕である。外面にはススが付着している。2は鉢状の土器であるが、内外面ともにヘラミガキされ、口縁から体部に移行する部分は小形丸底壺を思わせる。口径21cm。

3は琴柱形石製品。上端の幅2.6㎡、下端の幅2.3cm、推定長3cmのエ字形をなす。上段と下段にそれぞれ三条の溝が彫られ、端面も一条の溝が彫られている。端面の両端には一ヶ所づつ穴があけられている。石材は淡灰緑色を呈し軟質で滑石に近い。付近より出土した管玉は破片を含めて6点である。径5～7㎜、長さ19～22㎜を計る。いずれも両面より穿孔されている。石材はいずれも同石材であり、淡緑色を呈し軟質の緑色凝灰岩製である。

水路状遺構の性格と年代

6条の溝はいずれも西の方がレベルが低くなっており、水路と考えられるものである。また、溝4－bと溝4－cがH状に交わり、おそらく水量で調整したり流路を変更できるしくみになっていたと推定され、用水的性格をもつ遺構と考えられる。

ところで、溝3－aの出土遺物をみると、もっとも早い段階は舟底状遺構が機能していた段階であるが、これが埋没するのが弥生時代後期の法仏II式の時期である。一方、溝がほとんど埋まった段階で布留式の時期の遺物が出土した訳である。他方、前調査区のD調査区では溝底に弥生末期の月影式土器が出土している。以上を総合すると弥生後期法仏II式以前に掘られ以後月影式のころまではほぼ機能し、その後、しだいに埋まっていった溝ということができる。ただし、溝4－aは覆土上層である黒カッ色粘質土中に法仏式の土器が出土したから、前者よりかなり早く埋ったものと推定される。溝4－b・c、溝5は土器が出土していないので確実なことはいえないが、溝4－aと溝3－aの年代の幅の中に入ることは疑えない。

(2)　303号土坑（図E－9、図版30）

本址は、溝3－aの東に位置する土坑である。不正円形のプランをなし、径80～70cm、底径50～30cmを計り、深さは68cmである（平安時代の溝で東上端が切られている）。内より4個体の土器が出土した。本遺跡では土坑にまとまった土器が出土するものがほとんどないだけに特筆される。

4個体の土器の内1と3が完形品、2は口縁より肩部にかかる破片、4は胴部の一部が欠損している。1・3は表面が磨滅し、2も口縁の一部が磨滅しているが、もっとも下の4はそれがみ

られない。4を含んだ層は黄淡カッ色粘質土で自然堆積土とは考えられないので、下半分が埋められたのちに1・2・3が置かれて、その後自然堆積により埋まったものと観察される。

1・2・4は甕形土器ですべてススが付着している。1はやや開き気味の有段口縁にあまりふくらまない胴部がつく。口唇部は厚くつくられている。胴部の最大となる所は中心よりやや上にあたり、底部はしっかりしている。外面はハケ目調整、内面はヘラケズリである。口径14㎝、胴径16㎝、高さ19.3㎝を計る。2はくの字状の口頸部をなす、口縁端部は斜め下に張り出す。

4は口径17㎝、高さ28㎝、胴径21.5㎝を計る。口縁は有段をなして直立し、ぶ厚くつくられている。口縁下端部も下に張り出す。外は擬横線が走る。胴部は卵状をなし安定感がある。外面はタテ方向のハケメ調整が施されている。

3は赤カッ色をなした広口の壺。くの字状の口縁にややつぶれた球形の胴部がつく。口唇部は上下に張り出す。口径13㎝、高さ14㎝、胴径16.2㎝を計る。

以上の土器群は、口縁の形態・プロポーション等から考えて、前述した溝3－a舟底状遺構土器群とほぼ同じく法仏II式土器に属するものとされる（谷内尾晋司氏「前掲」）。

3　古墳時代後期の遺構

E調査区の東に寄って南北に走る溝2がある。幅は狭い所で2.5m、広い所で11mを計る不規則な溝である。F調査区にかかるころにくの字に折れる。覆土は茶カッ色砂礫層であり、一時に埋まったものと推定される。砂礫中に古墳時代の土師器および六世紀代に属する須恵器が若干出土したので古墳時代後期の溝としておきたい。前述の六条の溝を切って掘られている。

4　律令時代の遺構と遺物

(1)　12号建物（図E－10、図版32）

12号建物はE調査区の東南に位置する掘立柱建物である。F区（57年度調査区）に一部未掘部をのこしているが、その後の調査によって、梁行二間・桁行六間の身舎の西側に廂を有する南北棟であることが判明した。廂を含めた規模は梁行7.6m・桁行15.2mを計る。柱間寸法は梁・桁とも2.5m前後である。柱穴はやや不整形で、径50～70㎝の円形をなす。廂の側柱列の柱穴は身舎のものよりやや径が小さく浅い。建物の方位は、磁北に対して3°30″西にふれている。柱根・礎板は確認されなかった。

(2)　1号井戸（図E－11、図版33）

12号建物の西に隣接して1号井戸が確認された。井戸の掘り方は径1.6～1.7mの不正円形で、井戸の内法は推定90㎝である。中は黒色粘質土で充満されており、無雑作に側板が倒れ落ちている状態であった。検出面より深さ90㎝の所で桟が確認された。北と西の部分のみほぼ現位置を保っており、東と南側は折れて曲っていた。底までの深さは検出面より約120㎝であった。

1号井戸出土の遺物（図E－11・E－13・E－14）

須恵器（図E－13）　1は蓋。口径13.2㎝、器高3.4㎝を計る。つまみは擬宝珠形であるがず

んぐりしている。口縁はいったん低く屈曲し、そして横にのびる。2の蓋はやや口径が小さい(12cm)。杯には有高台のものと無高台のものがある。後者の方が体部が開く。6は口径13.4cm、器高5.3cm。7はかなり体部が深い。8～12の無高台杯は高さが2.7～3.0cmにおさまる。

杯の裏底に墨書が認められる個体は5点ある。5・12は「宀」の中がよくわからない。6には「大大」、10には「東」と記されている。12は不明である。

13～17は、長頸壺の口縁部と底部である。いずれも破片であり個体を複元するには至らない。

土師器（図E－14）　大小の埦形土器が出土した。小形品には完形品がある（12・13）。1はほぼ完形のもの。口径13.5cm、高さ3.5cm。4は皿に近い形態をなす。7は口径19cmを計る大形品で内外面ともヘラミガキされている。たいして、12はもっとも小形で口径7.3cm、高さ2.6cmを計る。糸切り痕をのこすものもみられる(10)。13は口縁部の二ヶ所にへこみが認められ耳杯状をなしている。

1・3・11・12に墨書が認められ、すべて「依」と書かれている。3と12は書体が似ているがこれらと1・11はそれぞれことなる。

斎串（図E－11）　本井戸より出土した遺物として注目されるのは11本の斎串である。薄い板（幅2cm前後）を加工し、頭部の先端を尖らせたのち側面に削り込みを入れ五角形状に整え、あたかも人頭状に仕上げている。一方の端は剣先状に加工する。長いもので17.2cm、短いもので14.3cmを計る。

獣骨　ほかに特異なものとして獣骨がある。馬かと思われる脚部の骨が3～4本出土した。

小括　本井戸より出土した土器は、D区溝1より大量に出土した土器群とほぼ同時期に比定できる。溝1は洪水等で一時期に埋没したと考えられるもので、溝1に平行してつくられていた8号建物が大幅に向きをかえるという集落自身の変動がその後におこっている。井戸1が廃棄されたのがこのころとすると、廃棄に際して獣骨・斎串を投棄して、呪的行為がおこなわれたのはこれと何らかの関係があるのかもしれない。

(3)　2号井戸（図E－12、図版33）

遺物が出土しておらず、時期を特定できないがここに紹介しておこう。2号井戸は黄カッ色砂質土のもろい地山に掘り入まれているもので、掘り方は径2m程の円形土坑であったように思われるが、湧水が激しく板材をとり出すことで精一杯であった。

井戸枠は、幅20cm、長さ70cm強、厚さ4cmの板材を四方に交互に組み合せて構築していくものであり、井戸1とは構造がことなる。内法は50cm前後である。

5　その他の遺物

D・E区で遺構にともわないで出土した遺物の中で特筆すべきものをあげておこう。

墨書土器（図E－13～18）　本遺跡から大量の墨書土器が出土している。D・E区においても120点余が出土した。この内「依」と書かれたものが90余点に到する。それぞれ書体がことなっており多くの人々の共通の字として「依」が位置づけられているのである。一方、本遺跡の東2.

3 kmにある金沢市藤江B遺跡は「石田庄」なる墨書土器が出土したことで有名であるが、ここにも「依」の墨書土器が一点出土している。関連が注目される。

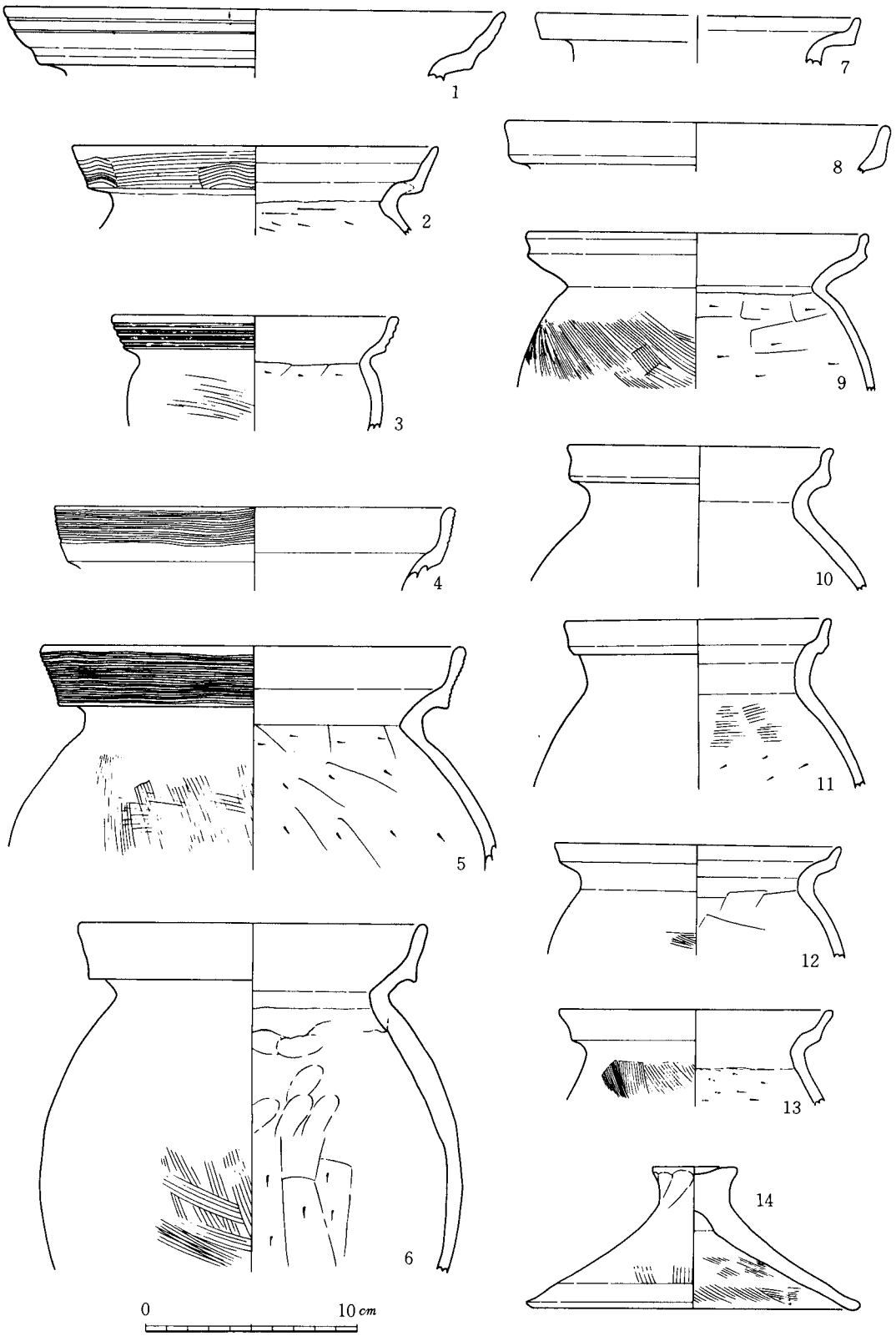
ほかに、「大」「大大」「中」「東」「上」「蔵」「巾」の墨書土器があり、解読しがたいが「宋」(?)らしい墨書もE区1号井戸を含めて四点みられる。なお、「廣人」と書かれた土器はやや古く奈良時代にさかのぼるものである。また「十」(図E—18の31)は墨ではなく漆書である。

石帯(図E—20)　2点ともE区より出土した。2は長方形をなし四隅のうち三隅が面取りされている。長辺3.9 cm、短辺3.6 cm、厚さ6 mmを計る。裏の四ヶ所に留穴が施されている。3は丸鞆形をなし、長径3.5 cm、短径2.4 cm、厚さ6 mmを計る。表面・側面はよく磨かれている。留穴は三ヶ所である。

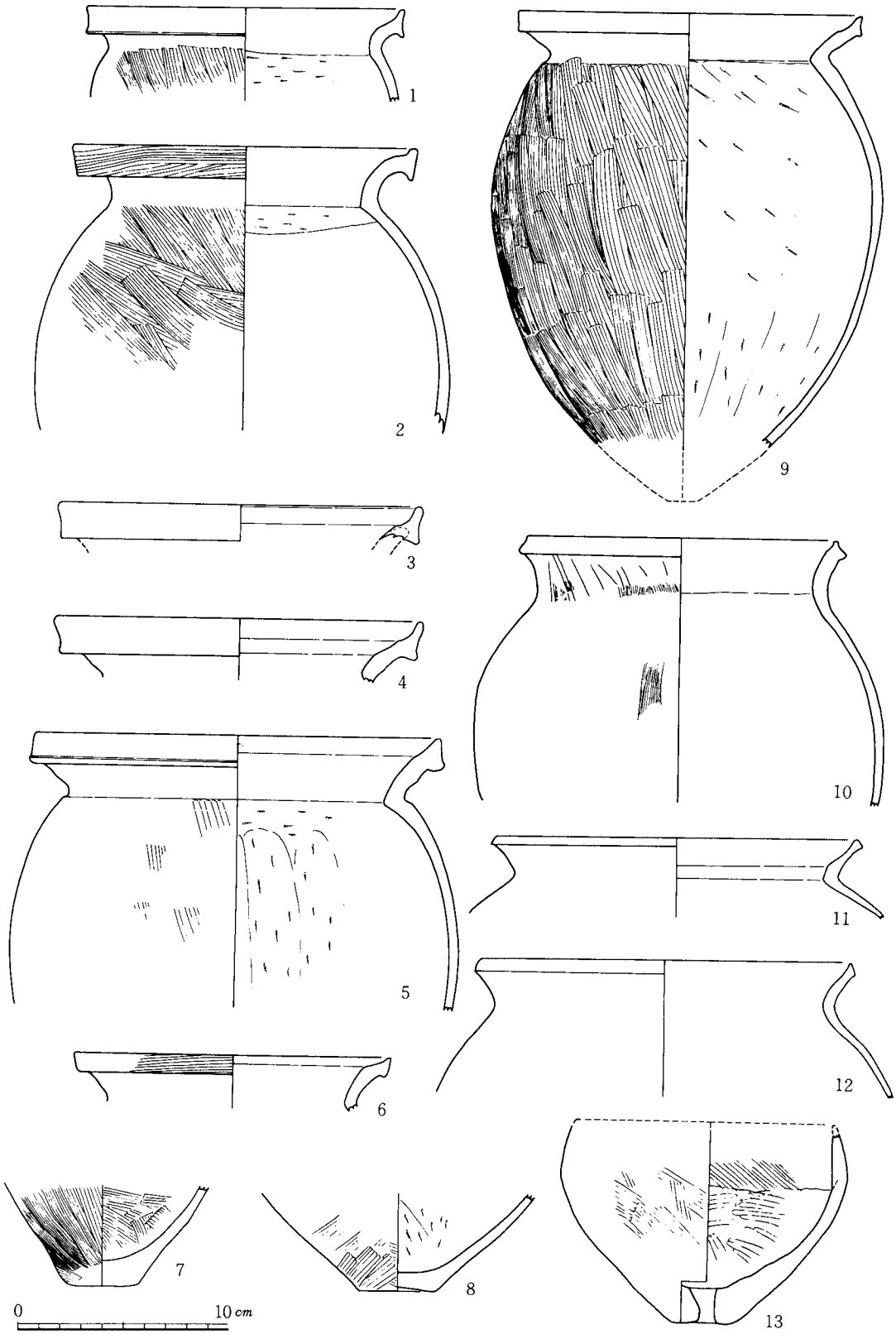
円面硯(図E—21の1)　最大径23.5 cmを計る大形品であり、素地は灰白色をなし堅牢に焼きしまっており、表面には緑色の釉がかかる優品である。脚部にかかるところに刻線による装飾文が施されている。

施釉陶器(図E—20)　施釉陶器が大量に出土するのも本遺跡の特徴のひとつである。1～7は緑釉、10～12は灰釉、13～17は青磁、18～24は白磁、そして25～27は美濃系の陶器と推定される。

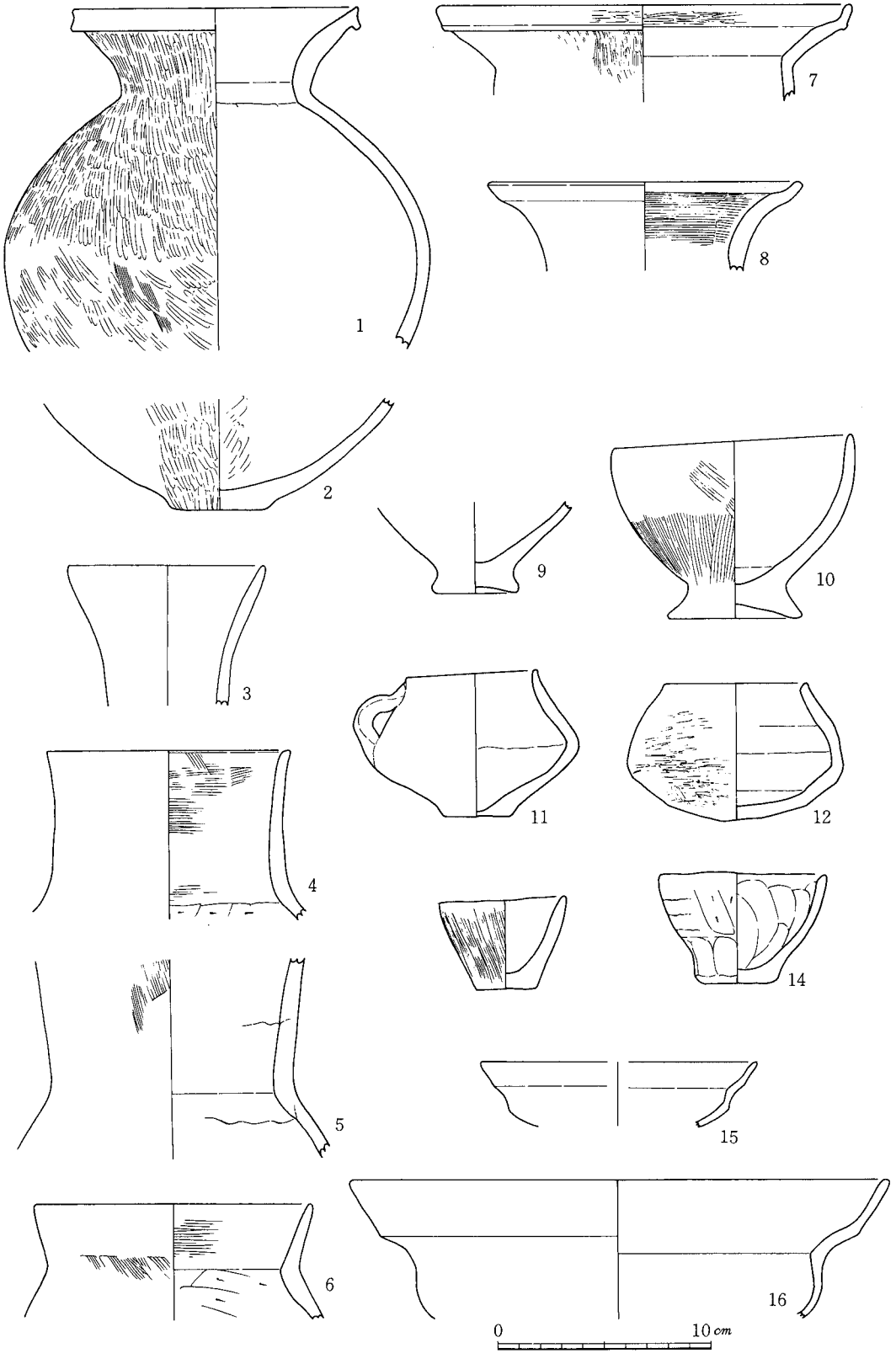
その他　図E—20の1は紡錘車。底径4.2 cm、上円部径2.3 cm、高さ2 cmを計り、中央に径6 mmの穴が貫通する。側面のみならず底面にも鋸歯状の線刻がみられるのが特徴である。図E—21の10は、須恵質の壺の底部であるが、外面に格子状の線刻が施されており、高台は底部の縁にしっかりと付けられている。外来系の土器か。同—3～6は、フイゴの羽口である。ほかに細い銅環(図版34)が出土している。(河村)



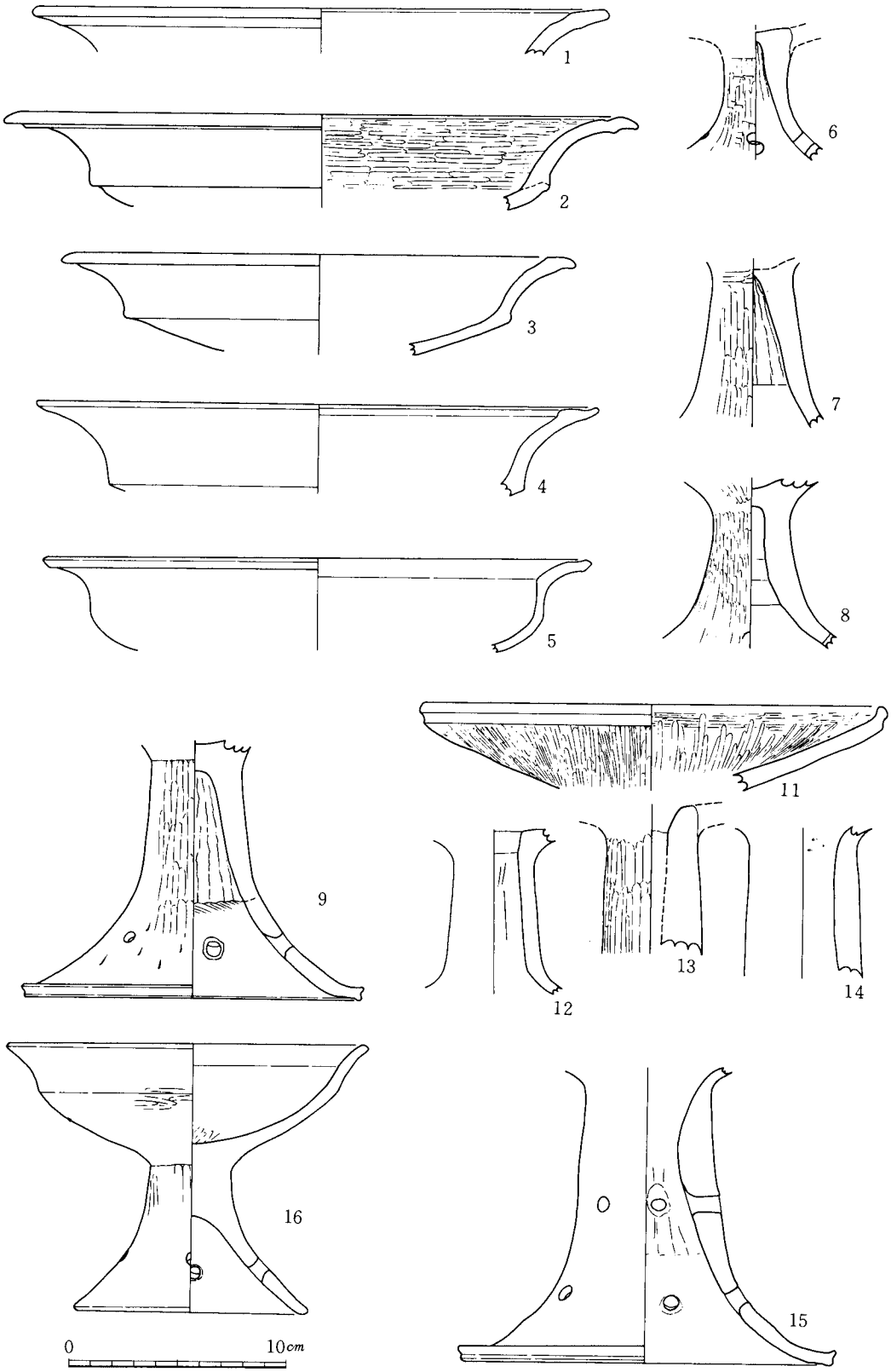
図E－4　溝3－a（E区）舟底状遺構出土土器(1)



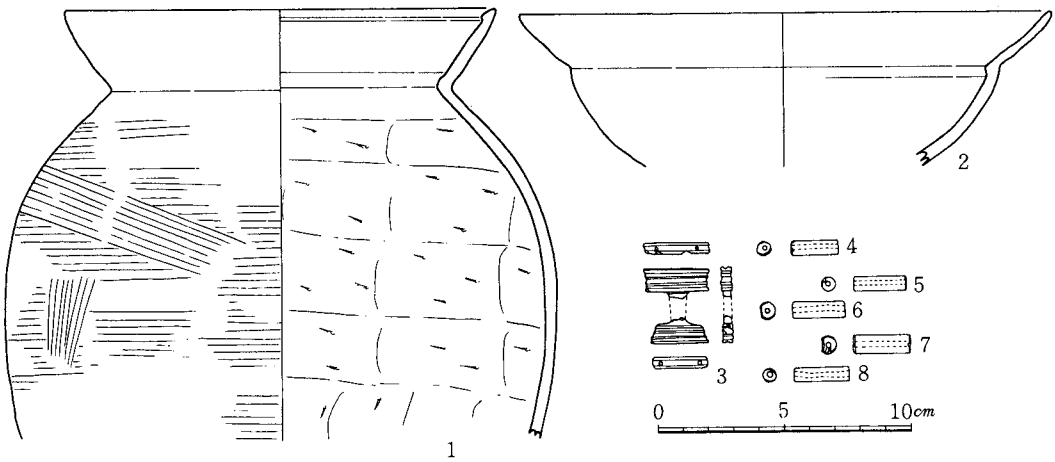
図E－5　溝3－a（E区）舟底状遺構出土土器(2)



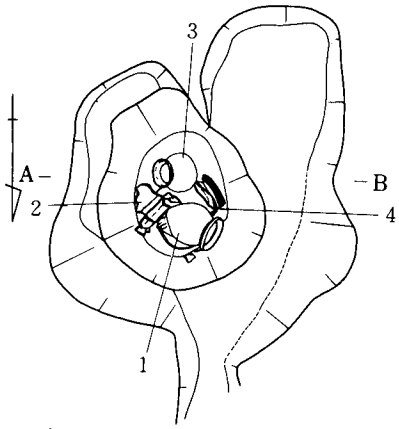
図E－6　溝3－a（E区）舟底状遺構出土土器(3)

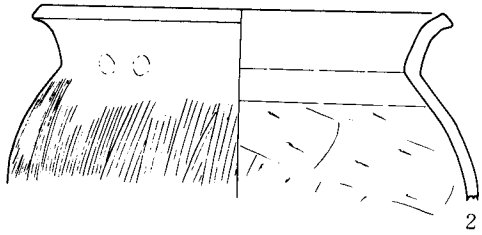


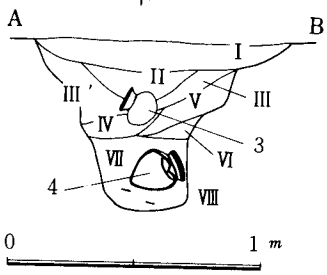
図E－7　溝3－a（E区）舟底状遺構出土土器(4)

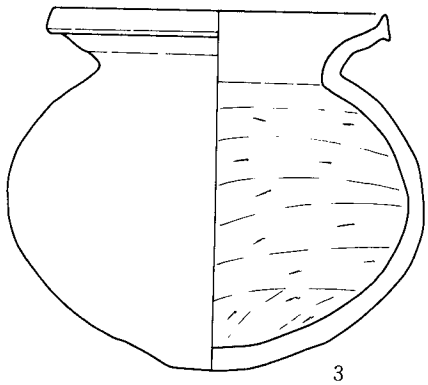


図E－8　E区溝3－a上層出土遺物実測図

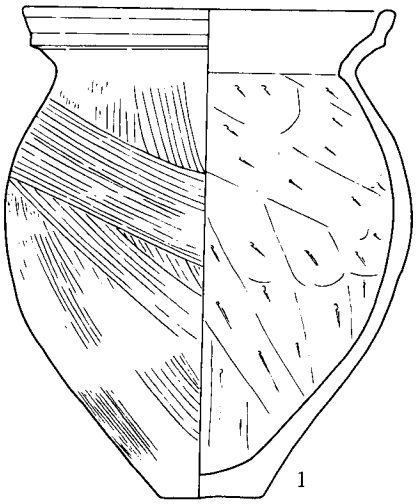


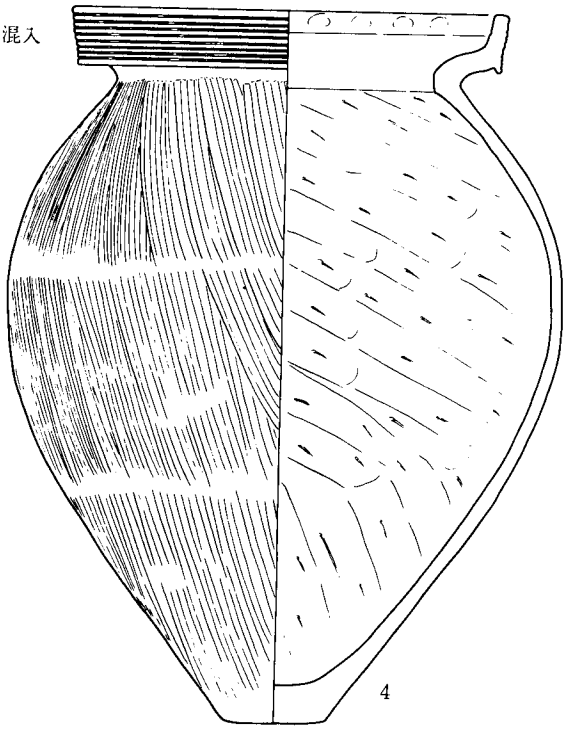






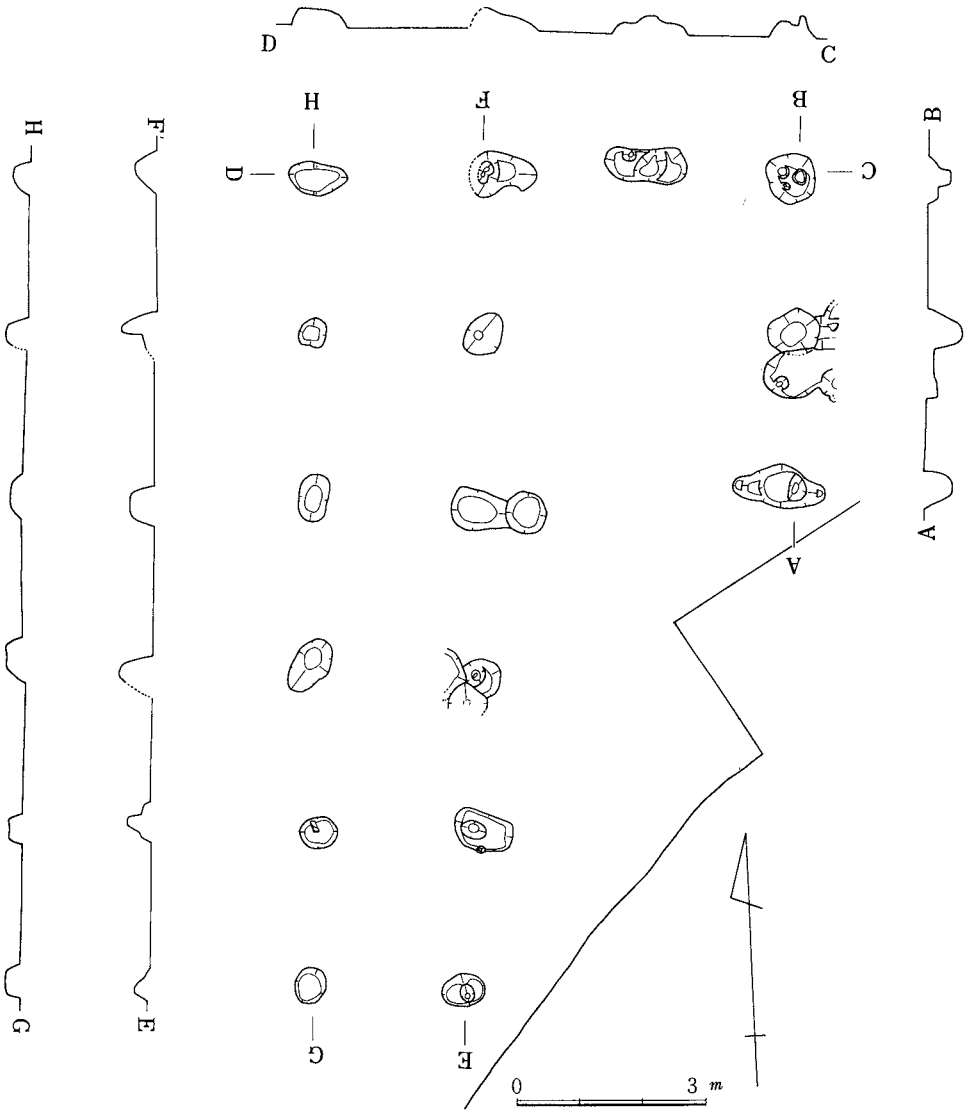
Ⅰ、黄茶褐色土
Ⅱ、黒褐色粘質土(炭化物混入)
Ⅲ、暗茶色粘質土(炭化物混入)に若干の黄褐色土混入
Ⅲ′、暗茶色粘質土に淡黄茶色粘質土混入
Ⅳ、暗茶色粘質土に淡黄茶色粘質土混入
Ⅴ、灰黄褐色粘質土
Ⅵ、茶色粘質土
Ⅶ、黄淡灰色粘質土
Ⅷ、地山



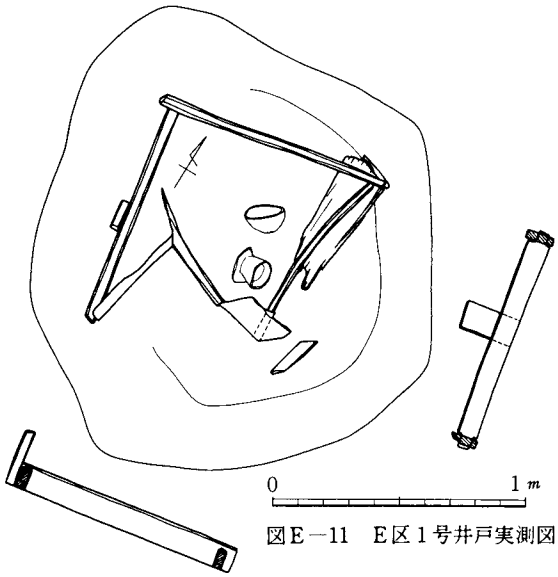


0 10cm

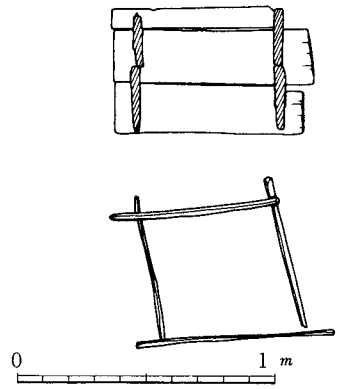
図E－9　E区303号土坑および出土土器実測図



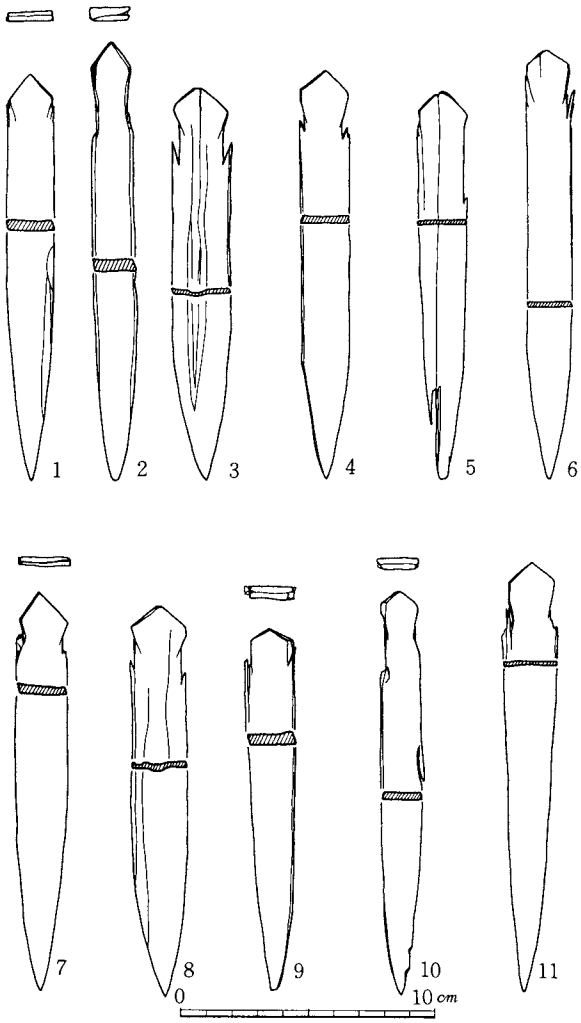
図E－10　12号建物実測図



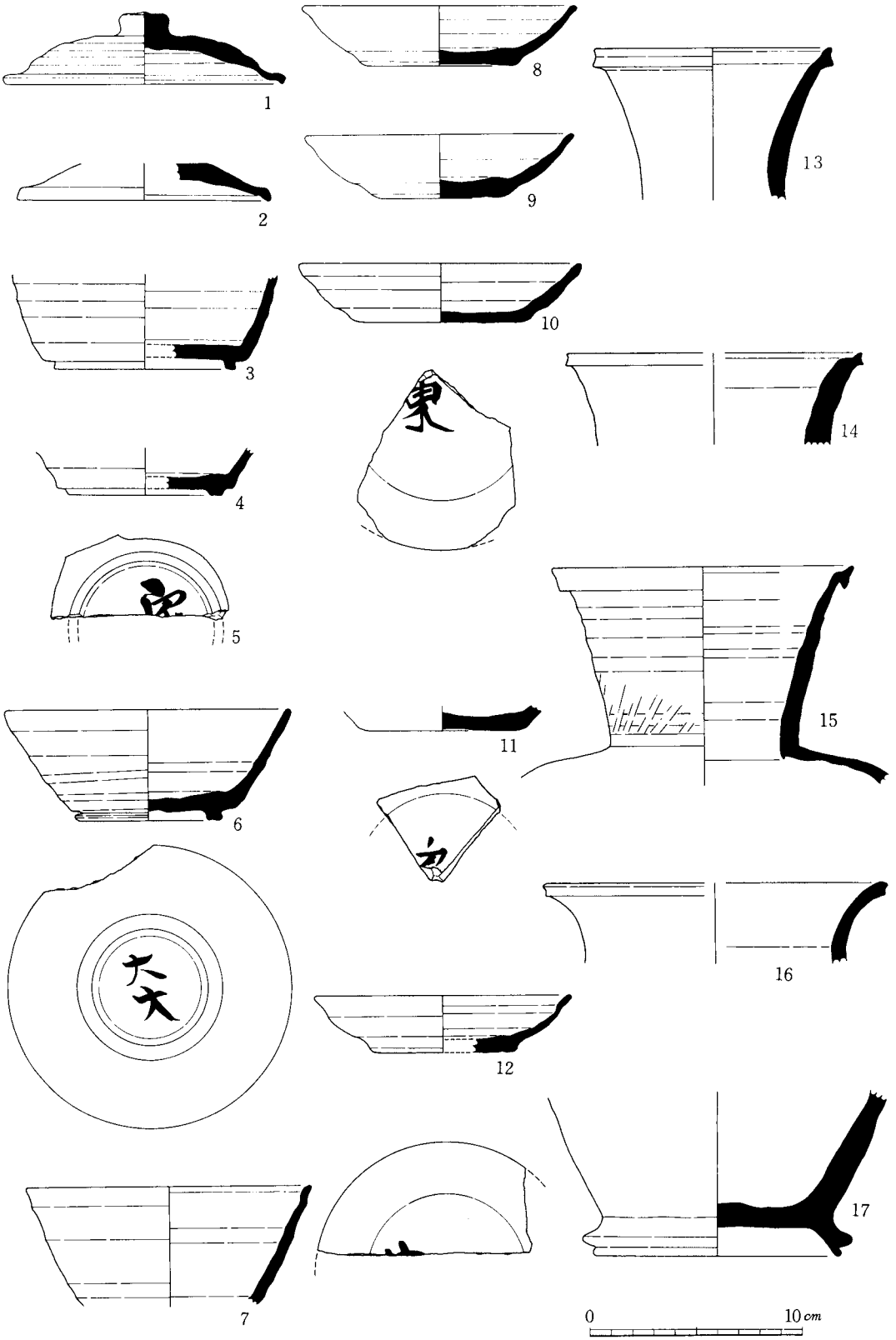
図E－11　E区1号井戸実測図



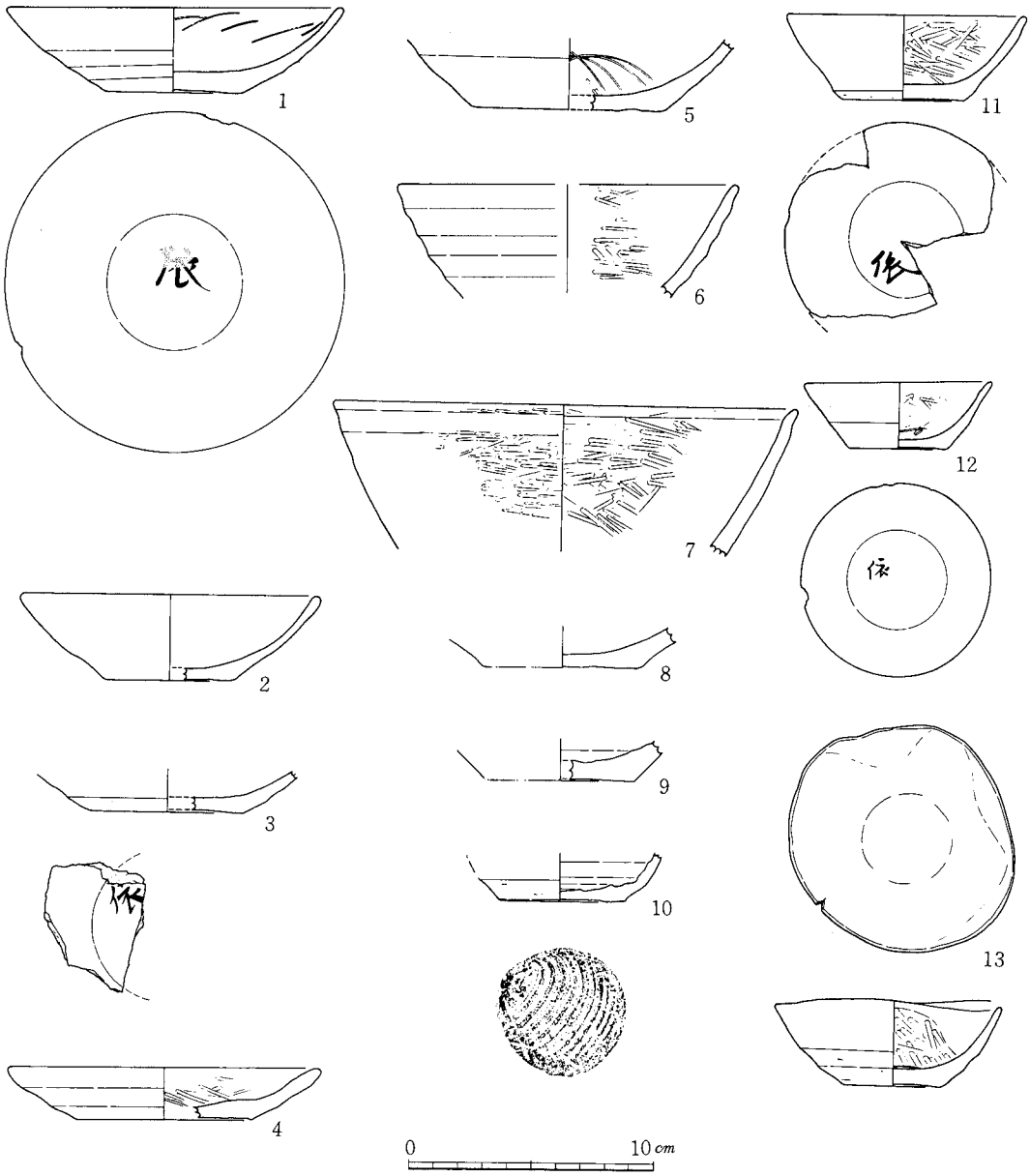
図E－12　E区2号井戸枠実測図



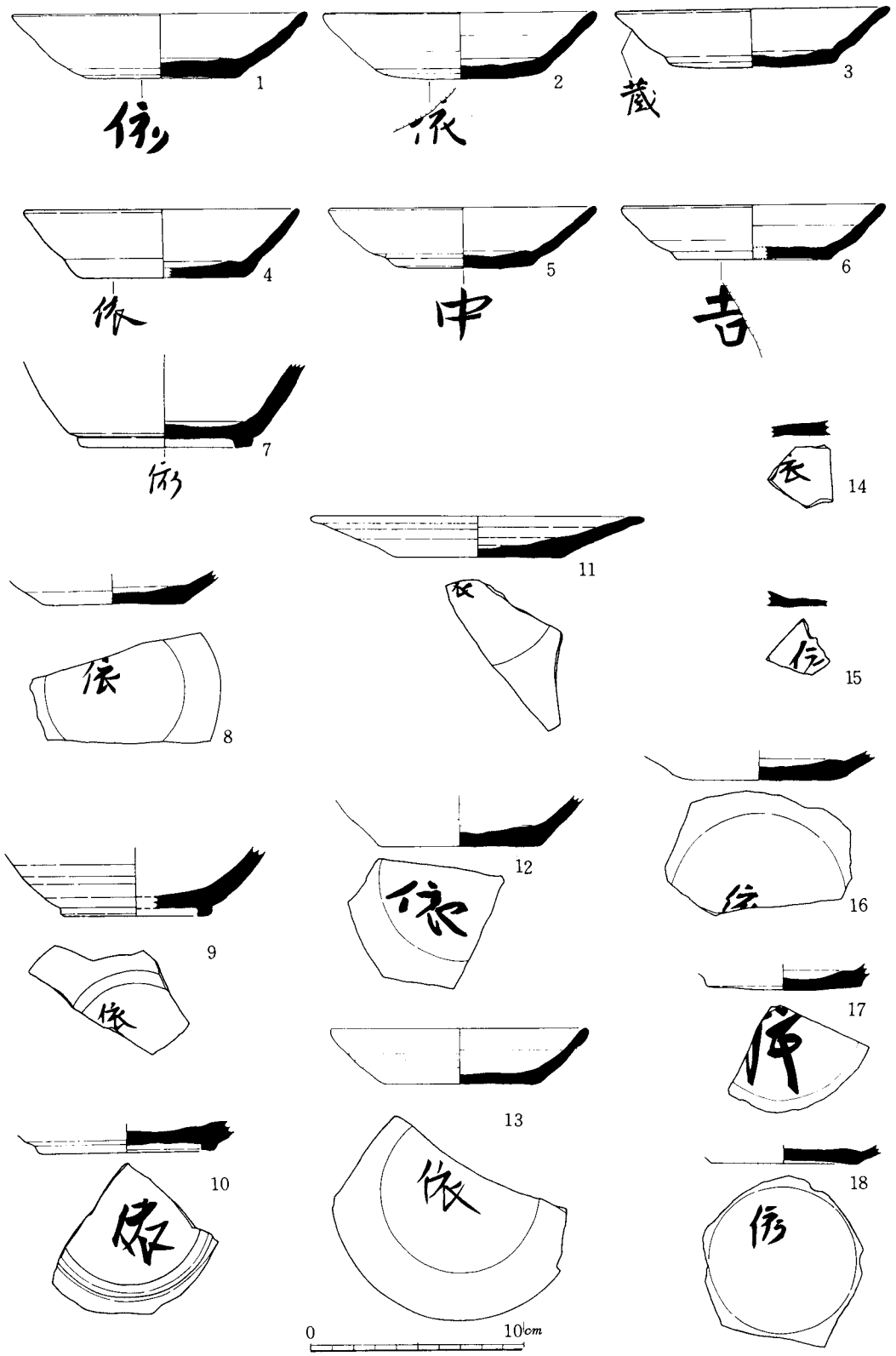
図E－11－2　E区1号井戸および出土斎串実測図



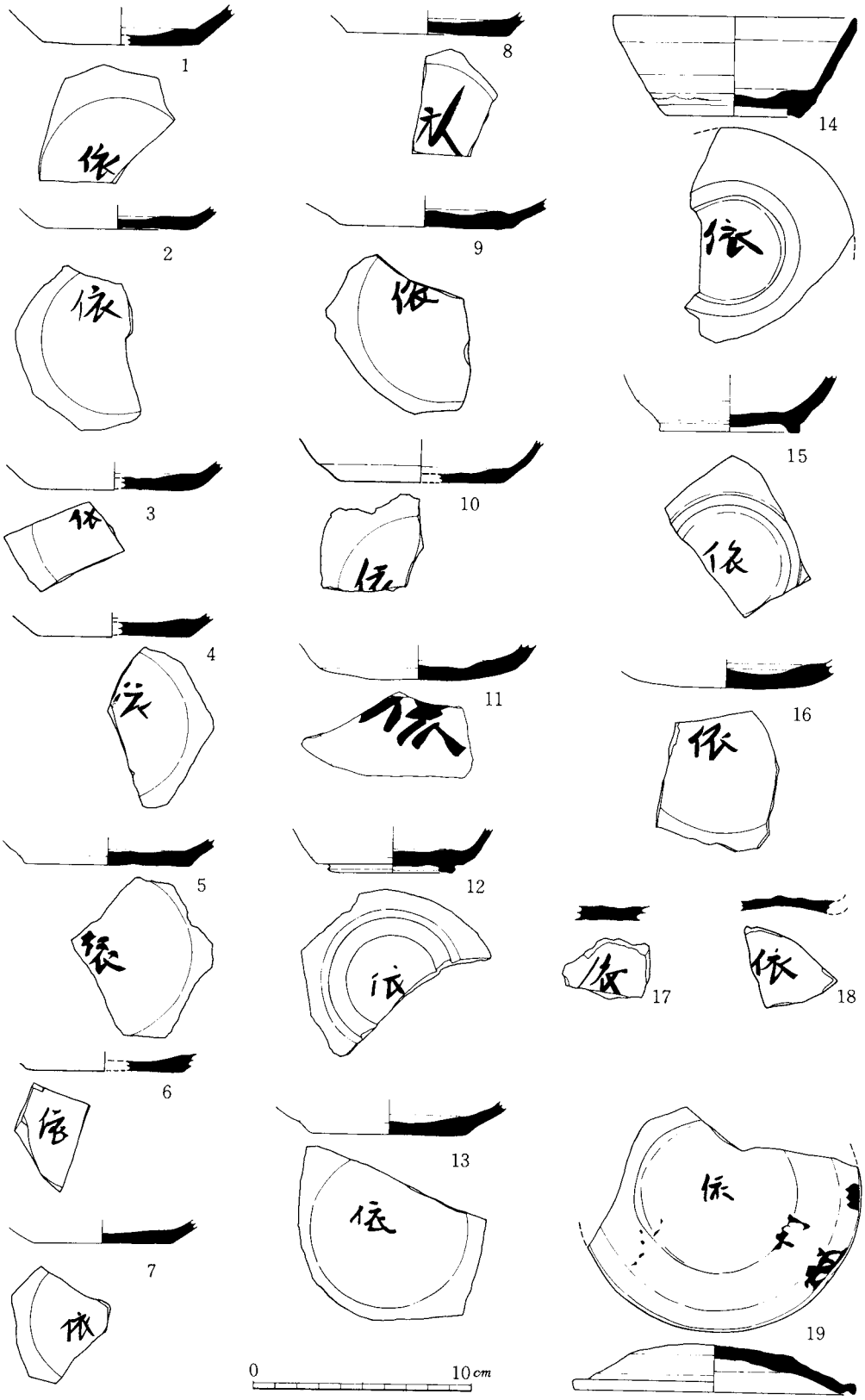
図E－13　E区1号井戸出土土器実測図(1)



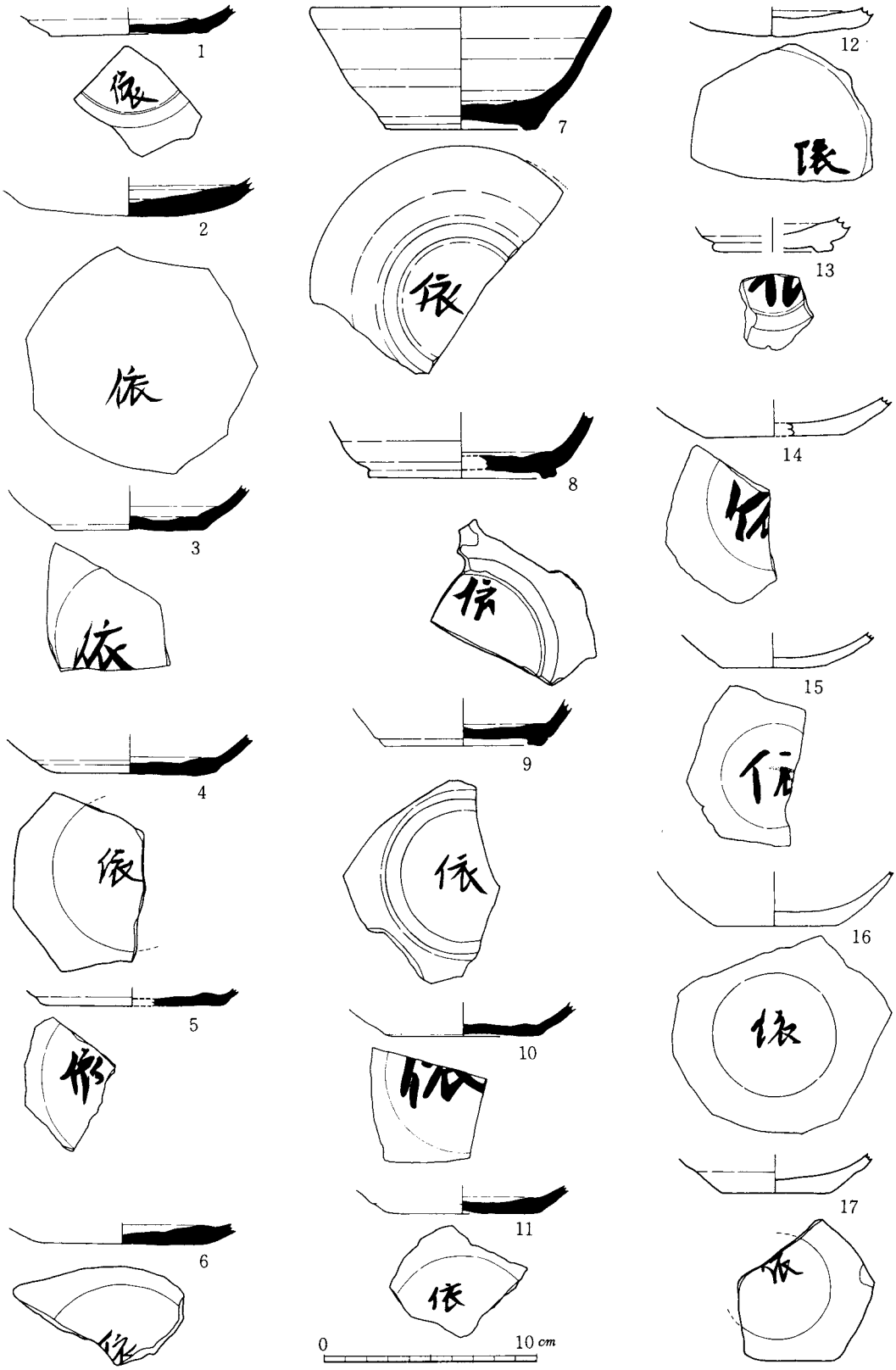
図E－14　E区2号井戸出土土器実測図(2)



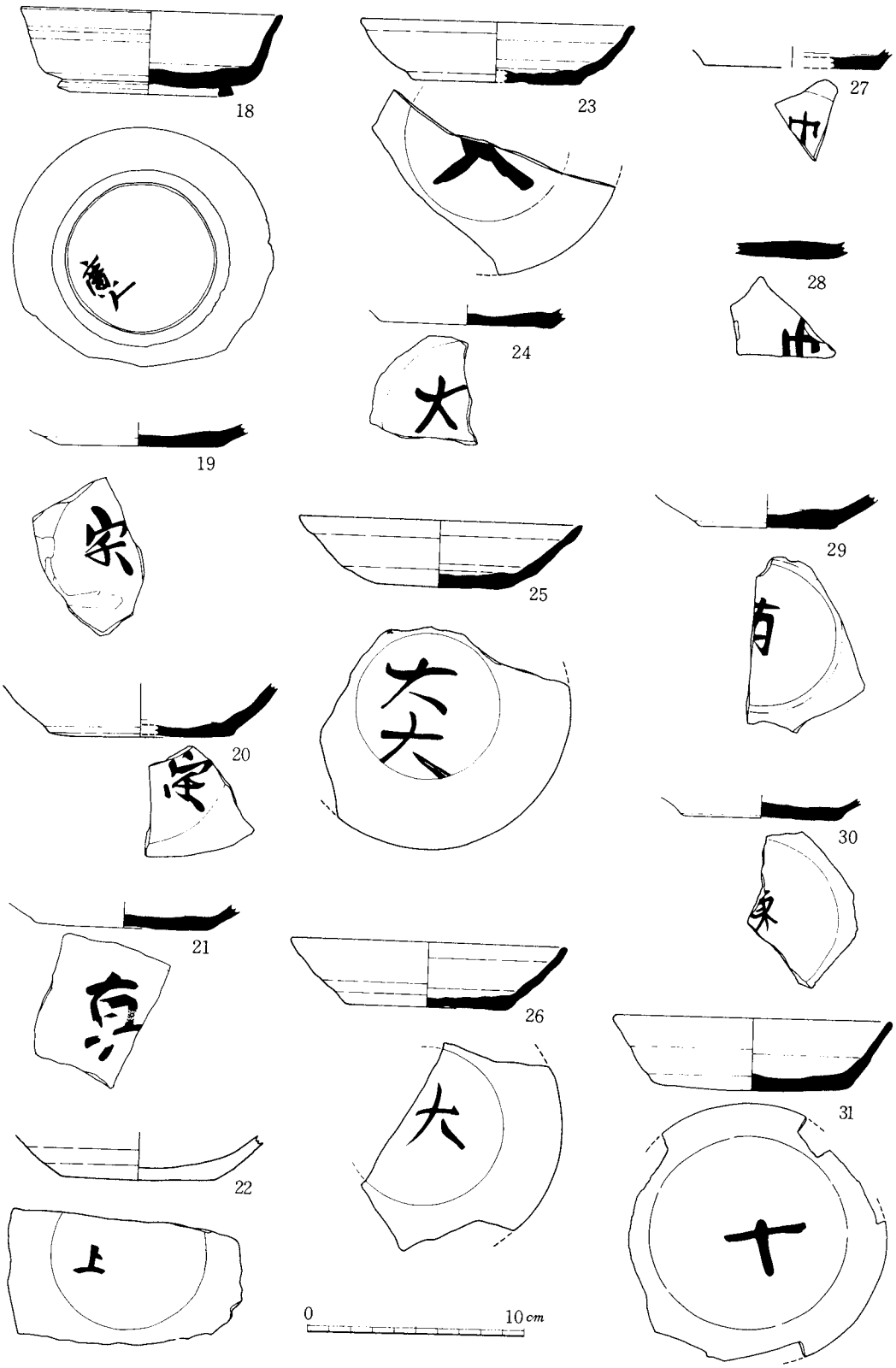
図E－15　D区・E区出土墨書土器(1)



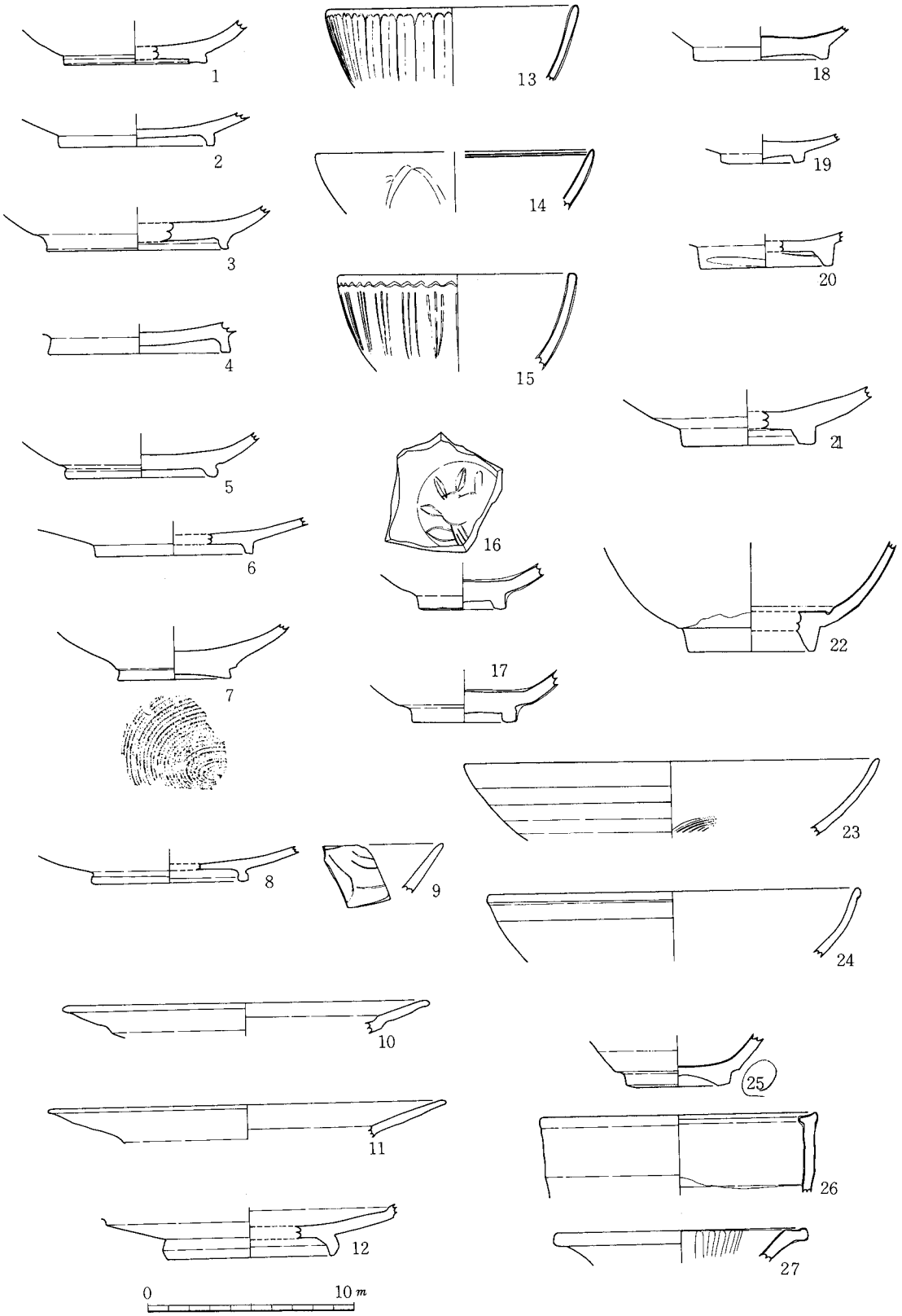
図E－16　D区・E区出土墨書土器(2)



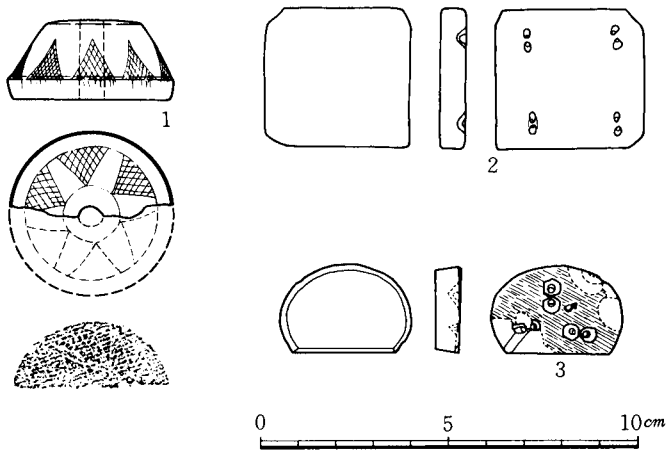
図E－17　D区・E区出土墨書土器(3)



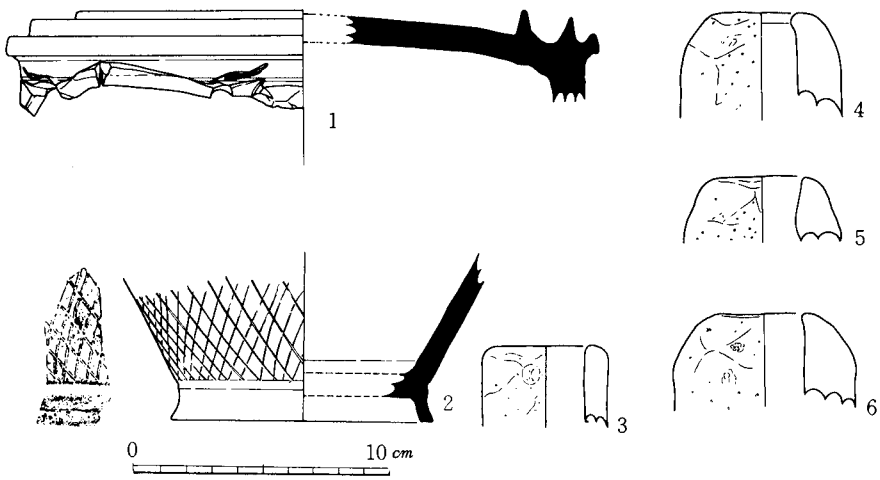
図E－18　D区・E区出土墨書土器(4)



図E－19　D区・E区出土・緑釉・灰釉・青磁・白磁・美濃・各施釉土器



図E－20　D区・E区出土遺物(1)



図E－21　D区・E区出土遺物(2)

第6節　F区の調査概要

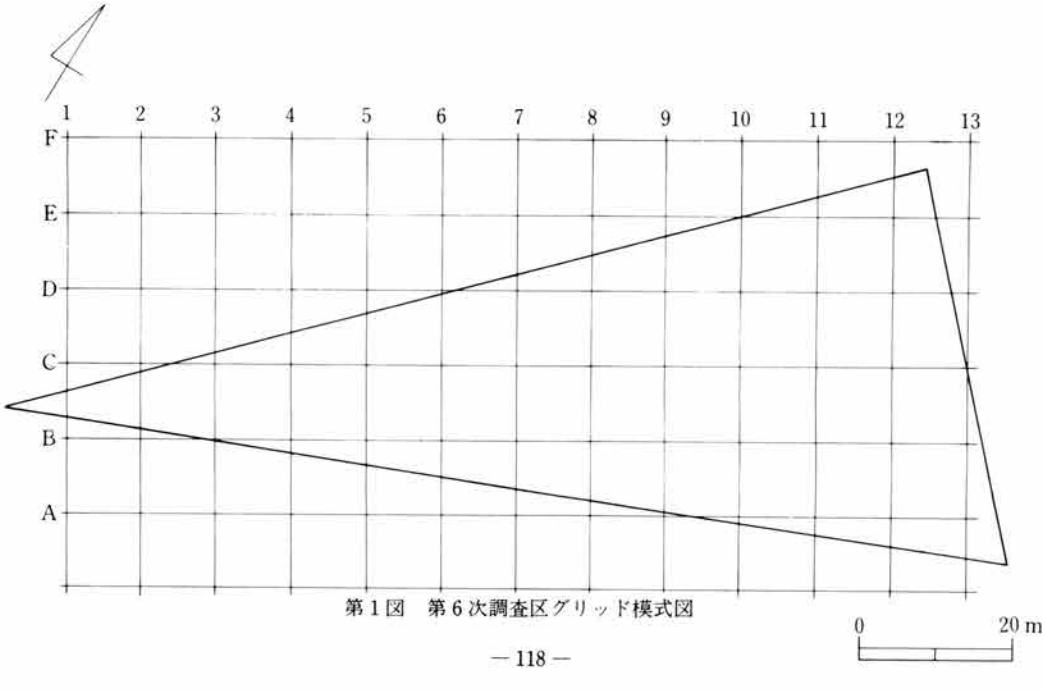
本年度の調査は、これまでの調査区の南側にあたる約3,400 m²を対象とした。弥生時代に比定されるものには、中期の柴山出村期の土坑をはじめ、後期の溝状遺構や土坑群が検出された。また、包含層中より遠賀川系土器片1点が出土し注目された。古墳時代では、前期の前方後方形周溝状遺構や後期の土坑などがあった。平安期では、前期から中期を中心とする掘立柱建物跡や井戸、溝状遺構などがあった。中世では、鎌倉期の井戸や室町期の溝状遺構が検出された。

出土品については、従来のように平安期のものが圧倒的に多く、多数の墨書土器や緑釉・灰釉陶器があり、本遺跡4点目の石帯、鏡片、和同開珎などの銅銭も出土している。

ところで、本年度の調査では航空写真測量が導入された。それによって、これまで調査員不足から冬期の悪条件下にまで及んでいた実測作業の能率化が計られ、また、遺跡の性格を知るうえで垂直写真が有効な活用資料となった。

第6次調査区

航空写真測量風景



第1図　第6次調査区グリッド模式図

第7節　主な遺構と遺物

1　掘立柱建物跡と柵

第12号建物跡（第2図、第10図1～11）　前年度に未調査部分を残していた大型建物跡である。梁行2間、桁行6間の身舎の西に廂をもつ南北棟である。身舎の規模は、梁行5m（柱間約2.5m）、桁行15.3m（柱間平均2.55m）を測り、床面積は76.5m²である。廂を含めた南・北柱列の長さは7.6mを測る。身舎の柱穴は、抜き取り穴との重複で1m前後の不整形なものとなっているが、もとは70cm程度の円形の掘方を呈していたとみられる。廂の柱穴は、50～70cmで身舎よりやや小形の不整円形である。主軸は、磁北に対して3°30″西にふれている。なお、南側柱列において、北側柱列の第2柱穴に対応するピットが確定できなかった。柱穴の掘方より若干の土器片が出土し、身舎内の南側に鏡片と丸鞆形の石帯が出土している。また、本建物跡の西には、斎串や大型獣骨が出土した井戸が隣接している。

第10図1の坏の底部に爪の跡がみられる。5は口径16.6cmの土師器の有台埦である。内面黒色で磨き調整を施した大振りの埦である。8は口径13.4cmの無台埦で、口縁部に漆が付着しており、胴部下半は不定方向のナデ調整がみられる。

第13号建物跡　調査区の西側C－3区にある。東側柱列1間と南側柱列2間分を検出したが、調査区の限界から全体規模は不明である。柱間は約2mで柱穴は径40～60cmの円形を呈し、柱痕跡は約20cmであった。

第14号建物跡（第3図）　第13号建物跡に近接するC－3区にある。梁行1間、桁行2間の東西棟である。梁行2.3mに桁行4.2m（柱間2.2m）を測り、床面積は10m²弱となる。柱穴は、30～50cmの円形の掘方を有している。主軸は第13号建物とほぼ同じで約17°西にふれている。

第15号建物跡　第14号建物跡の南に検出された。北側柱列3間分と西側柱列1間分を確認したが、全体規模は不明である。北側柱列の柱間は1.8～2mで、西側のそれは2.5mを測る。柱穴の掘方は25～30cmの円形を呈す。

第16号建物跡　第14号建物跡の東約6mのC－4区にある。建物跡の東は、近代の土坑状遺構や溝によって切られ規模は不明である。西側柱列は2間を有し、南・北柱列は1間分を検出した。ただし、対応する柱穴の等質性を無視すれば、東側に西側柱列の第2柱穴に対応する小ピットがあり、梁行1間に桁行2間の南北棟として完結する可能性もある。しかし、本建物跡の柱穴は径が80cm前後の円形を呈する比較的大形の掘方を有し、柱穴の底には根固め石を配する特徴があるので、2間×1間の南北棟とした場合、東側柱列の第2柱穴となる小ピットは、径が40cmと小形で配石もなくやや異質である。したがって、東側柱列を完結させるについては消極的である。西側柱列の柱間は3.4m、南・北柱列は4mと広い。主軸は第13・14号にほぼ等しい。付近から石帯が出土している。

第17号建物跡（第4図）　第12号建物跡と重複するD－8・E－8区にある。梁行2間、桁行3間の南北棟である。梁行7.25m（柱間約2.4m）に桁行5m（柱間平均2.5m）で、床面積

は 36 m²を測る。東・西柱列のピットの対応にややずれが認められ、ゆがみのある建物跡である。柱穴は径約 60 cm の円径を有し、主軸は約 5°西にふれている。

第 18 号建物跡（第 5 図、第 10 図 12～18）　第 12 号建物跡の東 2.5 mに並置された建物跡。梁行 2 間、桁行 3 間の南北棟である。梁行 4.8 m（柱間 2.4 m）に桁行 6.6 m（柱間 2.2 m）で、床面積は約 32 m²である。柱穴は径が 40～60 cm の円径を呈し、一部には径が 20 cm 程の柱根を残す。北側柱列東第 1 柱穴より、第10 図12 の「上」と記された墨書土器が出土している。

第 19 号建物跡（第 6 図）　第 18 号建物跡の南約 10 mのC－8 区にある。梁行 2 間、桁行 4 間の南北棟である。規模は梁行 4.9 m（柱間 2.45 m）に桁行 8.7 m（柱間は約 2.2 m）で、床面積は約 43 m²を測る。主軸方位は、第 17･18 号と同じく約 5°西にふれている。柱穴は 50～60 cm の円形を基本とするが、方形に近いものもみられる。

第 20 号建物跡（第 7 図）　第 19 号建物跡の南約 5 mのB－8 区にある。梁行 2 間、桁行 3 間の東西棟である。梁行 5 m（柱間 2.5 m）に桁行 6 m（柱間約 2 m）で、床面積は 30 m²を測る。柱穴は、一辺が 50～60 cm の方形の掘方を有し、径が約 20 cm の柱根跡がみられた。主軸は約 5°西にふれている。

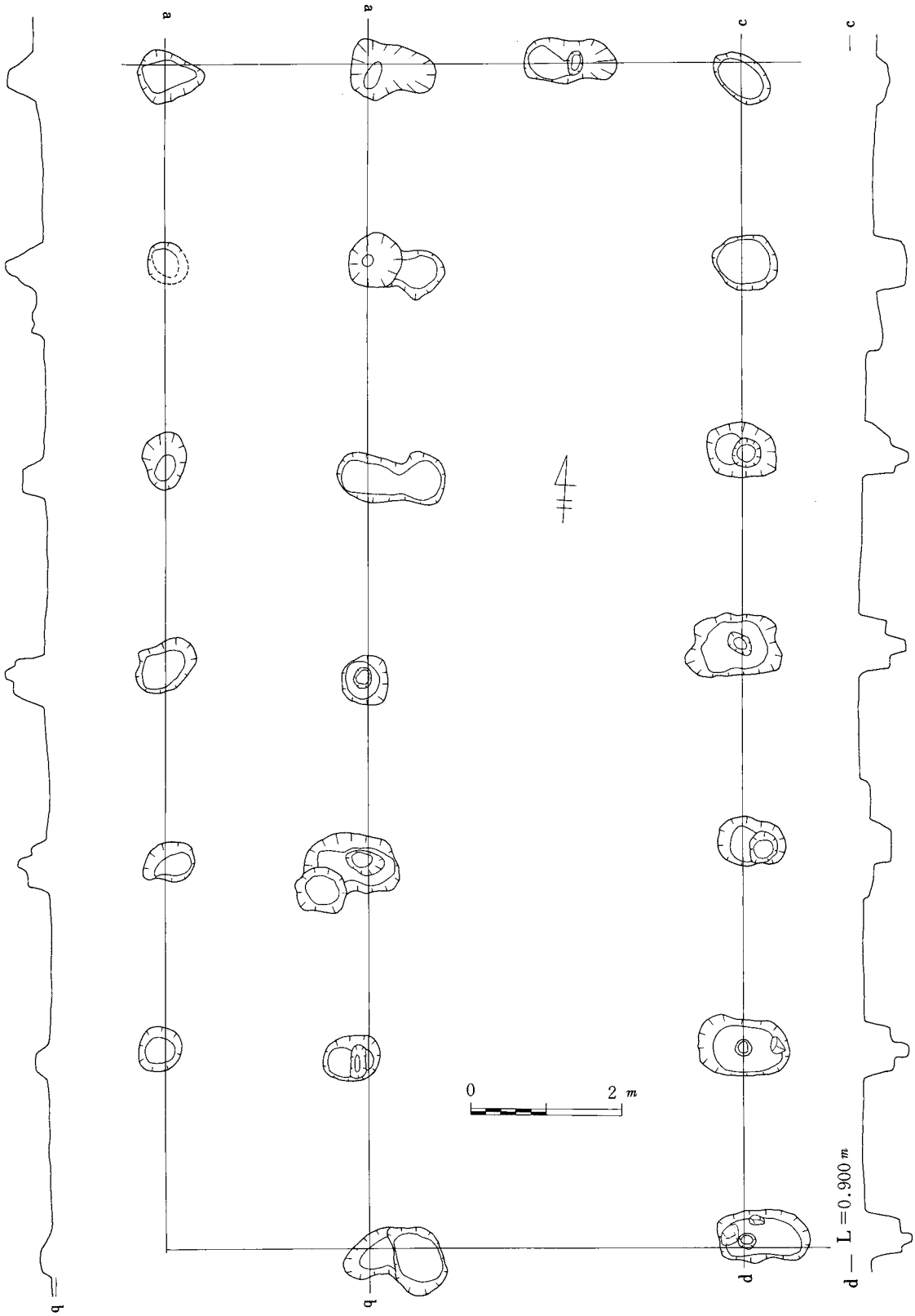
第 21 号建物跡（第 8 図）　第 19 号建物跡と重複する。梁行 2 間、桁行 3 間の南北棟である。梁行 4.8 m（柱間 2.4 m）に桁行 6.4 m（柱間平均 2.1 m）を測り、床面積は約 30 m²である。柱穴は一辺が約 50～60 cm の方形の掘方を有し、約 20 cm の柱根跡がみられた。西側柱列の北第 2 柱穴の掘方より、和同開珎などの銅銭 3 点が出土しており、構築時の埋納とみられた。主軸は約 7°西にふれている。ピットの切り合い関係から第 19 号建物跡に先行するとみられる。

第 22 号建物跡（第 9 図、第 10 図 19）　第 18 号建物の北東に隣接する総柱の建物跡である。梁行 2 間、桁行 2 間の南北棟である。梁行 4.6 m（柱間 2.3 m）に桁行 5.6 m（柱間平均 2.8 m）を測り、床面積は約 26 m²である。主軸は 8°西にふれている。柱穴は、50～70 cm の隅丸方形に近い掘方を有する。西側柱列は第 25 号溝と重複しており、第 2 柱穴は検出できなかった。第10図 19 の「依」と記された墨書大器が出土している。

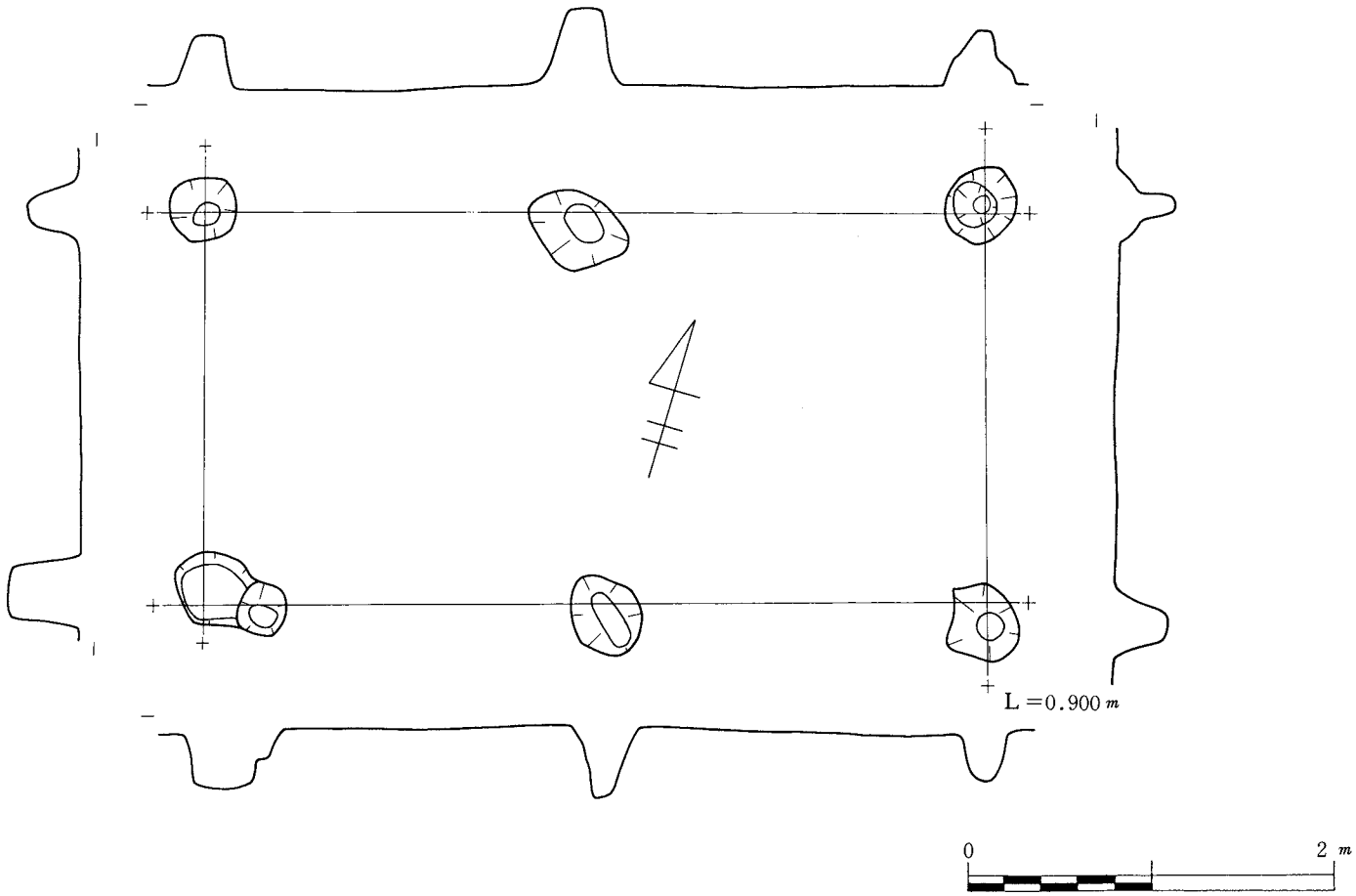
柵列　調査区の西に検出された。径が 20～40 cm の不整形な円形の掘方を南北に配している。柱間は 1 m前後であるが一律でない。

小結　本年度の調査では、11 棟の建物跡と 1 列の柵が確認できた。しかし、調査区域の狭い地点での規模不明の建物も含んでいるので、実態が把握し得たのは 8 棟であった。時期は、掘方の出土土器よりみて、吉岡康暢氏の奈良平安時代土器編年(註1)のⅣ期後半からⅤ期前半にまたがるとみられ、9 世紀末から 10 世紀頃と考えられる。西側の規模不明な一群をのぞく主な建物跡は、主軸を磁北に対して 5°前後西においており、一定の規格性を窺うことができる。第 12 号の大型建物跡をとりまく一群では、少なくとも二期の推移があったとみられる。予測的ではあるが、第 17･18･21 号建物跡が併存した一時期と、第 12･19･20･22 号建物跡が併存する一時期が考えられる。それに、西側の不規則な一群を加わえると、全体として三期の推移をみることができる。西側の一群については、井戸跡との対応から１１世紀頃まで下るものと考えられた。（戸淵）

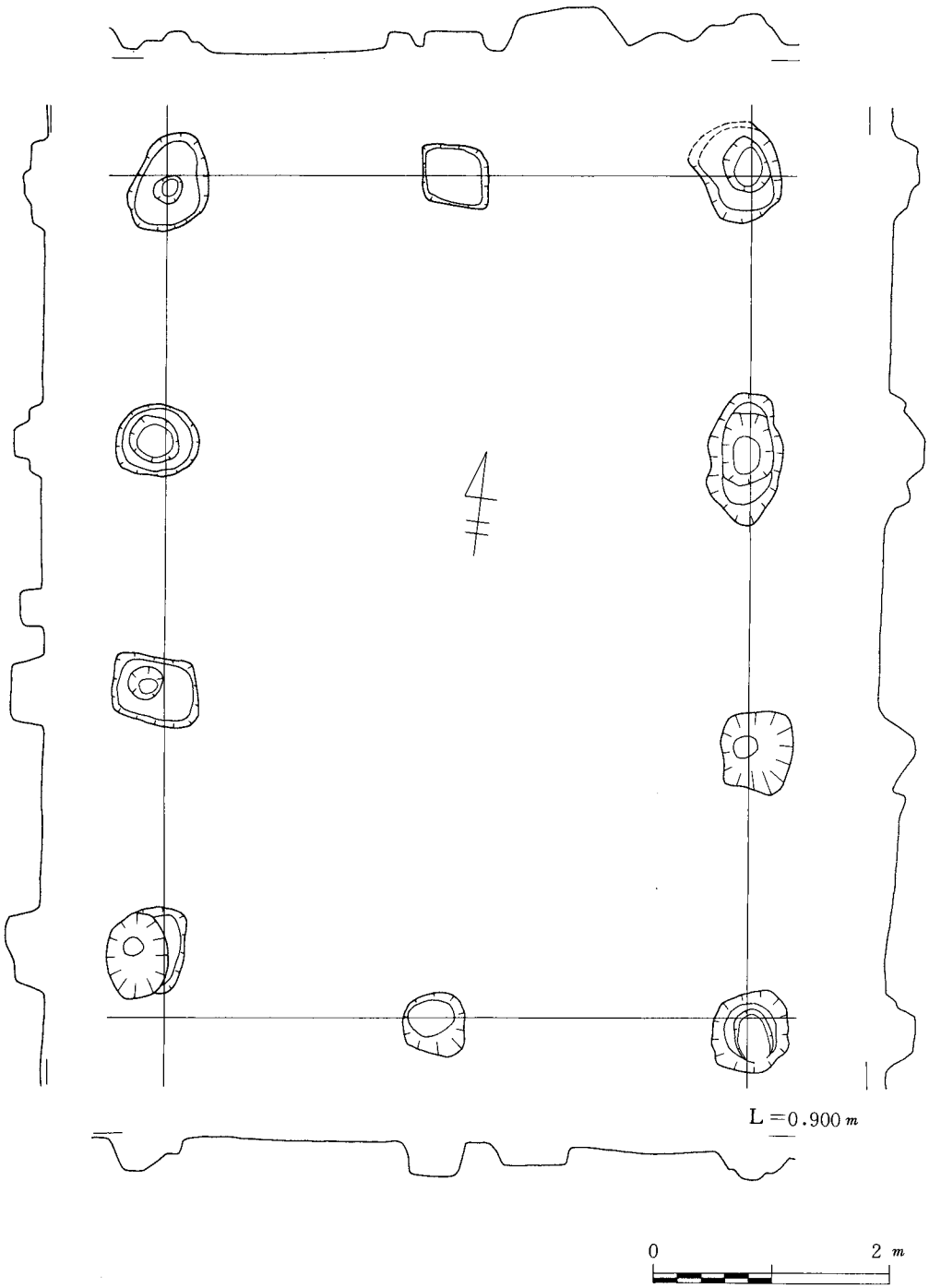
（註１）　吉岡康暢「奈良平安時代の土器編年」（『東大寺領横江庄遺跡』・1983 年）



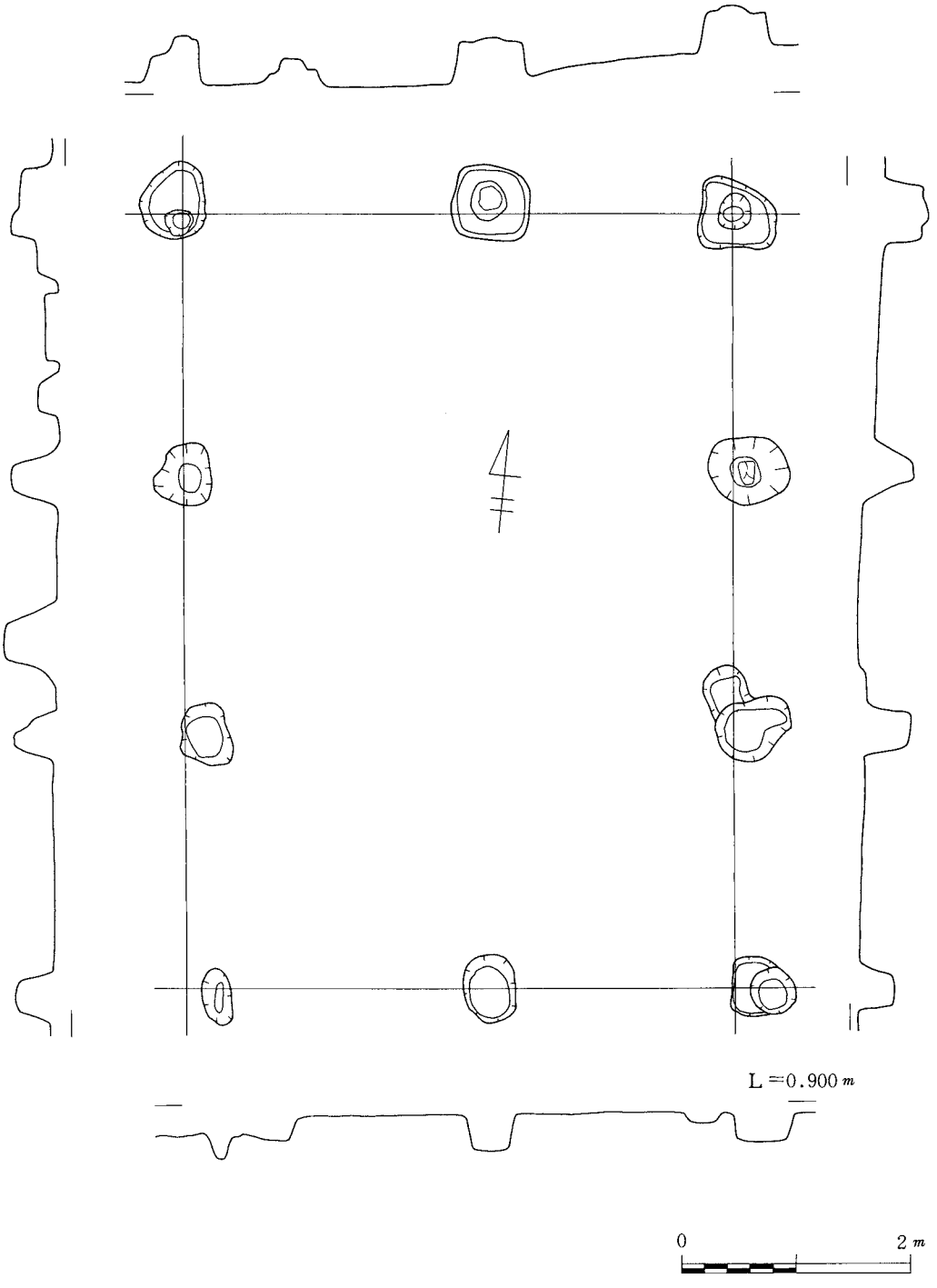
第２図　第12号掘立柱建物跡（S 1/80）



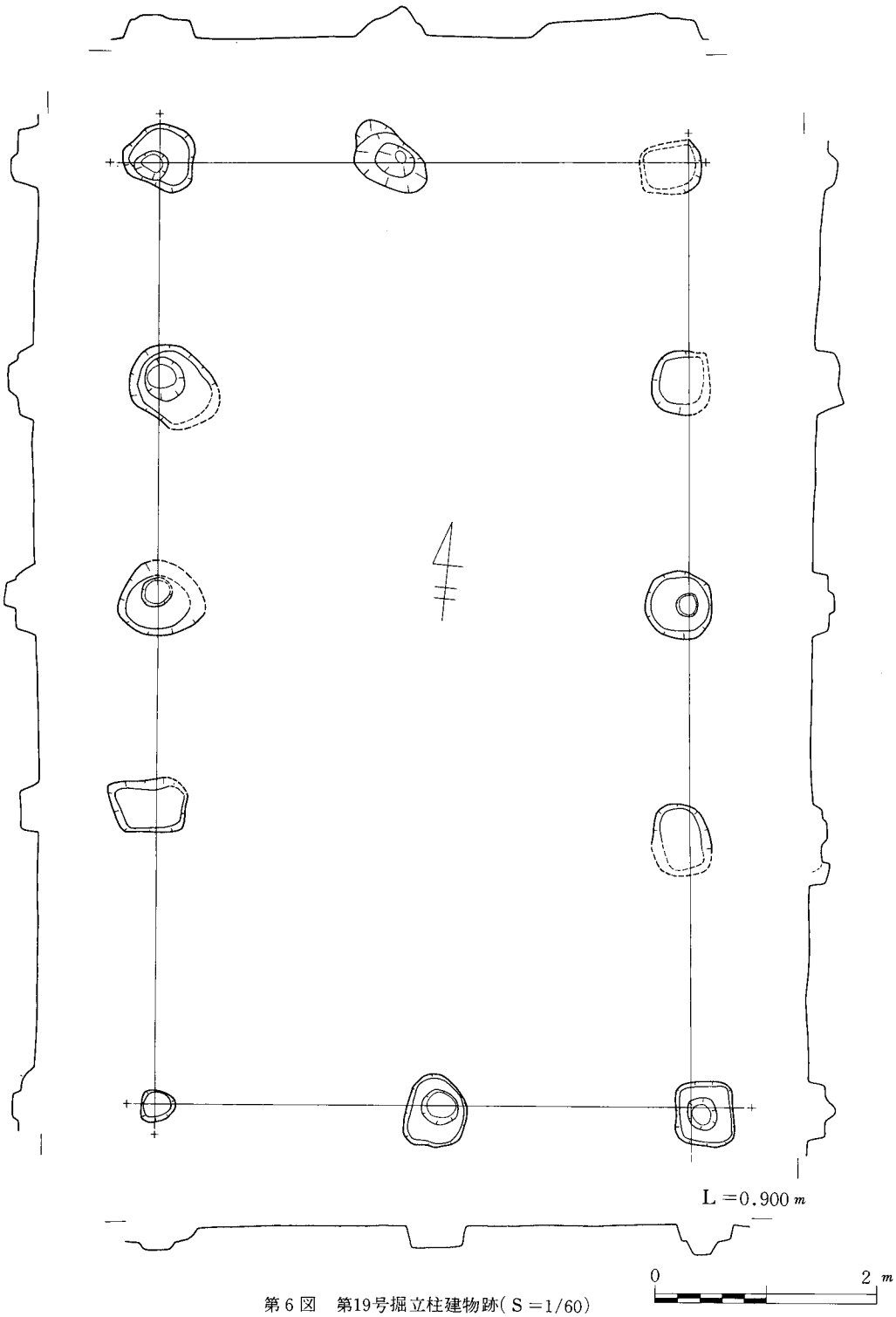
第３図　第14号掘立柱建物跡（Ｓ＝1/40）



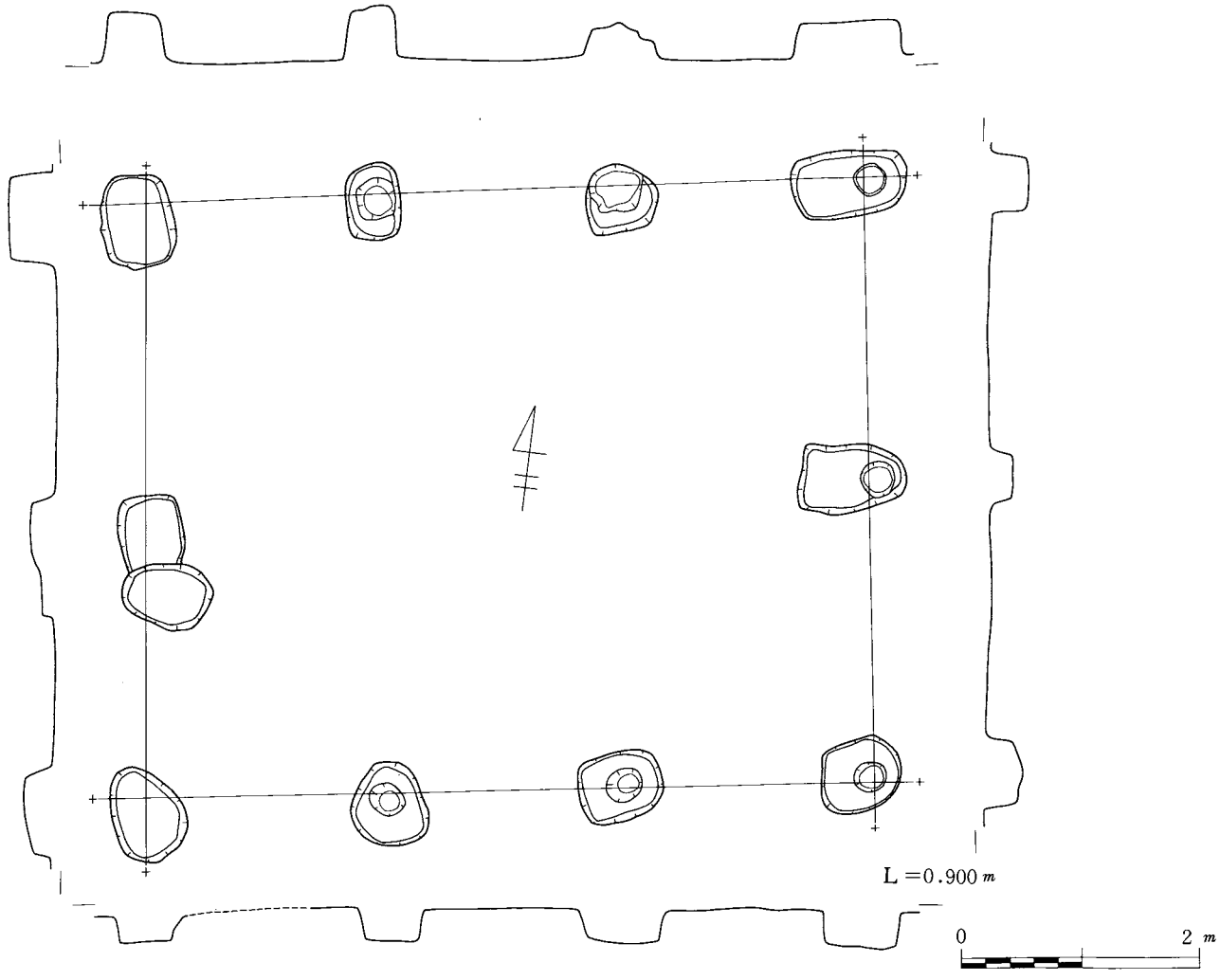
第４図　第17号掘立柱建物跡（Ｓ＝1/60）



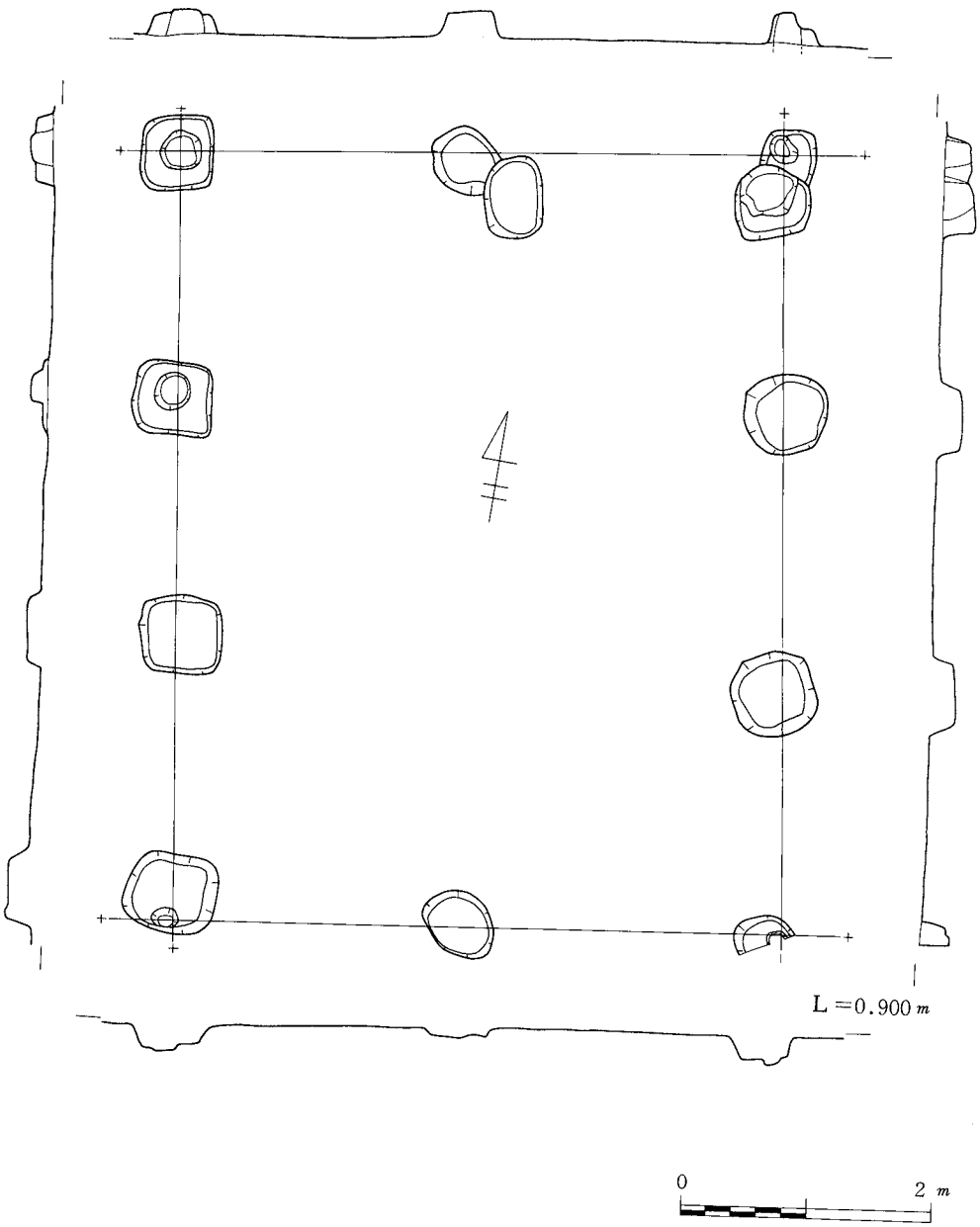
第５図　第18号掘立柱建物跡（Ｓ＝1/60）



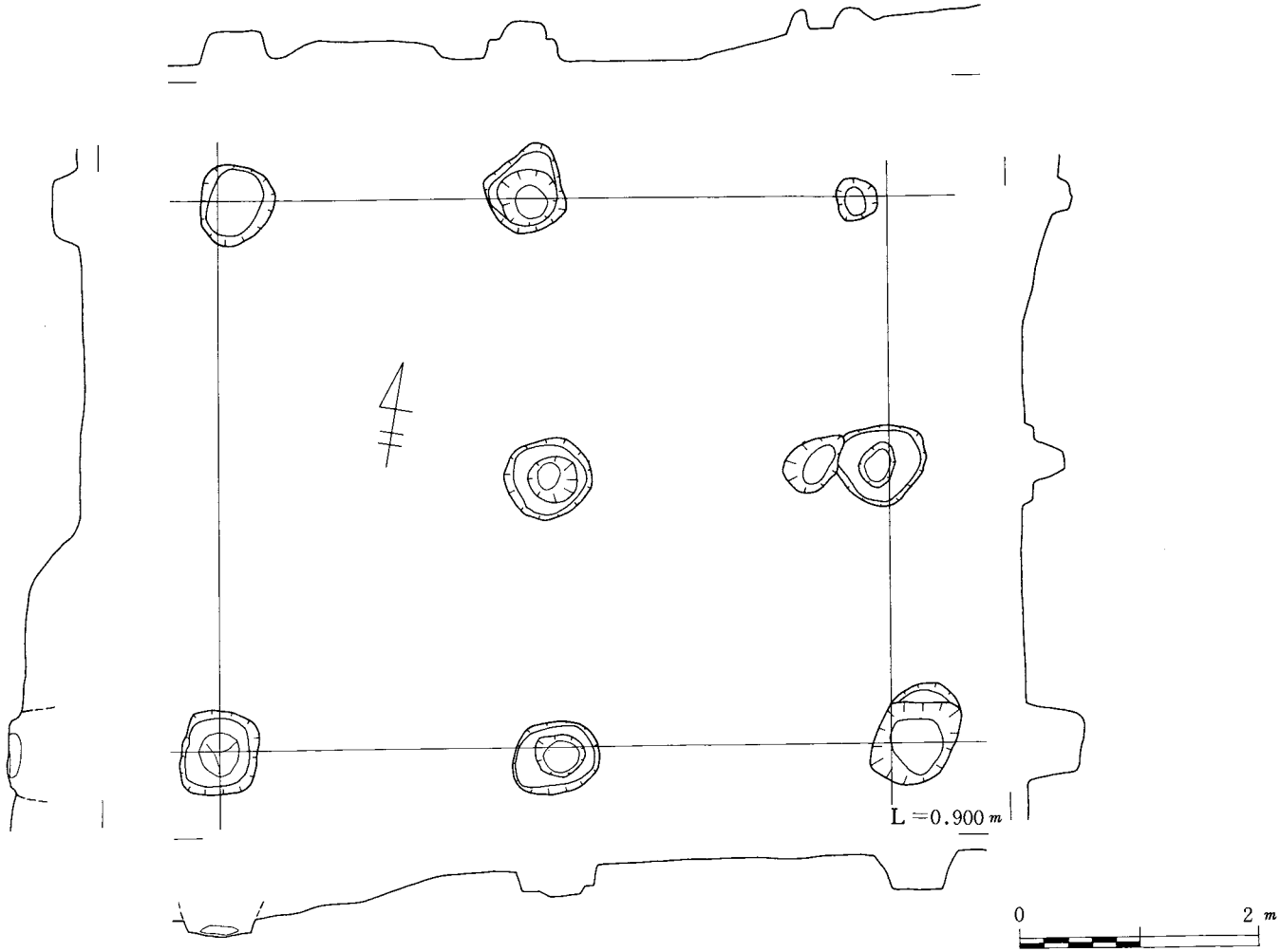
第６図　第19号掘立柱建物跡（Ｓ＝1/60）



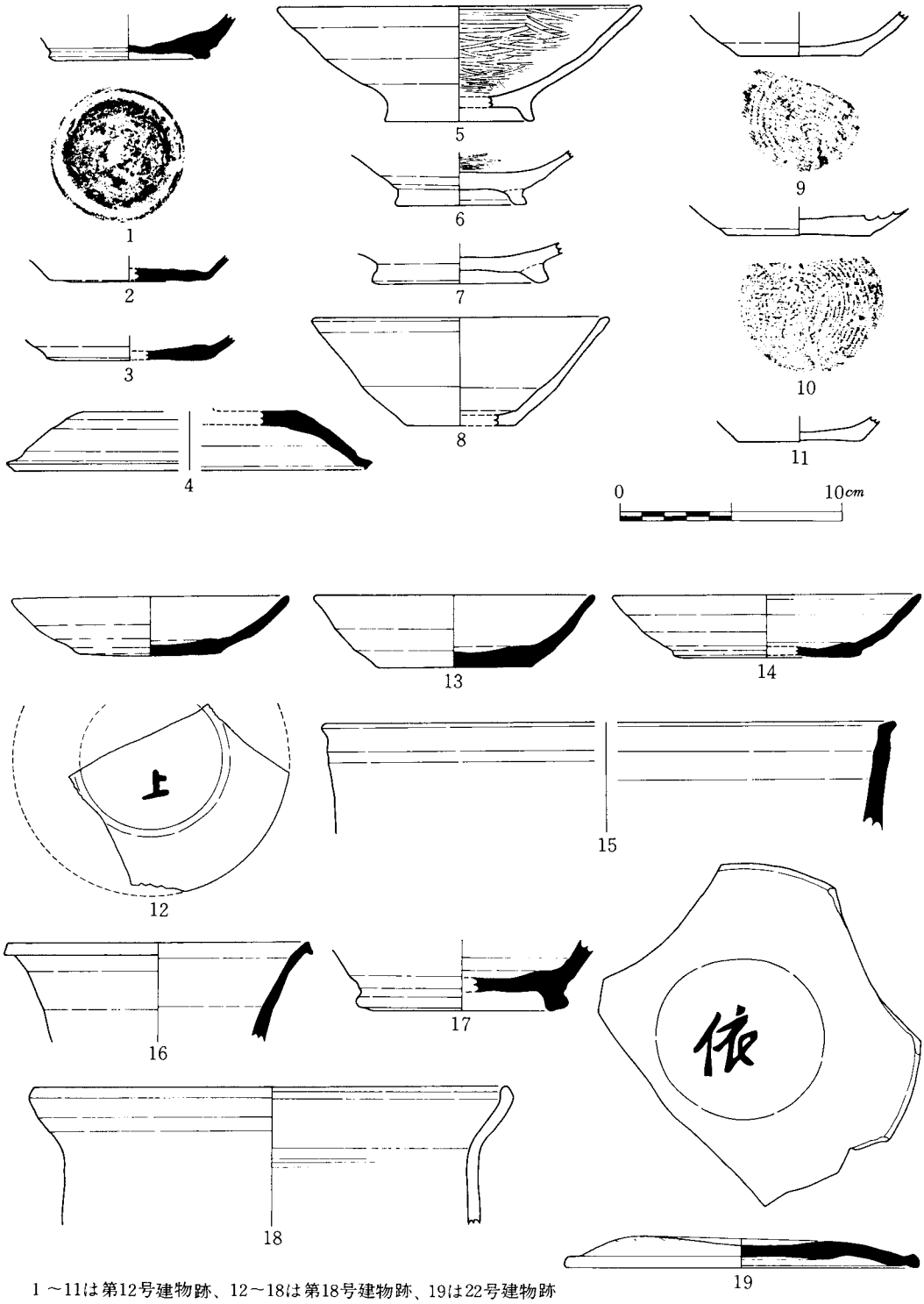
第７図　第20号掘立柱建物跡（Ｓ＝1/60）



第８図　第21号掘立柱建物跡（Ｓ＝1/60）



第９図　第22号掘立柱建物跡（Ｓ＝1/60）



1～11は第12号建物跡、12～18は第18号建物跡、19は22号建物跡

第10図　掘立柱建物跡柱穴掘方出土土器（S＝1/3）

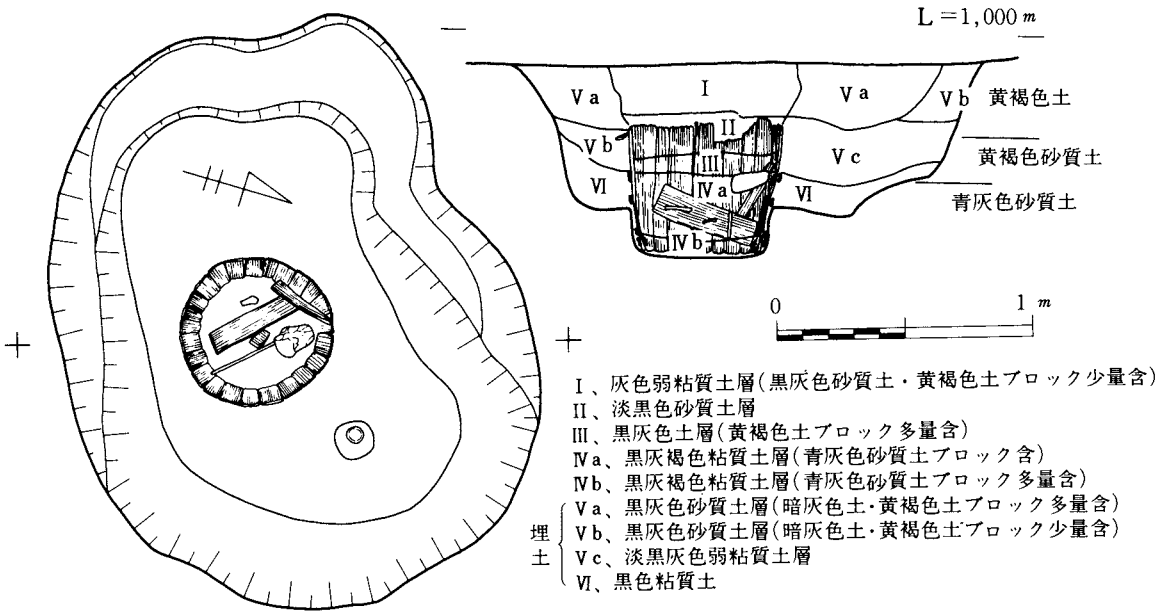
2 井　戸

第1号井戸（第11・13図）　円形桶側型井側をもつ鎌倉末期の井戸である。掘方は2.3×1.8 mの平面プランがほぼ楕円形を呈し、深さは57 cmを測る。井側は、第15図に一部を図示したような残存長50 cm前後、幅6～9 cm、厚さ約1 cmを測る板材を24枚円形に組み合わせ、井側中位から下位にかけて計4本の箍（たが）をはめたものである。内径44（下位）～58 cm（上位）を測る桶の転用である。井戸の最深部は深さ75 cm（L＝0.13 m）を測り、青灰色砂質土に達している。掘方の北東地山直上から、黒地に朱色の文様を施した漆塗りの木製椀が出土したが、ここでは図示し得なかった。井側内からは珠洲焼の擂鉢・土師質土器の破片が出土している。土層は埋土（V・VI層）と井側内覆土（I～IV層）が判別し得た。特にI層は、今回の調査で中世の遺構覆土に一般的にみられた灰色性を基調としている。

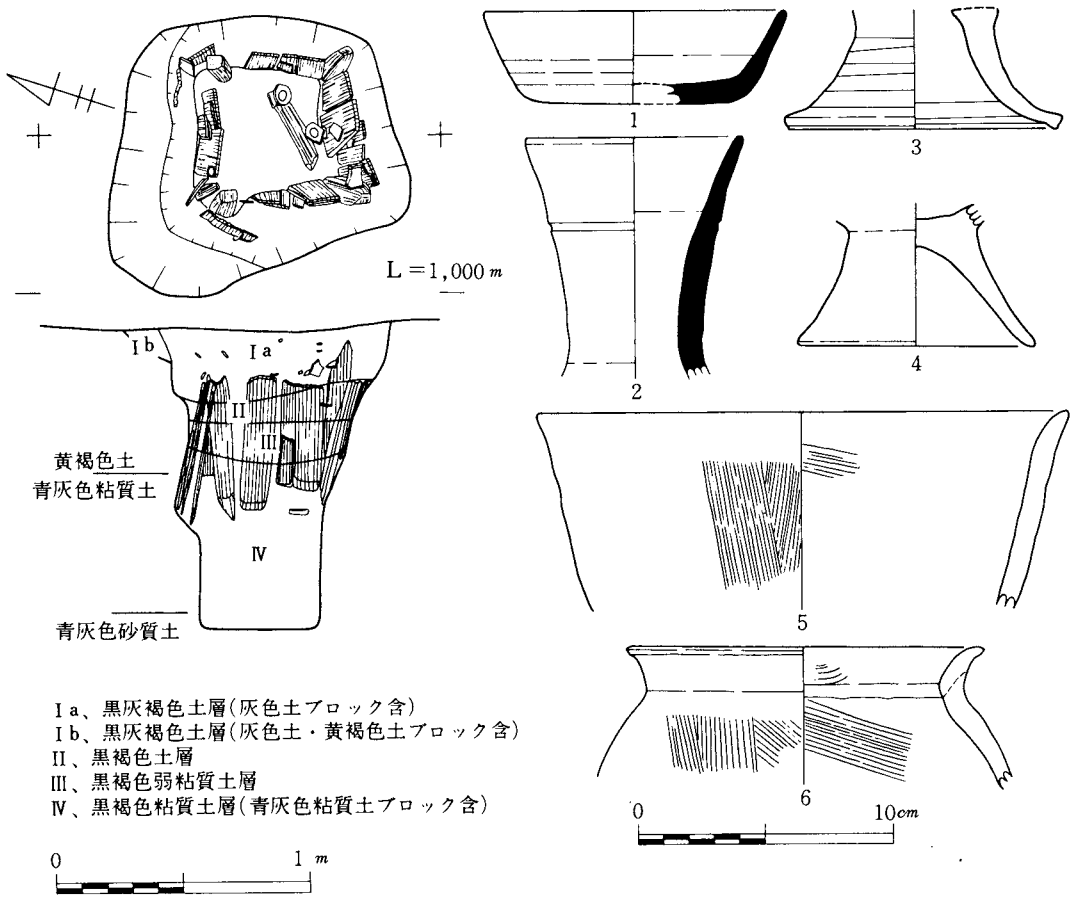
第2号井戸（第12・14図）　方形隅柱型をもつ奈良時代前半の井戸である。掘方は北西側が二段掘状に広げられているものの、平面プランは一辺が70～90 cmのほぼ方形と考えられる。井側は、7～8 cm角で残存長60 cmを測る隅柱と、残存長60 cm弱、幅8～20 cm、厚さ約2 cmを測る側板からなり、内側で一辺約50 cmを測る。隅柱には横桟を挿入したような痕跡はなく、井戸内からも横桟と考えられるような木製遺物も出土していないため、方形隅柱横桟型井側をもつ井戸とは異なる構造を有すると考えられる。これに対して、隅柱の下端部は第14図1のように、杭状に削り出してあり、側板の下端部も同図2～4のように斜めにカットされており、ともに打ち込みに適したような形状を有している。側板は2～4枚重複して検出された個所があり、外側の地山にくい込んでいる側板などは、遺存状態が悪く取りあげられないものが多かった。井側の下端までの深さは75 cmを測るが、井戸本体はさらに43 cm下り（L＝－0.33 m）、青灰色砂質土に達している。遺物は主としてI層から出土したが、量的には少ない。そのなかで、須恵器坏1点、同瓶1点、土師器高坏2点、同甕2点を実測し得た。

第3号井戸（第15～17図）　方形隅柱横桟型井側の井戸である。掘方は、2.35×2.65 mの隅丸方形を呈する。井側は、残存長120 cm前後を測る隅柱と、残存長1 m前後で幅15～20 cmに厚さ約2 cmを測る側板、および5×8 cm角で長さ130 cmを測る横桟などからなり、内側で1辺70 cm前後を測る。抜きとりのためか東側の井側が検出できず、土圧によって傾き倒れている側面もあり、完全には復し得ない。井戸最深部は深さ130 cm（L＝－0.57 m）を測り、青灰色粗砂層に通している。出土遺物は、土師器の埦を主体とし微量の須恵器片、木製遺物、自然遺物などがあり、主に下層のVa層から出土した。第17図1～8は土師器の無台埦である。1・2は小形の埦で、とくに1は9.4 cmと小振りである。3～8は口径12～13 cmを測る大振りのものである。これらの土器は、三浦上層期併行とみられ、11世紀頃と考えられる。

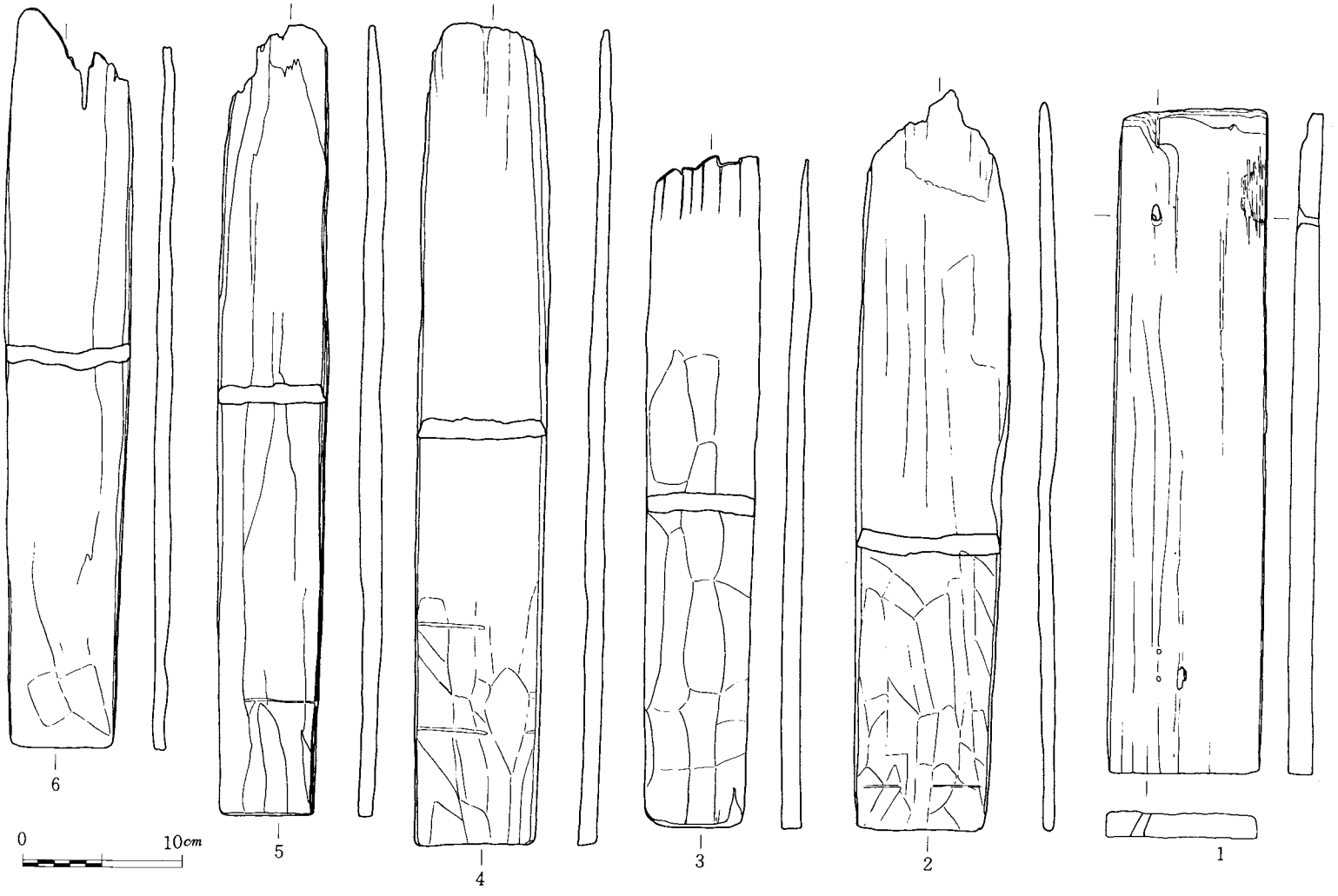
第4号井戸（第18・20図、第21図1～17）　第4号井戸は、井筒の構造という点からみると累積井筒の一種である。掘方は、直径約2.25 mのほぼ円形を呈し、深さ57 cmを測る。井筒下段は長さ60～70 cm、幅10～25 cm、厚さ約4 cmを測る板材を8枚セイロ組状（内側で一辺40～60 cm）に組み合わせ、同上段は残存長50 cm前後、幅8～15 cm、厚さ約2 cmを測る縦板を多角形



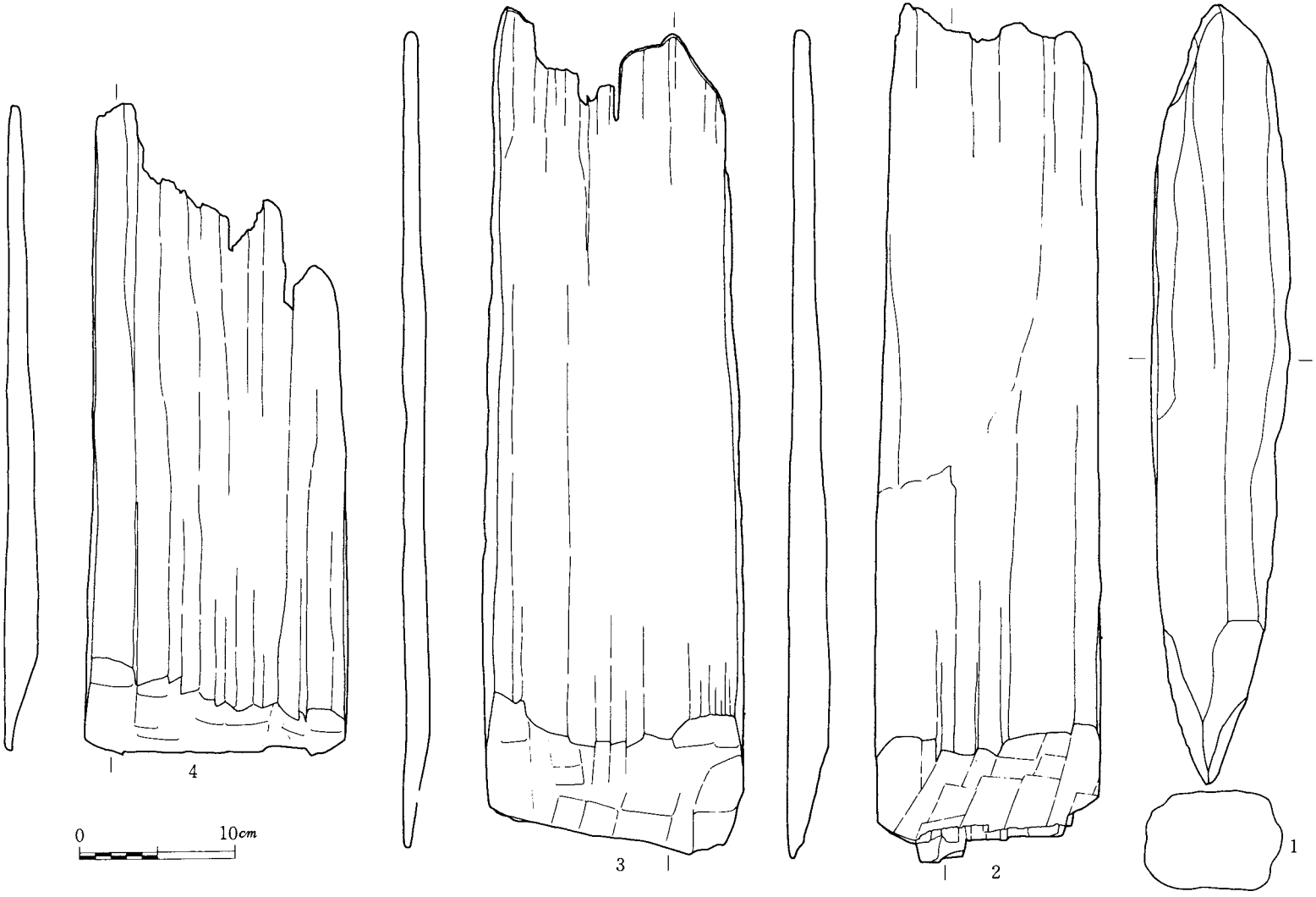
第11図　第1号井戸実測図(S＝1/30)



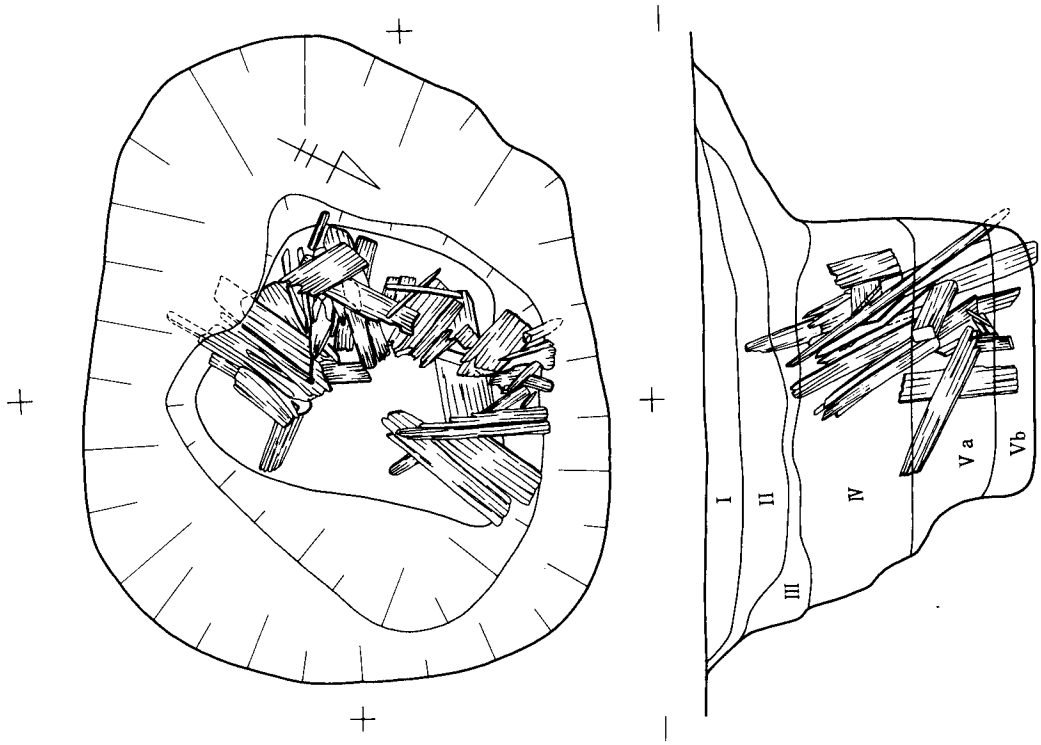
第12図　第2号井戸実測図(S＝1/30)と出土土器(S＝1/3)

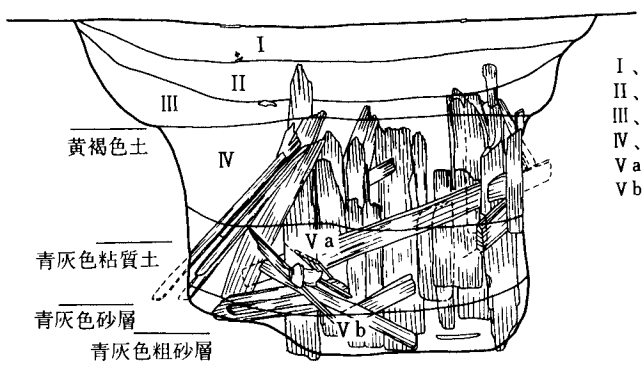


第13図　第１号井戸部材（Ｓ＝1/4）



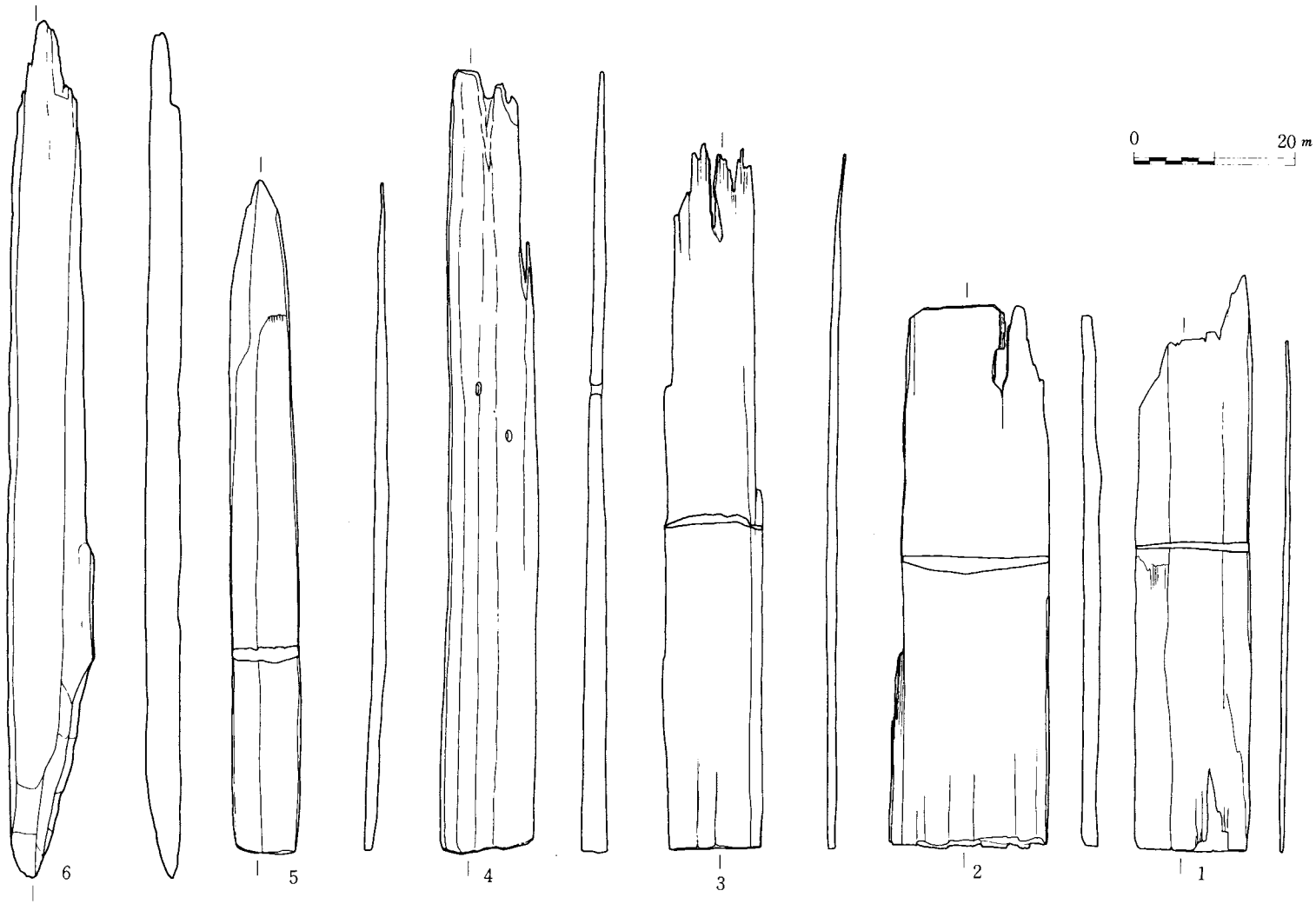
第14図　第２号井戸部材（Ｓ＝1/4）



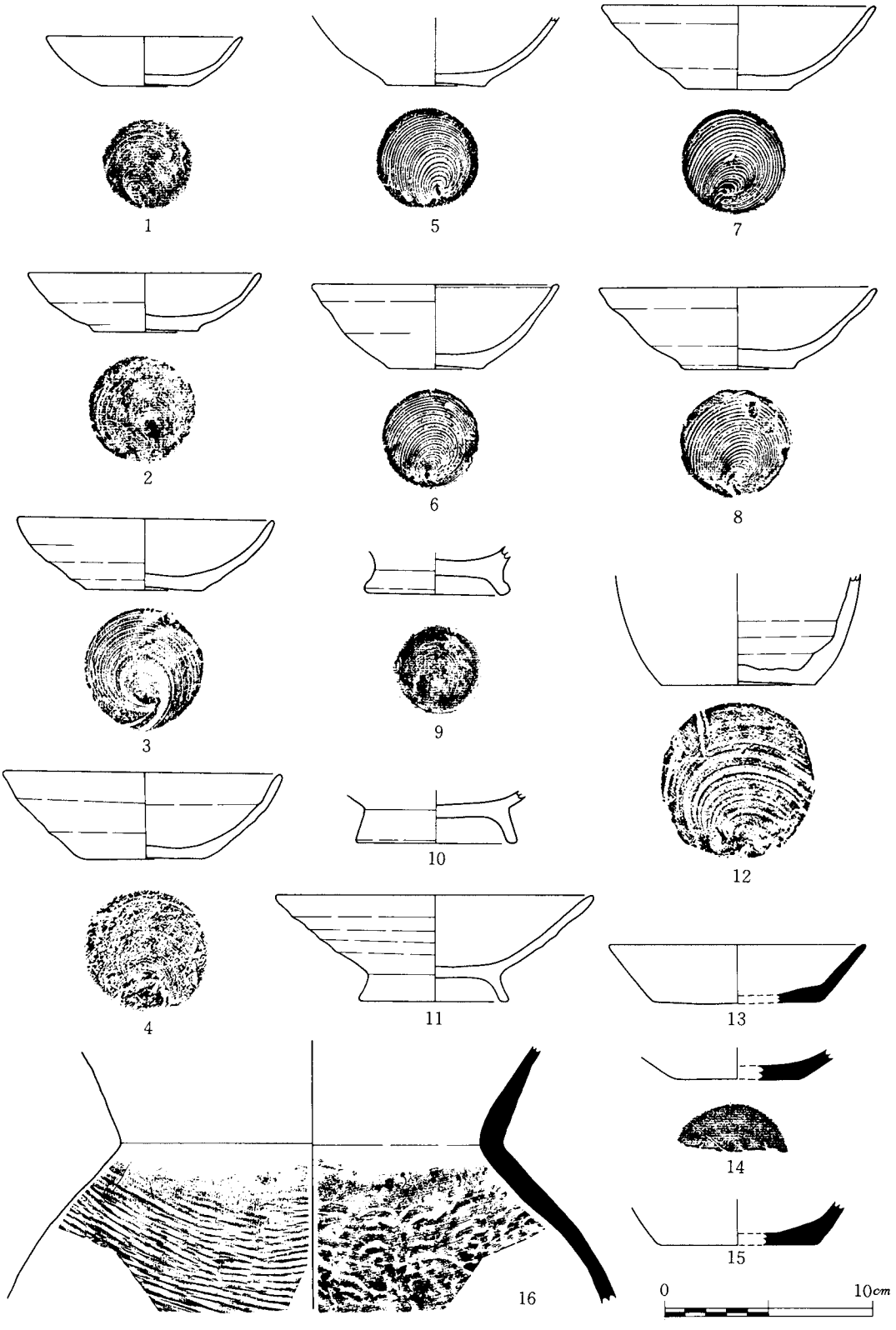


Ⅰ、暗茶灰色土層
Ⅱ、黒褐色弱粘質土層
Ⅲ、黒褐色土層(黄褐色土ブロック含)
Ⅳ、黒色強粘質土層(青灰色粘質土ブロック含)
Ⅴa、黒色弱粘質土層(青灰色砂質土ブロック含)
Ⅴb、黒色弱粘質土層(青灰色砂含)

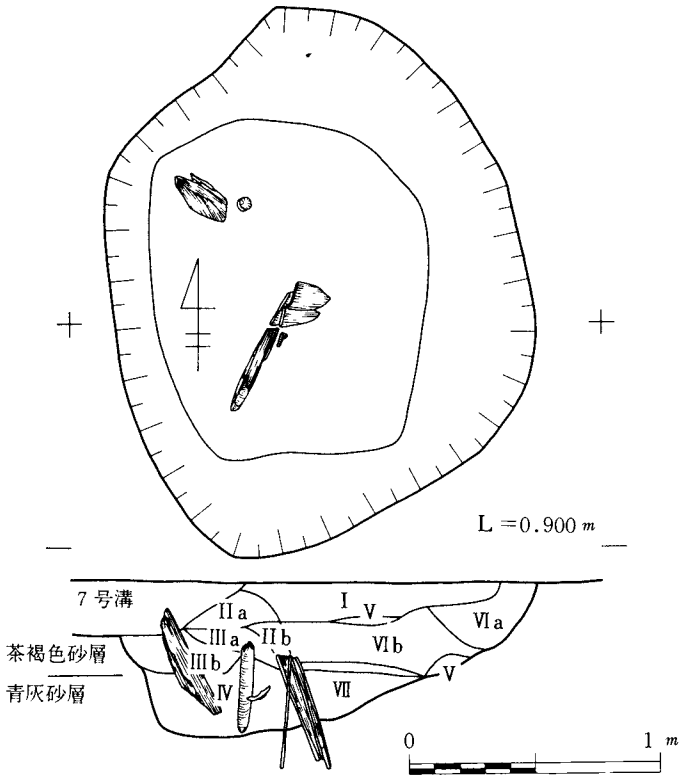
第15図　第3号井戸実測図(S＝1/30)



第16図　第３号井戸部材（Ｓ＝1/8）

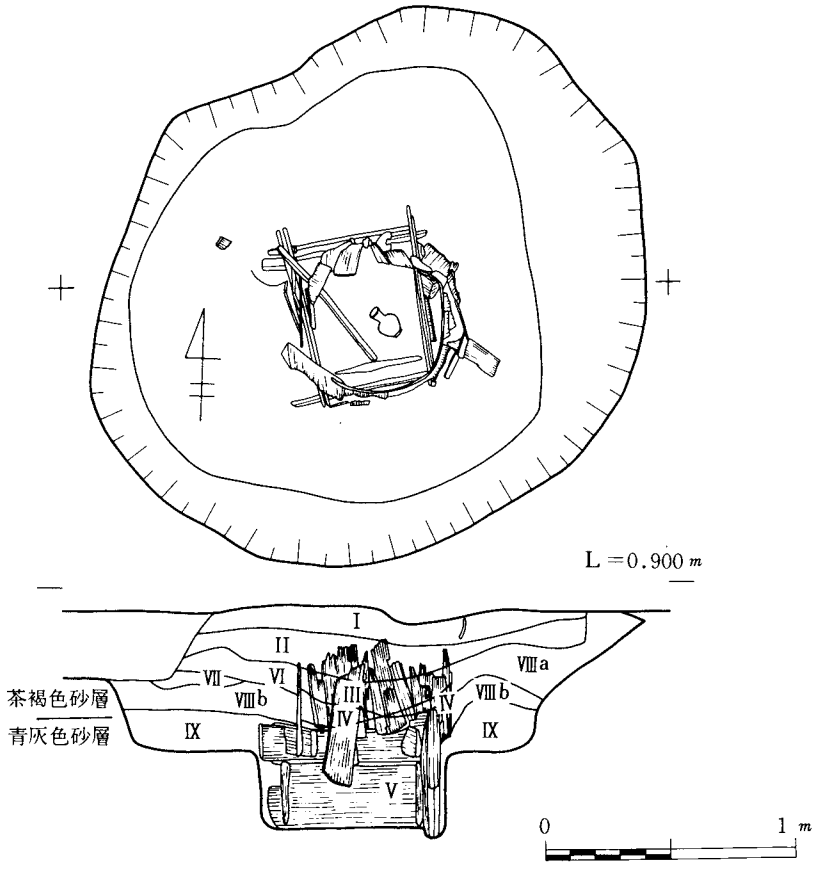


第17図　第３号井戸出土土器（Ｓ＝1/3）



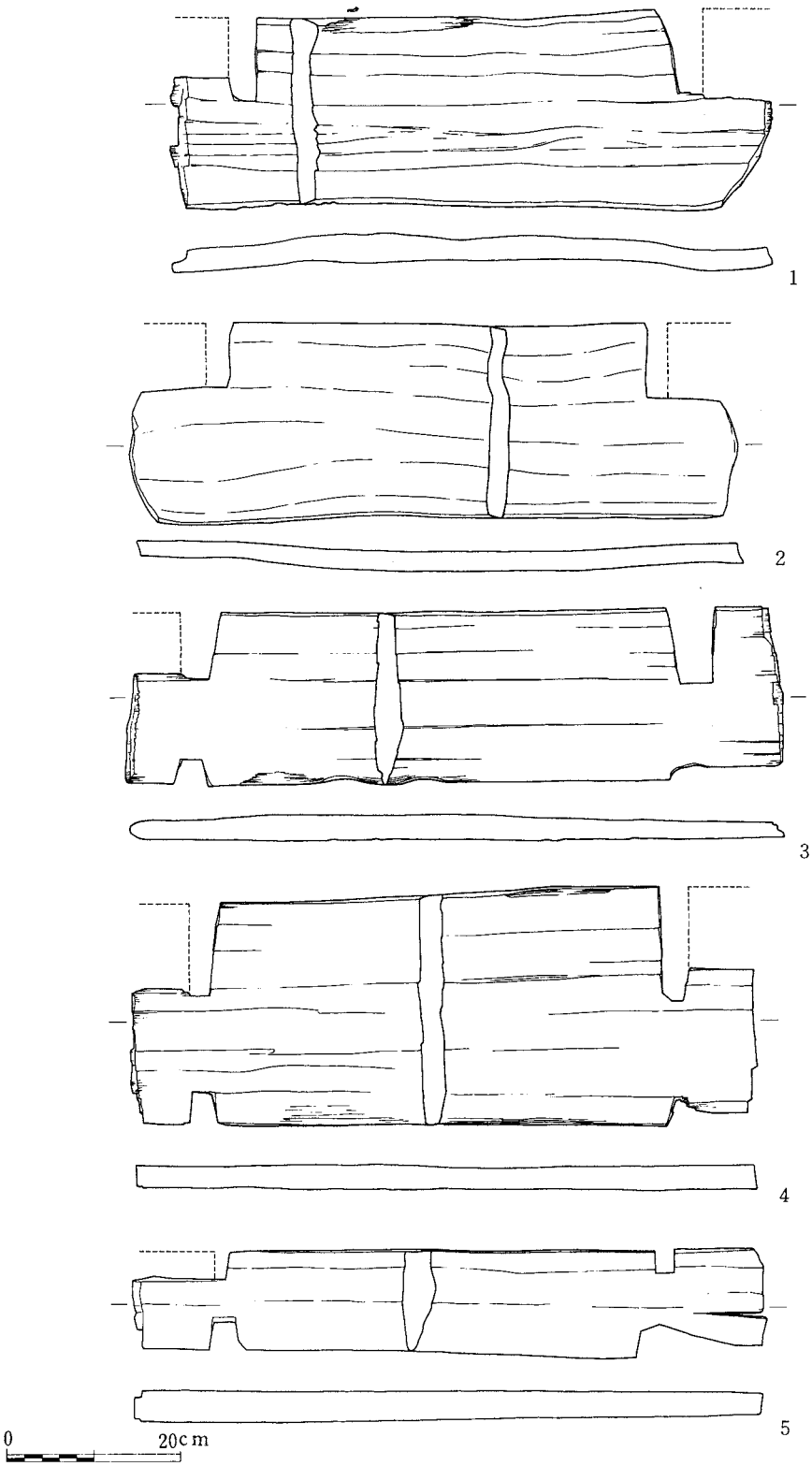
I、暗茶褐色土層
IIa、暗灰褐色弱粘質土層
IIb、灰褐色粘質土層
IIIa、灰黄色砂層
IIIb、灰褐色砂層
IV、暗灰色砂質土層(黒灰色土ブロック多量含)
V、灰色砂層
VIa、黒灰色砂質土層
VIb、黒灰色砂質土層(炭化物と黄色ブロック含)
VII、黒色弱粘質土

第19図　第5号井戸実測図(S=1/30)

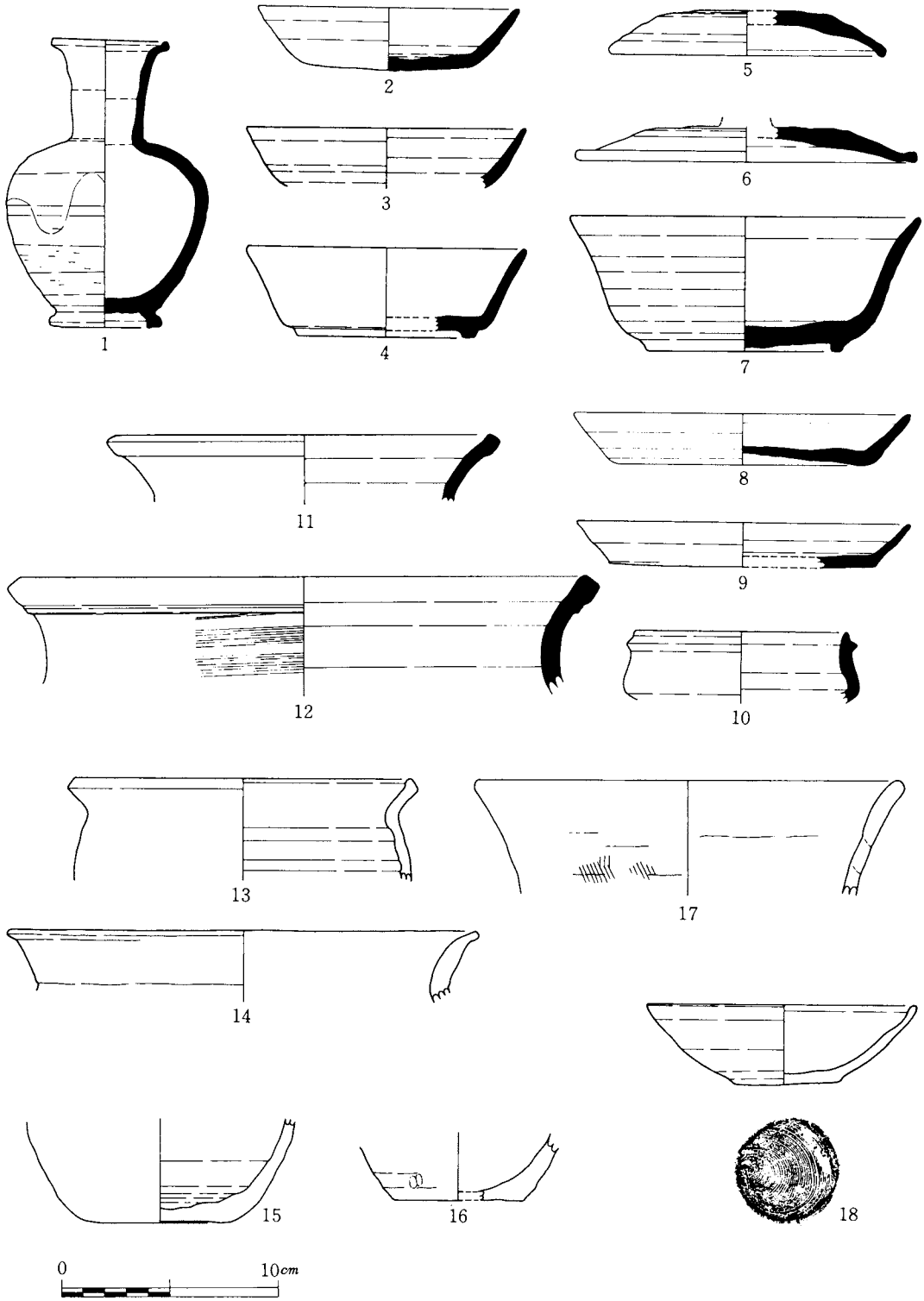


I、淡茶褐色微砂質土層
II、濁褐色砂質土層
(黒褐色土・灰色砂質土ブロック含)
III、黒褐色弱粘質土層(暗茶褐色腐植物含)
IV、灰青色砂層
V、黒色粘質土層
VI、濁茶灰色砂質土層
VII、黒灰色弱粘質土層
VIIIa、淡灰褐色砂層(黒褐色・茶褐色土ブロック含)
VIIIb、淡灰褐色砂層(黒褐色土ブロック多量含)
IX、明青灰色砂層(黒色粘質土ブロック少量含)

第18図　第4号井戸実測図(S=1/30)



第20図　第４号井戸部材（Ｓ＝1/8）



第21図　第４号井戸（１～17）および第５号井戸（18）出土土器（Ｓ＝1/3）

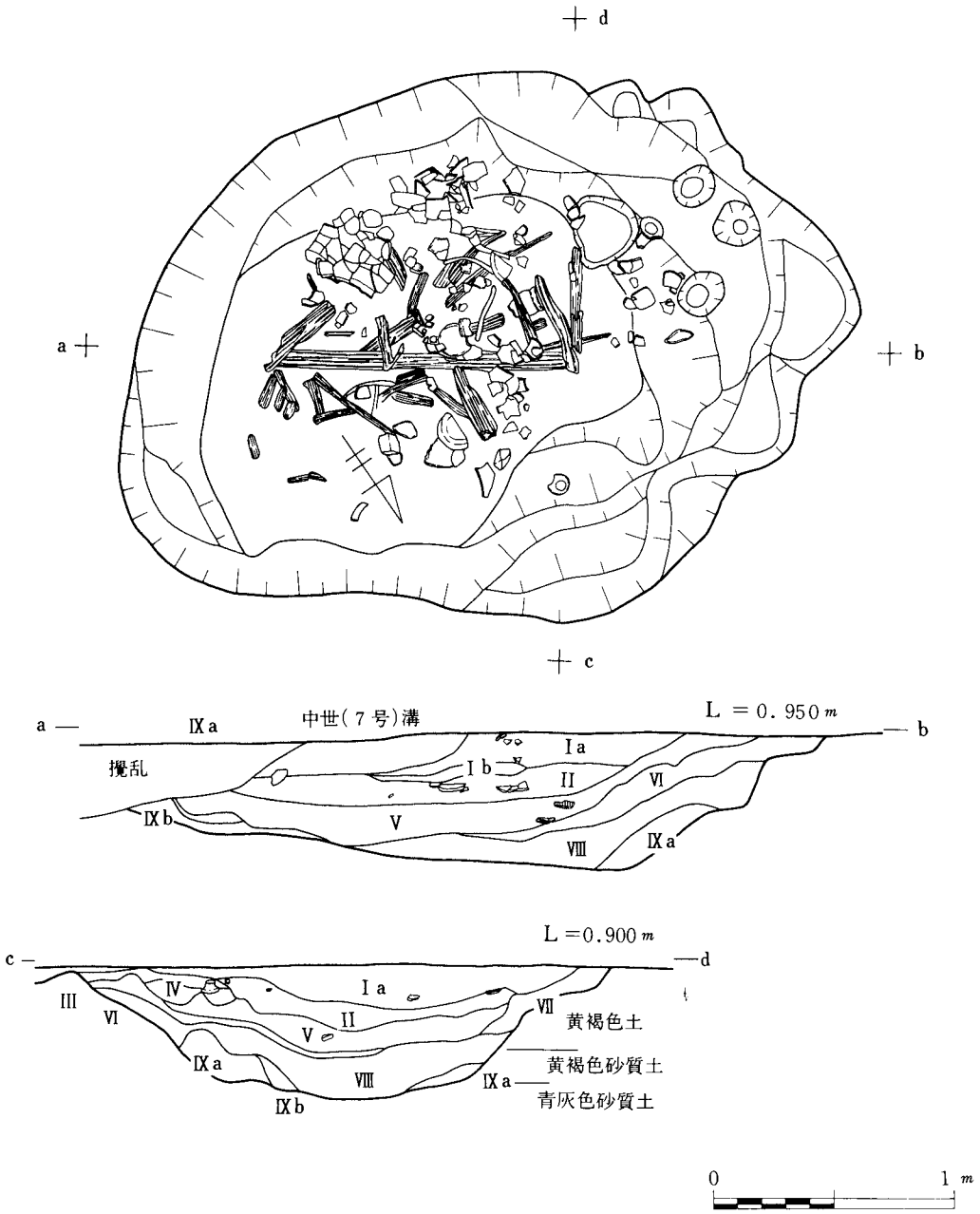
状（内径約 50 cm に組み合わせたものである。下段の外側には数枚の板が、上段の内側には、桜の表皮によって曲物状に仕上げられた板(幅約 6 cm、厚さ 1 cm)が、それぞれあてがわれている。井戸の最深部は深さ 88 cm（L＝－0.07 m）を測り、青灰色砂層に達している。第 20 図 1 は、口径が 5.3 cm に器高 13.1 cm を側る小形の瓶である。2・3 は外傾度の著しい坏で、7 は口径 16 cm に器高 6.2 cm を測る大振りの有台坏である。8・9 は口径 15 cm の小盤である。給分小袋窯期併行とみられ、九世紀末から 10 世紀初頭頃と考えられる。

第 5 号井戸（第 19 図、第 21 図 18）　4 号井戸に近接し、掘方の形状、大きさ、深さや井戸最深部の海抜高度（L＝0.01 m）などは 4 号井戸に類似するが、井側やその他主要な板が抜きとられたためか、検出されたものはわずかで、全体的な構造を知ることはできなかった。第 21 図 18 の土師器埦（口径 12.2 cm）が出土しており、第 3 号井戸と同じ頃の所産とみられる。（栃木）

3　主な土坑

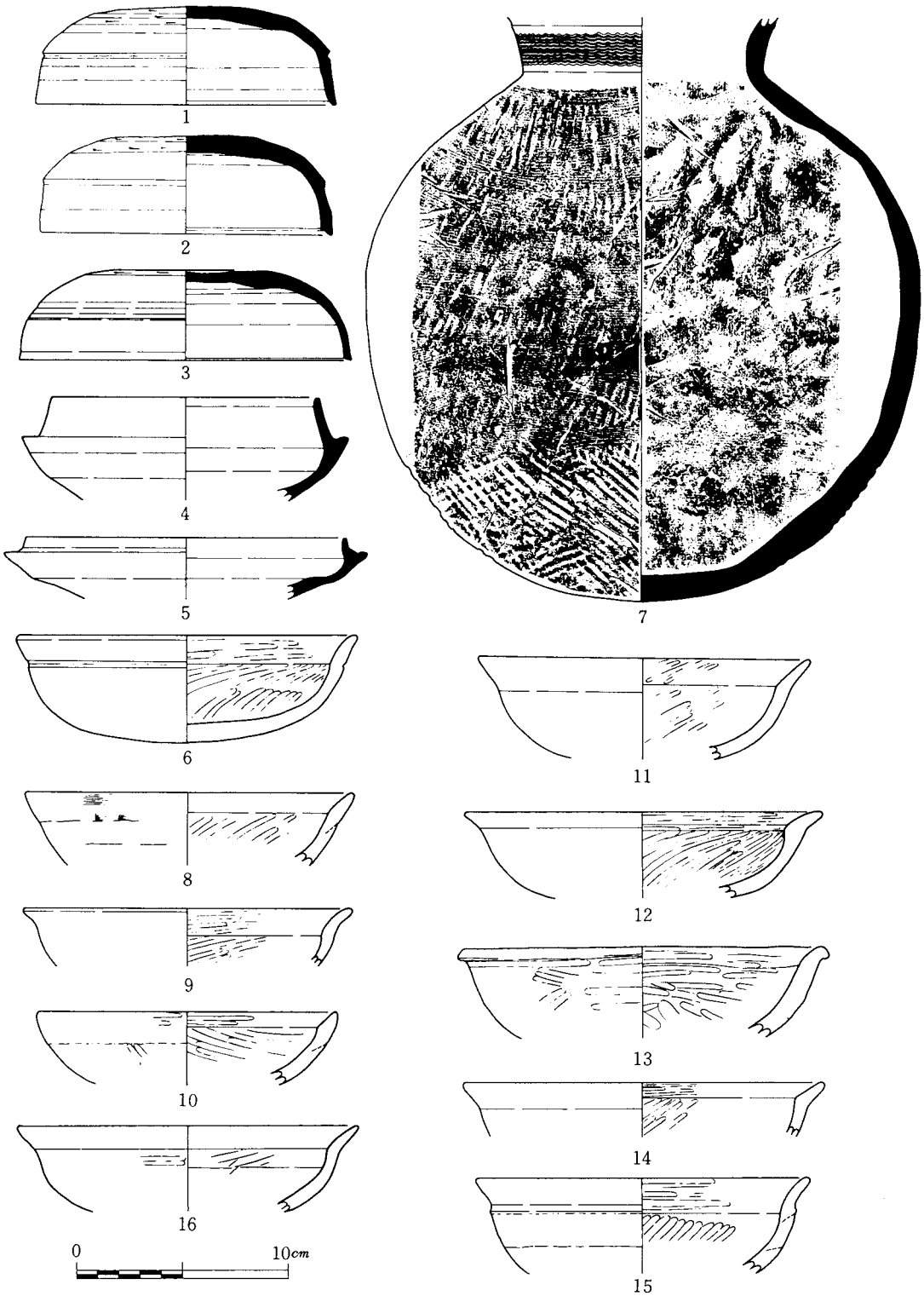
第 10 号土坑（第 22～24 図）　平面プランが楕円形を呈する古墳時代後期の土坑である。深さは 57 cm を測り、黄褐色砂質土(地山)から青灰色砂質土まで掘り込んでいる。遺物は主に Ⅰa～Ⅴ層にわたって出土した。Ⅵ層は黄褐色砂質土が多量にブロック状に混入しており人為的な埋め込みの可能性がある。須恵器・土師器・管玉の他、木製遺物が出土したが遺存状態が悪く取り上げ可能なものは少なかった。1～3 は大形化した蓋で、天井部に回転ヘラ削りがみられる。1・2 は天井端部に一条の沈線が施され、稜をきわだたせているが、3 はやや不明瞭なものとなっており、口径も 15.5 cm と最も大きい。5 の坏身は口径 15 cm で、たちあがりが短いものである。6～16 は、内彎する体部から口縁部で外反し、内面に明瞭な稜線を有する埦形土器である。そのうち 6～15 は内黒で入念に磨かれている。6 は口径 16 cm、器高 5 cm を測り、1 条の沈線をめぐらして体部と口縁部の境としている。17～22 と 24・25 は「く」の字口縁の甕形土器である。17 は口径 20.4 cm を測り、胴部内面はヘラ削りされ内面はハケ調整である。口縁部内外面はナデ調整を施す。21・22・25 は、重心を下胴部におく中形品である。25 は口径 15.7 cm、器高 26 cm を測る。26 は濃緑色を呈する長さ 3.9 cm の管玉で、孔径約 2 mm の孔が片面から穿たれている。これらの出土品より、本土坑は 6 世紀中頃の時期に比定されるものと考えられる。

弥生後期の土坑と遺物（第 25 図）　平安期の遺構多数が占める本調査区では、数基の弥生後期の土坑の存在が注視された。随所で平安期のピットと重複しており、明確なプランを残すものは少ない。C－7 区に検出された第 23 号土坑（第 25 図 1）は、直径約 1 mの円形を呈し、地山ブロックを含む黒色土を埋土とする。土器は覆土からのもので床面につくものはなかった。4 は口径 16.5 cm の有段擬凹線甕で、肩部に刺突文を施す。第 23 号に近接する第 28 号土坑は、短辺約 1 mに長辺約 1.5 mの長方形プランの土坑である。地山ブロックを含む黒灰色土と黒色土を埋土とし、地山直上から、有段擬凹線甕とともに、11 の大形打製石斧が出土している。石斧は長さ 11 cm 最大幅 11.6 cm 厚さ 5 cm を測る。B－8 区の 29 号土坑は、長軸 1.2 m短軸 0.85 mの楕円形土坑で、黒色土を埋土する。9 は、ほぼ直立する有段口縁に擬凹線を施し、口縁端部が比較的厚

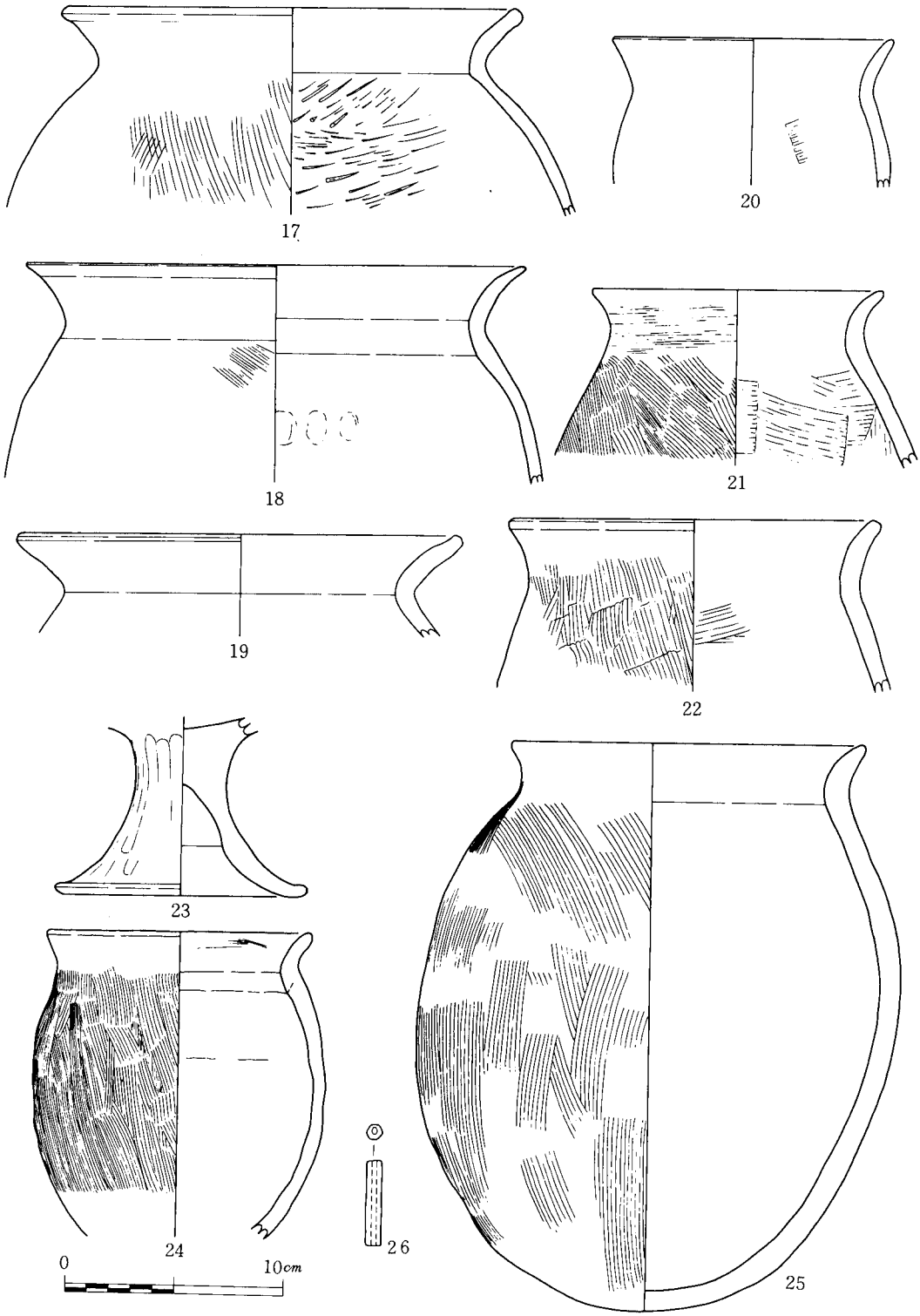


第22図　第10号土坑実測図(S =1/30)

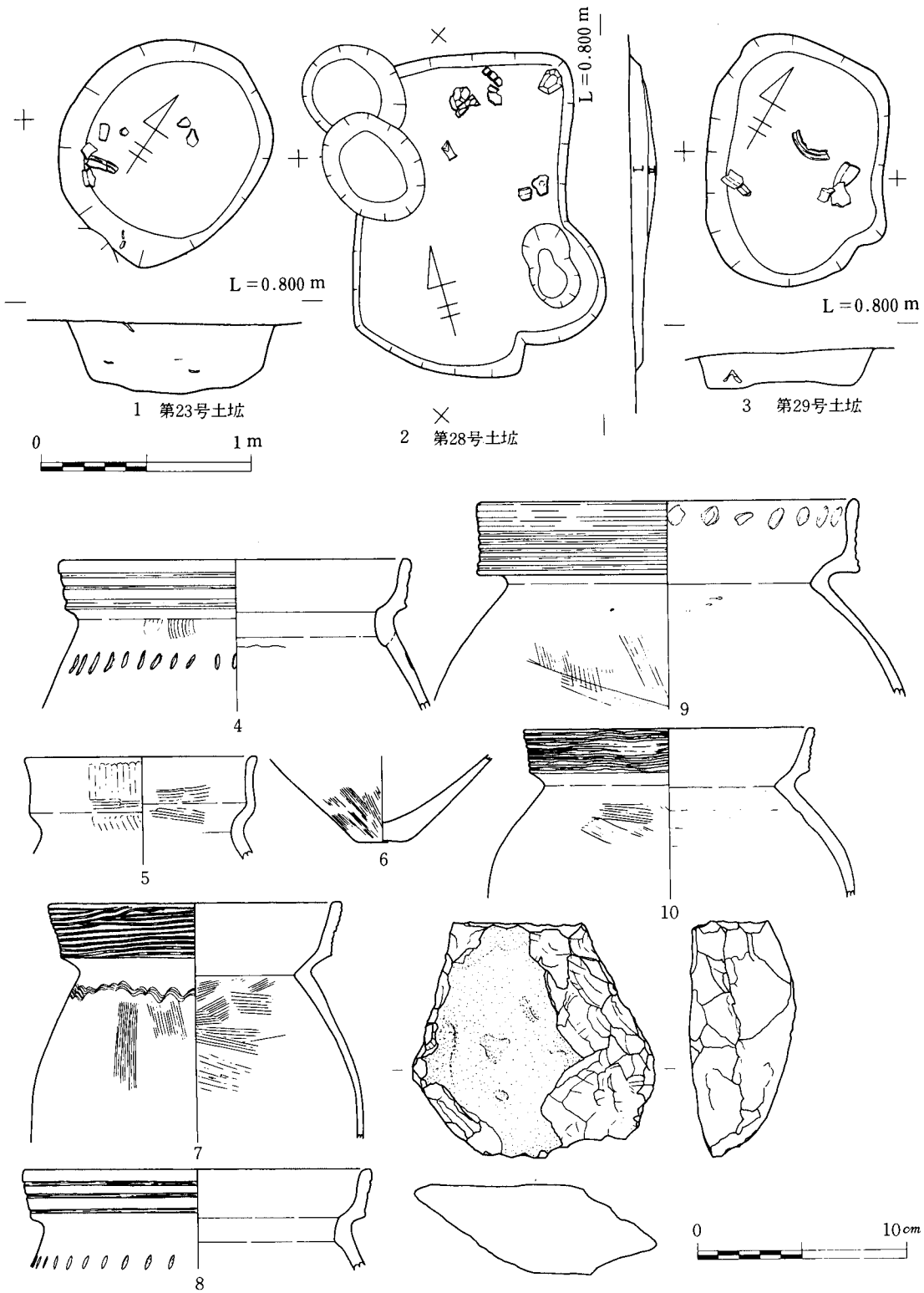
Ⅰa、茶褐色土層(灰色土ブロックと炭化物粒子少量含)
Ⅰb、茶褐色粘土層(灰色土ブロックと炭化物粒子少量含)
Ⅱ、茶褐色土層(灰化物多量含、灰色土、黄褐色土ブロック含)
Ⅲ、暗茶褐色土層(灰色土ブロック含)
Ⅳ、茶褐色土層(灰化物粒子と灰色土、黄褐色土ブロック含)
Ⅴ、暗茶褐色弱粘質土層(黒色土ブロック含)
Ⅵ、暗茶褐色粘質土層(黒褐色土、黄褐色砂質地山土ブロック含)
Ⅶ、暗茶灰色土層
Ⅷ、暗茶褐色粘質土層(黒色土ブロック含)
Ⅸa、暗茶褐色粘質土層(黄褐色土ブロック多量含)
Ⅸb、暗茶褐色粘質土層(青灰色土ブロック多量含)



第23図　第10号土坑出土遺物１（Ｓ＝1/3）



第24図　第10号土坑出土遺物２（Ｓ＝1/3）

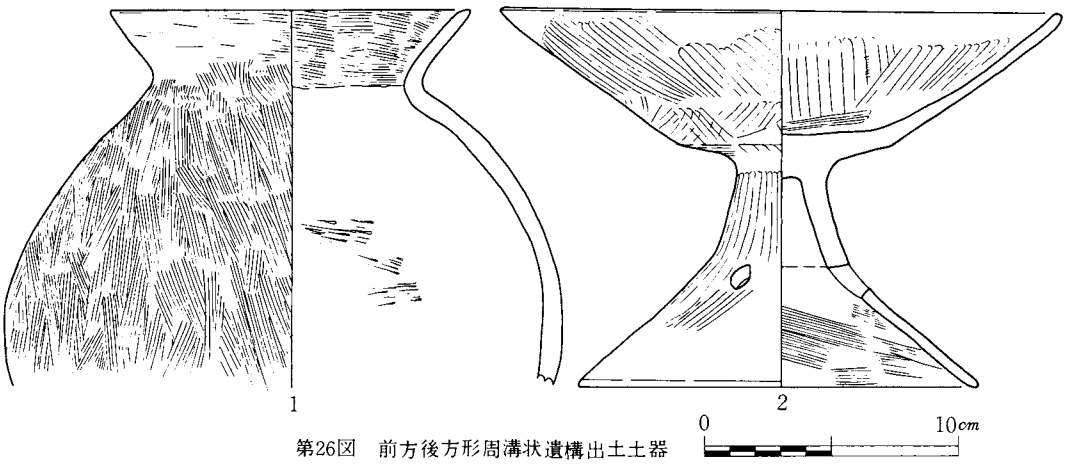


第25図　弥生期の土坑（S＝1/30）と出土遺物（S＝1/3）

く丸みをもつ甕形土器である。これらの土坑からの出土土器は、弥生後期の法仏式に比定されると考えられる。こうした弥生後期の土坑は、C－7区～B－8区にかけて分布しており、もとは土坑群として一定の領域を占めたものと想われ、近接する前方後方形をなす方形周溝状遺構との位置関係にも注視しなければならない。

4　前方後方形周溝状遺構

前方後方形周溝状遺構（第26・27図）　弥生後期の土坑群の南に近接する。上幅70～90 cm、深さ20～40 cmの溝が方形に周り、東側でくびれて前方後方状をなす遺構である。前方部先端には溝はなく、初源期の前方後方墳に類する形態を有している。先端部までの全長は8.2 mを測り、後方形部は6.5×5.5 mである。周溝の北東および南東端の地山直上より、第26図の甕形土器と高坏形土器が出土し、古府クルビ式併行に比定されるとみられる。本遺構は、平安期のピットなどと切りあっており、正確なプランを把握するには決して良好な状況になく、また、埋葬施設も検出されなかったことから、初源期の小型前方後方墳の範疇で捉えるには問題も多い。今後、その性格については、慎重に検討する必要があろう。

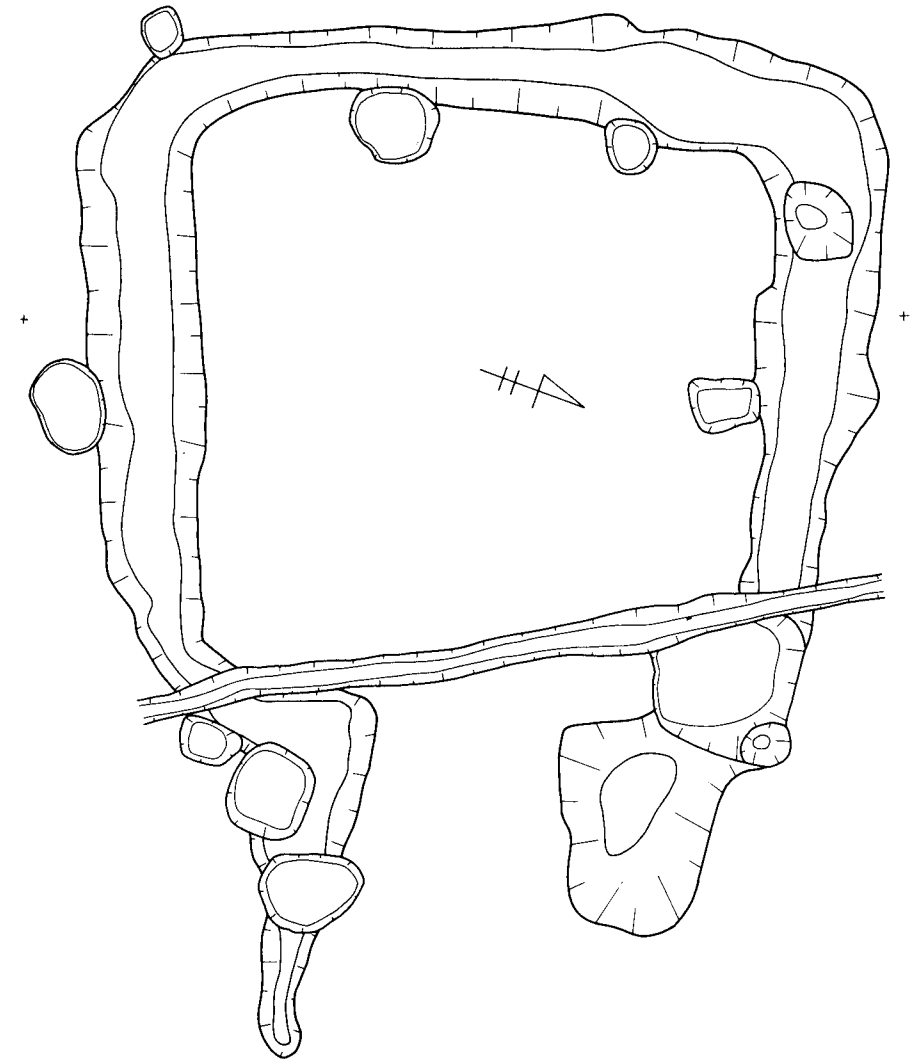


第26図　前方後方形周溝状遺構出土土器

5　主な溝状遺構

第25号溝（第28～30図）　建物跡の東にある南北溝である。上幅は2.5～2.8 m、深さ0.5 mの比較的大きな溝である。溝底面から直立するようにして立ちあがったのち、緩く斜行する断面形をなす。出土土器との関係から、もとは古墳時代後期のU字状を呈する溝であったものが、奈良・平安期に再利用されたものとみられる。特に、本遺跡の中心的な時期である平安期に至って、断面が箱形を呈する溝に掘り直されたものとみられる。

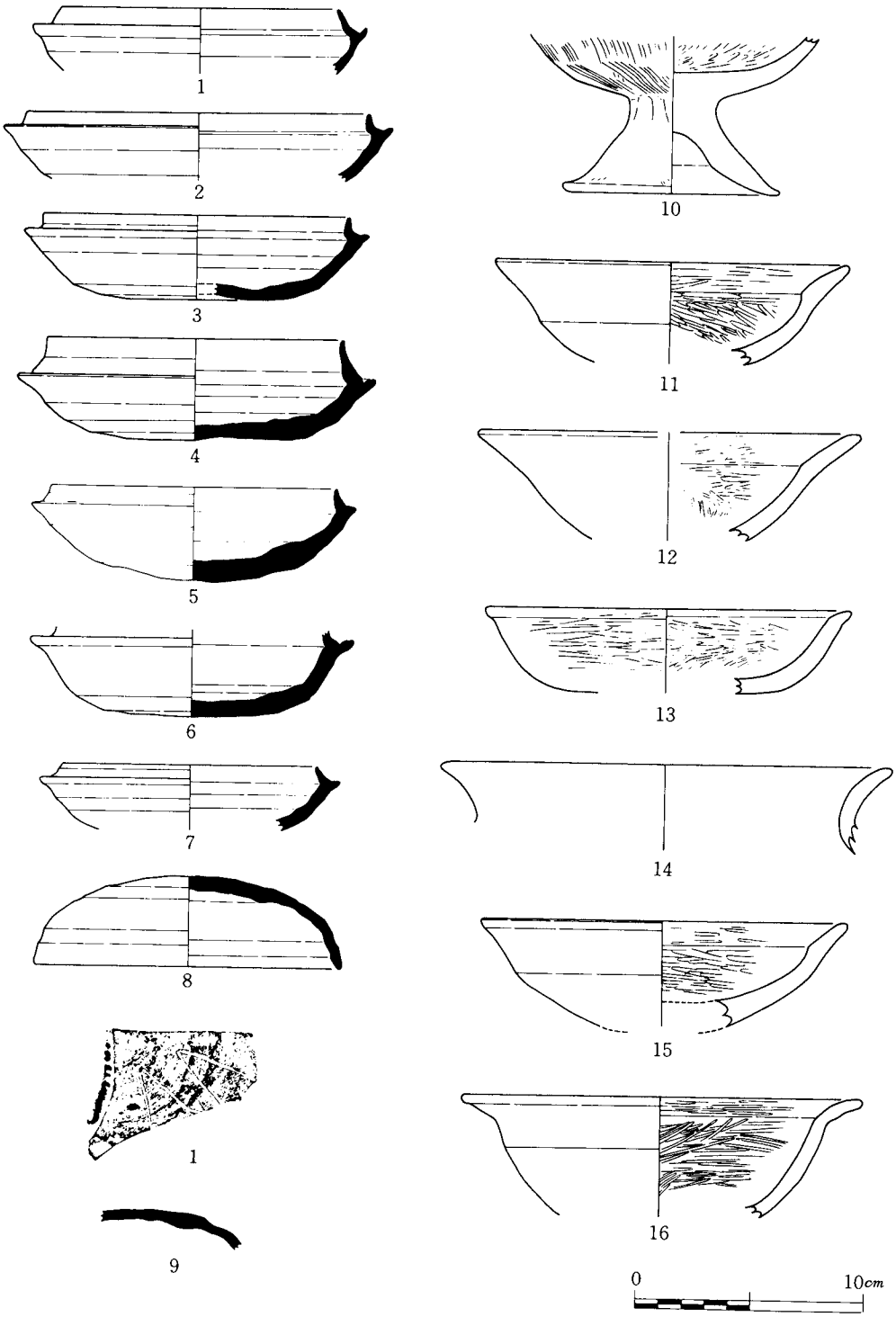
出土土器には、古墳時代後期の一群、奈良期の一群、平安中期の一群がみられ、平安期のものが最も多い。29は坏底部に「依」と記され、口縁部周辺には漆が付着している。39と42は「上」と記され、57は「庄」と読める土師器椀である。41は判読が困難である。いずれも、給分小袋窯併行期の9世紀末から10世紀前半頃の墨書土器である。



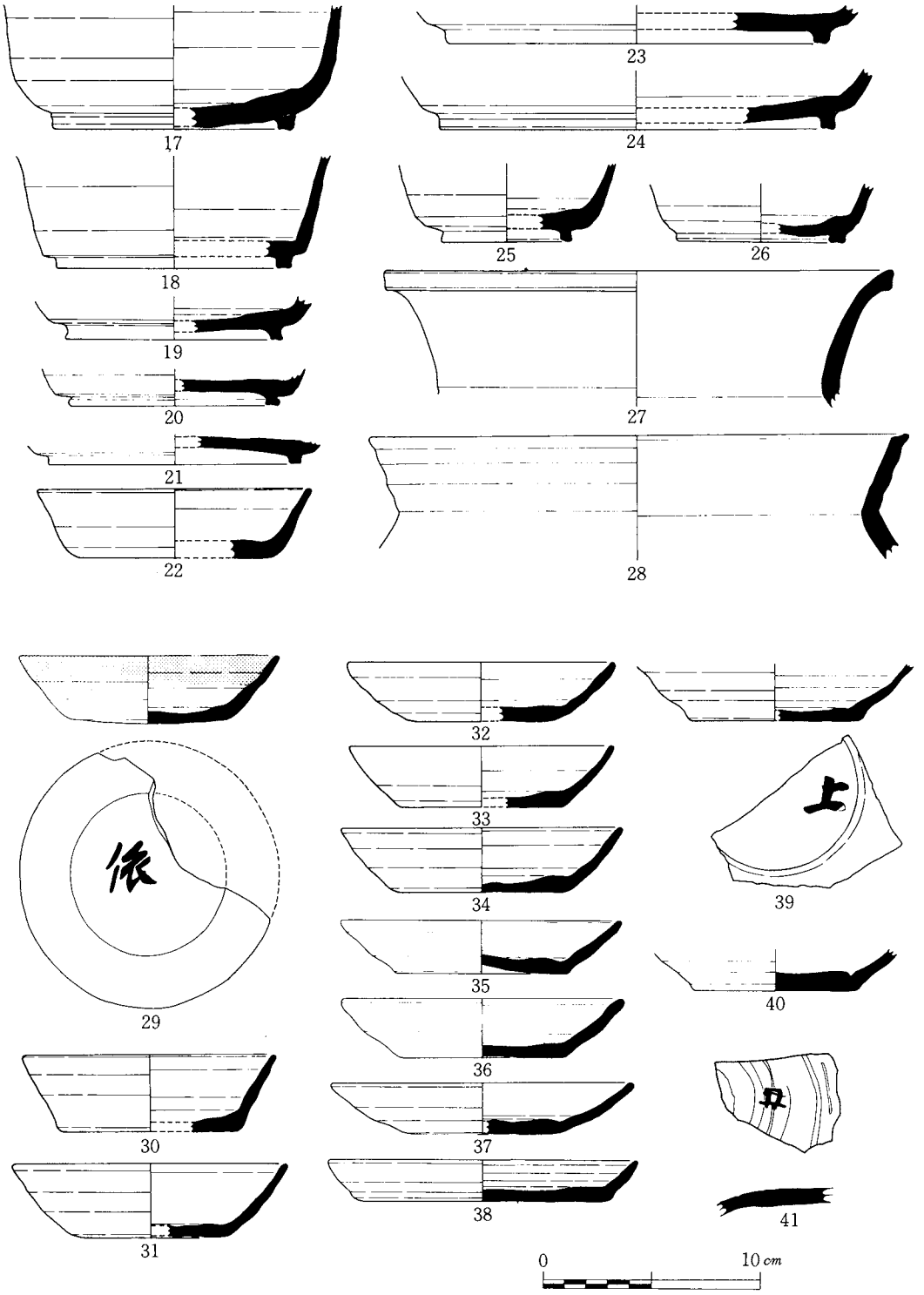
Ⅰ、黒褐色土層
Ⅱ、茶灰色土層
Ⅲ、暗茶褐色土層
Ⅳ、暗茶褐色弱粘質土層
Ⅴ、黒色土層粘質土
Ⅵa、黒色土層粘質土(地山ブロック少量混入)
Ⅵb黒色土層粘質土(地山ブロック多量混入)

0　2 m

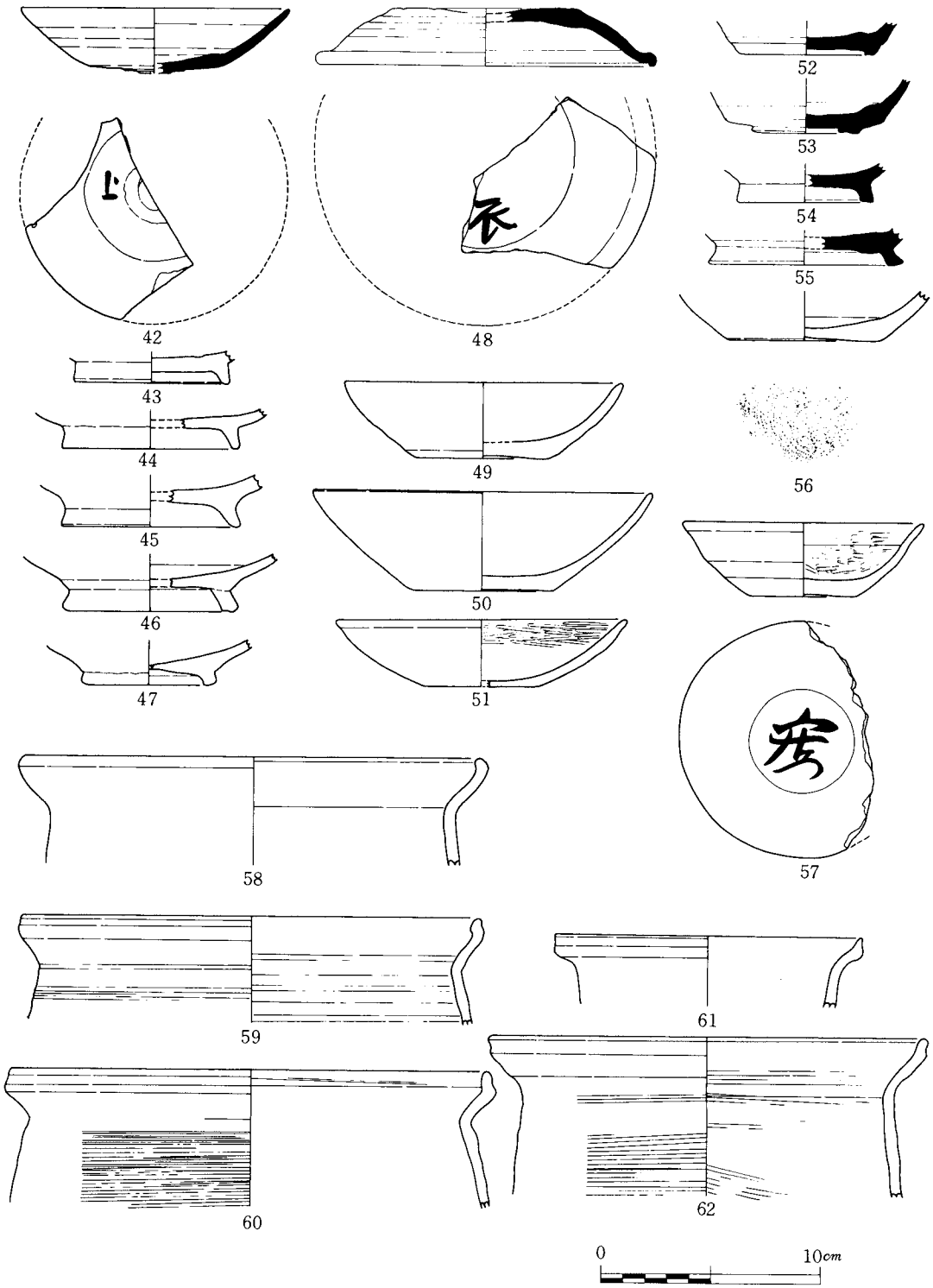
第27図　方形周溝状遺構実測図(S＝1/60)



第28図　第25号溝出土土器１（Ｓ＝1/3）



第29図　第25号溝出土土器２（Ｓ＝1/3）

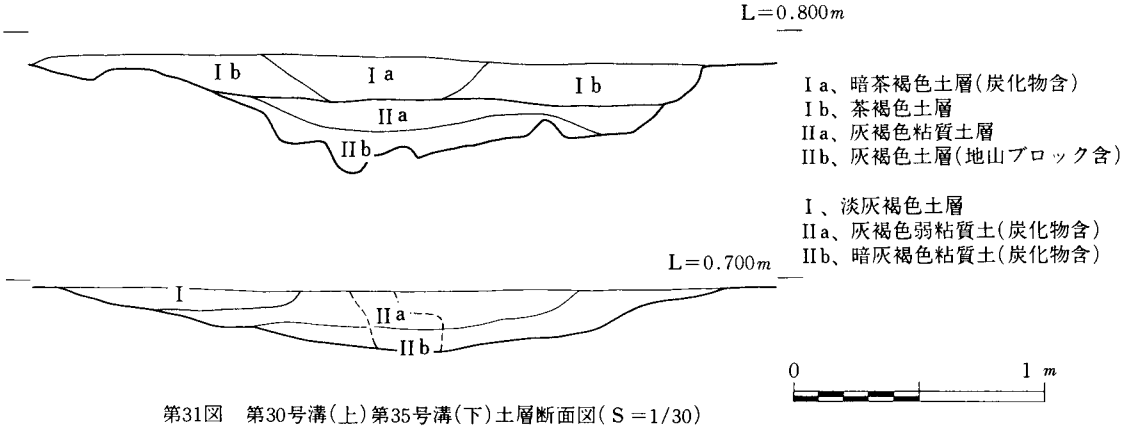


第30図　第25号溝出土土器３（Ｓ＝1/3）

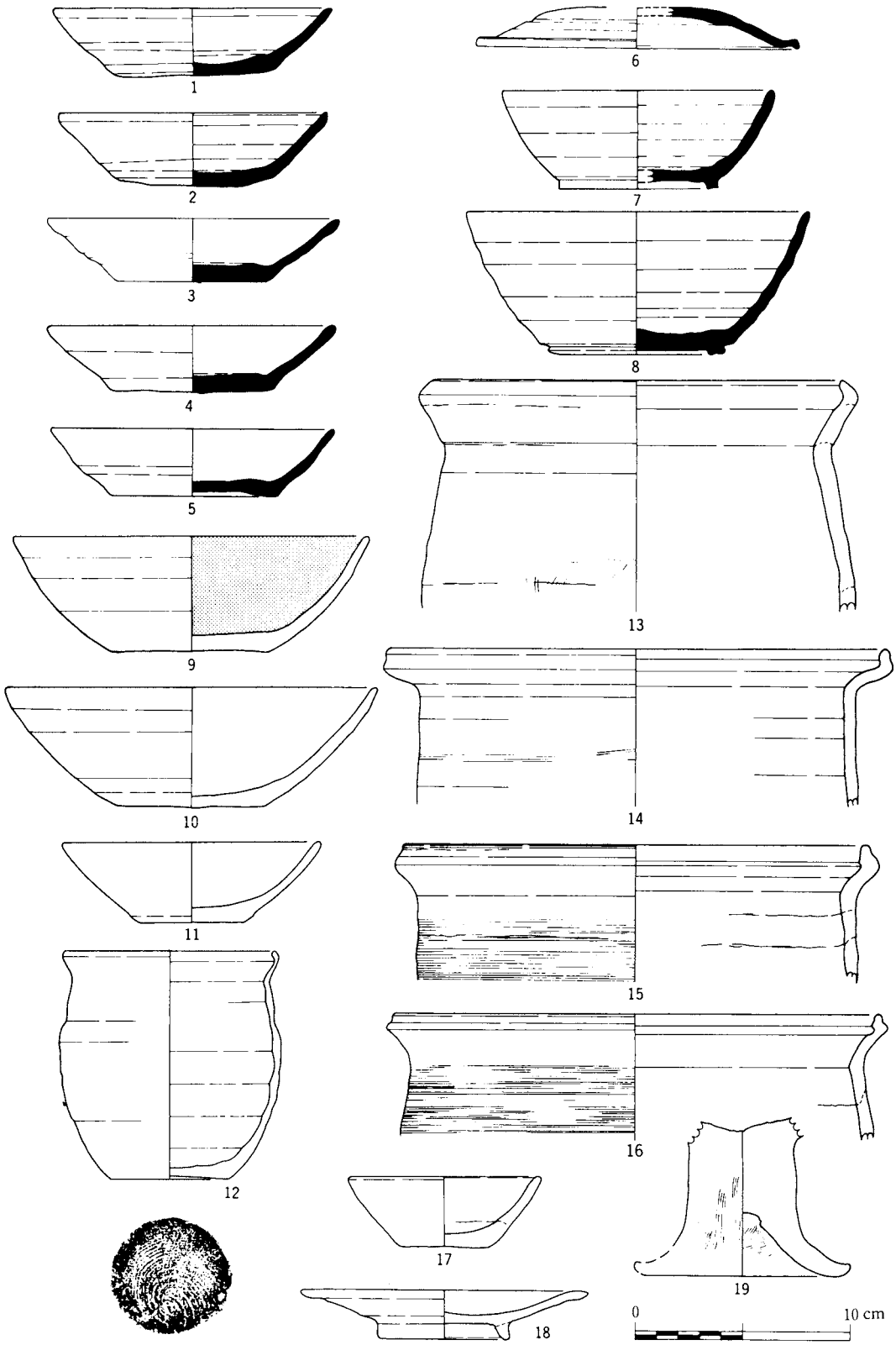
第26号溝状遺構（第32･33図）　第18号建物跡の東約3mにある。主軸を建物跡群とほぼ同一方向にとっており、強い有機性が窺える。上幅1～1.5m、深さ約10cmの断面形が逆台形を呈する溝であるが、長さ10mで完結しており、正確には長方形の土坑といった方が良いかもしれない。ここでは、多数の墨書土器を含む一括資料を得ている。1～5・20～22・24・25は無高台坏で、器高3cm前後、口径13～14cmを測る。7は小振りの有台坏で、8・23・28は大振りの有台坏である。坏は全体的に器面に水挽きによる起伏がみられ、口縁部付近での引き伸しが強い。口縁端部は丸味をもち、底面にはヘラ起し痕がみられる。9･10は口径17cm前後、器高5.5cm前後を測る大振りの黒色埦で、外面下半は回転によるヘラ削りがみられる。また、9の内面には漆の付着が著しい。13～16は口径20～24cmを側る大振りの甕で「く」の字口縁端を上方向に折りまげている。15･16は内面は強いナデによって凹状を呈する。その他「大」「依」「東」と記された墨書土器が伴出しており、何らかの祭祀行為に係る遺構ともみられる。

第27号溝状遺構（第34図）　第26号溝状遺構の北に隣接し、主軸方向も同一である。上幅約1.3m、深さ10～15cmの逆台形状の断面を呈し、第26号溝状遺構に類する。長さは6.5mとやや短い。1・2・8は、須恵器の無高台坏である。1は口径10.8cm、器高3.4cmを測る小振りのもので口唇部内外面に漆が付着している。その他は、口径12cm前後、器高3.5cm前後のものである。3～5は有台坏で、3・4は口径14.5cm前後、器高5.5～6cmの大振りのものである。6は、双耳瓶の口頸部であろう。10は、外面下半がヘラ削りされた黒色埦で、内面に漆が付着している。11～15は甕で、小形の11・12と大型の13～15がある。全体的に口縁部上方向への折りまげが弱く、大振りのものは内側にナデによる稜線がみられる。

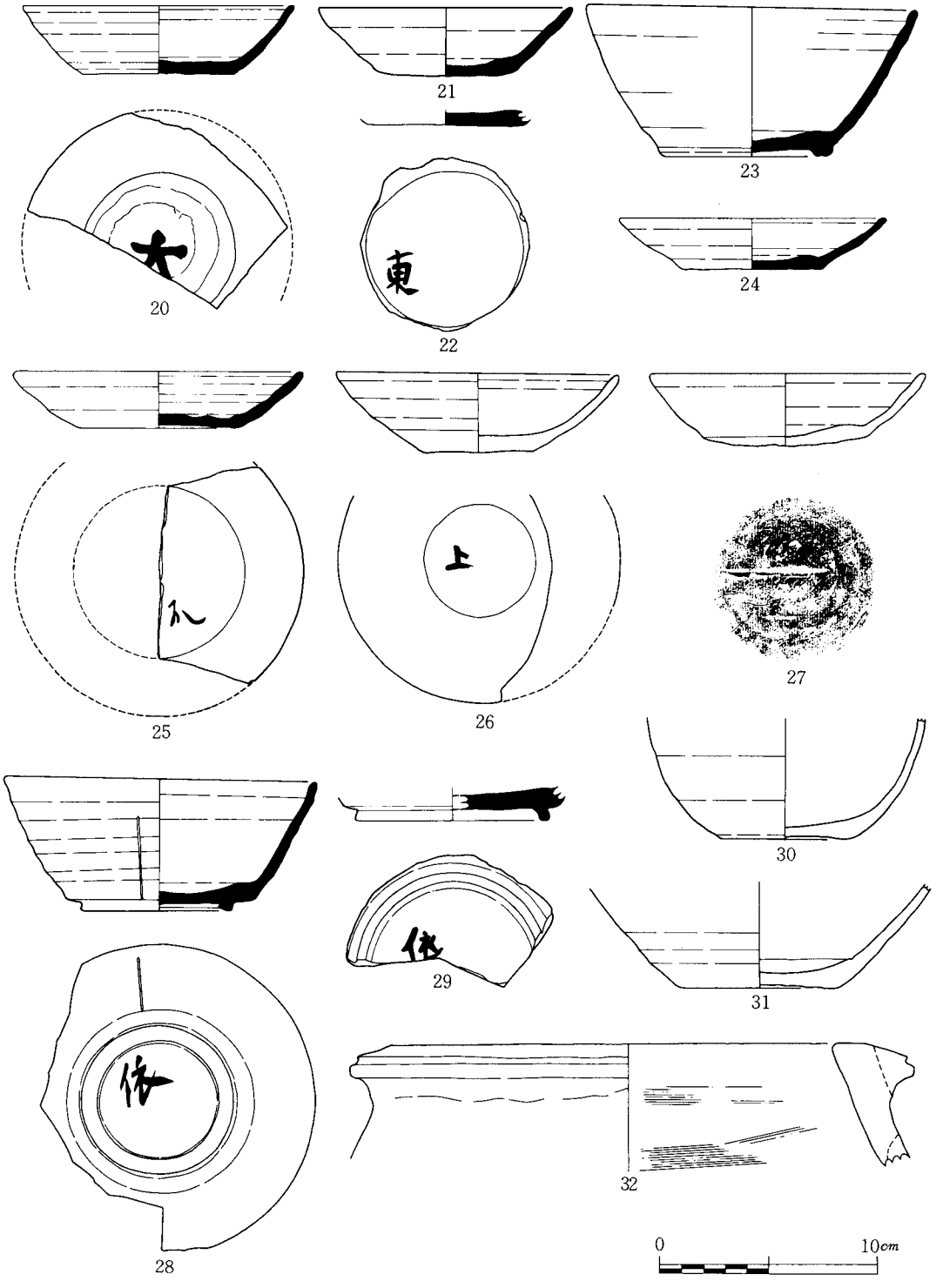
その他の溝（第33図）　弥生時代から中世の各時代にわたる溝状遺構が約40条検出された。なかでも平安期に比定されるものが最も多く、そのなかで、平行して走る第30号と第35号溝が注視された。両溝は、上幅2.5～3m、深さ約30cmの断面形が緩いU字状を呈するもので、建物跡群の東を画すように南北に走っている。また、両溝は約2.5mの間隔をもって平行に走っており、その間は「道」となる可能性が高い。さらに、両溝の溝底中央には杭列を有しているのも大きな特徴である。（戸淵）



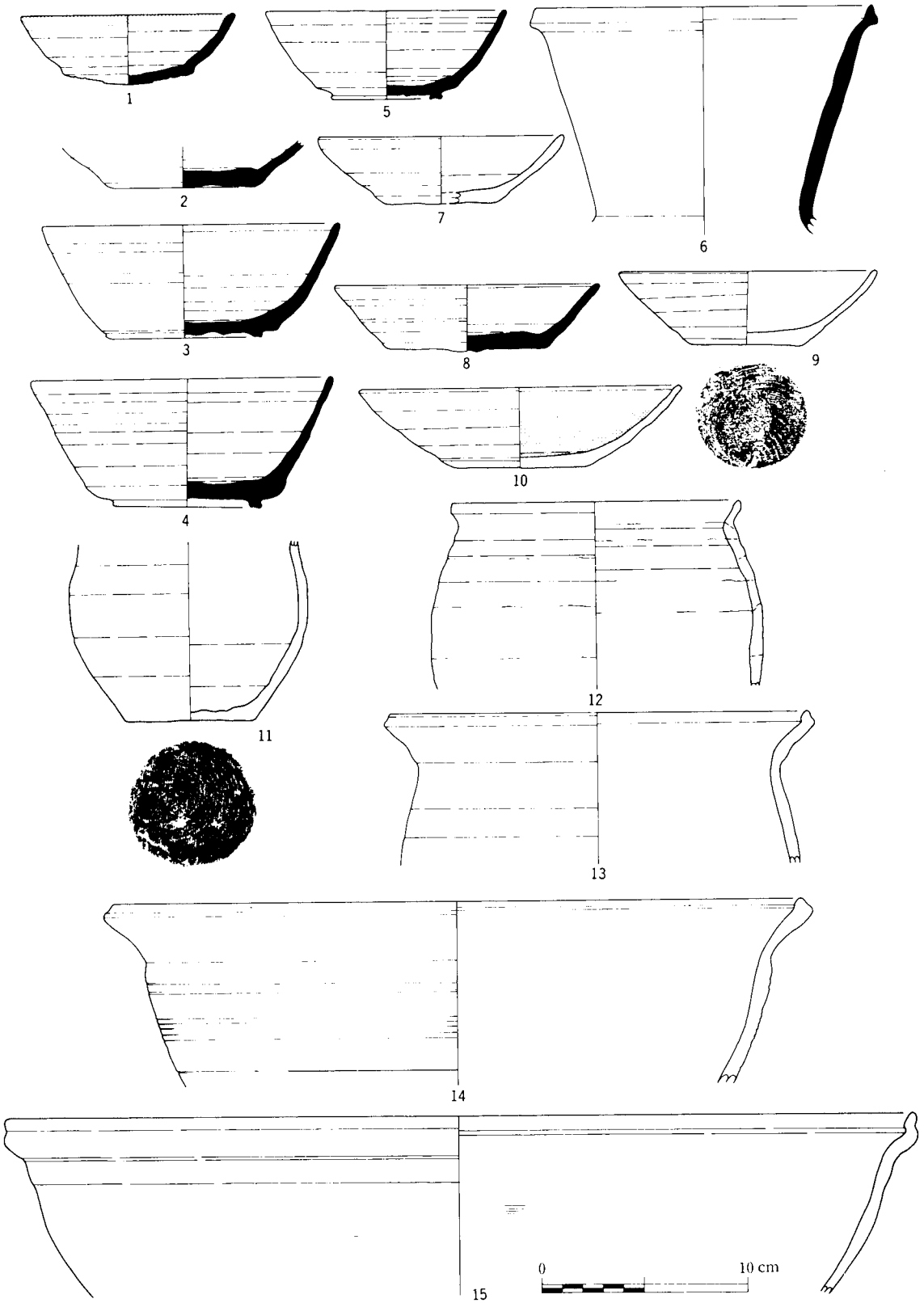
第31図　第30号溝(上)第35号溝(下)土層断面図(S＝1/30)



第32図　26号溝状遺構出土土器（S＝1/3）



第33図　第26号溝状遺構出土土器２（Ｓ＝1/3）



第34図　27号溝状遺構出土土器（S＝⅓）

6　銭　　貨

出土概況　本遺跡の第1次から第6次にわたる発掘調査によって銭貨10枚が出土し、その他に一括採集された銭貨56枚と合わせ、計66枚が出土している。これらの出土概況を既概報などにもとづいて年次順に記すこととする。

昭和50（1975）年7月21日、第1次発掘調査J－5調査区の第2層より青磁・緑釉の破片などとともに、唐銭「開通元寶」1枚が出土。翌年8月11日に耕作土より「寧」字と読める破片が出土したが、これは北宋銭「熙寧元寶」の銭貨名第2文字「寧」であると考えられる（註1）。

昭和53（1978）年、第2次発掘調査区より、北宋銭「熙寧元寶」1枚が出土している（註2）。

昭和55（1980）年、第4次発掘調査期間中の10月頃、当時埋蔵文化財センター主事の浅田耕治（現能都町立能都中学校教諭）調査担当者が発掘調査地へ向うため波打際を歩行中、波浪の浸食などによって自然崩壊中の包含層より、緑錆状となって露出している一塊の銅銭を偶然発見した、銅銭は鏹状になったいたものが、そのまま錆着したもので56枚が採集されている（註3）。

昭和56（1981）年9月10日、第5次発掘調査D－6調査区の包含層中より北宋銭「元豊通寶」と銭面付着のため不明のもの1枚および、北宋銭「天禧通寶」・「皇宋通寶」の各1枚が採集されている（註4）。

昭和57（1982）年、第6次発掘調査区の第16号掘立柱建物西側柱列北第2柱穴掘形より、皇朝十二銭「和同開珎（わどうかいほう）」（註5）・「神功開寶（じんこうかいほう）」・銭種不明の各1枚が重なった状態で検出されている（註6）。

以上が本遺跡より出土した銭貨である。これらを銭種・書体別にみると、20種・26書体におよぶことが確認された。初銭年からみると最古の銭は、西暦621（唐・武徳4）年に唐の初代高祖が銭造した「開通元寶」銭で、最新の銭は西暦1408（明・永楽6）年に明の成祖が鋳造した「永楽通寶」銭であった。この中国をはじめ近隣諸国からの渡来銭は、わが国の中世において、重要な流通貨幣として経済社会を展開してきたのである。一方、16号掘立柱建物より出土した「和同開珎」・「神功開寶」などの3銭は、前記の渡来銭と流通時期や性格を異にするものである。それでは次にそれらについて少し述べてみたい。（第1表、出土銭貨一覧）

皇朝十二銭　第16号掘立柱建物より出土した「和同開珎」は西暦708（和銅元）年、わが国において最初に公鋳された銭貨である。本銭は錆化が顕著なもので、左外郭部1/4を欠損している。銭貨名の和・開の2文字は部分的に、また珎文字はほぼ全体的に確認でき、同文字は損傷著るしいため読みとりがたい。画線は比較的細字に書かれ、鋳あがりは良好である。新・古に分類すると新和同である。計測値は外径2.5㎝、内郭径0.6㎝、重量は2枚付着のままで2,05ｇである。

「神功開寶」は西暦765（天平神護元）年、「和同開珎」・「萬年通寶」に次いで鋳造された奈良時代最後の銭貨である。本銭も腐蝕・錆化が著しく遺存状況は悪い。銭貨名の神・寶の2文字は微かに看取できるが、他の2文字は磨滅・損傷のため看取不可能であった。計測値は、外径2.6㎝、内郭径0,6㎝、重量0.85ｇである。

「銭種不明」は和同開珎の背に銭面を付着しているもので、外郭部の2ヶ所計約1/4を欠損し、また背は1/2強が欠落している。本銭は腐蝕・磨滅が著しく、遺存状態は極めて劣悪である。計

測値は外径2.5㎝、内郭径0,6㎝である。この銭貨は皇朝十二銭のうちの和同開珎、萬年通寶、神功開寶のいづれかである可能性が考えられる。

地鎮・鎮壇　第16号掘立柱建物柱穴より出土した上記3枚の銭貨は、明らかにこの建物を対象とした祭祀行為に係わる埋納物であると考えられる。こうした祭祀供養の儀式は、新しい建物を建立する際に、その工事の無事・安全そして平穏な生活が永く営まれることを願って建築の造営工事の一過程において何らかの形で行なう埋納行為で、一般的には地鎮祭とか鎮壇供養と呼ばれている。しかしながら、この両者を遺構・遺物の面から截然とすることが困難な場合が多い。

今回の調査例は、桁行3間、梁行2間の南北棟西側柱列北第2柱穴掘形より3枚の銭貨が重なり合った状態で出土したものである。このような出土状況は柱を立てている際の埋納鎮物であることを示唆するもので、そこで挙行された立柱祭にともなっての埋納行為と窺われる。このような建物の柱穴に鎮物埋納する例(註7)として、県下では寺家遺跡砂田地区01A建物、桁行9間、梁行2間の東西廂付南北棟建物の間仕切りの中心柱穴より「隆平永寶」1枚の出土がある(註8)。先年、発掘調査された金沢市千木ヤシキ田遺跡では第9号建物、桁行8間、梁行2間の南北両廂付東西棟南側柱列の中心柱穴より「和同開珎」3枚、「萬年通寶」1枚、「神功開寶」2枚、銭種不明銭1枚の出土があり、第12号建物、桁行7間、梁行2間の東西棟の南西隅柱穴より「萬年通寶」1枚が出土している(註9)。また奈良平城京の調査報告によれば、左京三条二坊十五坪のSB970桁行5間、梁行4間の南北両面廂付東西棟の身舎西北隅柱穴より「和同開珎」1枚、左京四条三坊一坪SB07建物の身舎西南隅柱穴より「水昌玉」1点、右京二条二坊六坪のSB545桁行3間以上、梁行2間の南面廂付東西棟の南廂柱穴より「和同開珎」4枚以上、左京四条四坊九坪のSB2390桁行6間、梁行3間の東・南二面廂付南北棟の身舎東北隅柱穴より「和同開珎」1枚の出土例が知られている(註9)。

さて、管見にのぼった上記例から類推すると、鎮物埋納の位置は柱列の中心柱穴か、あるいは身舎の四隅柱穴に限られているように看取されるが、その方角については一定性がみられず、特に定まりがないようである。今回の調査例は西側柱列北第2柱穴から出土しており、上記例にみられるような普遍的な埋納位置と異っている点が注意される。この違いは建物における規模・役割的な相違を示すのか、あるいは時期・地域差に起因するものか現状では判らない。さらに銭貨3枚の埋納については、埋納銭貨の多・寡や同種銭貨の埋納などとどのような差異があり、意味がこめられているのか現段階では明らかにすることは不可能である。

本遺跡内において、地鎮・鎮壇の祭祀供養が行なわれた形跡は、本例以外確認されておらず、本建物が遺跡内において特定の建物であった可能性は充分窺知できる。そして、このような建物が存在する遺跡は、また特別な機構を備えた遺跡である可能性が考えられる。大型掘立柱建物遺構、緑釉・灰釉陶器、石帯、鏡など、その卓越した遺跡・遺物の検出などとともに本遺跡を官衙級的な遺跡と想定する傍証の1つと考えられる。ともあれ、本建物例は周辺地域の律令期、とりわけ平安時代前期における建築祭祀研究の1資料であり、今後の資料増加をまって究明に近づきたいと考えている。

渡来銭　本遺跡より出土した渡来銭は「開通元寶」から「永楽通寶」までの18種55枚と銭種不明の9枚、計64枚が数えられる。出土枚数が寡少であるが一応鋳造国別の出土傾向をみると、北宋銭の出土率が1番高く、唐銭、明銭の順である。これは各地の遺跡からの出土率と同様で一般的な傾向を示すものである。

わが国の貨幣鋳造は先にも述べたように、708（和銅元）年に「和同開珎」が初めて鋳造されて以来、958（天徳2）年の乾元大寶鋳造までの約250年間、十二種の銭貨を鋳造してきたが、律令体制の衰退とともに廃止されている。しかし、その後一般社会において通貨の需要は続き、その不足から中国の銅銭を12･13世紀頃から輸入し、流通し、年貢物の代銭納化など貨幣経済が浸透していった。その後、近隣諸国の銅銭も混在し日明貿易などによって、膨大な量の銅銭が輸入されるようになってから、わが国の商品貨幣経済は画期的な発展をとげたのである。日本各地より出土する備蓄銭の出土例は、そうした流通経済社会が広範に展開していたことを物語るものであり、また近年発掘調査が増えてきた中世遺跡からは渡来銭の出土事例の報告がなされており、中世社会における貨幣流通経済が広範な地域に浸透していたことを示すものである。

県下において、渡来銭が比較的多く出土した遺跡として門前町道下元町遺跡[註10]・穴水町西川島遺跡群[註11]、金沢市普正寺遺跡[註12]、鳥越村鳥越城跡[註13]が挙げられる。このうち鳥越城跡は性格上異なるので除くとして、他の諸遺跡には個々の差異は認められるものの、河口に営まれた集落遺跡として立地条件などに共通性が窺える。本遺跡もこれらの遺跡と同様、大野川河口に営まれた集落遺跡である。大野川の水運は当周辺域における商品流通経済の発展に大きな役割を果してきたことは充分指摘される。そして、本遺跡は後背地内陸部への物資供給の基地的な側面を備え、貨幣流通経済を活発に展開していたと推測できる。（芝田）

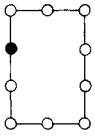
(1)　平田天秋・東四柳史明　『金沢市・戸水C遺跡発掘調査概報　金沢港泊地造成事業関係堀蔵文化財発掘調査概要報告書』（以下「金沢港泊地……」省略）　石川県教育委員会　1976年　金沢。
(2)　田島明人・平田天秋・端野英子　『金沢市戸水C遺跡発掘調査概報』　石川県教育委員会　1979年　金沢。
(3)　浅田耕治氏より御教示を受ける。
(4)　石川県立郷土資料館学芸員戸澗幹夫氏より御教示を受ける。
(5)　芝田悟　「和同開珎について」『石川考古』第163号　石川考古学研究会　1985年　金沢。
(6)　注4と同じ。
(7)　当埋文センター主査小嶋芳孝氏より、付近では皇朝十二銭の出土例が多く、柱穴（柱穴番号は三・へ）覆土中より出土していることから紛れ込みの可能性も考えられるとの御教示を受ける。
(8)　金沢市教育委員会文化課主事出越茂和氏より御教示を受ける。その他にも、桁行3間、梁行2間建物の中央ピットに和同開珎1、萬年通寶2、神功開寶7、銭種不明3枚の埋納、そして本文の桁行7間、梁行2間東西棟建物内の北側柱列寄りピットに和同開珎2、萬年通寶2、神功開寶6、銭種不明銭1枚の埋納、それから溝内ピットに萬年通寶2、神功開寶3、富壽神寶4、銭種不明銭1枚の埋納、さらに土師器埦多数を埋納するピットが確認されているが、今報告では柱穴埋納に限定しているため載せなかった。
(9)　奈良国立文化財研究所編　『平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告』　奈良国立文化財研究所　1984年　奈良。
(10)　西野秀和・宮下栄仁他　『門前町道下元町遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年　石川。
(11)　石川県立中島高校教諭四柳嘉章氏より渡来銭135枚が出土していると御教示を受ける。

(12) 浅香年木・櫻井甚一・吉岡康暢他　『普正寺』　石川考古学研究会　1970年　金沢。
1983年度の発掘調査では渡来銭161枚が出土、分布調査で1枚が出土している。
(13) 西野秀和他　『鳥越城跡発掘調査概報』　鳥越村教育委員会　1979年　石川県鳥越村。

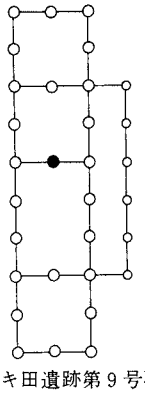
〔参　考　文　献〕

(財)元興寺文化財研究所考古学研究室　『古代研究』18　(財)元興寺文化財研究所考古学研究室　1979年　奈良。
『古代研究』28・29　(財)元興寺文化財研究所考古学研究室　1984年　奈良。
奈良国立文化財研究所編　『平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告』　奈良国立文化財研究所　1984年　奈良。

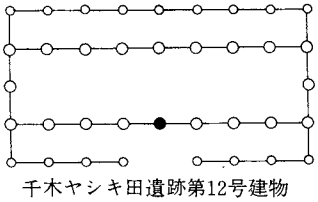
戸水C遺跡第21号建物



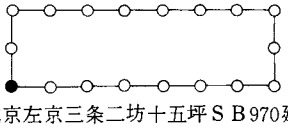
寺家遺跡砂田地区O 1 A建物



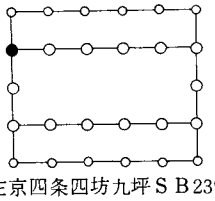
千木ヤシキ田遺跡第 9 号建物



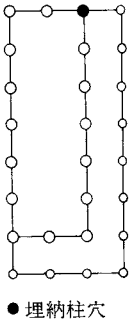
千木ヤシキ田遺跡第12号建物



平城京左京三条二坊十五坪S B970建物



平城京左京四条四坊九坪S B2390建物



● 埋納柱穴

(注) 各建物の上方は北方向を示す。但し、各々に若干のズレはある。

第38図　埋納(銭貨)掘立柱建物一覧

第1表　出土銭貨一覧

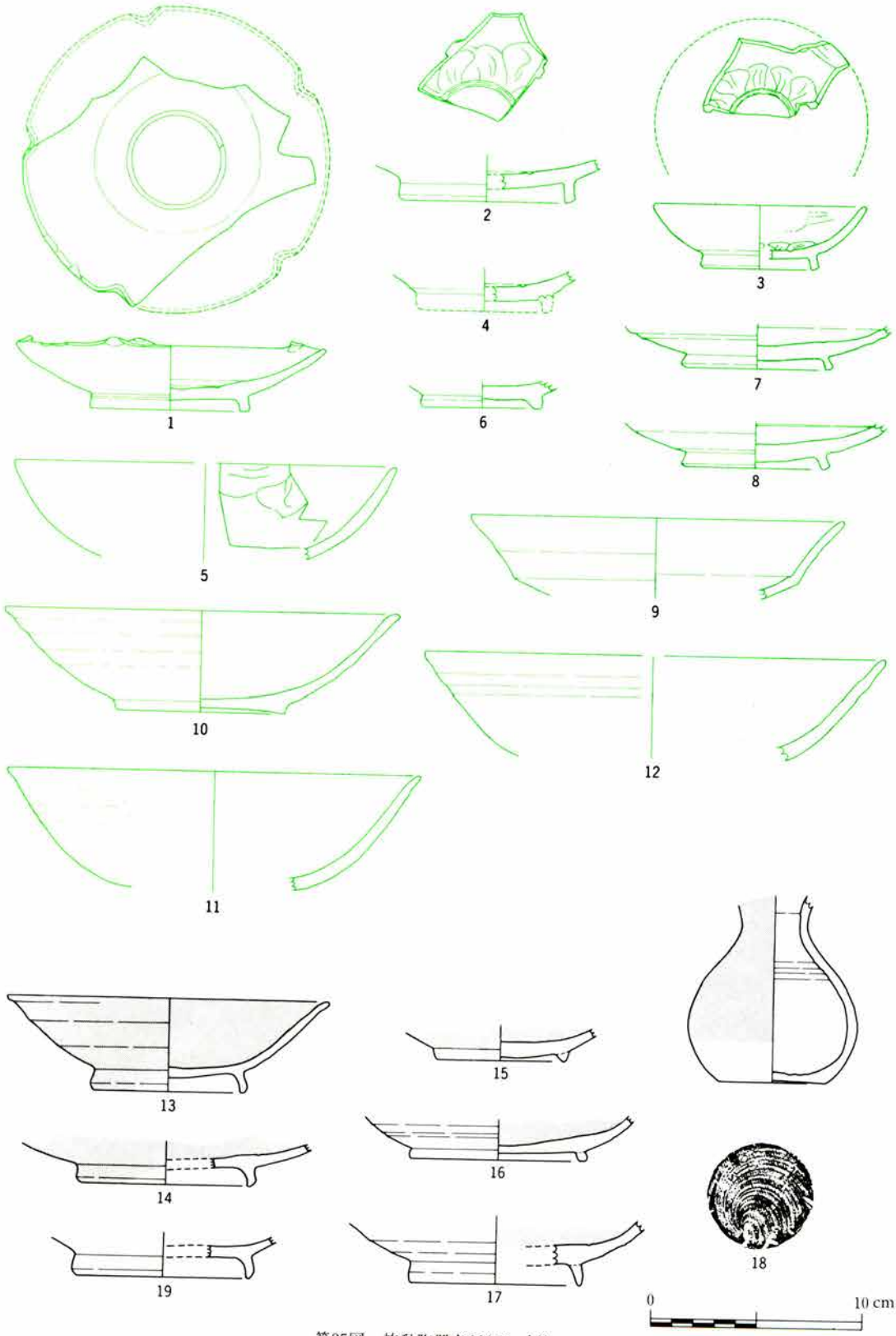
番号	出土品	銭貨名	時代	初鋳年（西暦）	書体	枚数	備考
1	1975年調査	開通元寶	唐	武徳4年　(621)	隷	1	J－5区、第2層
2		□寧□□			楷	1	耕作土
3	1978年　〃	熙寧元寶	北宋	熙寧元年　(1068)		1	
4	1981年　〃	天禧通寶	〃	天禧年間　(1017～22)	楷	1	採集
5		皇宋通寶	〃	寶元2年　(1039)	篆	1	〃
6		元豊通寶	〃	元豊元年　(1078)	行	1	D－6区、包含層
7		銭種不明				1	〃
8	1982年　〃	和同開珎	奈良	和銅元年　(708)	楷	1	第21号掘立柱建物柱掘形
9		神切開寶	〃	天平神護元年　(765)	〃	1	〃
10		銭種不明				1	〃
11	調査地通路	開通元寶	唐	武徳4年　(621)	隷	1	一括採集（包含層）
12	波打際	涼化元寶	北宋	淳化元年　(990)	楷	1	〃
13		〃	〃	〃　(〃)	草	1	〃
14		至道元寶	〃	至道年間　(995～7)	〃	1	〃
15		咸平元寶	〃	咸平元年　(998)	楷	2	〃
16		景徳元寶	〃	景徳2年　(1005)	行	3	〃
17		天禧通寶	〃	天禧年間　(1017～22)	楷	1	〃
18		天聖元寶	〃	天聖元年　(1023)	〃	1	〃
19		景祐元寶	〃	景祐元年　(1034)	篆	1	〃
20		皇宋通寶	〃	寶元2年　(1039)	楷	1	〃
21		〃	〃	〃　(〃)	隷	1	〃
22		〃	〃	〃　(〃)	篆	3	〃
23		嘉祐通寶	〃	嘉祐年間　(1056～63)	楷	1	〃
24		治平元寶	〃	治平元年　(1064)	〃	1	〃
25		熙寧元寶	〃	熙寧元年　(1068)	〃	5	〃
26		〃	〃	〃　(〃)	篆	4	〃
27		元豊通寶	〃	元豊元年　(1078)	行	4	〃
28		〃	〃	〃　(〃)	篆	5	〃
29		元祐通寶	〃	元祐元年　(1086)	行	2	〃
30		〃	〃	〃　(〃)	篆	3	〃
31		紹聖元寶	〃	紹聖元年　(1094)	行	2	〃
32		聖宋元寶	〃	建中靖国元年　(1101)	〃	1	〃
33		政和通寶	〃	政和元年　(1111)	篆	1	〃
34		永楽通寶	明	永楽6年　(1408)	楷	2	〃
35		銭種不明				8	〃
合計						66	

7　その他の遺物

緑釉陶器（第35図1～12）　図化し得た12点について若干その特徴等について記すこととする。1は、口径14.8cm、器高3.1cm、高台径3.7cmを測る五輪花皿になるものである。輪花は外面よりの指頭によるものと思われ、その両側の口縁端部は2ないし3個所ヘラ状具により快り取られている。須恵質で内外全面に淡い緑釉を施している。内面見込み部分には径5.0cm、同7.0cmの圏線が認められる。つぎに陰刻花文を施したものについて見てみよう。2は全形を知り得ることができないが、高台径8.2cmを測るもので、やや大振りの皿（椀か）形をなすものであろう。内面の径4.2cmを測る圏線に沿って連続する花弁を施すものである。花弁は三弁一単位で四ヶ所に配されるものと推定できる。須恵質のもので内外全面に淡い緑釉を施すものである。3は、口径10.0cm、器高3.1cmを測る小形の高台付椀である。内面の圏線に沿って三弁一単位で花弁を四ヶ所に連続して線描し、また、口縁端内面にも五単位（三弁一単位）と推定される下向きの花弁が描かれている。このタイプのものは、普通輪花をなすものが多くこれも五輪花椀になる可能性がある。底部には糸切り痕を残す。須恵質で淡い緑釉を施す。4も2と同様な花弁を施す皿形をなすものと思われる。5も破片であるため全容を知り得ないが、口縁端内面には、ほぼ三弁五単位の下向きの花弁が線描されるものであろう。内面見込みの部分にも花弁が線描されていたかどうか破片のために不明であるが線描されていなかった可能性が大きい。1～3と同様に須恵質で釉調も非常に似通っている。9は、口径17.6cmを測るもので体部中央部で屈曲して稜をもついわゆる稜椀である。体部外面稜近くより腰部にかけてはヘラケズリ他はナデと観察される。10は、口径19.0cm器高4.8cmを測る椀である。ベタ高台でヘラケズリされる。(いわゆる切り高台である。)土師質で淡い緑釉を施しているが表面の剝落が甚しく遺存状態は決して良くない。11、12も同様に碗形のものであるが11は須恵質で釉調は暗く、12は土師質で淡い緑釉を施すものである。また、緑釉陶器の中で底部に糸切り痕を残すものは3、4、7のみであるが、他は再調整のために観察不可能である。

灰釉陶器（第35図13～18）　全形を知り得る資料は少ない。13は、口径15.0cm、器高4.5cmを測り底部外面と内面見込み部分には施釉されない。内面見込み部分に重ね焼の痕跡が認められる。胎土は灰白色を呈し、釉は淡緑色の発色をし釉むらが多く見られる。高台は断面三日月形を呈する三日月高台が付けられる。15～16については内全面に施釉し、残存する外底面には施釉は認められない。15の底部には墨書痕が見られる。18は底径5.2cm、最大胴径8.0cmを測る手付瓶と推定される。灰釉は胴部上方にのみ施釉する。底部には糸切り痕を留める。

これまで6次にわたる調査で出土した施釉陶器はかなりの量にのぼる。緑釉陶では椀、皿、手付瓶、唾壺、香炉などがあり、灰釉陶では碗、皿、瓶が出土している。今回報告の分はそのほとんどが猿投窯産（嶋海、篠岡）で10のみが京都石作窯の可能性がある。調査年次、調査地点によって新旧の別、産地別が見られ概して猿投窯産が多いのであるが、京都、滋賀産のものもかなりの数量が含まれると思われるが詳細な検討を経ていないので明確なことは言えない。今回の報告の陰刻花文を有するものは、そのほとんどのものについて簡便化が進んでおり黒笹90号窯式かそれ



第35図　施釉陶器各種（S＝1/3）

以降の所産であろう。また、灰釉陶の13も黒笹90号窯式のものであろう。

墨書土器（第36図1～7）　先に報告した以外で、その他の遺構や包含層などから出土したものを図示した。本遺跡の代表的な墨書土器は「依」であり、今回の調査でも出土頻度が最も高い。ついで「上」が目立った。なお、本調査区では、坏蓋を利用した転用硯が認められたが、過去の調査で出土している円面硯や風字硯の出土はなかった。

銅鏡（第36図8）　第12号建物跡の内部より出土した。全体の約8分の1の大きさを窺うことができた。復元口径は18cm位で、蒲鉾縁を呈する縁厚は0.43cmを測る。鏡片中央寄りに花弁をあしらった鏡背文様が認められるが不鮮明である。亀井正道氏の教示によれば、日本には類例のない唐式鏡であり、鏡背文様が近似するものに男体山出土の花枝飛鳥鏡(註1)があるという。しかし、口径は本遺跡のものが大きく、平縁の幅も広い。

管玉（第36図9）　C－4区の包含層から出土した。全長2.9cmで、直径約3mmの孔が片面から穿たれている。濃緑色を呈す。

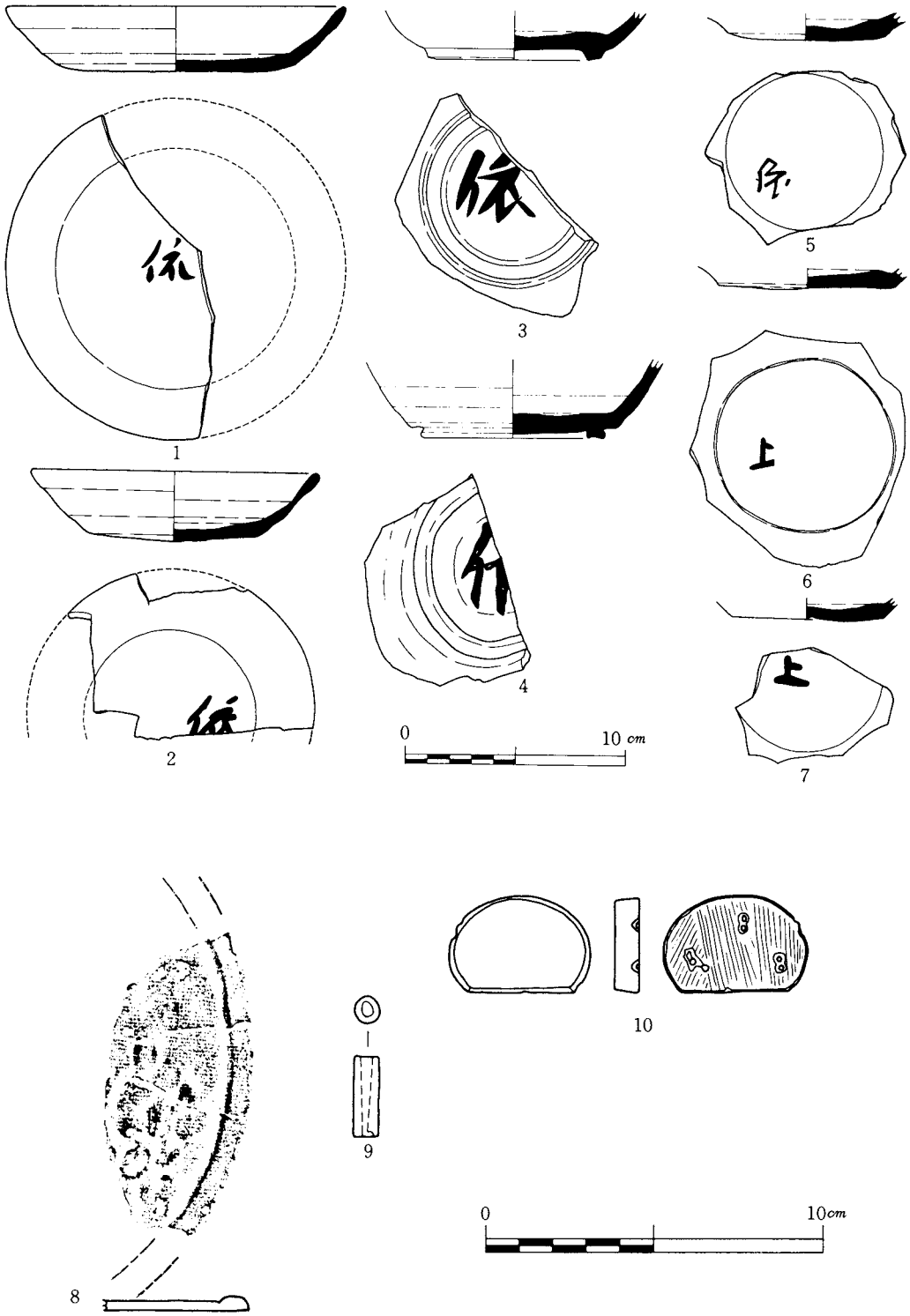
石銙（第36図10）　丸鞆形を成し、横4.2㎝、縦2.8㎝、厚さ0.7㎝を測る。表面、側面はよく磨かれているが、裏面は磨かれていない。3対の貫通する留穴が施されている。

遠賀川系土器（第37図1）　復元口径25㎝を測り、口縁端部が外側へ突出し刻目を有する遠賀川系の甕形土器である。本県では、既に遠賀川系の壺形土器の存在が知られていたが、甕形土器は初例であり、また、海浜部からの出土として注視しておきたい。

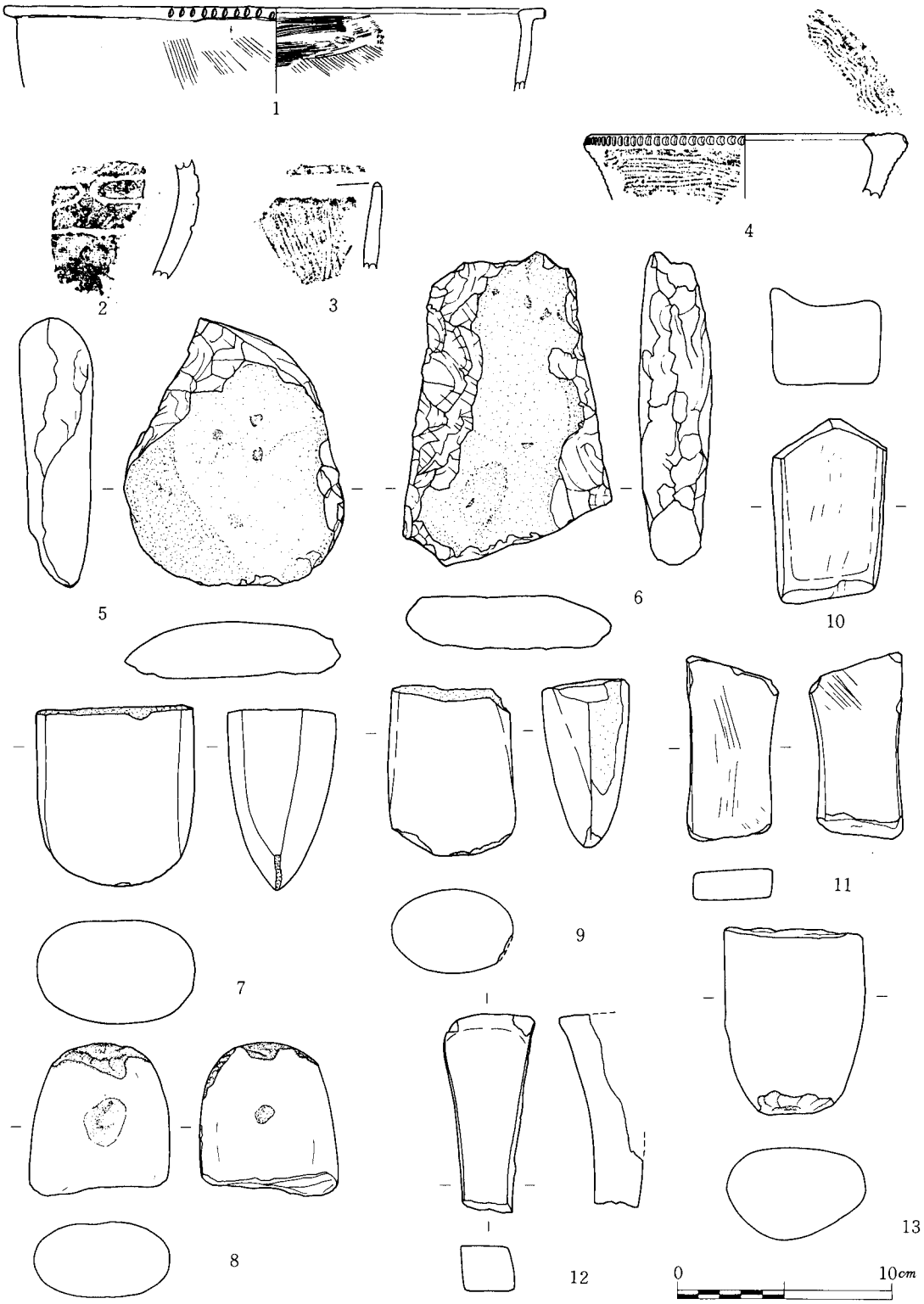
中期初頭の土器（第37図2～4）　2は工字文・沈線、3・4は条痕文が外面に施されており、いずれも柴山出村式の一群とみられる。5の縁端部は、波状櫛状具文と刺突文がある。

石器（第37図5～13）　5・6は大形の打製石器であり、10～12は砥石である。7～9は磨製石斧である。本遺跡では、大形の打製石斧数点が出土しており、金沢平野の弥生集落跡ではよくみられる。

（註1）亀井正道他『日光男体山』・1963年。なお、鏡片の鑑定にあたっては、亀井正道氏より多くの教示を得た。記して感謝の意を表します。



第36図　その他の遺物(１)(土器Ｓ＝1/3、その他1/2)



第37図　その他の遺物(２)(Ｓ＝1/3)

第3節　ま　と　め

数次にわたる調査により、本遺跡にはほぼ次のような特徴がみられた。

1）大野川左岸の水運の便利な要地に立地する。

2）7間×2間や6間×2間などの大型建物跡があり、南北に近い主軸をもって配置された一時期がある。

3）大型建物跡の柱間は七尺ないし八尺となる広いものが多く、なかには掘方の一辺が1mを測り、径約40cmの柱痕と長さ約70cmの礎板を有する大規模なものがある。

4）遺跡の北と東には、溝と道路と推定される遺構に画されている。

5）「依」をはじめとする墨書土器多数と硯が出土している。

6）緑釉・灰釉などの貴重な陶器が顕著である。

7）石帯・鏡などの有位層に関わる遺物が出土している。

8）斎串、緑釉香炉の埋納、建物跡への銅銭埋納などの律令的祭祀の執行が窺える。

以上の諸点より、官衙跡であることは疑いないところであり、現在のところ、加賀国域にあっては最も卓越した内容を有し、国家機構の関連施設である可能性は極めて高い。本遺跡に近接する近岡遺跡では、「解申田中殿□□□」の文書様木簡が出土しており、本遺跡との関連が注目される。田中殿の下には割注とみられる2文字があり、それが「目代」と読める可能性があることから、極めて大きな問題を投じている。つまり、もし「目代」と読めるならば、国司の代官としての目代が存在したことを裏付けるものであり、強いては、小松市古府町に推定されている加賀国の国府所在地についても問題を投じるものである。また、南東に近接する近岡ナガシマ遺跡では、本遺跡と同時期で同質の大型建物跡が検出されており、その西にある大友遺跡でも、方形の掘方をなす建物跡とともに、「依」・「田中」と記された墨書土器が出土している。このように、本遺跡周辺には、多くの平安前期から中期にかかる建物跡が密集しており、あたかも国衙に付属する曹司地区のような様相を呈している。本遺跡の性格については、広く加賀国域内の官衙跡の動態と実態の比較の中で検討する必要があるが、国家機構のなかに包摂された施設とすることについては、異論を唱える人は少ないであろう。(戸澗)

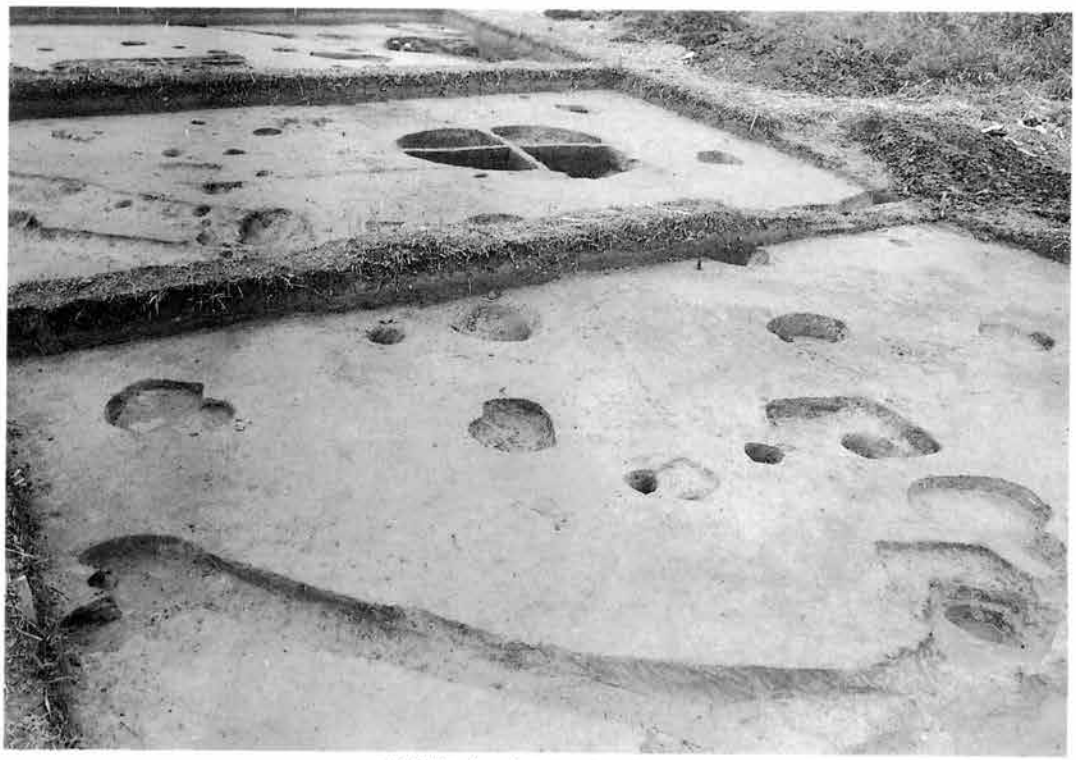
戸水C遺跡(○印下)、近岡遺跡(同上)周辺航空写真(昭和36年撮影、セントラル航業提供)

同　　上(昭和57年撮影、同上)

図版2

遺跡遠景（北より・中央部が遺跡・手前大野川）

A区北調査区（西より・手前A－2号溝跡）



1号建物(上：南より、下：西より)

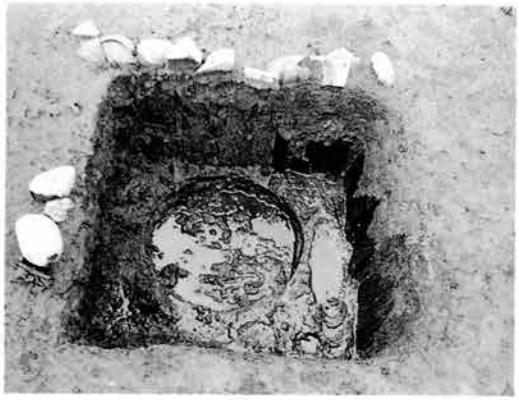
図版4

2号建物(北より)

A－1号溝跡(北より)

（東より）

（南より）



（西より）

（北より）

検出状況

土層関係

A－1号井戸

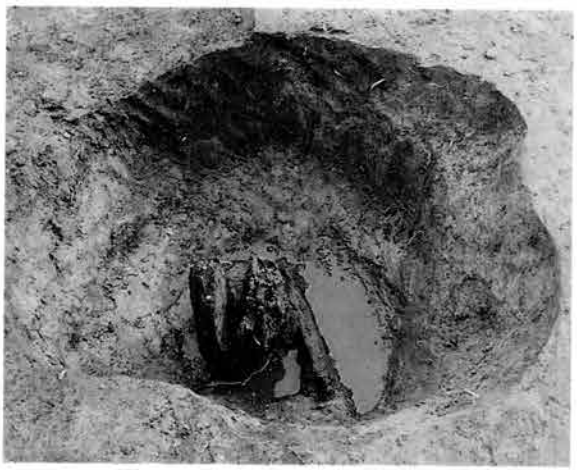
図版6

←（南より）　（東より）

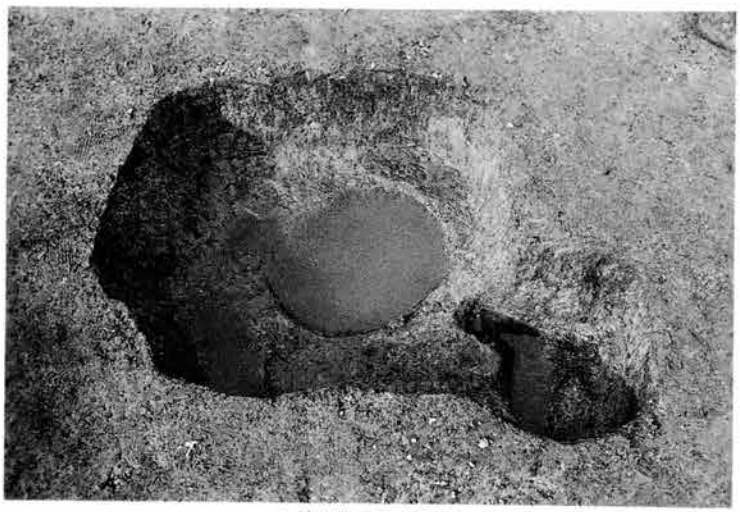
内側細部

Y－2号井戸

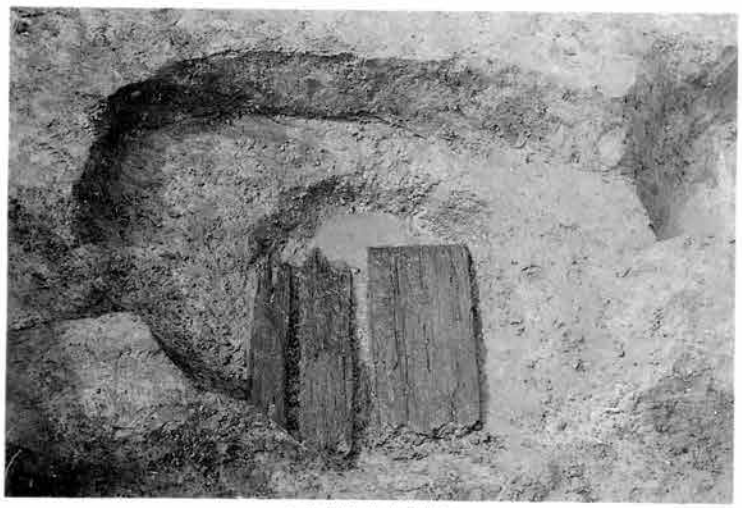
A区西調査区 溝状遺構群（東より）



2号建物北妻列西2

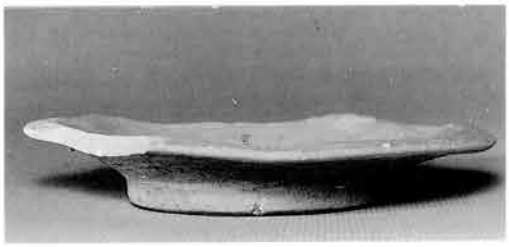


2号建物西側柱列北2

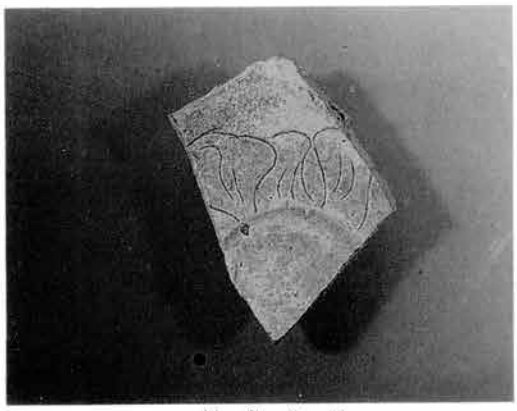


2号建物北妻列東1

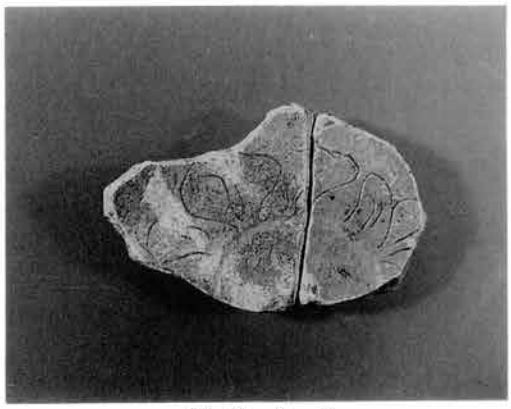
図版8



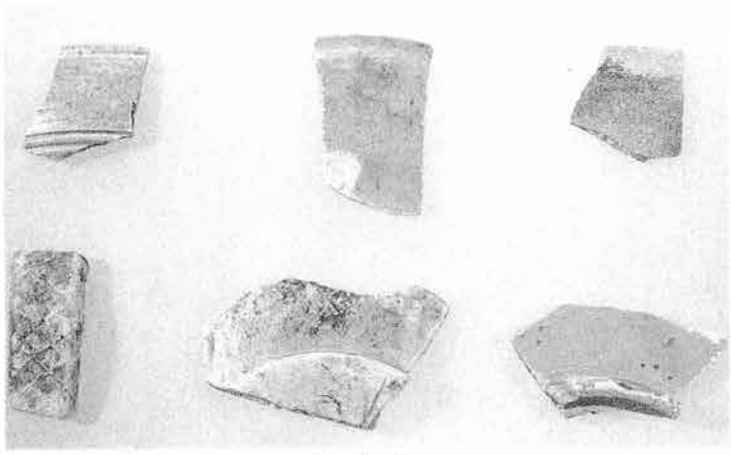
灰釉陶器



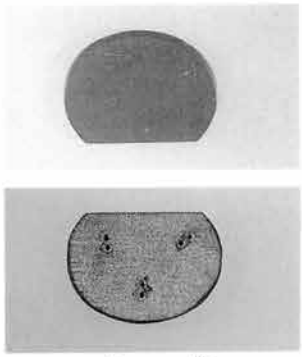
緑釉陶器



緑釉陶器

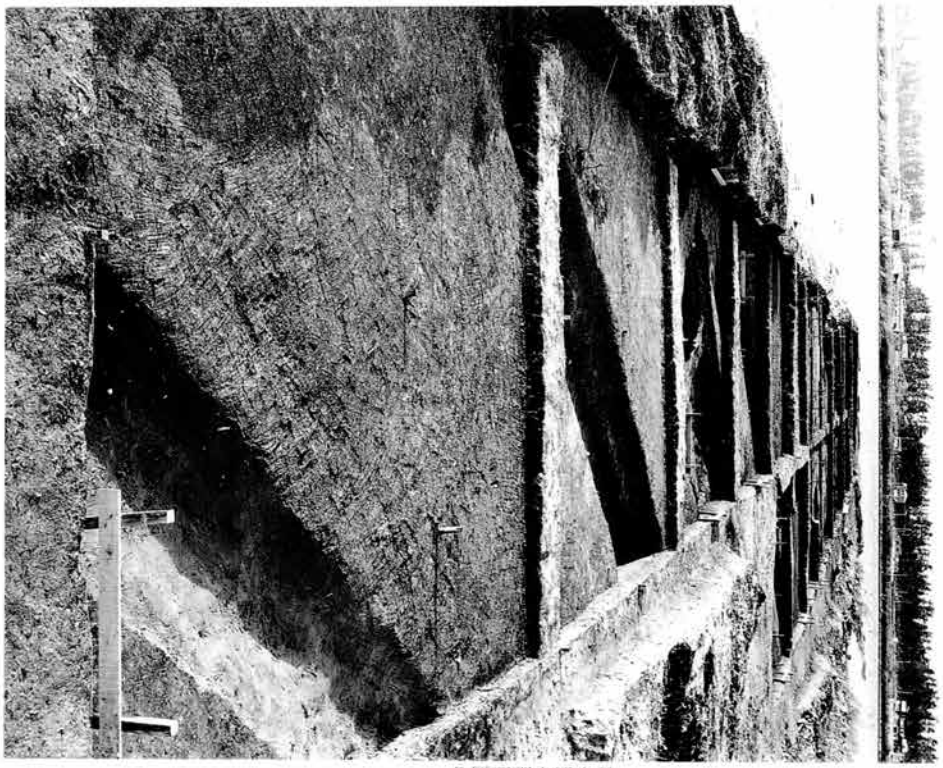


緑釉陶器

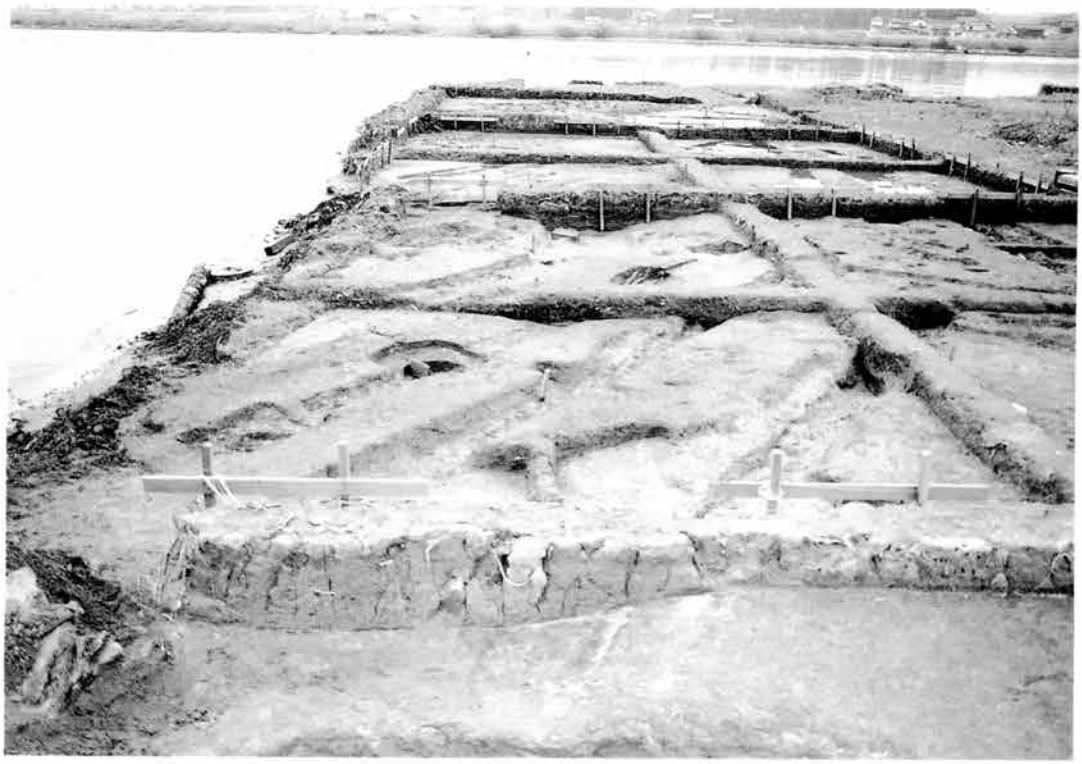


石帯

出土遺物



B区西調査区全景

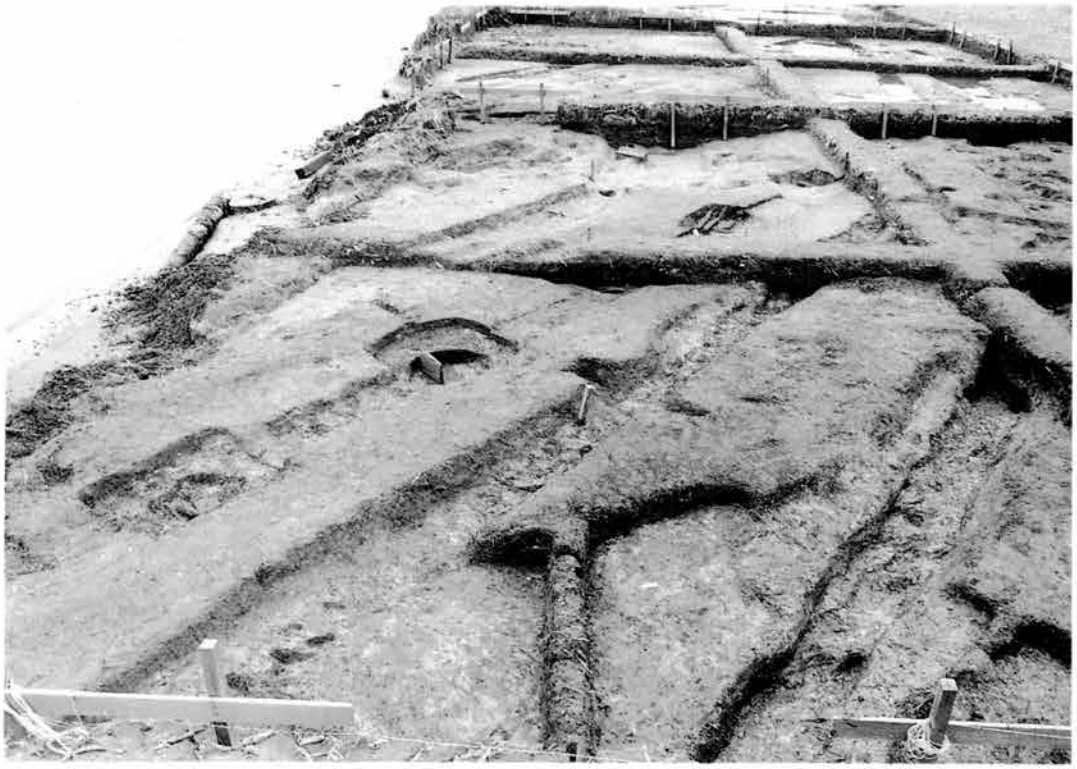


B区3号建物周辺

図版10

B区北調査区(東より)

B区北調査区(南より)

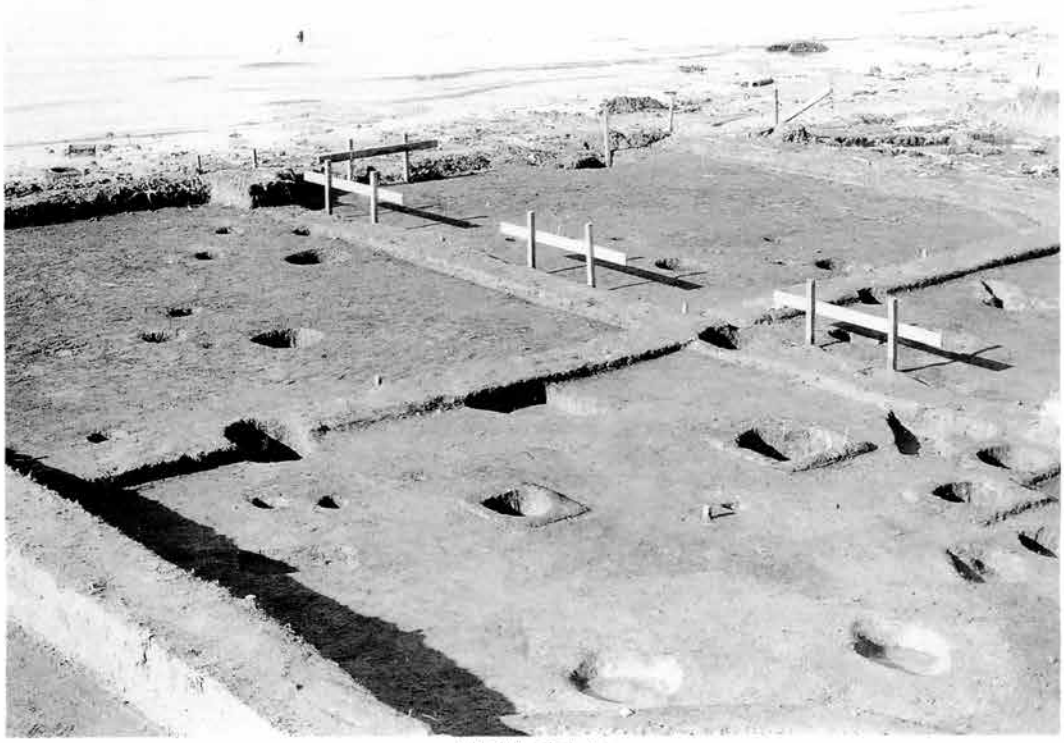


3号建物(南より)

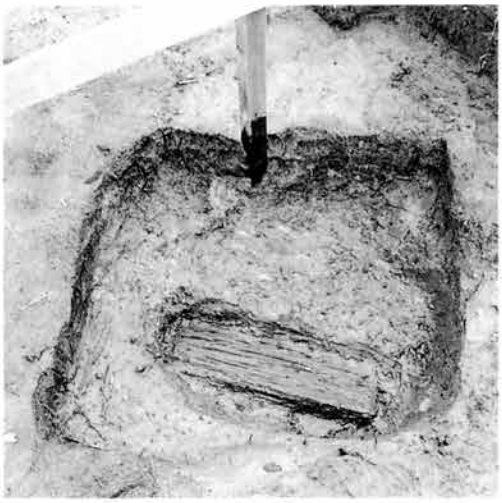
3号建物(東より)

図版12

4号建物(北より)



4号建物(東より)



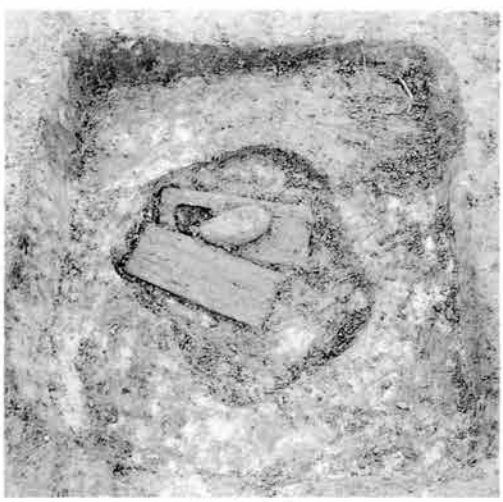
西側柱列北 1

東側柱列北 1

東側柱列北 2

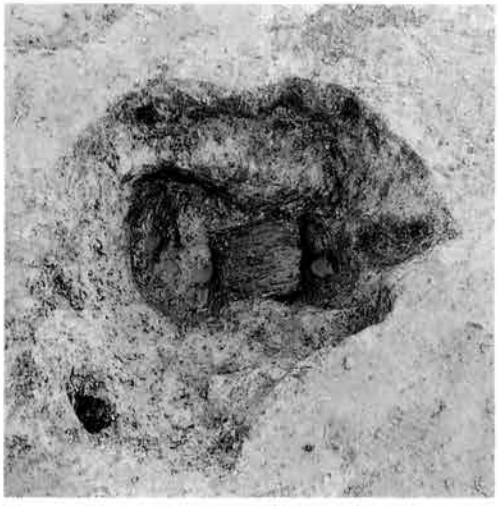
東側柱列北 3

東側柱列北 4



東側柱列北 5

図版14

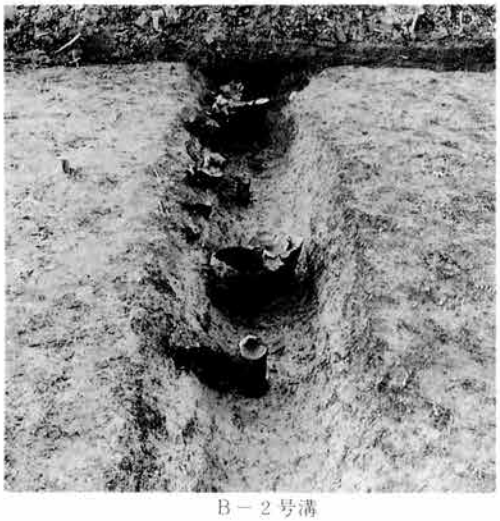


2号建物東側柱列北4

2号建物東側柱列北5

B－1号井戸

B－2号方形竪穴状遺構



B－2号溝

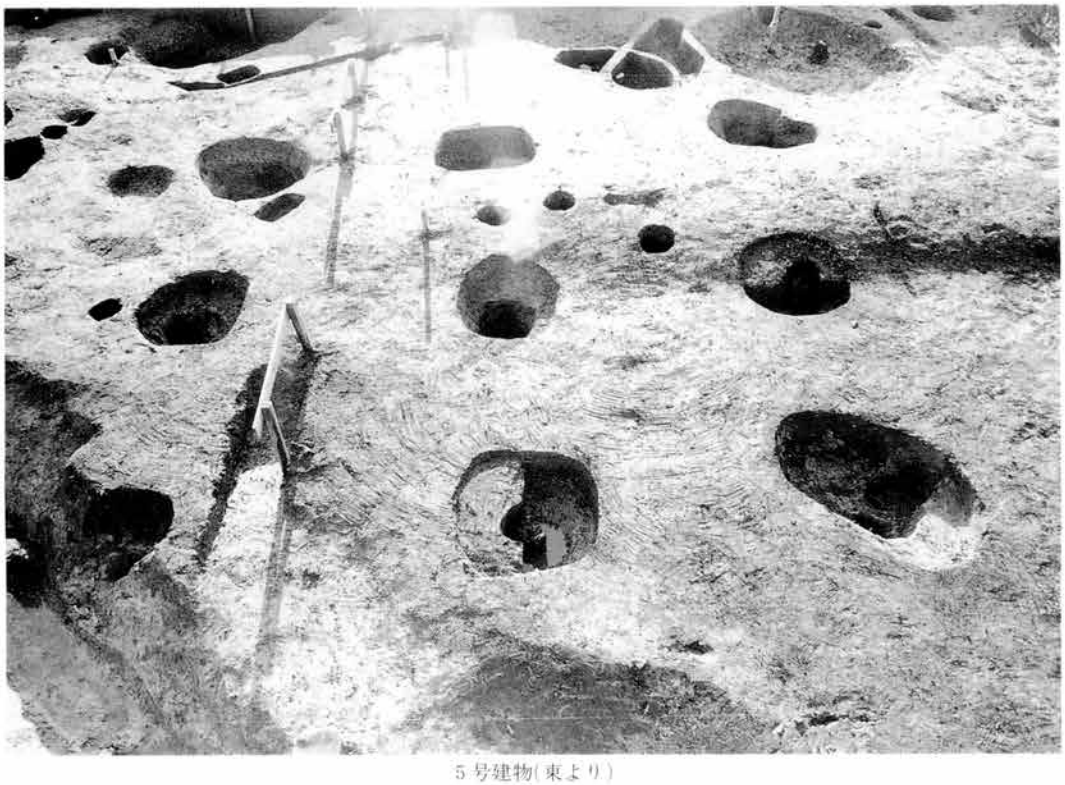
B－2号溝

C区(南より)

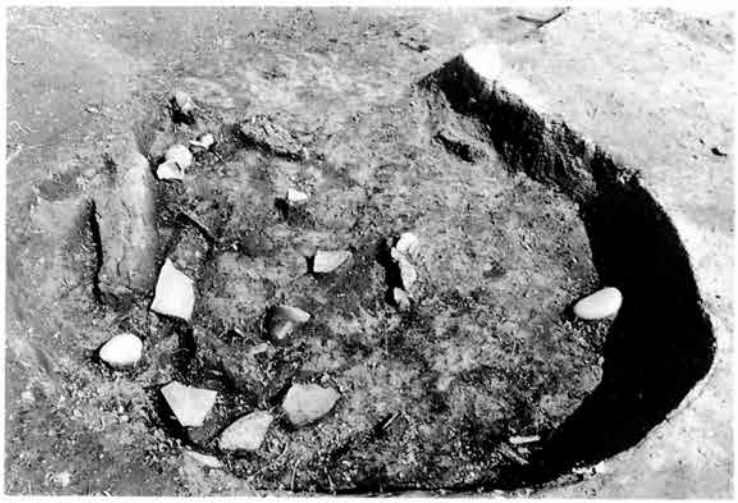
6号建物(北より)

図版16

5号建物(北より)

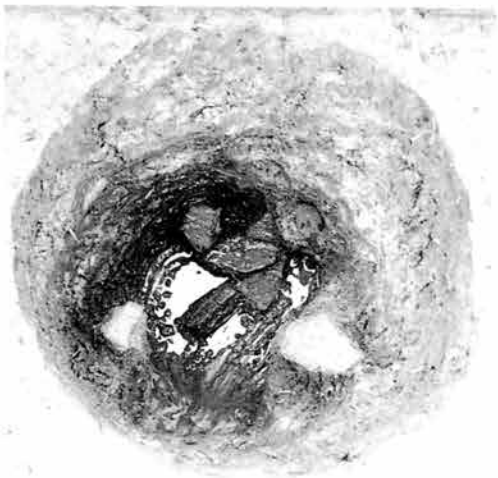


5号建物(東より)



C－1号土坑

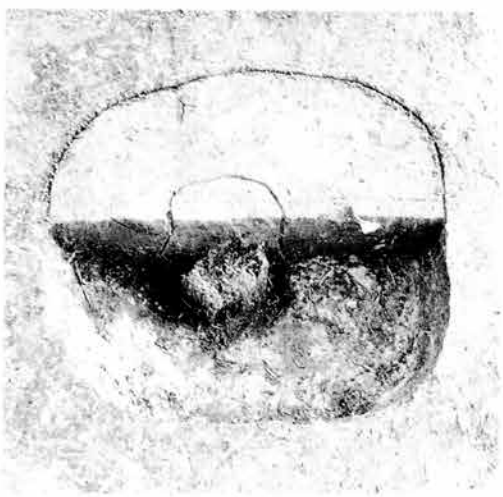
同左　出土状態



C区井戸(？)

C区緑釉香炉出土ピット

C－3号溝



5号建物西側柱列北2

5号建物、C－3号溝(西より)

7号建物、C－7号土坑

図版19　D調査区

▲北から見た調査区

◀作業風景

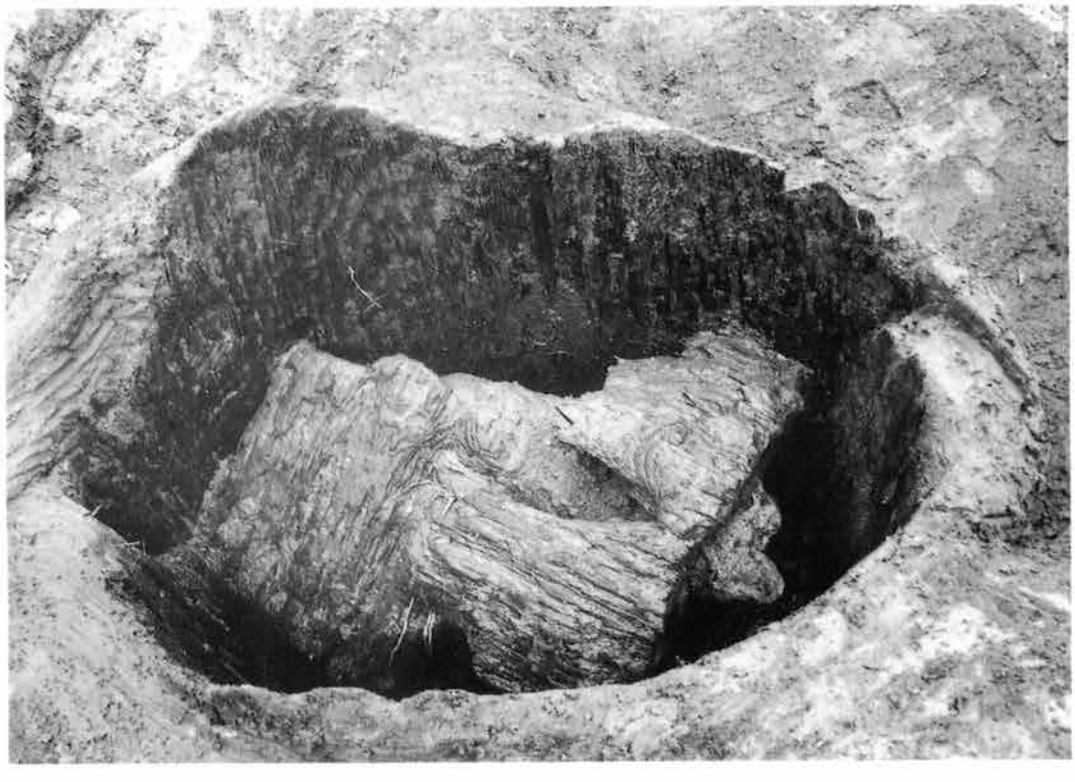
図版20　D調査区

▲▼ 2号建物周辺

9号建物の柱列と礎板

図版22　D調査区

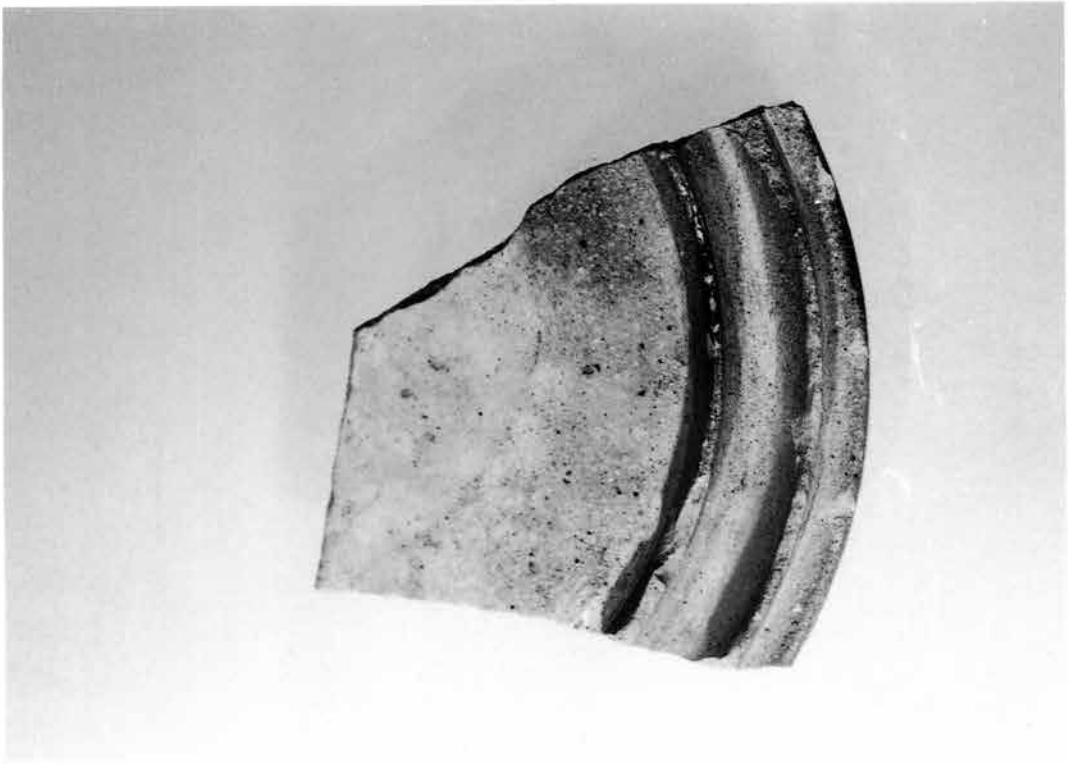
1号井戸

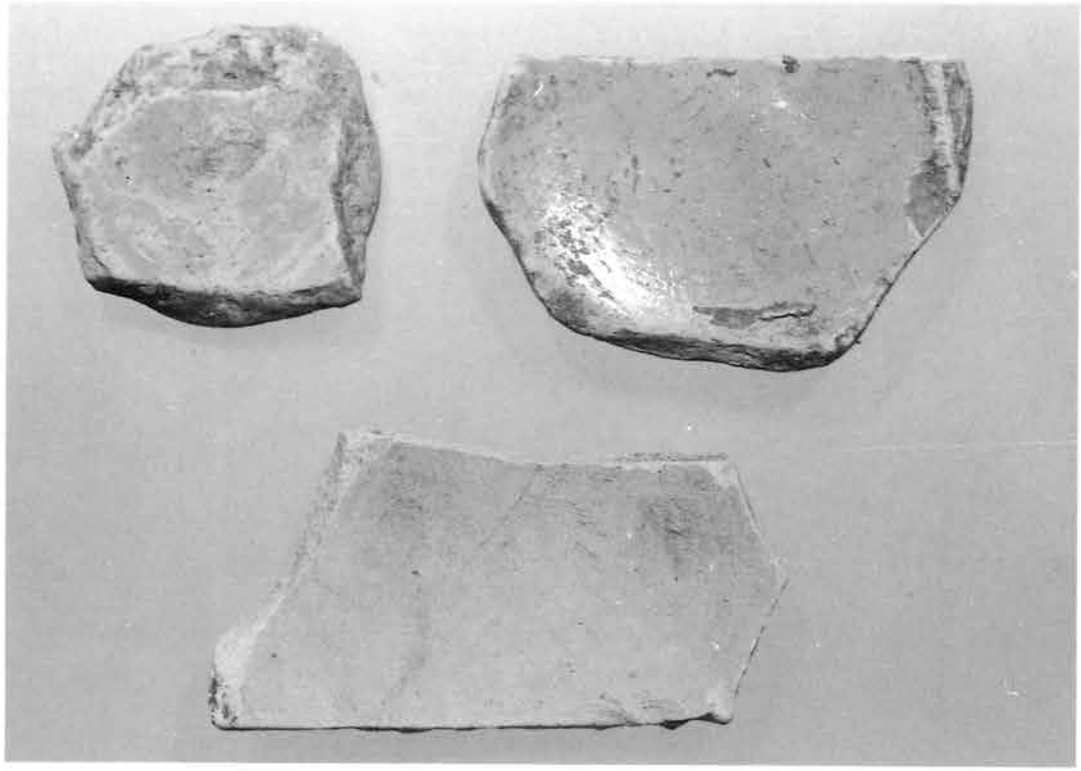


▲▼墨書土器

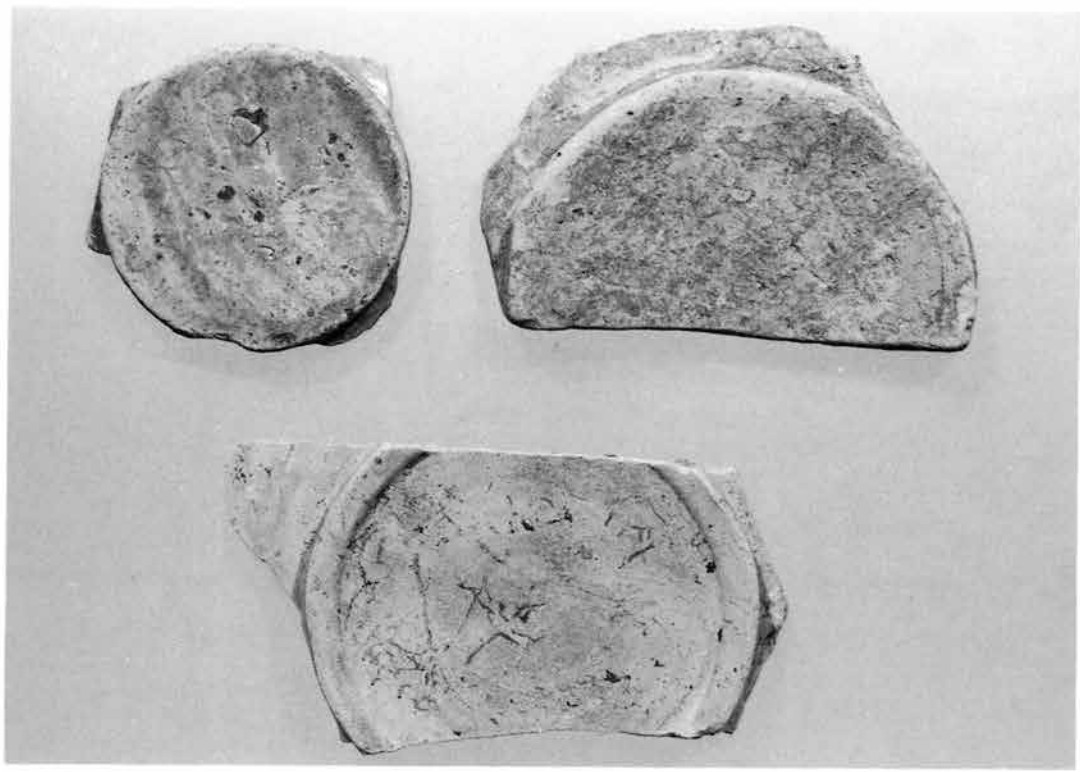
▲墨書土器

▼円面硯

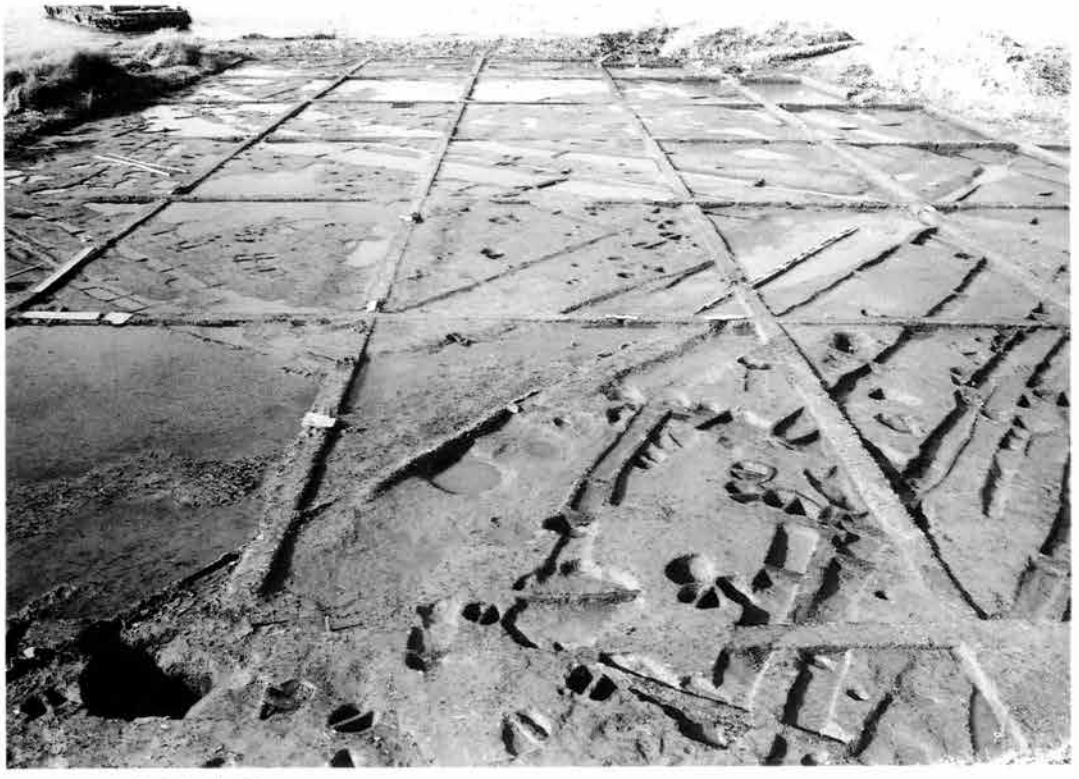




緑釉陶器▲表 ▼裏



図版26　E調査区



▲北東　地区

▼南西　地区

▲溝3－b・4－a・3－a（西より）

▼溝3－aの舟底状遺構

▲溝３－ａ舟底状遺構の遺物（矢印は籠）

▼籠の出土状態

▲溝4－bと溝4－cの接合部(上が北西)

▼溝4－a土器出土状態

▼溝3－a舟底状遺構の調査風景

▲▼303号土坑の土器出土状態

▲溝5・4－c・4－b（北西より）

▼溝4－b・4－c・5（南東より）

▲12号建物(南より)

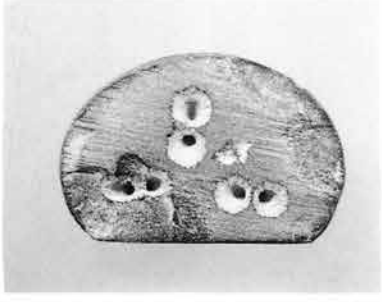
▲溝－5・4－c・4－b、溝2(北より、タワーの下に12号建物)

▲2号井戸

▼1号井戸

図版34　E区出土遺物

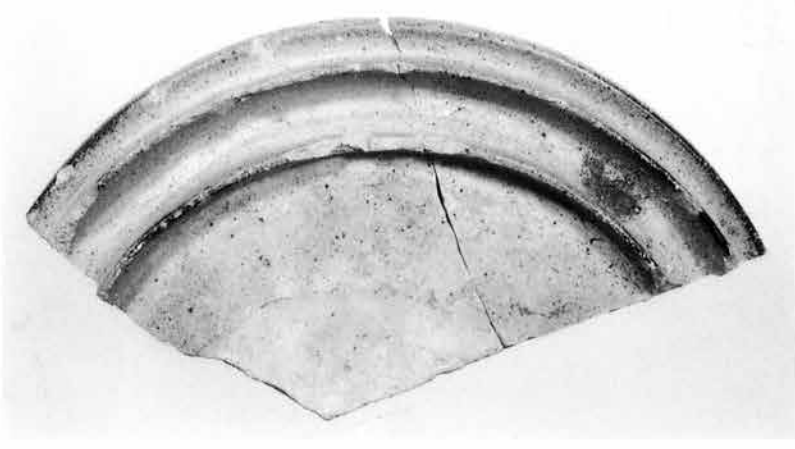
◀石帯　表



裏

▶「廣人」銘墨書土器

▶円面硯



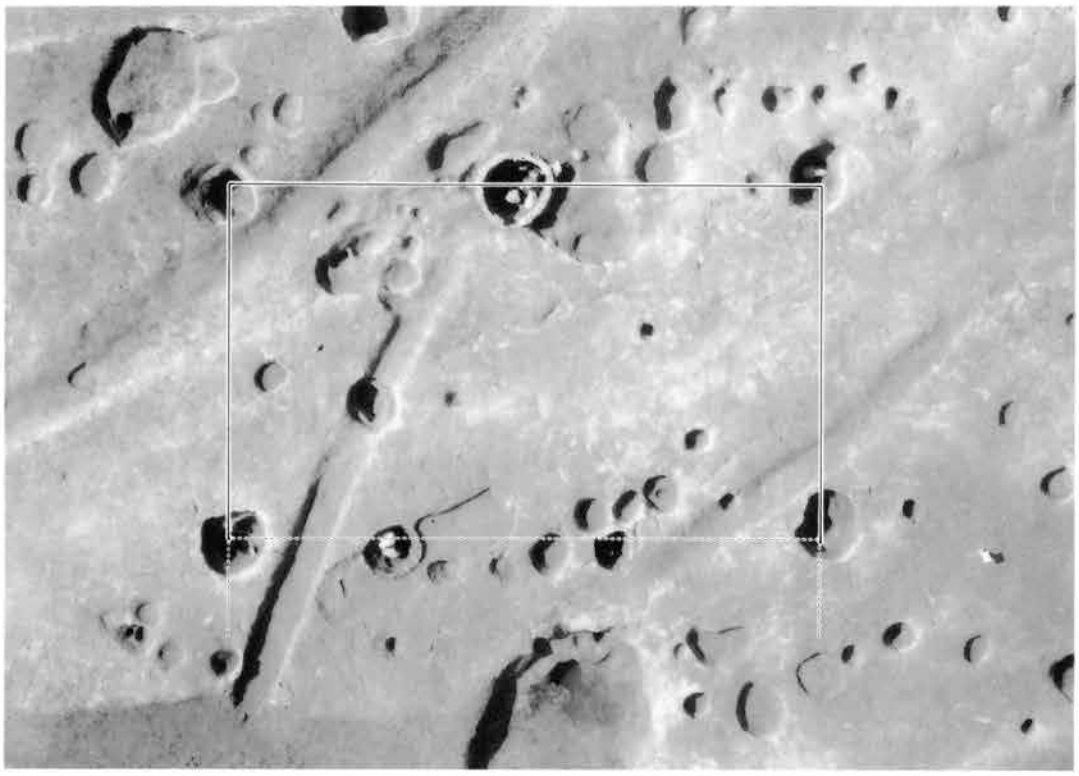
◀琴柱形石製品と管玉（溝3－a）

銅環

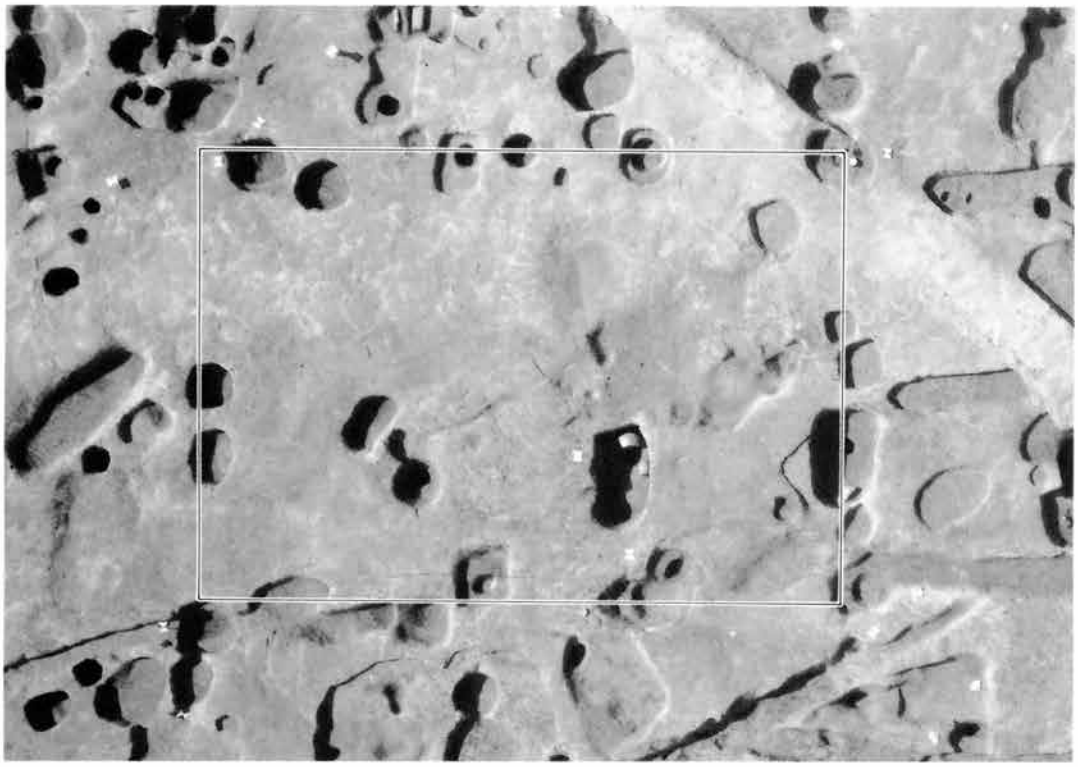
第6次調査区俯瞰

第12号掘立柱建物跡

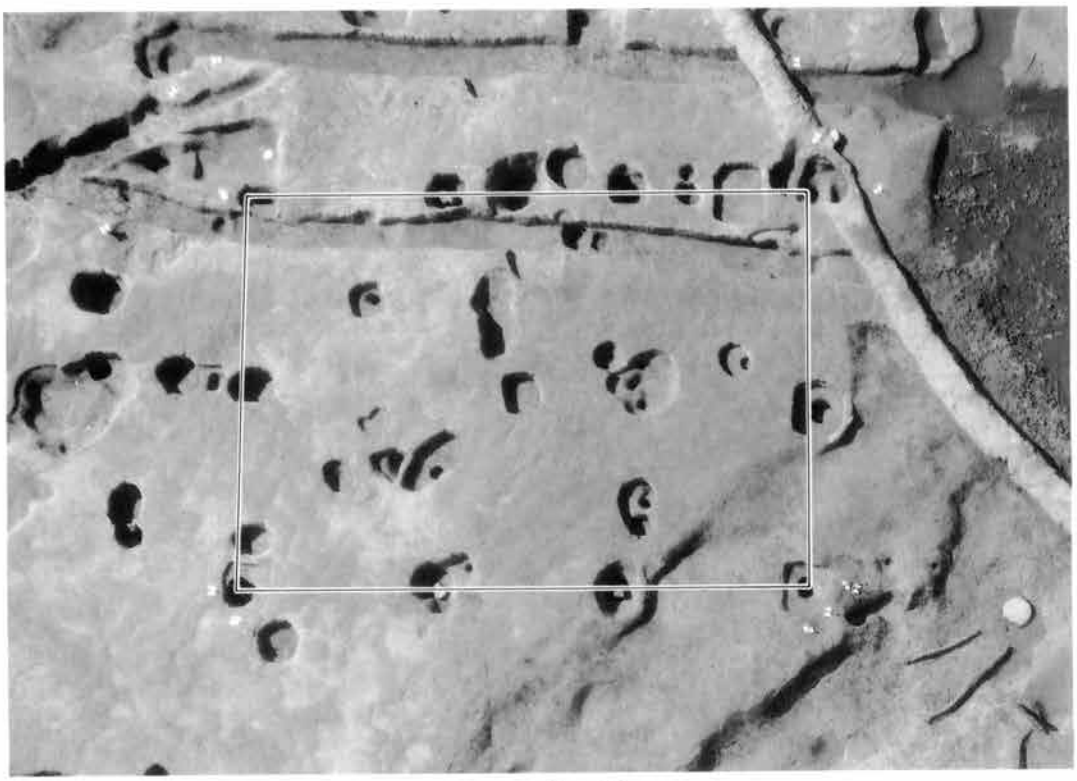
第13～第15号掘立柱建物跡と柵列
（右13号、中14号、左15号、上柵列）



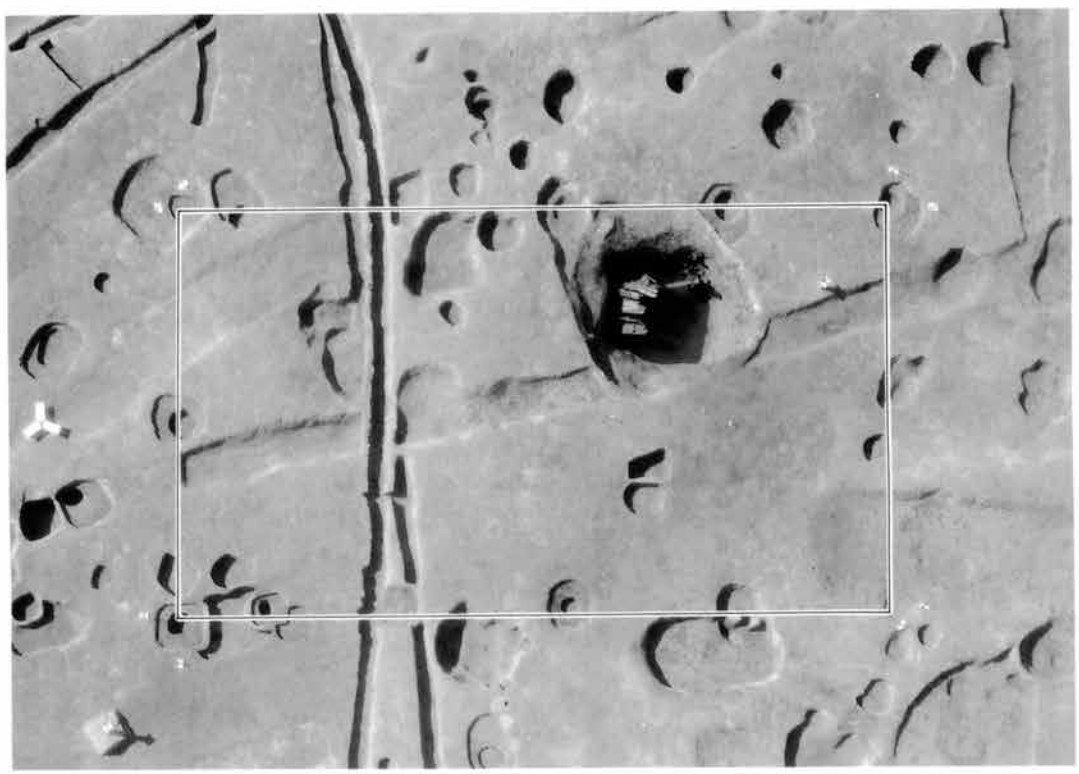
第16号掘立柱建物跡



第17号掘立柱建物跡

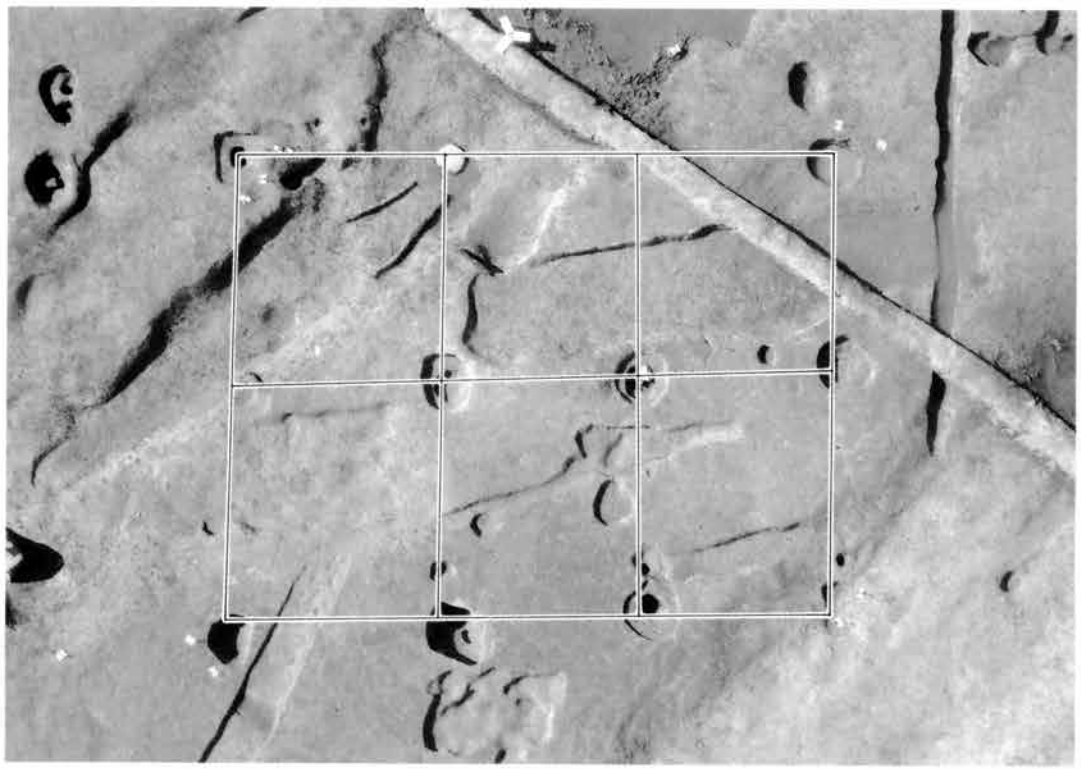


第18号掘立柱建物跡



第19号掘立柱建物跡

第20・21号掘立柱建物跡



第22号掘立柱建物跡

前方後方状遺構(西側から)

前方後方状遺構(南側から)

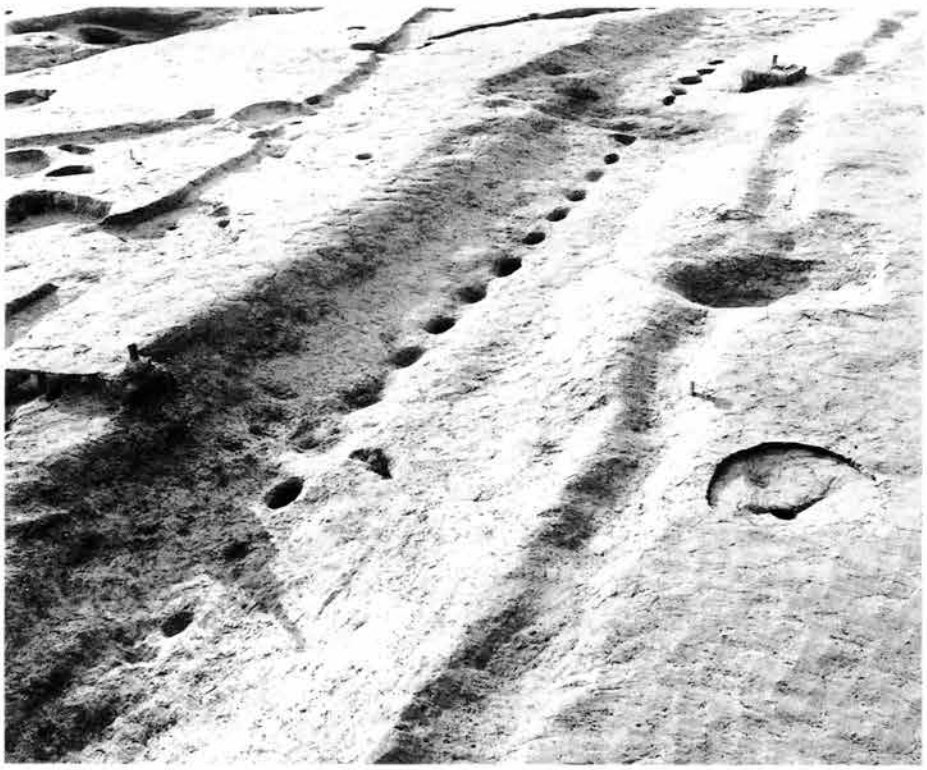
第1号井戸

第2号井戸

第3号井戸

第4号井戸

第5号井戸

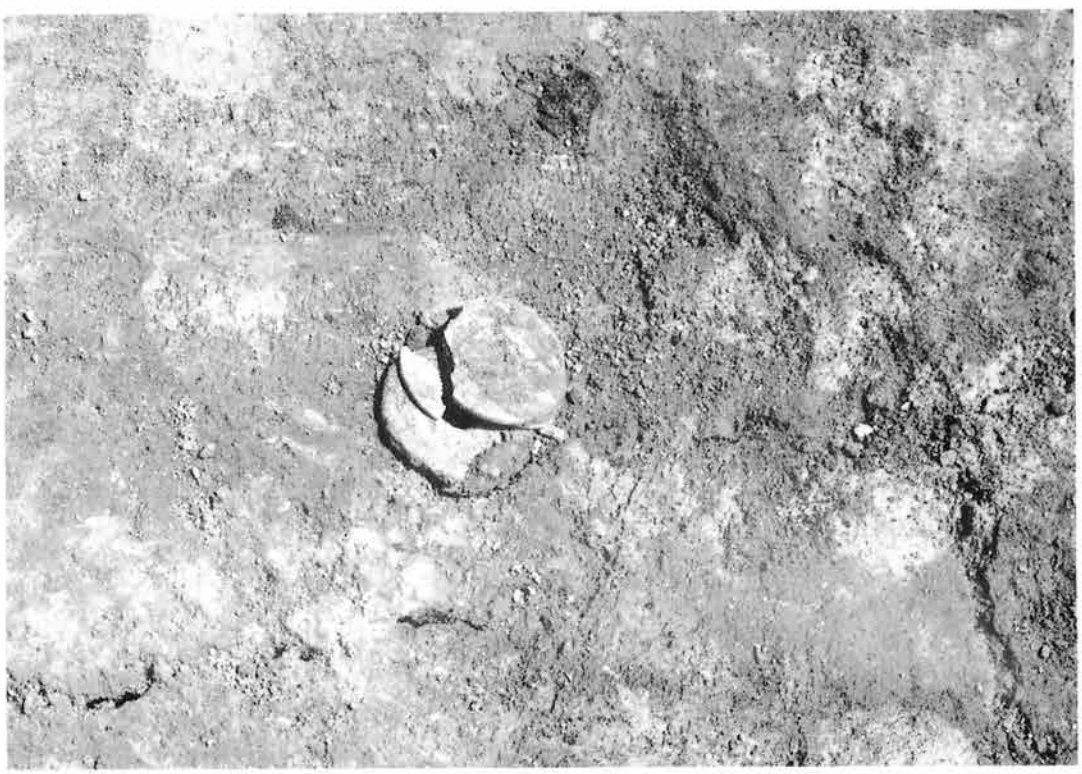


杭列のある第30号溝

道路状遺構

第10号土坑

銭貨出土の柱穴



銭貨の出土状態

図版46

和同開珎(楷)
神功開寶(楷)
開通元寶(隷)
天禧通寶(楷)
皇宋通寶(篆)
元豐通寶(行)
開通元寶(隷)
淳化元寶(楷)
淳化元寶(草)
至道元寶(草)
咸平元寶(楷)
景德元寶(行)
天禧通寶(楷)
天聖元寶(楷)
景祐元寶(篆)
皇宋通寶(楷)
皇宋通寶(隷)
皇宋通寶(篆)
嘉祐通寶(楷)
治平元寶(楷)
熙寧元寶(楷)
熙寧元寶(篆)
元豐通寶(行)
元豐通寶(篆)
元祐通寶(行)
元祐通寶(篆)
紹聖元寶(行)
聖宋元寶(行)
政和通寶(篆)
永樂通寶(楷)

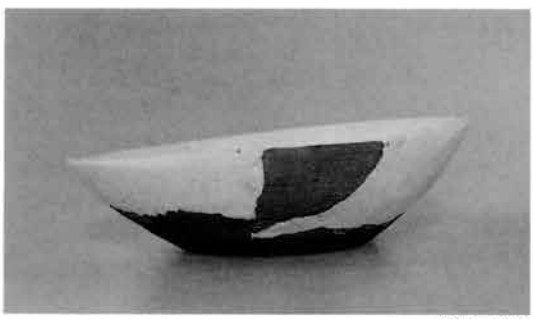
出土錢貨(原寸)

第17 図1

第17 図6

第17 図2

第17 図7



第17 図3

第17 図8

第17 図4

第17 図11

F区第3号井戸出土土器

第23 図 1

第23 図 6

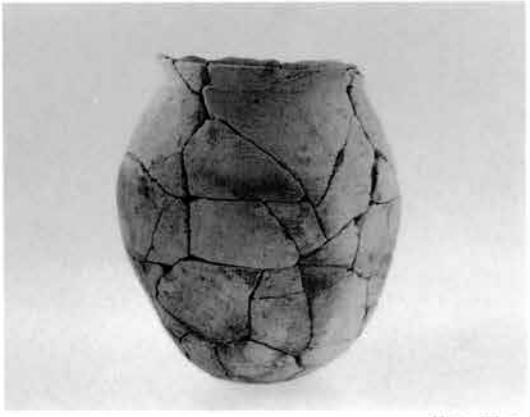
第23 図 2

第24 図23

第23 図 3

第24 図24

第23 図 7



第24 図25

F区第10号土坑出土遺物

第21 図1

第21 図2

第21 図4

第21 図7

第26 図1

第26 図2

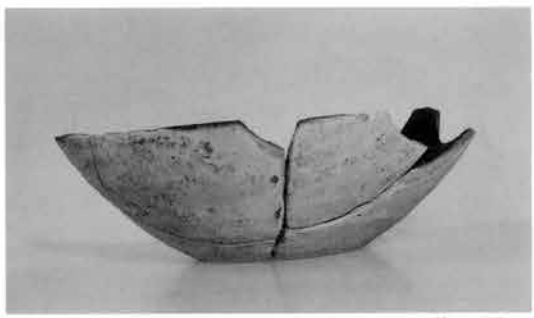
第32 図1

第32 図2

F区第4号井戸、前方後方形周溝状遺構、26号溝状遺構出土土器

図版50

第32 図4



第32 図10

第32 図5

第32 図12

第32 図8

第32 図18

第32 図9

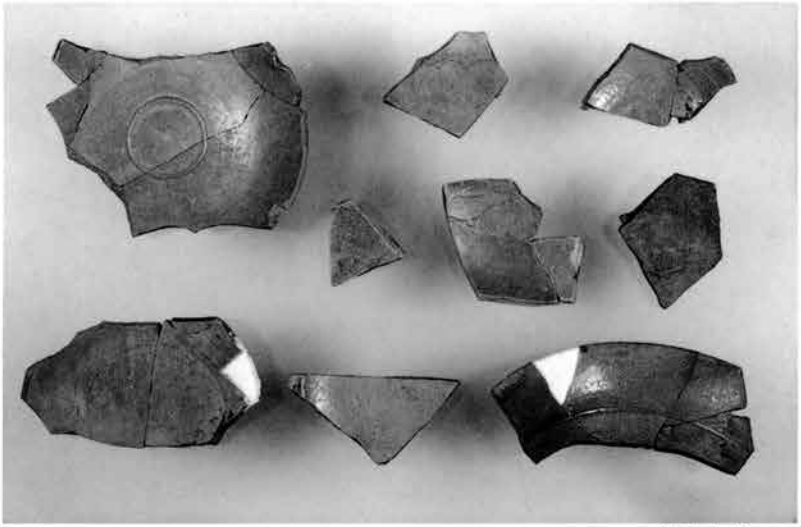
第33 図23

F区第26号溝状遺構出土土器

第33 図26

第33 図28

第32 図13～16



第35 図1～9

F区第26号溝状遺構出土土器緑釉陶器

図版52

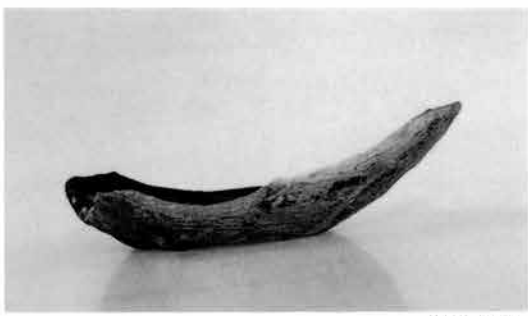
第34 図3

第34 図8

第34 図4

第34 図9

第34 図5

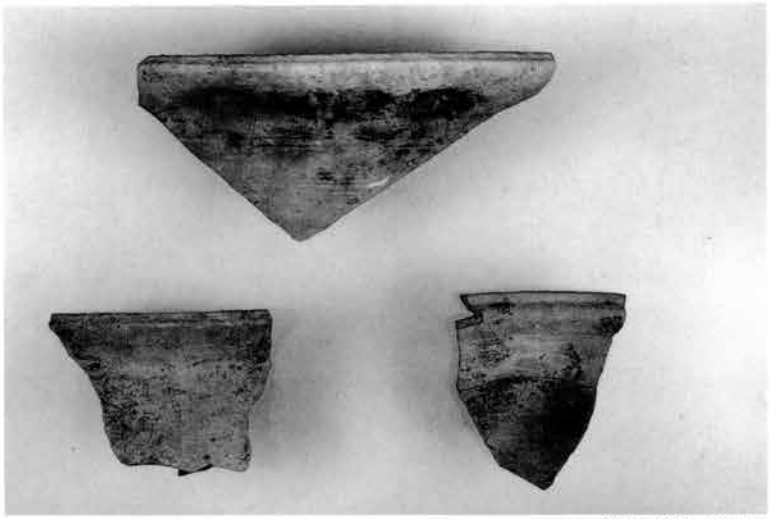


第34 図10

第34 図6

第34 図11

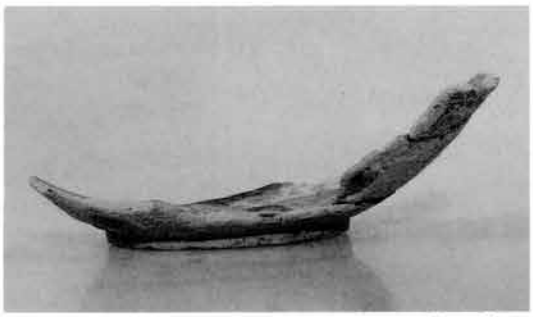
F区第27号溝状遺構出土土器



第34 図14、13、15

第35 図1

第35 図3

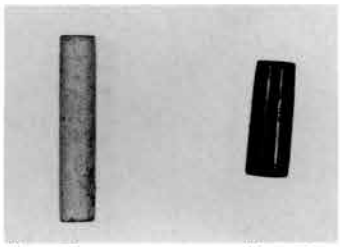


第35 図10

第36 図3

第36 図8

第36 図10



第24 図26　第36 図9

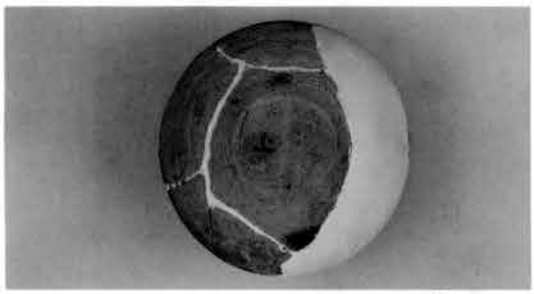
F区第27号溝状遺構出土土器、施釉陶器、銅鏡、石銙、管玉

第36 図6

第10 図12

第33 図28

第10 図19



第33 図26

第33 図22

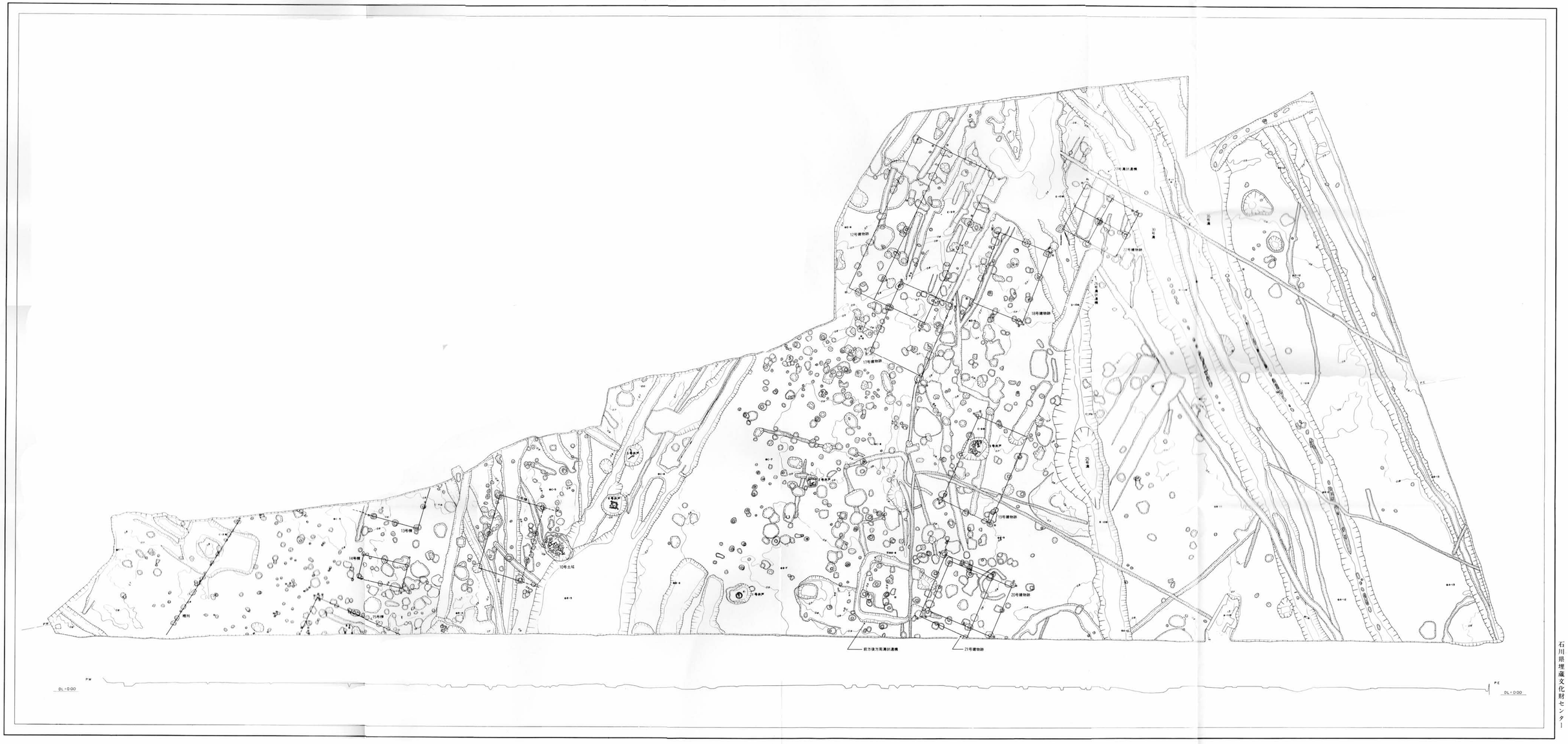
墨書土器

金沢市戸水C遺跡

金沢港泊地造成事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

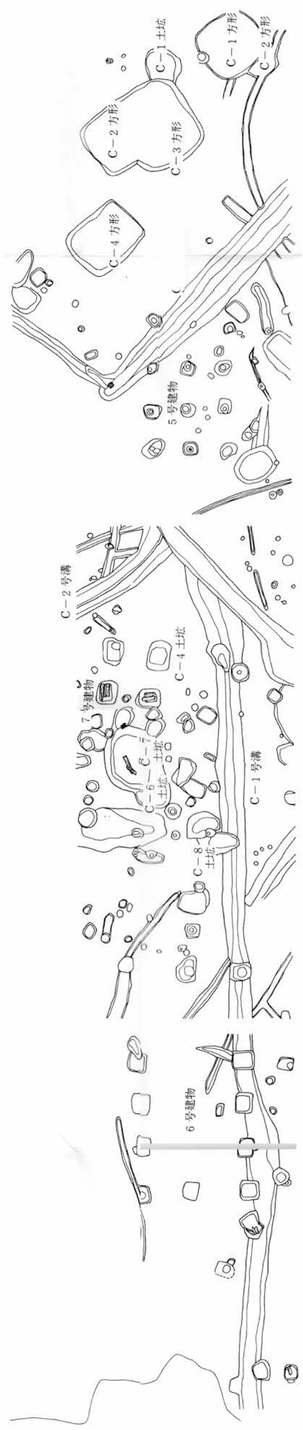
印刷・発行　１９８６年３月
編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
〒921 石川県金沢市米泉町４-133
印　　刷　㈱ 橋 本 確 文 堂
〒921 石川県金沢市大手町２-35

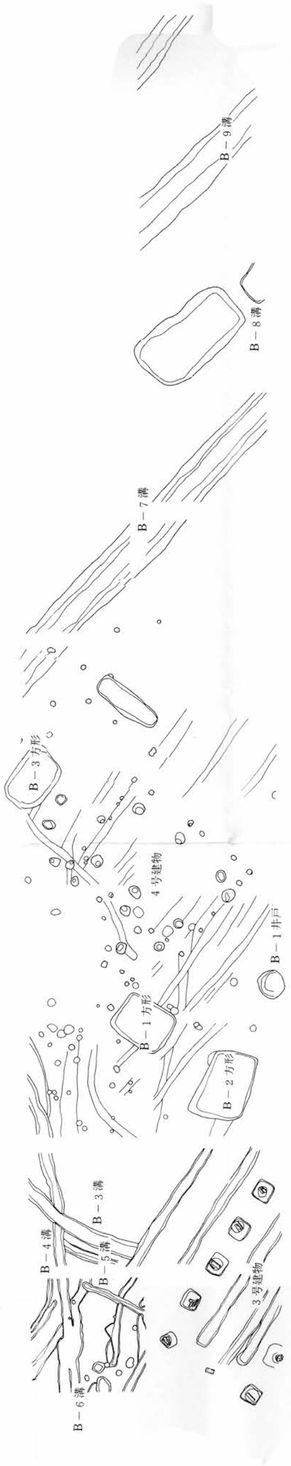
戸水C遺跡（F区）遺構平面図

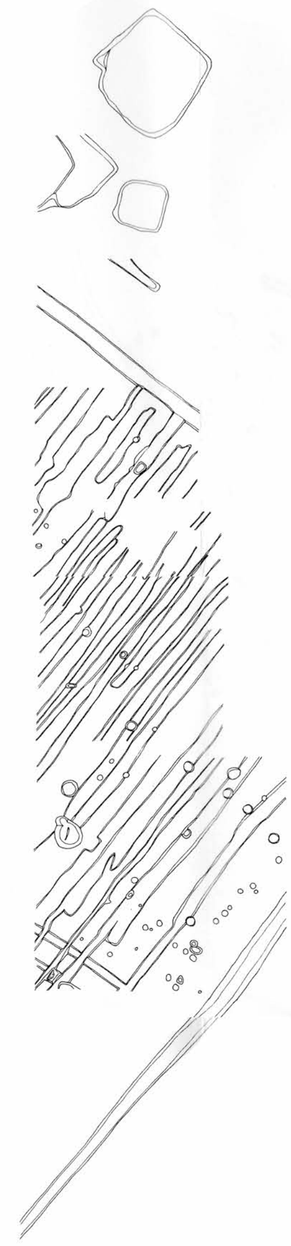


1：100

石川県埋蔵文化財センター







A、B、C区遺構配置図 $(\frac{1}{200})$